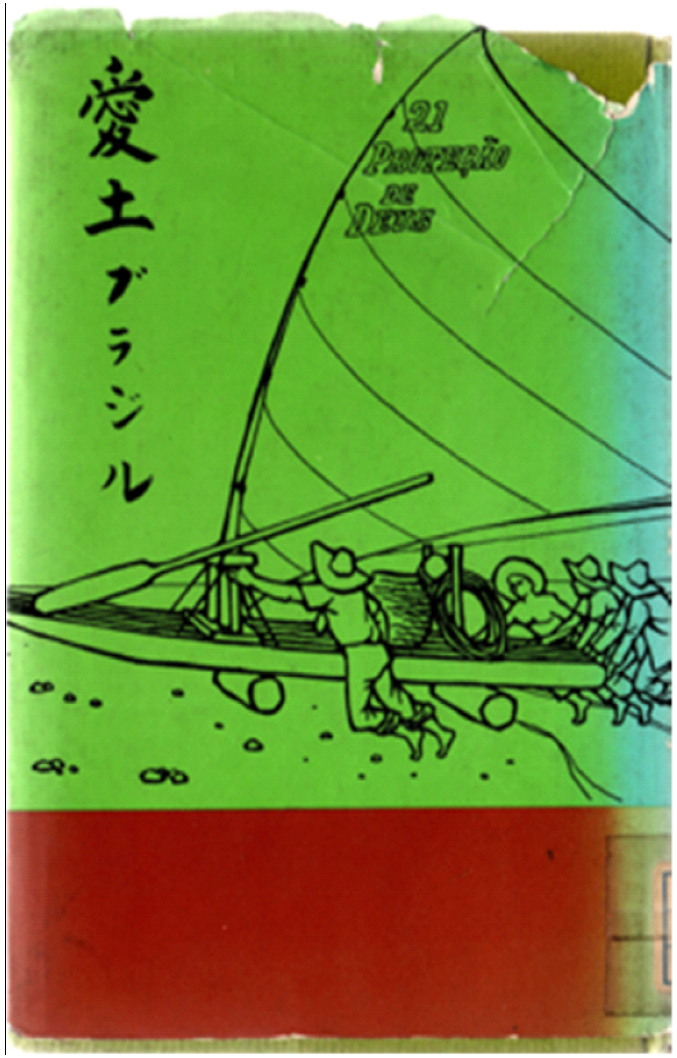

愛土ブラジル

佐藤常蔵　著

序言にかえて

またしても帝国書院を煩わして、第三回の随筆集『愛土ブラジル』を出版することになった。いつもながら秩序だった記述ではなく、最近二、三年来の随想を、評論旅行記などにまとめたにすぎない。

これをもって、さきに上梓した『ブラジルの風味』と『ブラジル風物記』を合わせて三部作をなすが、もとより三回にわたって随筆集を出版しようと意図したのではなく、結果としてそのようになったのである。

題名『愛土ブラジル』は、感傷的な響きをもつが、これは私の在ブラジル四十年の生活を通し、理論を超えて養国ブラジルを愛しうる境地に達した端的な意思表現にほかならない。

四十年というと、あまり長命でない人の一生涯にも相当するが、その長い歳月に私は、当国の社会にいったい何をしたであろうか。とりたてていう何物もないが、おそまきながらブラジルを学ぶにつとめ、昨今はこの国土の風物一切に自ら溶けこむまでになったことを喜び、且つ幸福とするものである。これがいうところの同化であろうか。

日本政府のブラジル移民行政などは、私の知ると

ころではないが、究局は移住国を真に理解することが移民と企業進出の実績をあげる第一義かと思われる。そうした見地から、拙著がブラジルへの新移住者の当国を知るためのささやかな燈火となり、また、善悪いずれの意味にもカボクロ化しつつあるコロニア人のよい刺激ともなれば幸いである。

本書に集録された文章は、随筆、評論、風土記、歴史物語、旅行記に大別はしたが、おのおのの内容からしていずれにも属し難いものがある点を御諒解願いたい。

今回の挿し絵と表紙図案は、優秀な日系学徒として将来を嘱目される田中洋典君の制作であり、また題字は、帝国書院取締役佐藤温氏の染筆による旨を伝え、厚くお礼を申し上げる次第である。

一九六二年五月二十五日

在ブラジル四十周年を迎えて

佐藤常蔵

目次

序言にかえて　2

第一編　随筆・評論・風土記

サンパウロの日本人街の変遷……　8
郷愁と養国愛……
出版文化の影響……　19
書斎隻語（古本と新刊書）……
コロニアの読書現象……　28
兵学校出身の文化人……
国勢調査余談（現世紀初期のリオ）……　36
改築成ったわが家……
文化予算（ウイスキー・本・レコード・映画など）　46
ブラジルの俗謡踊り……
リオの〝治外法権地帯〟（山上のファベラ）　57
共和博物館となったカテテ宮（元大統領公邸）……
ブラジルの祝祭日……　67
ブラジル農務省百年史の流れ（百年間に農相百人）……
カフェー王国の落日（グワタパラ耕地とその創立者
マルチーニョ・プラード・ジュニオールの追想）…80

サンパウロ出身の文化人　エドアルド・プラード…８７
「新聞の日」九月十日（ジャーナリズムは社会の燈火）……
大アマゾンの流れに思う……　９８
聖州人の典型　フランス生まれのヘルクレス・フロレンセ
道路開設と自動車時代を生んだ功労者　ワシントン・ルイス

誇らしき話題　１１２
（女流作家ラケル・デ・ケーロスの誕生五十周年に寄せて）
ブラジルの内国映画史……　１１６
ユーカリ樹下の思い出
（農学者・文学者エドムンド・ナバロ・デ・アンドラーデ）……
パンの味……　１２５
聖業一筋に（イタケーラの「子供の園」に挺身する人々）
コロニア狂想曲……　１３４
サンパウロの水道物語り……
愛国の文学者　モンテーロ・ロバット…　１４８
サン・ジョン祭り……
コロニア言論界の元老　黒石清作翁の永眠……１５９
珈琲談義……　１７４
ブラジル政治史上の疑問符
コーヒーの地理学……　１８０

第二編　ブラジル歴史物語・旅行記　２０６

サンパウロ物語（初めは土人教化村）……　２０７
サンパウロの創立記念日……
黄熱病の悲劇……　２１７
ブラジル独立余談　（アメリカ合衆国に使いしたブラジル帝国初めの外交官）……　２２７
コンデ街のお城　サルゼーダス伯爵の旧邸……２３１
ブラジル開港の功労者カイルー子爵……　２３８
人間に翼を与えた人……　２４３
ブラジル演劇の先駆者　ジョアン・カエターノ……
リオの名所　チジュカの森……　２５８
移民記念塔の陰に……　２６４
写真奇談（帝王の肖像をめぐって）……　２７３
サンタ・クルース城塞にいまも散乱する白骨……
ブラジルの乃木将軍　マヌエル・オゾリオ元帥２８６
サン・クリストヴアン宮夜話……　２９２
ドン・エンリッケ王子とアメリカの発見…３０３
黒人ドレイ秘話……　３１２
ブラジル建軍の父　カシアス公爵……　３２２
アンデスの征服者　ラポーゾ・タヴァレス……
銀の夢……　３３２

ブラジルのスイス　ノーバ・フリブルゴ……　３４２
植民期の南リオ・グランデの歴史……　３５９
バイアは招く……　３９４
ブラジル風物談……　４５２
リオ・ブランコ外交……　４９５

著者略歴　５４４

随想録　第一編

随筆
評論
風土記

サンパウロの日本人街の変遷

私の知るブラジル人で、日本人によく似ているのでジャポネースのあだ名の人がいる。その人が語るのには、彼の母が妊娠中にサンパウロのコンデ・デ・サルゼダス街に住んでいたが、当時としては珍しい日本人を毎日見ていた影響か、生まれた子が日本人の顔であったと。

それが彼であったのだ。

彼の生まれたのが一九一〇年というから、第一回の笠戸丸移民が耕地を出て、コンデ街坂下に住んでいたころである。

今は日本人が珍しいどころか、どこを歩いても日本人に会わないことはなく、どうかすると、オニブスの乗客の半数が日本人であることもまれではない。サンパウロの日本人街の歴史は、このようにし

て始まったわけだ。

一九一〇年のころには、もちろんコロニアとか日系社会、二世などの文字もコトバもなかった。

サンパウロの人口も十六万そこそこで、高層建築もなく、電車とタキシー代わりの乗用馬車が悠然と歩いていた。走っていたのではない。

中央区の目抜きの場所はカフェー店で占められ、一杯百レースのカフェーを喫しながら、ひまじんが世間話に花を咲かせていたものだ。それは現在のようなラテン・アメリカ第一の工業都ではなく、いかにも珈琲産業の町という感じであった。カンポス・エリゼオスや、アベニーダ・パウリスタに豪壮な邸宅を構える耕主の全盛時代で、その威勢あたるべからざるものがあった。その反面、奴隷制度は撤廃され、自由労働移民が珈琲耕地に入れられていたのだが、契約コロノは鉄鎖につながれざる奴隷であったのだ。初期の日本移民が耕主の圧制に耐えかねて、労働争議を起こしてサンパウロに出たとはいうものの、コンデ街に一軒を構え得たものもなく、殆んどがボロン（地下階）住いであった。

その思い出のコンデ街とても昔日の面影は失われつつあるが、あのスコットランドの城閣風のサルゼーダス旧伯爵邸が、廃墟のような姿を残している

にすぎない。

一九一四年となっては、ブラスやモッカ区に住む邦人もぼつぼつ現われたが、それが上等の部の人たちであった。日本領事館、海興支店、藤崎商会のほかには商館らしいものもなく、僅かの日本人家族の過半数が、このコンデ街坂下に住んでいたので、それはおよそ日本人街と言いうるものではなかった。

邦人旅館の先駆では、上地弥蔵氏がボニータ街に上地ホテルを開設した。これが邦人ホテルの唯一のもので、好人物の上地氏は若い浮浪者を泊めてはよく勘定をふみ倒されたらしい。

当時日本からやって来た某氏が、サンパウロの繁華街のドライブを思いたって、タキシーの運転手に、「どこか美しい場所に連れて行って欲しい」と言うつもりで、ルア・ボニータと言ったところ、ボニータ街の上地旅館に案内されたなどの笑話がある。このボニータ街が現在のトーマス・デ・リーマ街で、町の中央区に近い割合いに、いまだに旧建築が多いのは何といっても懐かしい。

その後コンデ街とコンセリェーロ・フルタード街に、邦人商店が現われるまでになった。たとえばコンデ街の中央、遠藤商店、コンセリェーロ・フルタード街の瀬木商店などである。邦字刊行物の草分け

は、星名謙一郎に主宰される謄写印刷の「週刊南米」があり、活字印刷の日伯新聞とブラジル時報が創刊されたのは、それよりも後のことだ。

さて、私が青雲の志を抱いてノロエステからサンパウロに出たのが一九二七年だが、そのころのサンパウロの日本人街は、コンデ街とコンセリェーロ・フルタード街から、ガルボン・ブエノ街やファグンデス街に延びつつあった。さしあたりガルボン・ブエノ街には、私の働いた農業のブラジル社と同仁会があり、ファグンデス街にはブラジル時報社や医師高岡専太郎氏の診察所があった。

また、ブラス区にあった日伯新聞社がサン・ジョアキン街に移転間もない時でもあった。更にサン・ジョアキン街には父兄会（現在の文化センターの敷地）があり、タマンダレ街には海興サンパウロ支店があり、ほかにもこの一帯には日本人の住宅が少しばかり見られた。当時の日本人住宅は、ビラ・マリアナ区を主として次第に四散したが、その全部が借家で、自身の所有する家に住む人は皆無の状態であった。第一、住宅を持つなどは観念的に遠い夢で、あわよくば錦衣帰国をと願っていた人にはそれが当然である。従って自家所有の先駆をなしたことでは蜂谷専一、氏原彦馬、鮫島直哉の諸氏があげられる。

三浦日伯が、「ブラジルの日本人社会も、借家住いから自分の家をもつまでにならねばだめだ。しかも自家用車も持てずに、電車の便いかんで借家を捜すようでは話にならん。」といつかの論説でやじっていたのが、今にして思い出される。

ところが現在はどうか。コロニア実態調査の結果では、サンパウロ市内だけで一万一千家族、約五万人居ることが判明した。五万人とは小さな町の人口にも相当するものだ。それらの日本人がイジノポリス、ジャルジン・パウリスタ、アクリマソンの高級住宅区からピニェーロス、ビラ・マリアナ、ジャバクワラ、ジャルジン・サウデ、イピランガに全面的に住んでいて、昔のような日本人区というものがなくなった。ガルボン・ブエノ、コンセリェーロ・フルタード街は中央区に近い日本人商店街というだけであって、あれを日本人街と呼ぶのは当たらない。あえて言えばガルボン・ブエノ街は単なる商店街でなくて、歓楽街の趣きを呈しつつあるようだ。夜間には東京の新宿や銀座裏にも似て、日本に居るような錯覚を起こさせるほどだ。映画館、料亭、ナイト・クラブ、喫茶店、ボアテ風のものもあり、約三十年前をしのんで感慨深いものがある。

このガルボン・ブエノ街を回顧すると、戦前から

戦後の二十年間は、一種の空白期というかさびれていた観があった。それがシネ・ニテロイの出現と共に、付近に邦人商店が軒をつらね、今は文字通りの歓楽街を形成した。

もし五十余年の日系コロニアの歴史が、サンパウロの日本人街に反映しているとすれば、それは必ずしも健全な成長とはいえないかも知れない。こう考える時に、人間社会はよい面にのみ伸びることは不可能で、あまり芳しくないものも伴って成長するようだ。しかしそれでよいのであろう。

若い愚連隊がガルボン・ブエノ街に巣食っているのも成長したコロニアの一面であり、それによってコロニアの将来を案ずることはない。美しい庭園にも時には雑草がはえるようなものだ。

それから日本人の同化問題だが、今となっては同化するもせぬもあったものではない。

まず、数において日系人がどんどんふえている事実をどうみるか。また日本のゾーリが当国の婦人の間に圧倒的に流行しているなど、どちらが同化するのかと言いたくなる。この現象を、私はブラジル社会のゾーリ文化と称しているが、どうやら昔のような排日政治家の存在は許されなくなったようだ。

さりとて、われわれに少しの自戒も反省も要しないというのではない。結局、これは日系人各々の良識にまつ問題だが、ともあれ、夕暮れのガルボン・ブエノ街をブラブラ歩いていると、サンパウロの日本人街の変遷にあわせて、種々のことが思い出されるのである。

郷愁と養国愛

訪日やヨーロッパ旅行が容易にできそうもない私は、手近なブラジル国内の旅行を思い立って、ぼつぼつ実行している。この短時日の旅によって学ぶところが意外に大きく、いかにブラジルについて無知であったかに驚く。また、数日の予定で国内旅行をするとして、さて、どこを選ぶかに迷うほど、未知の場所が多いのは私だけではあるまい。

さしあたり距離的に近いサンパウロと、リオ州の海岸線に所在する観光地をあげるとすれば、カナネーア、イグアペ、イタニャエン、ベルチオガ、サン・セバスチョン、イリヤベラ、カラガタツーバ、ウバツーバ、パラチー、アングラ・ドス・レース、マンガラチーバ、カーボ・フリオ、マカエーなどがあ

る。

ミナス州境に近い山岳地には、カンポス・ド・ジョルドンと、国立公園イタチアイア高山があるのは周知の通り。

僅かこれだけの名所にしても、その全部を知る人は比較的少ない。ましてや南三州や北東ブラジルを旅して、その土地の歴史、人情、風物を学ぶには数年がかりでも見きれないほどのものがある。その時に始めてブラジルの広大さを知るであろう。私のいう観光地は、坦々たるドライブウェーを経て行ける場所ばかりでなく、時には馬やボロ車に揺られて訪れる現世ばなれのした土地でもある。

説教らしくなるが、ブラジルを知るのはこの国土への愛情を深めることだ。理解なくして同化などあり得ない。本を読むことも人の話を聞くことも必要だが、それのみではこのブラジルを知るには十分でない。なんとしても旅によって実地に学ぶところが大きい。ところが目系コロニアの実状はどうだろう。

なるほど、産業経済面の発展は目ざましいが、一世にとっては養国であるブラジルを旅して、少しでも見聞を広めようとする気慨に乏しいのは不可解なほどだ。

一つには言葉の不得手と、訪問地に対する予備知識に欠けるための旅行のおっくうさにあると思う。これはまた、観光業者の責任でもある。やたらに外国観光熱をあおって、肝心のブラジル国内観光の奨励宣伝をおろそかにするのはどうしたことか。

このことを物語るものとして、ニューヨークやパリー、ロンドン行きの飛行機とその発着は、電話一つで直ちに知ることができるのに反し、ブラジル国内の奥地行きのバスについては、尋ねてみてもなかなかわからない。これは、ブラジルの国土が膨大に過ぎるせいであると同時に、国内観光事業のたちおくれを意味するものだ。

ブラジルの産業で、最も進歩性に欠けるのは国内観光事業と言っても過言でない。当国は外貨獲得のためにも国内観光網の開拓につとめるべきであろう。

皮肉な事実として、ニューヨークやパリー、ローマに数回も遊んだ人で、サンパウロ州のウバツーバを知らない人がいる。このごろでは日系コロニアにもこれに似た実例が多い。訪日旅行は三回もやったが、サンパウロやリオ付近の名所を殆んど見たこともないという人がある。

しからば、外国旅行をする人が外国をよく学んで

いるかといえば、必ずしもそうでない。その一例として、訪日途上パリーに一週間も滞在した某氏夫妻は、ホテルで退屈しながらルーブルを訪れなかった、と聞いてモッタイない気がした。私はまだ見もしないルーブルを頭に描き、ダヴィンチのモナリザがどこに飾られているかをあらかじめ知ってはいるが、果たしていつパリー訪問が実現できることやら……。

また某氏は、観光バスでパリーのコンコード広場につれて行かれ、案内人の説明をきいてもさっぱりのみ込めず、その昔この広場でたくさんの市民が殺されたことがあとでわかったと。これでは「フランス革命」の著者カーライルが地下で泣くであろう。

この人が更にロンドンに行き、ウェストミンスターや国会議事堂、バッキンガム宮殿を見物し、トラファルガー・スクエアーに立つネルソン提督の銅像を仰ぎ見て、何らの感興もわかず、早くホテルに帰って休息したかったとは情けない。とかく年老いてからの外国旅行はこんなものであろう。

よほど旅行への興味と、訪問地の予備知識をもたない限り、せっかくの外国旅行も、ネコに小判になる人が大部分なのかも知れない。

また、郷愁の問題だが、いかに高価でも、日本製

のかん詰や日本映画で郷愁を満足させている間はまだしも安上がりである。現今の為替では、夫婦そろって訪日するには、少なくとも一千コント以上かかる。商売人が商用で訪日するのは例外として、普通人が訪日旅行をするのはいよいよ困難になった。しかし人情は打算や理屈を超越し、いかにしても訪日を決行せねば気がすまないという人がかなり多い。

これらの人が滞日中に費やす金はたいへんなものであろう。かつてはハダカ一貫で渡伯した人だが、錦衣訪日となれば、郷里への寄付に始まり、いろいろの形でたくさんの金がふりまかれる。これは日本の移民政策とも結び付く問題で、国家将来の計画からすれば、一人でも多くの移民を海外（特にブラジル）に送り出すことは、それに要する予算の数百倍、数千倍ともなって日本を潤す結果となろう。もっともこれは功利的見地からのみ論ぜられる事ではないが。

昨今では、十人よればその七、八人までが戦後に訪日をしている。従って、まだ訪日をせぬ者は肩身がせまい。中には一度訪日したためにそれが病みつきとなって、再度の訪日を熱望している人がある。

こんな人に限って、養国ブラジルに愛情をもち得

ず、この国を学ぶ態度にかけるのはむしろ不幸といわねばならない。ブラジルを学ぶことは、それと対象的に日本をもよく知ることであると思う。私の場合は、いずれ実現するつもりでいる訪日の準備のためにも、ブラジル国内の小旅行を楽しみ、それによってブラジルを知ることに努めたい。それが私自身の現在の生活を豊かにすることでもある。

出版文化の影響

近ごろ日本から来る若い人たちに接して感じるのは、彼らが話題に豊富なことだ。自身の専門についてはもちろんだが、そのほか何でもひと通りの知識をもっている。

わけても音楽や文学、美術などに関してはそれぞれの好みの差こそあれ、相当の意見と鑑賞眼をもっているのに驚く。在ブラジル三十九年のカボクロ化した私の感覚では、これらの青年と何を論じても太刀打ちできない。いかに環境に恵まれなかったにせよ、私の二十台のころには、彼らの何分の一の常識ももたなかった。さても時勢の変遷とはおそろしいものだ。

この事実は、戦後の全世界の交通網とマスコミの発達、出版文化の影響にあると思う。

とくに、近来の日本の出版界の活況たるやものすごく、新刊書が店頭に氾濫しているようだ。

こうなれば良書の選択がむつかしく、手当たり次第乱読して適当に知識を養うことになろう。しかし、これが必ずしも日本人の読書欲の盛んなことを物語るものではないかも知れない。むしろ、読書の観念を離れ、たくさんのごちそうの中から好きなものをつかみ食いする心理に通じるのではなかろうか。いずれにしても、戦後のマスコミと出版文化を通じての日本人の知識の吸収力というか、消化力はたいしたものと感嘆するばかりだ。

ただ、あまりに出版物が多く、便宜にすぎて苦労なくして学べるためか、日本人のもち合わす知識が浅薄になっているようでもある。もっともこれは世界的の傾向で、奥深い研究は斯界の専門家の領域で、普通人は表面的に広く知ればよいのだ、というのが一般の説のようだ。事実それでよいのであろう。

週刊紙などは汽車やバスの中で読んで、あとは紙くずのように捨てる人が多いと聞くが、これでは弁当がらのようなものだ。読んだあとに何が頭に残る

のであろうか。

ところで、出版文化に関連して、昨今の日本人のフランスかぶれはたいしたもので、ことフランスに関する限り、一応はなんでも読まねば気が済まぬらしい。そのせいか、文学的にあまり価値のないようなフランス小説が邦訳されている。若いシャンソン歌手が人気を博し、フランス料理を食べて得意然としている知識人が意外に多い、とは日本を訪れたある外人から聞いた話だ。

このごろの日本では、フランス語を学ぶことが文化人のたしなみでもあるかのように聞く、これはなんのことはない、現世紀初めのブラジルの上流社会の風潮でもあったのだ。

その反面、日本では英国やアメリカの昔日の名著でいまだに邦訳されてないものがある。ウイリアム・プレスコットの『メキシコとペルー征服』などがその一例だ。現在は日本での考古学研究の見地から、インカ文化についての興味が高まっていると知って、こんな事が考えられる。おそらくこの書は今もって邦訳されてないと思うが、もし既にあるなら、私の不明をわびるほかない。

さて、私がブラジルに来て間もないころ、ノロエステのいなかにいた時には読物とてなく、一冊の本

を何回か繰り返して読んだものだ。そして好きな文章は筆記までしたことが忘れられない。

現今の人にそんなことを言っては笑われるのが関の山で、またそんな必要もないであろう。今から三十九年も前のことだからラジオもなく、いわゆる邦人社会のマスコミとしては週刊新聞があっただけだ。しかも、それが発行日から十数日も後に手に入る始末。野ら仕事に疲れて帰って、夕食をすませてからその新聞を見るのが楽しみであった。

それから単行本にしても、古色蒼然たるものが少しばかりあったにすぎない。今どき明治文学や大正初期の文学を論じてもはじまらないが、あのころの文学作品にはいかにも「文学」としての味わいがあった。ところが近ごろはどうか。およそだれの文章をみても、すべて単一化された形で一様なのはどうしたものか。これでは人各々の文章の個性がない。簡明に能率的に叙されている以外には何も感銘をうけない。

今ごろの作家で、文章に行きづまって執筆を中絶し、気分転換のために旅に出るなどという人は皆無ではなかろうか。

この点、さすがに現代文学でも、志賀氏や川端氏の文章には、他の作家に見られない深みと美しさが

ある。

必要に応じて簡便にかん詰で食事をするのは能率的だが、丹念に薪でたいた釜の飯には一種形容し難い味がある。文章にもこれと同じことが言えるのでなかろうか。

ブラジルぼけした私には、日本の目まぐるしい出版文化には恐怖を感じるほどだ。つとめて新しい書物を読まねばと思いつつ、ともすると徳富蘆花や森鴎外にひかれるのは頭の古さにあるのであろうか。

また外国文学に対しても、つい古典的なものに興味をもつのはやむを得ない。

書斎隻語

―古本と新刊書―

週間は私は仕事の都合で朝四時半に起床し、家を出る前に一時間ばかり読書をすることにしている。こういうと、いかにも勉強家らしく聞こえるがそうではなく、十数年来の惰性にすぎない。

日曜日だけは六時ごろに起きて、ゆっくり本を読むのが楽しみだ。私の狭い書斎には、執筆のために

集めた資料で未整理のものがたくさんある。この資料整理がまたタイヘンな仕事で、これに多くの時間をとられる。また読書にしても、大冊の本を読み上げるにはかなりの熱意と気力が必要である。従って、山なす資料と文献に目を通しながら一書をものにするには、第三者の想像のほかの努力が払われていると思う。とくに学術書の場合がそうだ。タカが随筆の一つでも、真の快心の作はなかなか書けない。だから、書くよりはせめて良い本をなるべく多く読みたいものだ。

ところで、昨今のブラジルの出版界は非常な活況を見せている。新刊書がぞくぞく現われるのはまさに壮観である。おかげで長い間絶版であった本が手に入り、有名な著者の新著が買えるのは有り難いが、いずれもひどく高価なため、いつも月末には赤字となるのはやむを得ない。しかし、いくら高くても、欲しい本を買った後の気持ちは悪くない。こればかりは飲酒の二日酔いとは同日に論じられぬであろう。

昨年の下半期から、今年の二月にかけて購入したブラジル版の本の一冊当たりの価格が、七百クルゼイロについている。十年ほど前には百五十クルゼイロ程度で買えたものだが。もっともシネマの入場料

が百クルゼイロであることを思えば、本代はまだしも安い。問題は購入した本をいかに役だてるかにあるのではなかろうか。

ご多分にもれず、私も僅かばかりの本を買いはするが、その全部を読破することは容易でない。

せいぜい序文や総論をみて積み重ねておく始末である。それにしても私の蔵書など貧弱なものだが、大きな書架に収めきれない本を山と積んだ中で、筆を執る気分はまた格別であろう。いつか文豪ウォルター・スコットの書斎の写真を見てそんな気がした。この境地は、愛酒家が、あの色合いと形ともに芸術的なウィスキーのビンを並べて楽しむ気持ちに通じるものがあるようだ。

さて、昨年は何らまとまったものも書けず、今年こそはと年頭にホゾを固めたものの、いまだに何も書けない。その理由は、資料不足よりは私の不勉強と無気力にあるというのが偽りのないところであろう。

よく人は、「資料がないので書けないよ」と、いともあっさり言い訳けするが、これはどうも疑わしい。いかにブラジルとて時間と努力をかけ、方法をつくせば、捜し求める資料は完全でないまでも相当見つかるはずだ。それができないのはやらないから

であり、また費用を惜しむためではなかろうか。
一例として三、四十年も昔の出版書を発見したとする。印刷が不鮮明でよごれた古本だが、価格が一コント以上と聞いては驚くのが当然だ。目下絶版となっていて再版の可能性のないものに対して、本屋のオヤジは法外の値段を付けるのが常識である。一つにはそんな古本を捜すご仁は一種のかわりもので、欲しいとあればいかほどでも払うとみられているからだ。
つい数日前だが、ある書店の地下室で、挨にまみれた一冊の本を偶然発見した。その本の題名は“ＡＳ ＦＲＯＮＴＥＩＲＡＳ ＤＯ ＳＵＬ”で、ブラジル南部の境界問題をテーマにしたもので、著者はフェルナンド・ノブレである。
一九二二年の出版で、この書こそ、私が数年前に各書店を捜し歩いたがどうしても見つからぬまま半ばあきらめていたものだ。一九二二年といえば、ブラジルが独立百年祭を挙行した、また私が渡伯した年でもある。それは三十九年前で、いうまでもなく当時の出版物は旧綴字法で記述されているが、それに昔日のブラジル語の懐かしさを感じて、また面白い。
問題の古本は、著者の署名入りで知名の某学者に

贈呈されたものだった。それがどうした因縁でこの書店の地下室に置かれる運命になったのか。著者の好意による寄贈書を他に売るなどは、当人の所為でないとしてもおかしな話ではある。私どもは、時に不必要の古本をまとめて売ることもあるが、著者から寄贈されたものはいつまでも保存するのが礼儀だと思っている。

しかし、この古本を見つけたことによって、南部の境界問題をめぐるブラジル外交史をつづる上に、好個の資料が整ったのはうれしい。

今年になって購入した新刊書では、ブラジル文明史叢書「植民篇」（ＡＥＰＯＣＡ　ＣＯＬＯＮＩＡＬ）が代表的なものだ。これは史家セルジオ・ブアルケ・デ・オランダの監修のもとに、著名の大学教授や著述家がそれぞれ専門の立場から分担執筆したもので、おそらくこの種の史書としては最も権威あり且つ、完璧な内容と言える。第一巻は十五世紀のポルトガルの領地的発展とブラジル発見が主題をなし、第二巻は植民期ブラジルの政治、経済、社会が叙述されている。ついで第二部の帝政ブラジルと第三部の共和制ブラジルが出版される予定である。この書は、ブラジルの文明史に興味をもつ人には、先きにコンパニア・メリョラメントから出版された

フェルナンド・デ・アゼベド著の「ブラジル文化」（ＡＣＵＬＴＵＲＡ ＢＲＡＳＩＬＥＩＲＡ）と共に必読のものと言える。

ほかにも新刊書で序言を読んだままのものはあるが、それをもって読後感を述べることはできない。それは食卓に向かって、先きにソブレメーザ（デザート）だけを食べて、ほかの料理を批評するのに等しいからである。

コロニアの読書現象

さきごろサンパウロ女学院で催された婦人講習会で、『女性と読書』のテーマで話をし、当夜は座談会にも出席した。

僅か一、二時間でまとまったことも述べられず、また、読書についてたいしたウンチクもない私の話は雑談に終始した。その話の中で、読書も食物をとると同じで、偏食になってはならない、と言ったのはよいが、私自身の読書傾向が偏読となりつつあることを思って恥ずかしかった。

また講習生の一婦人から、二十歳ぐらいの娘に読ませるブラジル話の本では、どんなものがよいか、

と質問され、私こそもっとブラジルの本を読まねばならぬことを感じた。

思いつくまま、純文学ものでは昨年度のベスト・セラーズになったジョルジェ・アマードの『ガブリエラ・クラボ・エ・カネカ』と『オス・ヴェーリョス・マリニェーロス』、ついでエリコ・ヴェリッシモの『オ・アルキペラゴ』(オ・テンポ・エ・ベントの第三部作)、更に昨年末に出版されたジョゼ・ジェラルド・ヴィエーラの『テレーノ・バルジオ』(荒廃地とでもいうか)をあげてみた。というのは、昨年度を通じて比較的新人の登場が少なく、旧作家の作品が多く出版されたからである。特にジョルジュ・アマードが、齢五十にして三十年の作家生活を完了したことは、ブラジル文壇の偉材として高く賞賛に価する。

おそらく現今の当国の作家で、広く外国に紹介されていることではジョルジュ・アマードと、エリコ・ヴェリッシモが卓抜するものだ。

それにしても、コロニアの一世も読書範囲を一歩進めて、ブラジルの代表文学に興味をもつまでになってほしい。また、古典では、ジョゼ・デ・アレンカールやマッシャード・デ・アシスを理解するくらいの気慨と向学心があってしかるべきであろう。

文学に造詣の深くもない私が、あまり書きたてはドヤされるのが関の山だから、この辺でコロニアの読書傾向に目を転じよう。

ところで、このごろの物価高はものすごく、庶民階級は食生活に追われて精神生活まで手のおよばないのがほんとうであろう。とくにジャニオ氏の大統領辞任以来の物価指数は、サンパウロのポルト・ジェラルの坂のような上昇ぶりを示した。その昔十五ミルか二十ミルでフェーラでたくさんの買物ができたことが懐かしい。もっともあの当時は鼻下にヒゲをたくわえた一人前のご仁の月給が四、五百ミルであった。現在はその約百倍の収入を得ているのだが、生活がどれほど向上したであろうか。家具調度は立派になり、台所は電化され、ウィスキーを飲みながらテレビを見れるまでになったが、書架の本はふえてもいないようだ。むしろ子供の室には『テゾーロ・デ・ジュベンツーデ』などが飾られている。それは子供にせがまれて買ったからであり、ご主人の書架はノルデステの半乾燥地帯のようだ。

どうやら昔も今も買いにくいものは精神のカテということになる。こんな人でも、あやしげな猥本はいつどこで手に入れたかちゃんと持っている。シネ

マの入場料が百クルゼーロから百二十クルゼーロになっても苦情をいわない。また魚釣りはへたながらも道具だけには凝っている。週間は朝寝坊しても日曜日には早暁に起きてサントスに降り、海にボートを浮かべて浩然の気を養う。月に一、二回は交際と商取引のため料亭を訪れるという善良な市民であり、よき家庭の夫である。

これらの人がまれに本に話題を向けるとすれば、それは殆んどよろめきやゆがみをテーマとした日本の出版書であって、ブラジル語の本ではない。

昨年度を通じて売れた単行本の実数は知らないが、一世を対象とする場合、コロニアの読書欲と読書人口は、他のコロニアを含める一般ブラジル人社会との比較で第一位を占めるかと想像される。その反面、ブラジル語の出版書を読まない点でも第一位かも知れない。つまり、読書にこのような両極端の現象を生んでいるのが現在の日系コロニアの文化的特異性でもある。

これは、コロニア人の語学のハンディキャップによると同時に、日本の出版文化の反映でもあろう。もしこれが戦前であれば、日本人の不同化問題として指摘されたかもしれないが、今では日本人コロニアを通しての日伯文化合流の一現象と、好意的にみ

られているようだ。

しかし、当のコロニア人の態度がそれでいいかどうか。私などは道楽で書店をのぞき、捜す本が絶版であれば図書館を利用するのだが、あの市立図書館では一世らしい人に出会うことは皆無といってよい。日系学生は多いが、それは試験準備のために来ているのが大部分のようだ。かくいう私も、実は図書館を訪れるようになったのは最近十年来のことだから、えらそうな口はきけない。

書くことがまちまちになったが、昨年度のブラジルの出版界はすこぶる低調であった。

その第一の原因は、紙価その他の著しい物価高による大衆の購買力の減少を見越しての出版社の弱気であり、第二は、すぐれた著作の現われなかったことを意味している。

一九六〇年度にはまだしもすぐれた学術書や文学書が見られたが、一九六一年度は寂しい限りであった。小説、詩集、翻訳書にしても前年度よりはずっと少ない。しかし美術書では、画家カリベの『デゼーニョ・ダ・バイア』、ダルシー・ペンテアードの『カデルノ・デ・オーロ・プレート』のほか、『アルバム・ブラジル』などが出た。

大冊の書を読むのが厄介ならば、こうした画帳や写真帳で、目で学ぶのもブラジルを知る一方法であろう。

兵学校出身の文化人

世間には、兵学校出であって軍人とは全く異なるコースを経ている人が少なくない。ヨーロッパやアメリカにそのような人が多いが、それがいうところの兵学校出身の文化人であろう。

宗教小説『ベン・ハー』の著者リュー・ウォーレスなどがその代表的なものだ。彼は陸軍大将の経歴をもちながら外交官生活をし、また文学者として世界に名を成した。

このように兵学校出なりとて、必ずしも軍人たる要はなく、むしろ、軍服をぬいで他の分野にその長所をのばすことに人生の意義があるのではなかろうか。

百貨店として米州諸国に名高いシーアース・ルーバックの前社長も、退役陸軍大将であった。ジェネラル・ウードと聞けばいかめしい感じを受けるが、サンパウロのシーアース百貨店開設一周年記念の祝賀会でみた彼の印象は、洗練された大実業家であ

り、きわめて穏健な老紳士であった。

ところで、一九六一年四月二十三日をもって、リオ州レゼンデのアグーリャス・ネグラス陸軍兵学校が創立百五十周年を迎えた新聞記事をみて、同校出身の著名文化人の名が頭に浮かんだ。

同兵学校は、ドン・ジョアン六世によって創設されたもので、アメリカ合衆国のウェスト・ポイント陸軍士官学校と相並んですぐれた伝統を誇るものだ。その卒業生の中からカシアス公爵やベンジャミン・コンスタンをはじめ、多くの傑材を生んでいる。

カシアスは武門に生まれ、軍人に終始したにもかかわらず、平和愛好に徹し、剣をとってはやむなくたったところに彼の人柄がしのばれる。

またベンジャミン・コンスタンは、軍人よりは教育家、名文相で知られ、ブラジル国旗の創案者ライムンド・テーシェーラ・メンデスの提案を入れて、「オルデン・エ・プログレッソ」の標語を決定したことは、いかにも彼らしい理想を抱懐していたことを物語っている。

エウクリーデス・ダ・クーニャとトウネー子爵（アルフレド・エスタノレ・デ・トウネー）は、リオのプライア・ベルメーリャ陸軍兵学校出身で、いずれも軍属土木技師であった。

およそ共和制初期のブラジルの大学は、法科と医科に限られていたので、工科、機械科、数学を修めるには、兵学校に入学するほかなかったのである。そのため、必ずしも軍人を志望しなくとも兵学校に学んだ人材は少なくない。ベンジャミン・コンスタン、エウクリーデス・ダ・クーニャ、アルフレド・トウネーなどがそのよい模範といえる。

特にアルフレド・トウネーについて述べると、彼の士官候補生時代と中尉時代の制服姿を見るに、軍人というよりは、むしろ貴族の血をひく文化人の感じだ。

彼は、プライア・ベルメーリャの陸軍兵学校で数学を専攻したが、好みは文学であり音楽を趣味とした。わけてもピアノの演奏に長じていたが、これはあまり知られていない。彼はモーツァルトとベートーヴェンに傾倒し、その愛好曲をひくことに無上の喜びを感じた。

また、彼が世間に忘れられていたブラジル古典音楽の作曲家、パーデレ・ジョゼ・マウリシオの作品の紹介と普及につとめた功績は大きい。もし彼のこの努力がなければ、パーデレ・ジョゼ・マウリシオの名作は埋もれてしまったかも知れない。

パーデレ・マウリシオは、ドン・ジョアン六世の

懇請によってたくさんの教会音楽を作曲したが、中でも有名なのがミサ曲の「レキエム」である。パーデレ・マウリシオは、ハイドンの弟子シグモン・ノーコンの指導をうけたので、これがその作品に多大の影響を及ぼしている。それらのことは、アルフレド・トウネーの紹介文に詳しく記述されている。

アルフレド・トウネーは、いうまでもなく文学者として著名だが、彼の代表著作は、小説『イノセンシア』と、パラグワイ戦従軍記の『ラグーナの退却』であろう。彼は初対面で、だれからも敬愛され、親しまれたらしく、パラグワイ戦争中はマット・グロッソで至るところの住民に忘れ難い印象を与えている。

それを物語るものでは、一九二三年にアキダウアナ市に彼の記念碑が建立され、不朽の名著『ラグーナの退却』の作者として、その名が永久に刻まれている。彼が家庭にあってペンを執り、ピアノを弾奏する姿には、殺伐な戦場を思わせる軍人らしさはいささかもなく、教養高い文化人であった。

国勢調査余談

―現世紀初期のリオ―

目下ブラジルの国勢調査が進められているが、これに関連して思い出すことがある。

今から五十余年前、一九〇六年のペレーラ・パッソスのリオ市長時代に、リオ連邦直轄区の人口調査が行なわれた結果、八一一、四四二の人口が発表された。これによってリオの人口はやがて百万に達するだろうとうわさされたが、一九二〇年度の国勢調査では一、一五七、八七三の数字が公表された。

この人口増加は、ペレーラ・パッソスの都市計画としての大通りの開通（現在のアベニーダ・リオ・ブランコとアベニーダ・ベーラ・マールなど）と、科学者オズワルド・クルースによって、リオを衛生都市としたことに負うところが大きい。

いかにリオが世界三大美港の一つを誇っても、マラリアや黄熱病の巣であっては話にならない。

外国の観光客がリオの悪疫におそれをなして、遠く避けて通り過ぎたのは現世紀初めのことだ。

オズワルド・クルースの悪疫撲滅を全面的に支持したのは、当時の大統領ロドリゲス・アルベスであり、一九〇六年度の黄熱病によるリオ市民の死亡率は、千人に対する二一・七人に低下した。

それ以前は三十八パーセントの高率であったこと

を思えば、顕著な成績といえる。

ところで、リオが悪疫から救われて衛生都となり、大通りの開通によって市街の趣きを一変したのはよいが、全人口の五割以上が文盲であったとは情けない。つまり、一九〇六年の調査では、八一一、四四三人の中の四二一、〇七二人が文盲であった。そのころは調査員に対して、文盲と申告することをたいして恥とも感じなかったようだ。また、現在のような文盲撲滅運動もなく、専ら市街の区画整理と悪疫一掃に注意が払われていたのだ。

このように、リオが近代都市としての風格を備えたのは五十余年前だが、それは外観のみで、真実は帝政期と殆んど変わるところがなく、特に思想的にそうであった。上流人の間にはスポーツとしての自動車が流行する反面に、コロニア期の長老制と、貴族社会の遺風とにとらわれるという矛盾があった。

一部のインテリ婦人は、女性の社会的解放を主張して世間から冷たい目で見られた。また、女性が家庭を出て職業婦人として働くことに対し、それは女性の堕落である、ときびしい攻撃があった。しかし、ある一部の婦人は非常な決意をもって官庁や商館に働き、世評の的となったのもそのころだ。他方それはモダン・ガールの出現とあって、有閑人の話題を

にぎわしたものである。

当時のリオには、貴族と富裕階級の大邸宅は比較的少なく、大部分は中産のカーザ・テレア（平屋）であった。たいして経済力はないが、さりとて貧民でもないという程度の市民が多かったようだ。従って、現今のような貧民窟（ファベラ）も存在しなかった。

市民はポルトガル系が大多数を占め、風習、道徳、思想、政治には多分に保守的なところがあった。それなればこそ、進歩性はなかったが平和があったと言える。

老人の多くは共和制よりは過去の帝政を懐かしみ、且つ執念をもつありさまであった。そのためか、数人の老人が寄れば必ずモナルキスタ（君主主義者）としての気炎をあげるのであった。共和主義者の代表的人物であるルイ・バルボーザが、ある集会の席上で、「ブラジルは帝政から共和制となって都市の衛生状態は変わったが、人々の血は変わらない」と、皮肉めいた言葉をもらしたとは面白い。もっとも、帝政第二期が五十年の長きに及んだことからしても、老齢の人たちには、新しい共和制への心の切り替えが容易でなかったことはうなずける。

こうしたリオの気風は、現世紀初めはいうまでも

なく、第一次世界大戦の終局した一九一八年ごろまでも持続されたようだ。結局は、現世紀初期のリオの風趣にひかれるものがある、とは老人組の偽らざる述懐である。そこにはまた、意味深長なものがあるらしい。

著述家ジルベルト・アマードの著書『メモリアス』の一部には、一九〇六年ごろのリオは売春婦の天国であったことが記されている。現在のリオの目抜きの場所に、かつてのコルテザン（実際は宮廷の侍女だが、ここでは高等淫売婦を意味する）の建物があり、白昼公然と取り引きが行なわれたようだ。

忘れもしない、カンポス・サーレスの大統領任期中だが、司法大臣エピタシオ・ペッソアと警視総監エネアス・ガルボンは、リオの風紀改善のため売春に対して徹底的弾圧を加えることにした。

この運動にはルイ・バルボーザも大いに賛意を表したものだ。しかし、一向に実績があがらず、ルイはがゆいまま、「もし司法大臣と警視総監が断固たる態度をもって売春撲滅に当たらぬ限り、この問題は解決されぬであろう。なぜならば、法律の上では一家の主婦も売春婦も社会人として何らの区別はされていないから」と、彼独特の雄弁で叫んだもの

だ。

これを見ても、売春撲滅の困難さは今も昔も変わるところがない。

さすがのルイもリオの売春問題には手を焼いたようだが、その後間もなくちまたにはカフェ・カンタンテという現在のカバレー式のものが現われ、それに二十歳未満の女性が手足をあらわに出して歌をうたう、というスサマジイことになった。これは別の意味のモダーン・ガールとして、人々に騒がれたのは当然であるが、このノビダーデであるカフェ・カンタンテの出現によって売春婦の活動は少しくさびれ、それほどに表面化せずにいつの間にかこの問題は解決済みとなった。

そのころのリオ出身の代表作家には、リーマ・バレットやジョアン・ド・リオ（パウロ・バレット）があったが、この両人は思想的には急進派に属し、その革新的な論調をもって女性の自由を主張した。当時のブラジルの女性には投票権のなかったことを知って意外である。

しかし、時勢の変化と風潮の推移はおかしなものだ。年老いた君主主義者が絶えて新人が登場するに及んで、次第に旧思想はすたれて新しいものが取り入れられるようになった。

たくさんの女性は官庁や会社に勤めるようになり、活動的な服装をし颯爽として街頭を潤歩するようになった。また街路のうす暗いガス燈に代わって電燈が輝き、コロニア風の建物が姿を消して高層建築が現われたのも自然の成り行きであろう。

詩人、オラボ・ビラックは、リオの市街に電燈が点ぜられてから、あの美しい月夜のながめが失われた、と慨歎したというが、これもまたやむを得ない。

現在のリオに悪疫はなく、文盲の率もきわめて低く、君主主義者も全く絶えてしまったが、さてほかに残るものは何であろうか。

改築成ったわが家

コロニアの五十周年と、私どもの銀婚を記念する意味で、拙宅の改築をはじめたのが一九五八年の三月であり、それから二年半を経てようやく完成した。

これは、初めの予定の九カ月を過ぎること二十一カ月で、でき上がった当時はほっとしたというよりは、むしろ虚脱状態におかれたのが偽らざるところだった。

私は時間的に外部にいる方が多いが、毎日家にいて、実質的に工事の監督に当たった妻は全くまいったらしい。そのため、妻はすっかり神経質になり、私が家に帰ってもうっかり口もきけないありさまとなった。

もし改築ノイローゼというコトバがあるとすれば、妻はそれにかかったわけである。工事の着手前には、やがて面目を一新するわが家を頭に描いて喜んだものだが、さて実地に仕事にかかるや、あまりの煩雑さに改築とはかくも神経をイラだたせるものかと思うようになった。これなら新しく建てた方がよほどましで、改築はこりごりだと感じた。これは改築の経験のある人の同感とするところであろう。

ところで、工事が延びるのは経費がかさむことであり、契約以外のものは日を迫って高騰するのには閉口した。それは寿命をちぢめる思いでもあった。

つまり、当国の近来のものすごいインフレは、私どものささやかな経済にもひどい手違いを生じさせたのである。ツバロン族（鱶（フカ）族）ならぬ私の僅かばかりの収入で、よくもこれだけの改築ができたものだと、今にしても身ぶるいのする思いである。

工事の請負者は人一倍のグズで、一週間の予定の

ところは三週間もかかる始末、彼とてもこの仕事ではもうからないとこぼしていた。

しかし工事がひまどったために、その間妻はゆっくりあれこれと考えることができた。建築設計や室内装飾を趣味とする妻は、丹念に幾度も設計図を描いたものだ。それだけが妻の喜びのひと時であったと言える。大げさだが、妻の描いたさまざまのデザインが、一つの大包みともなるほど残っている。私どもの苦心の一例として、壁の色彩を考えるだけに数日を要したことがある。

幸いピントールは芸術家膚の人で、以前は高級家具の塗り上げが専門であったとか。従って拙宅の壁には全部の仕上げまでに十数回の手をかけるという丹精さであった。なるほど彼が最後の上塗りを施してから見るに、なんとも形容のことばがないほど美しい。特に光沢を消した高尚な色合いの感覚には、立派な芸術性がある。

人間の家庭生活に、色彩の及ぼす影響は実に大きいと聞くが、今度の改築にすぐれたピントールを得たことはこの上もなく好都合であった。おそらく普通のピントールには彼の技術は理解されぬであろう。

私どもが現在の家を建ててから八年ともなり、今

では庭の樹木も大きくのびてほんとうに落着きができた。私が夕刻帰宅する時に、妻はリビングや居間のガラス越しに茶を喫しながら、庭のながめを楽しんでいることがしばしばある。どうやら近ごろになって、妻は改築ノイローゼから解放されて、家の美を観賞する気分になったようだ。

その妻が先日休養を思いたって、妻の実家の本拠であるカンバラの農園に行くことになった。

私は「一家の主婦とても当然休暇をとるべきだ、せっかくの好機会だからゆっくり休養してくるがよい」と、虚勢を張って言ったはよいが、七日目あたりから自炊するのがいやになった。また久しぶりに一人となったせいか、閑寂なわが家にあってかえって気が散じて落着かない。妻の留守中は大いに読み、かつ執筆するつもりが、まとまった原稿一つも書けないのはどうしたものか。

しかし、そのうちにもただ一つ気分を統一できるのは、好きな音楽を聞くことだった。

妻がいなかに出かけるという直前に、買いつけのレコード屋に註文しておいたレコードが着いたという電話があった。それは私が長い間捜していたハイドンのオラトリオ『天地創造』と、ヘンデルのオルガン協奏曲であった。いつもならば、「あなたがあま

りレコードを買うと、生活予算にひびきますよ」などと皮肉を言う妻も、この時ばかりは快よく私のレコード購入も許してくれる仕儀となったものである。

今日は妻がいなかに行ってから二回目の日曜日だが、一人でレコードを聞きながら、しみじみと中年の生活の楽しみを味わいうる境地になった。若いころは同じ好きな音楽を聞いてもこのような心境にはならなかったが、今こうしてレコード音楽を聞いていると、過ぎた改築の煩わしさが夢のようだ。

いつしか雨となり、その騒音にまじってバッハのカンタータが聞こえ、形容し難い情趣をわかさせる。

さて近く妻が帰宅するが、二十数日を外で休養したことによって、改築後のわが家の良さが一層よくわかるのではないかと思う。

文化予算

―ウイスキー・本・レコード・映画など―

最近の物価高には値上げというよりは強奪に等しいものがある。しかしモノによってはいかに高価で

も買わざるを得ない。食料物資がそれだ。これをシマツすると健康がもたず、医者と薬店へ奉公する結果になる。

サテ、私は従来酒をたしまないので、その方の予算を必要としないにもかかわらず、毎月金不足で困るのはどうしたことか。この上に高価な酒でも飲んだならどうなるかと思うとゾッとする。

ところが近ごろはよくカクテル・パーテーによばれたり、まれにはウィスキーをもらうことがあるので、それを少しばかり飲むと実に快適な気持ちになる。私は今まで自分の文化予算には専ら本とレコード、シネマとバレーの観賞、音楽会費などをあてていたが、ウィスキー代を計上することも必要なりとの悟りをひらいた。なぜかというと、ウィスキーを適度に飲んでホンノリした気分でペンを執るとよく能率があがるし、食卓に向かって妻の料理に世辞の一つもいう心境になるから夫婦円満の妙法でもあるようだ。しかも安眠ができ、血液の循環がよくなって高血圧を防ぐときいては、ウィスキー礼賛を唱えざるを得ない。こうなるともらいもののウィスキーのビンがからになったら、私は開びやく以来の壮挙としてウィスキー購入のために大金を投ずるであろう。

ところで、酒で思い出すのは先日の散歩途上に新発見をしたことだ。それはカーザ・アングロ・ブラジレーロ（旧マッピン・ストア）にホワイト・ホース、ジョニー・ウォカー、ジョンヘーグ、オールド・パーなどの舶来のウィスキーが飾られていて、バカに安い値がつけられているのでよく見ると、それは月賦払いの金額であった。

これはまさしくノンベイにとって福音だが、同時に興ざめでもある。つまりこんなウィスキーを飲んで陶然となるのはよいが、月賦で酔うことを思えばうんざりするからだ。

ところでウィスキーから精神のカテの本に飛ぶが、もともとブラジルの新版書は高価なのに、最近はこれが目だつて高いのに驚く。さりとて図書購入の予算をたいしてふやせないのが読書子の悩みであろう。私もご多分にもれずその一人だが、有り難いのは買いつけの外人の書店で、支払いなどいつでもよいからお持ちなさいとて、いとも気前よく貸してくれることだ。その昔ルイ・バルボーザは図書購入予算が不足して常に書店に借金があり、また書店ではドトール・ルイ・バルボーザに本代の貸しのあることを名誉としたとか。文化人もこれまでになれば相当のものだ。私もルイにあやかるべく書店に借金

をして一人前のつもりだが、しょせん借金はいつかは払わねばならないので、あまり借りないことにしている。

数日前にバロン・デ・イタペチニンガ街のブラジリエンセ書店に、エドアルド・プラード生誕百周年記念の出版書が出ていたので、まっ先に定価を見たら三百八十クルゼイロとなっている。エドアルド・プラードは私の尊敬するサンパウロ人の一人だが、本文を数ページ拾い読みして購入は見あわせた。ほかにも欲しい新刊書が幾つかあるが、いずれも七、八百クルゼーロもするので当分待つほかはない。

次に高価なために気易く買い得ないのがレコードだ。外国からの輸入盤は、一枚千五百クルゼーロもするし、内国盤とても七、八百クルゼーロするので、いい気になって数枚も買うならば財布がからになってしまう。先月は靴の購入をやめて古靴を修繕し、そのかわりレコードを五枚ほど買った。クローム皮の靴がレコードにかわり、もらいもののウィスキーで半ば夢心地となってハイドンやモーツアルトを鑑賞するとは、なんと世知がらい文化的雰囲気であることか。

最後はシネマだが、これまた近ごろは特殊な映画

は入場料が百クルゼーロもする。いま予告中の超特作映画『ベン・ハー』が上映されれば百クルゼーロ以上かも知れない。こうなればシネマとも言えないが、低俗なものを幾つも見るよりは名映画を一つ見る方に賛成したい。特に『ベン・ハー』は原作小説の著者リュー・ウォーレースの人物にひかれるせいか、是非とも見たい気がする。

リュー・ウォーレース（一八二七―一九〇五）は元来が軍人で、メキシコ戦争を初め南北戦争に従軍し、後にニュー・メキシコ州の知事となり、一八八一年から五年間、トルコの大使の任にあったこともある。おそらく彼がトルコ在任中にアラビア、シリア、トランス・ジョルダン地方を旅行し、あの宗教小説『ベン・ハー』の構想を描いたものであろう。また彼はハリソン大統領のおりに、特使としてブラジルを訪れたこともある。

文化予算がウィスキーから本、レコード、映画に飛び、ついには『ベン・ハー』の著者リュー・ウォーレースを引き合いに出したが、この辺でひと休みしてウィスキーを飲みながら次の題材でも考えることにしよう。

ブラジルの俗謡踊り

フォルクロレを辞書でみると民謡、俗諺、伝説となっているが、ブラジルのフォルクロレは俗謡踊りというのが適切かと思う。つまりフォルクロレは単なる民謡でなく、その踊りも意味されているからである。これは世界的にそうかも知れない。

ブラジルのフォルクロレの歴史は相当古く、ジェズイットの土民教化のころに始まっている。それには土着俗謡のフォルクロレ・カボクロがあり、またアフリカの黒人奴隷から伝わるフォルクロレ・ネグロや、ポルトガルやスペインの拓植民によって入れ

られたフォルクロレ・イベリカが原型をなすものもある。

フォルクロレは、これに興味のない人にはつまらないシロモノだが、およそ人類学にあわせてブラジルの風土と地方色を学ぶには、フォルクロレは重要な一分野であることは否定できない。だから興味がないにもかかわらず、それを研究するうちに自然に好きになる人があるようだ。私などは好きというよりは、なかば義理づくで少しばかりブラジルのフォルクロレを研究しているが、このごろになって幾分か理解できるような気がする。

サンパウロ市の四百年祭を機会にブラジルのフォルクロレ研究と、その保護機関の必要性が唱えられ、ユネスコと提携してブラジル文化社会科学、教育の一部門として『ブラジル俗謡研究会マリオ・デ・アンドラーデ』と『パウリスタ俗謡普及会』が設けられた。

全般的にみてサンパウロがフォルクロレであまり振わないのは、フォルクロレ・パウリスタというものがほとんどないからであろう。サンパウロでのフォルクロレ研究とその普及に情熱を打ちこんだことでは、マリオ・デ・アンドラーデと田園詩人アマデウ・アマラルをあげねばならない。またフォルク

ロレ・カイピーラの普及ではコルネリオ・ピレスの名が思い出される。

ところでサンパウロといわず、ブラジル全土で代表的な俗謡踊りにはどんなものがあるか。

まずポプラールなものとしてクルルーが頭に浮かぶ。このクルルーはサンパウロにもかなり普及しているが、特に盛んなのがマット・グロッソである。従ってマット・グロッソのクルルーでよく知られているほどだ。

このマット・グロッソのクルルーを研究したのは、ブラジル人ならぬドイツ人の人類学者カール・フォン・デンステーンで、彼はそのため一八八七年から数年もクヤバに滞在したといわれる。

クルルーの語源はツピー・グワラニーに発して、『クルルー蛙』を意味する。クルルー蛙が飛ぶような踊りであるところからその名称が生まれたもので、アマゾンのソリモンエス地帯の土人の踊りに始まっている。マリオ・デ・アンドラーデの著書『クルルー』には、これはアマゾン土人の原始踊りであって、ジェズイットが宗教祭りにそれを取り入れ、マット・グロッソを通じて各州に普及されたとある。だからクルルーはブラジル土人文化研究の一課題ともなっている。

クルルーの熱心な研究家には、同じくドイツ人の人類学者マックス・シュミットがある。彼は、一九〇〇年のころマット・グロッソの各地を旅してクルルーを綿密に観察し、その踊りと楽器について詳しく紹介していることは敬服に価する。

サンパウロ州では、バンデーランテやモンソン隊の開拓地であるピラシカバ、チエテ、ラランジャル、コンシャス、ペレーラにクルルーがよく普及している。

クルルー踊りは地方によって必ずしも同じではないが、大ぜいが円形を描き、その中から、二、三人ずつ現われてびっこをひき、飛び上がって踊るのがその特徴をなしている。歌詞も土人の踊りではツピー語が主だが、カボクロのクルルーはいうところのカイピーラ語である。今ではピラシカバのクルルーといわれるほど、同地でのクルルーが有名である。

このクルルー踊りの特異性は、サンバやバッキのように女性が現われずに専ら男性だけの踊りであることだ。しかも白人よりは黒人、ムラット、カボクロが多い。

つぎはイベリア俗謡踊りのファンタンゴだが、こ

れにはスペインとポルトガルから伝来した二つのものがある。スペインのファンタンゴはスペイン南部の田園踊りであり、ポルトガルのものはアコーデオンまたはギターの奏楽で踊る。これはサパテアド踊りにも似て、脚部を敏捷に動かすのが特徴である。ブラジルでは南リオ・グランデ、パラナ、サンタ・カタリナによく普及し、サンパウロ州ではクツイー、ソロカバ、サン・ミゲル・アルカンジョ、イタペチニンガ、イタラレー、サラプイー方面で盛んである。

これも殆んど男性だけの踊りで、『ケブラ・シフレ』『ペガ・ナ・ボタ』『ビラ・コルポ』『マンダジーニョ』などの踊りが総括的にファンタンゴと呼ばれている。

それからブラジルの土人踊りから伝来するものに、カテレテあるいはカチラがある。これもジェズイットの宗教祭りに取り入れられたのが、次第に広められたものだ。カテレテはミナス、マット・グロッソに盛んで、サンパウロ州ではサンパウロ市の近傍でこの踊りの見られるのが面白い。

パウリスタではカテレテよりは、バタペまたはカチライペの名でよく知られている。かつてはピラジューでカテレテが盛んであった記録がある。

サンパウロ市の近くではサンタ・イザベル、カラピクイバにカテレテ踊りが見られる。またピラシカバでもこの踊りが隆盛をきわめたと開くが、どうやらサンパウロ州ではピラシカバがフォルクロレの本場といえそうである。

次はフォルクロレ・ネグロだが、その代表的なものがバッキとサンバである。

バッキは十七、八世紀にアフリカのコンゴとアンゴラから伝来したもので、ブラジル全土に普及し、バッキ専門の研究家もいるほどだ。サンパウロ州ではカピヴァリー、チエテ、ラランジャル、ポルト・フェリス、ピラシカバ、ジュンジャイーでバッキが盛んである。近来ではバッキを変型した白人踊りもあるが、これは世界的に普及している。

なおサンバとコンガーダ、並びに宗教儀式の様相を帯びるマクンバについて書けば長くなるし、退屈でもあるからそれは省く。

外国人にはブラジルのフォルクロレの熱心な研究家があるが、寡聞にして日系コロニアではその名を聞かない。

もし居られるならば、その研究や所説を発表願いたいものである。

リオの〝治外法権地帯〟

―山上のファベラ―

カロリナ・マリア・デ・ジェズスが、サンパウロ市カニンデ区のファベラの生活を描いた『クワルト・デ・デスページョ』(オンボロ長屋と邦訳されている)で一躍有名となったが、リオ市のファベラこそリオ特有のものであろう。それはレシフェのモカンボ、またはポルト・アレグレのマロカにも相当するが、あのファベラを単に黒人の貧民窟と訳したのではぴったりこない。こうなるとファベラの適切な訳語がむつかしい。

リオ市の名物，最下級民の雑居するファベラ

リオのファベラは所々の岩山の上か中腹に形成されていて、それにはルアの名はなく、市街地図にも記載されていない。

あの雑然と群居するボロ家は市役所から正式の許可を得たものではもちろんなく、市役所当局でもこれを黙認している形だ。

もしファベラ以外の場所に許可なしで建築をすれば、規則違反で罰則をうける。従ってファベラは一つの治外法権地帯であり、黒人のみの別社会でもある。

ファベラには言うまでもなく学校も水道、電燈、下水溝もなく、不衛生きわまる最下等社会で、悪い意味で現世離れのしたものだが、そこに住む黒人には、彼らなりの天国であって、常に陽気な歓声が聞こえるのがほほ笑ましい。

彼らがもし当局から強制立ちのきを命じられるならば、また別の空地にファベラが現われる。つまり、リオ市から黒人が絶えぬ限りファベラは消えることはないであろう。

リオのファベラの歴史は相当古く、奴隷解放の直後に始まっているようだ。黒奴は自由とはなったが土地も金もないので、だれの所有にも属さない空地を捜がしてボロ家をつくったのがその発端となって

いる。特に岩山などは市のものであって、個人に所有されるのはまれといってよい。現在のリオでは岩山がファベラとなったのはそのためであり、数十家族から数百家族が群集生活を営むのが特徴である。

およそ世界の各都市の山手街は富裕人の住宅区となっているに反し、リオでは山手に貧民の黒人が住んでいるとは面白い。

リオの近傍では昔の王政期に設けられた、サンタ・クルース街道に沿ってつくられたファベラが最古のものだ。一時はこのサンタ・クルース街道のファベラは名高い存在となり、リオの名物となって、カリオカのうたにまで歌われたほどである。

その代表的なものが、かつて一世を風摩したカルナバルの歌の一節である。

ノ・カルナバル
メ・レンブロ・タント・ナ・ファベラ
オンデ・エラ・オィー
サンバヴァ

このカルナバルの歌をうたいながら三日間踊り狂うファベラの黒人には、人々の常識で割り切れない人生哲学がある。それがリオのカルナバルの特色と

すれば、もしファベラの住民が絶えればリオのカルナバルは味気ないものになるかも知れない。市立劇場や高級クラブの舞踏会につどう上流人だけでは、あの街頭に展開される黒人のカルナバル風景は見られない。

ところで、最も大規模のファベラは、十九世紀末にバイアのセルトン地帯のカヌードスに起こった邪教徒の叛乱戦当時に設けられたものだといわれる。ファベラの語もその時につけられたと、ある歴史家は語っている。

政府軍に包囲されたジャグンソ族は、カヌードスの山麓に群居して持久戦をつづけたが、それをファベラと名付けたのがファベラの語の始めとも言われる。これについてはエウクリーデス・ダ・クーニャの名著『オス・セルトンエス』にも記述されているが、こうなれば、ファベラの語の超源がリオとバイアのカヌードスの、いずれが先きかは断定し難い。

カヌードスの叛乱戦のリーダーであるアントニオ・コンセリェーロの死によって、さしもの動乱も終局し、凱旋軍がリオに引揚げ、陸軍省の裏側のプロビデンシア山頂に仮バラックを設け、それが政府軍の一時的の兵営となった。その時にある兵士が皮肉めいた句調で仮設バラックを「ファベラ」と名付

けたのが、リオでのファベラの語の最初ともなったようだ。つまり、ファベラそのものは、カヌードスの叛乱戦以前にリオにあったのは事実だが、ファベラの語の生まれたのはカヌードス戦の後のことだ。

リオのプロビデンシア山頂の仮設バラックを、「シダーデ・デ・アントニオ・コンセリェーロ」と呼んだともいわれるが、それほどに政府軍は一年にも及んだカヌードスの包囲戦には手を焼き、「ファベラ」にはひどくこりたもののようだ。

一八九二年ごろのリオ市の人口は六十万足らずで、市中至るところに所有主不明の土地があったので、そこにファベラがつくられて盛況を呈した。それらのおもなものがファベラ・ド・ピント、ファベラ・ド・サルゲーロであった。

進んで一九〇五年には、市の区画整理や改良工事のため、多くのファベラの住民は追われることになった。それが結局は岩山の中腹や頂上に群居するようになったものだ。

彼らの生き甲斐は、一年を通じてかせいだ金でカルナバルの仮装具を整え、サンバ踊りとあの喧騒な歌の練習をすることだ。

そうした陽気さの反面、塵挨の中に嬰児の死体が

捨てられていることもまれでなく、ファベラが普通人に理解され難い別世界となっている理由である。

しかし、ファベラが新首都ブラジリアにも出現しつつあるとか。それはあの近代都の粋ともいうべきブラジリアに興ざめといわざるを得ないが、宮殿にもカワヤありの感を深くする。

結局は黒人のいるところにはファベラはつきもので、そこにまた、ブラジル社会の面白さがあるのかも知れない。

共和博物館となったカテテ宮

―元大統領公邸―

先日、リオのフラメンゴ海岸通りのホテル・ノーボ・ムンドに投宿した私は、すぐ近くのカテテ宮を訪問した。

カテテ宮が大統領公邸であった間は特別これに興味はなかったが、ブラジリアへ遷都後この建物がＭＵＳＥＵ　ＤＡ　ＲＥＰＵＢＬＩＣＡ（共和博物館）となったので、これを見学する気になった。

カテテ宮は「パラシオ・ダス・アギアス」の別名でも知られるが、それは屋上に幾つかのワシの像が

配置されているからだ。

リオのカテテ街は、ユダヤ系の家具店が軒をつらねているところで、私は商用でリオ訪問のたびに必ずあの付近を通るにもかかわらず、かつてカテテ宮を見学する気にならなかった。むしろ時には、外国の高官の大統領公式訪問で通行が遮断されて腹がたったくらいのものだった。ところが最近のリオ旅行では、珍しくもカテテ宮の訪問を思いたったものである。

私の著述家としてのふれこみがきいたせいか、カテテ宮管理長のジェニー・ドレーフス女史が、自ら私を案内してくれたのは感謝のほかない。

聞くところではカテテ宮は、初代ノーバ・フリブルゴ男爵の本邸として一八六二年に完成したものだ。従って来年（一九六二年）で百周年を迎えるわけである。

初代フリブルゴ男爵が死去してからは、その子息サン・クレメンテ男爵（後の伯爵）の邸宅となった。このサン・クレメンテ男爵については、サンパウロ新聞一九六一年三月二十二日号の「ブラジルのスイス、ノーバ・フリブルゴ」に述べた。

サン・クレメンテ男爵はリオ州に十五の耕地を所有する大耕主であったので、奴隷開放による打撃は

実に大きく、ついにカテテ宮をブラジル銀行の抵当に入れる財政的窮状におかれた。当時はカテテ宮をホテルにする案も出たが実現されず、ブラジル銀行を介して共和政府とサンクレメンテ伯爵家との間にこの建物の売買契約が進められたようである。カテテ宮が共和政府によって正式に買収されたのは、三代大統領プルデンテ・デ・モラエスの時で、買価は一千八百コントスであった。

当時この建物に居住したのは副大統領マヌエル・ビトリノ・ペレーラで、それ以来は専ら大統領官舎ではありながら、事実これを住居としたのは故ジェツリオ・ヴァルガスだけである。

カテテ宮は日本流にいう三階建で、ルナセンスのネオクラシック型に属し、ドイツ人の設計で、室内装飾にはフランス人とイタリア人の専門家が当たっている。この建物は外部から見るだけではその豪華さは想像もされない。内部の装飾と家具調度をみて初めてその壮麗無比を如実に知り、これを造営したフリプルゴ男爵とサン・クレメンテ伯爵の風格がしのばれる。特に天井画とシャンデリアのきらびやかさは目を奪うばかり、また彫刻された重厚な扉と、日本や支那の蒔絵装飾を思わせる豪奢な家具は、帝政期の代表的貴族の生活を現わしている。

地階はサロン・ダ・レプブリカ、会議室、大臣室から成っている。サロン・ダ・レプブリカで人人の注目をひくのは、デオドロ将軍が史的宣言の署名をした机と、それに使用したペンがそのまま保存されていることだ。実にこのペンによって一八八九年十一月十五日にブラジルの運命が決せられ、七十年の帝政から共和制が生まれたのだ。この室にはデオドロ将軍の肖像や軍服、軍刀、多くの勲章が見られる。

別室に陳列されるプルデンテ・デ・モラエスの遺品とカヌードス叛乱戦の記念物には感慨尽きないものがある。カヌードス遠征軍に使用された銃や剣、砲弾、軍旗も陳列されている。その広大な大臣会議室に掲げられる「ブラジル国旗誕生」の大作は、国宝的名画ともいうべきであろう。

二階の各室には歴代大統領の肖像写真、礼服、勲章、個人的所有物であった陶器、メタル、扇子などが飾られている。それらは、ニーロ・ペサーニャとエピタシア・ペッソア両家から寄贈されたものが比較的多い。その他カンポス・サーレス、ロドリゲス・アルベス、アフォンソ・ペンナ、ウェンセスラウ・ブラス、アルツール・ベルナルデスの遺品も相当見られる。

サンパウロ人に懐かしいワシントン・ルイスの記念室もある。彼の死の直前の書簡が硝子箱に収められている。その文面に、「ブラジルの現状は多事多難だが、さりとてその将来性には変わりない。全国民はこの苦難に耐えて未来の歓喜を願うべきである」と述べているのに胸をうたれる。

三階は名高いサロン・アズールという社交室で、これに謁見室が続いている。ここで各国の大使高官が信任状を奉呈したのだ。私は、田付大使以来、安東大使までの諸大使の姿を思い浮かべた。

想像より質素なものでは、大統領の事務室とその居間がある。大統領の事務室には、クビチェック前大統領の就任式に使用した礼服とその肖像画が掲げられている。この肖像画はポルチナリの作というが、失礼ながらはなはだ不出来というほかはない。私が率直にこの感じを述べたら、案内のドレーフス女史が笑いながら「ご説の通りです」と答えたのはおかしかった。

ついでジェツリオが劇的最後を遂げた寝室を見たが、これがたいして私を感動させなかったのはどうしたものか。それは独裁者ジェツリオを傑出した政治家と思いつつも、全面的に心服し得ないものがあるからかも知れない。博物館となったカテテ宮はブ

ラジル共和史の縮図であり、これを訪れて歴代大統領のありし日をしのぶと共に、共和史のあらましを学ぶことができる。

今一つ見る価値のあるのはカテテ宮の庭園だが、これはカテテ街からフラメンゴ海岸に面する広大なもので、その中にドン・ジョアン六世が南洋から取り寄せた珍しい樹木が見られる。

この稿を終えるに当たり、私のカテテ宮見学に多大の便宜を与えられた同博物館管理長ジェニー・ドレーフス女史に、深くお礼を申上げるものである。

ブラジルの祝祭日

今年度（一九六一年）第四回全伯日語教職員講習会の希望によって、去る十一月二十二日に「ブラジルの祝祭日」のテーマで話をした。当日の聴講者は五十名ほどで熱心に聞いていただいたが、これは私としても初めての試みであるから、話の内容の概略を記してみたい。

ブラジルは他国との比較で祝祭日が多い。それらは法令で設定された国祭日、つまりフェリアード・ナショナルとして商工業が義務的に休業する日と、

ポント・ファクルタチーボで任意に休業する日とがある。ポント・ファクルタチーボは官庁の休みを意味するほどで、官公吏には一年を通じて相当の休日があるわけだ。これはラテン・アメリカ諸国の通弊でもある。近ごろでは、銀行が官庁と歩調を合わせて休業するのでケシカランとの声が起こっている。

ところで同じこの祝祭日も、カトリックの宗教祭と、国家的記念日の二つに大別される。また、ほかに地方的に催される祝祭日、あるいは法令によらずして習慣的に行なわれるもの、さらに奥地に見るカボクロや黒人の邪教徒特有のお祭りなどがある。それらを全部休業するとなると年中働く日がなくなる。どうかして祝祭日がつづくと、人々はそれを利用してドッと遊びに出かけるが、さて、その日がなんのための祭日か記念日かは知ろうともしない。

およそこれらの祝祭日には、ブラジルの社会的特異性、人情風俗、地方色が現われている。そのあるものには植民期以来の伝統がうかがわれる。

さて、十二月三十一日夜半のミサ・ド・ガーロが過ぎ、新年初頭のお祭りでは、おもに地方農村で行なわれるサント・レイス祭がある。このカボクロ的のお祭りがブラジルの年中行事の始めをなしている

ので、それから順序を迫って書き出してみる。

一月七日　サント・レイス祭（主顕節）おもに奥地農村で行なわれる。粗末だが色とりどりの服を着用し、異様なマスク（面）をかぶった数名からなる一団が、打楽器を奏しながら戸別訪問して家内安全と商売繁昌を祈願する。そして何がしかの金をもらうが、もしそれを拒絶すれば、彼らはどろぼうに早変わりすることがある。

一月九日　“Ｄｉａ　ｄｏ　Ｆｉｃｏ”　一八二二年のできごと。ジョゼ・ボニファシオ、ジョアキン・ゴンサルベス・レード、ジャヌアリオ・クーニャ・バルボーザなどによる、ドン・ペードロ一世のブラジルへの引きとめ運動が効を奏し、八千人の署名を得た。ドン・ペードロはポルトガルへの帰還を断念してブラジルにとどまることを宣明した。ここにブラジル独立第一歩が印され、それをデーア・ド・フィコといわれるが、今ではかすかに記憶されるにすぎない。

一月二十日　リオの護神サン・セバスチョン祭。一五六七年一月二十日のフランス軍に対するブ

ラジルの戦勝記念日でもある。リオ本来の創設記念日と混同する向きもあるが、それは三月一日である。

一月二十五日　サンパウロの創設記念日。ジェズイツタ教団のマノエル・ダ・ノブレガ神父とジョゼ・デ・アンシェタ修道士ほか十数名の協力者により、ビラチニンガ高原、現在のパテオ・ド・コレジオにおいて、サンパウロ・デ・ビラチニンガ村創設のミサがあげられたのが一五五四年一月二十五日、この日である。

二月から三月にかけてのカルナバル。来年（一九六二年）は三月の四、五、六日。カルナバルから四十日がクワレズマ（四旬祭）で、この間は結婚式を避ける習慣がある。

三月九日　聖僧ジョゼ・デ・アンシェタの誕生記念日。アンシェタをブラジルの最初の小学教師として、誕生当日を「師の日」とするが、まだ広く普及されていない。当日サンパウロ市セー広場のアンシェタの銅像前に花束が飾られる程度である。

四月七日　ドン・ペードロ一世の退位の日。一八三一年の史的できごと。

四月十八日　モンテイロ・ロバット誕生日。モンテイロ・ロバットは、サンパウロ州タウバテの生んだ文学者。この日を期し、当日から七日間を「書籍週間」として全伯的に記念される。

復活祭（パスコア）　四旬祭後のセマーナ・サンタ。来年（一九六二年）は四月二十二日の日曜日。

○四月二十一日　チラデンテス記念日。ブラジル独立運動の犠牲としてチラデンテスことジョアキン・ジョゼ・ダ・シルパ・シャビエルは、一七九二年四月二十一日にリオのサン・ドミンゴス広場で処刑された。

四月二十二日　ブラジル発見記念日。

○五月一日　労働祭。

五月七日　キリスト昇天祭。

五月十三日　奴隷解放記念日。一八八八年五月十三日、ドン・ペードロ二世の息女イザベルによって、「レー・アウレア」なる奴隷解放令が署名発布された。

○五月第二日曜日　「母の日」。

五月二十四日　ツユチー戦勝記念日。パラグワイ戦史に輝くマノエル・オゾリオ将軍をブラジル軍総司令官とする、一八六六年のツユチー戦勝。

六月十一日　リアシュエーロ海軍戦記念日同じくパラグワイ戦、タマンダレ提督とバローゾ海軍大将の指揮によるブラジル海軍の大勝利。

六月十三日　サント・アントニオ祭。

六月二十四日　サン・ジョアン祭。

六月二十九日　サン・ペードロ祭。

七月九日　サンパウロ護憲革命記念日。

七月十六日　商業の日。ブラジルの開港と自由貿易、外国移民導入の損唱者カイルー子爵ジョゼ・ダ・シルバ・リスボアの誕生日をもって「商業の日」が設定された。

七月二十日　翼の週間。七月二十日のサントス・ズモンの誕生日から七日間を「翼の週間」として記念される。

○八月十五日　聖母昇天祭。

八月二十五日　陸軍の日(デーア・ド・ソルダード)。ブラジル陸軍の創設者カシアス公爵ルイス・アルベス・デ・リーマ・エ・シルバの生誕日をもって、陸軍の日が記念される。

九月四日から七日まで、ブラジルの護神ノッサ・セニョーラ・アパレシーダ祭が挙行される。

○九月七日　ブラジル独立記念日。

九月十日　新聞の日“Ｄｉａ　ｄａ　Ｉｍｐｒｅｎｓａ”一八〇八年九月十日、ブラジル官報「ガ

ゼッタ・ド・リオ・デ・ジャネイロ」が発刊さる。

九月二十一日　樹木の日

十月十二日　アメリカ発見記念日、または「大洋の日」。

○十一月二日　フィナード（孟蘭盆）。

○十一月十五日　共和宣言記念日。

十一月十九日　国旗の日“Ｄｉａ　ｄａ　Ｂａｎｄｅｉｒａ”一八八九年の臨時政府当時、ライムンド・テイシェイラ・メンデスの国旗図案とルイ・バルボーザの国旗法案によって決定された。

十二月八日　聖母懐胎日。

十二月十三日　海軍週間。ブラジル海軍創設者タマンダレ提督（ジョアキン・マルケス・リスボア）の誕生日まで七日間。

十二月二十五日　ナタール（クリスマス）。

註＝〇印は国祭日（フェリアード・ナショナル）で商工業が義務的に休業する。

以上述べたほかに、地方や町それぞれの教会祭がある。バイアのサルバドールは教会が多いだけに、年中教会祭のあるのが特徴となっている。

さらに米州だけのパン・アメリカの日があり、また商売人の販売政策による父の日、恋人の日、子供週間などがある。この中でも父の日が、母の日との比較ですこぶる影のうすいのはどうしたことか。

ブラジル農務省百年史の流れ

―百年間に農相百人―

先般、コロニア実態調査委員会の用務でコチア産業組合本部を訪れた際に、応接室に掲げられていた故フェルナンド・コスタの肖像写真をみて、思い出すことが多々あった。

私がフェルナンド・コスタに初対面したのは一九二八年で、彼がサンパウロの農務長官の時であった。当時私は、『農業のブラジル』の雑誌社にいたの

で、記事とりのため毎週二回ほど農務局を訪れたものだ。

そのころの二世諸君はまだ幼年時代であったので、へたなポルトゲースで堂々と話し合った私は大胆かつ進取的であったかも知れない。

フェルナンド・コスタはサンパウロ人でピラシカバ農大出であり、郷里のピラスヌンガに農場をもっていた。私は彼から日本人家族を斡旋する相談をうけてその農場を訪れ、一夜泊ったことがある。当日は、あたかもジュリオ・プレステス州統領がアララスを訪問の帰路、フェルナンド・コスタの農場に立ち寄ったので、私は僅かの間州統領とも語ることができた。少し大げさに言えば、私は思いがけない光栄に浴したわけである。

ジュリオ・プレステスもサンパウロのイタペチニンガ出身で、同地に耕地を所有し、フェルナンド・コスタとは個人的にも親交があったようだ。その後フェルナンド・コスタは農相となったが、おそらく農大出の農相は彼をもって最初とするであろう。

彼の農相在任期は比較的短かったが、業績においてはみるべきものがあった。

彼は常にふろ上がりのようなよい血色をし、立派な体格であったので、私は彼と対談しながらひけ目

を感じたものだ。

彼はまじめなカトリック教徒であったが、サンパウロの執政官当時夫人を失い、次いで彼自身は自動車事故で他界したのは惜しみても余りあることだ。

ところで私は彼の肖像写真をながめながら、彼が何代目の農相であったかを考えたがどうしても思い出せない。これは私のみでなく、当国の農界人でも正確に言い当てるものはないであろう。それほどにブラジルの農相のいすを占めた人は多く、複雑をきわめている。

そのブラジルの農相に関連した面白い特集記事が週刊誌ＶＩＳＡＯにのっていた。

それはブラジル農務省百年度の表題で、「百年間に農相百人」のサブタイトルがついていて注目をひく。そういえば過ぐる七月二十八日（一九六〇年）でブラジルの農務省創設百周年になる。農業国を自認する当国が独立後約四十年の帝政第二期に、ようやく農務省が設けられたのはおそすぎた感がある。

一八六〇年七月二十八日の法令一〇六七番をもって　ＭＩＮＩＳＴＥＲＩＯ　ＤＥ　ＡＧＲＩＣＵＬＴＵＲＡが新設されて、初代農相にイニャウマ子爵が任命されたが、二ヵ月余りで某陸軍大将と交代した。

そのまた陸軍大将は二十三日で退任し、それに代わって一文官が現われたが、これも任期七日であったとは笑い話のようだ。しかも当時の農務省の予算たるや、帝政政府の全予算の五パーセントで、貧乏省のあだ名がつけられたほどだ。

この農務省が新設された一八六〇年から帝政の終局までの二十八年間に、三十五人の農相が登場しているから、一人当たりの平均任期は九ヵ月二十九日となる。この三十五人の農相の内訳は子爵五人、法大出（文官）二十四人、大将二人、その他四人で、その大部分が農業と農政の知識に乏しかったとはおかしなことだ。

また帝政から共和制となった直後の三年間に、八人の農相が相次いで現われているから、その平均任期は四ヵ月四日という短命さだ。共和制最初の農相は、共和主義者の代表的人物キンチノ・ポカユーバで、一八八九年十一月十五日の共和革命の当日に就任したが、二十二日で退任している。

それから現在までの七十一年間に、六十五人の農相が現われるという目まぐるしさだ。これではだれが何代目の農相であるかを知るのは至難だ。

フェルナンド・コスタは、八十何代目かの農相と思うがどうであろうか。

共和制六十五人の農相を各々の専門別にあげると、法大出三十八人、農大出七人、土木建築技師七人、医師四人、軍人四人、獣医一人、不明四人となっている。

更にその出身州別に見ると、ペルナンブーコ十一人、サンパウロ八人、リオ・グランデ・ド・スール六人、旧リオ連邦直轄区四人、その他のミナス、バイア、パライバ、パラー、セアラ、パラナなどは一人または二人を占めるのみだ。

共和制の農相で特に知られるのは、ミゲル・カルモン、ロドルフォ・ミランダ、アシス・ブラジル、オジロン・ブラーガ、パウロ・バッロス・カルヴァーリョ、ジュアレス・タボラ、ダニエル・カルヴァーリョ、フェルナンド・コスタであろう。

この中でミゲル・カルモンは、アルツール・ベルナルデスの大統領就任と同時に農相になって、完全に四年を過ごしたから長命のレコードである。

また若年で農相になったことではジュアレス・タボラがレコードであり、彼は三十四歳で就任し、その在任中の業績には顕著なものがある。

今この稿を書きながらその昔、フェルナンド・コスタの農場で彼と深更まで語ったことを想起して懐かしさを禁じ得ない。

カフェー王国の落日

グワタパラ耕地とその創立者　マルチーニョ・プラード・ジュニオールの追想

リベロン・プレート地帯の名高い珈琲耕地では、ズモン、サン・マルチーニョ、グワタパラなどがあげられる。これらの耕地は初期の日本移民に深い縁故があり、当時の通訳や監督であった平野運平、北村政吉、鈴木貞次郎、加藤順之助の諸氏の名が連想される。特に近ごろはグワタパラ耕地がコロニアの話題に上っているが、この大耕地が時流におされて次第に経営不能に陥り、ついには分割されて日系移住会社に所有されることをだれが想像したであろうか。

一つグワタパラ耕地に限らず、かつては全盛をきわめ珈琲王国を誇った耕地で、今は見る影もなくその残骸をさらしているものが少なくない。それはまさしく珈琲王国の落日の観があり、さても時代は変わったものだ。

珈琲万能を謳歌したころのリベロン・プレート地帯には三千万本の珈琲樹があった。それははるか地平線に波状形を描いてつづく文字通りの珈琲の海で

あった。しかも、ズモン耕地の百万本、サン・マルチーニョ耕地の三百五十万本、グワタパラ耕地の百八十万本が代表的なものであった。この三つの耕地の創立者が、ヨーロッパ移民（特にイタリア移民）の誘入に尽くしたマルチーニョ・プラード・ジュニオールである。

彼はリベロン・プレートの珈琲産業の功労者であるばかりでなく、ブラジルの珈琲史に特筆されるべき人物である。

ここではブラジルが珈琲移植二百周年を記念した一九二七年度の資料を主として、特にグワタパラ耕地の史的記録をつづってみたい。

同耕地は株式組織のコンパニア・グワタパラによって経営されたが、一九二七年度の社長はアントニオ・アルベス・デ・リーマであった。

ところで、グワタパラ耕地を語るに先だって、その創立者マルチーニョ・プラード・ジュニオールを紹介するのが順序かと思う。

彼はバンデーランテの血統であるサンパウロの名門プラード家に生まれ、一八六〇年から一八六三年にかけ、サンパウロ法大での傑出せる存在であった。

やがてパラグワイ戦争が勃発するや義勇兵を志願

し少尉の資格で戦線に向かった。しかし病気のため終戦前に帰還した。彼が戦火を如実に体験したことは、その人生観社会観を一変させる動機ともなっている。

彼が三十三歳の時に父マルチーニョ・ダ・シルバ・プラードからアララス所在の三つの耕地の経営がゆだねられ、それに努力するかたわらアララスの公益事業に尽くした。同時に彼は政界にも活躍したが、早晩来るべき奴隷制度の撤廃と、それによって必然生じる労力不足を予見して、外国の自由労働移民の誘入を提唱した。彼は八方奔走の結果、サンパウロのプロビンシア統領パルナイバ伯爵の賛同と後援を得て、政界財界の重鎮を集めて「移民協会」の設立に成功した。この協会幹部として名を連ねた人々の大部分は著名のラチフンジオ（大地主）だ。

そのおもなものはイツ伯爵、トレス・リオス伯爵、ピニャル子爵、タツイー男爵、メーロ・オリベーラ男爵、ピラシカバ男爵、リメーラ男爵、オーロ・プレート子爵、ニコラウ・ソーザ・ケイロース、ラファエル・アギアール、パエス・デ・バッロス、ジョアキン・クーニャ・ブエノ、エリアス・パシェコ・シャーベス、ジョルジ・チビリッサ、アウグスト・シンシナート、アルメーダ・リーマ、アントニオ・ソーザ・

ケイロースなどである。

マルチーニョ・プラード・ジュニオールが、リベロン・プレートのテーラ・ローシャ地帯の綿密な実地調査をしたのは一八七五年ごろで、その珈琲栽培に最適の地味、標高、気候に感歎して大面積の森林を獲得した。当時は、彼の購入地の中心からもよりの鉄道駅まで五十キロ隔たっていた。

さていよいよ開拓だ。緑の海の形容詞そのものの広漠たる森林を、数百人のカマラダを動員して伐採し、数週間を経てそれを焼き払う光景は、そのころならでは見られぬものであった。まっかの炎がごうごうたる音響をたてて一挙に数百アルケーレものデルバーダ(森林伐採地)をなめつくすありさまは、凄絶というか筆舌に表わし得ない。

マルチーニョ・プラード・ジュニオールが初めに形成したのは、珈琲樹百万本のアルベルチナ耕地だが、これが後には英国系会社に買収されて有名なズモン耕地となった。日本移民が入れられたころは既にその英国系会社の所有に属していたのである。同耕地での労働争議は名高い逸話となっている。

マルチーニョ・プラード・ジュニオールは、アルベルチナ耕地に次いで樹数三百五十万という、ブラジル最大のサン・マルチーニョ耕地を形成した。こ

の耕地は彼の母ベルジアナと兄コンセリェーロ・アントニオ・シルバ・プラードの共同出資によるものであった。

更に彼は、珈琲樹数百八十万本のグワタパラ耕地の形成に乗り出したほどの非凡の情熱家であり努力家であった。

一と口に珈琲耕地とはいうが、樹数百万本以上の大耕地ともなれば、標高と地勢による珈琲栽培地区の選定、道路の開設に始まり、管理事務所並びにコロノの住宅、採集珈琲の水道溝、乾燥場、精選工場、製材、煉瓦工場、その他の農産加工施設、牧場の形成、家畜飼育場など、あらゆる部面に専門技術と知識を必要としたことは言うまでもない。

加うるに、耕地の経理面から珈琲市場の動向にも絶えざる研究を要した。

グワタパラ耕地は各々三十万本の地区六つから成り、それの擁する人口は三千を数えた。従って耕地内にはコロニアのほかに教会、学校、病院、薬局、映画館、パン屋、肉屋、雑貨店があって、あたかも町の趣きを呈した。また同耕地では珈琲の全盛期にあつても珈琲単一に終始することなく製糖、米作、綿作、牧畜、マンデオカ製粉も兼ねて、相当業績をあげたことが注目される。米作地には北村政吉氏が邦

人家族を入れ、氏自らがその指導に当たったものだ。

しかし一九一二年ごろから珈琲園に衰退の徴が現われ、いうところの減産期に入った。そのばん回策として老朽樹の剪定と施肥に留意され、堆肥用の家畜四百頭が飼育されたなどは、当時進歩的な耕地経営とて世間の注目をひいた。

その後は欧州大戦となり、特に一九一八年の霜害は甚大で、被害樹の伐採（新芽をふやすため）と珈琲の再植には非常な努力が払われた。

その甲斐あって生産は再び増加し、一九二七年度の全生産は精選珈琲十六万アローバに達した。

それらの採集珈琲の搬出のため耕地内に設けられた水道溝の延べ距離は十キロメートル、珈琲乾燥場の総面積は六万四千平方メートルであった。

また珈琲精選工場の能力は、一日当たり最高二百アローバで、それはモジアナとパウリスタ鉄道によってサントス港に積み出された。

参考までに一九二七年度のグワタパラ耕地の資産とその内訳、生産高を見ると次のようになっている。

資本金　五千コント

積立金　五千七百コント
珈琲樹数　百七十六万六千本
珈琲生産予想　十六万アローバ
総面積　六千三百五十四アルケーレ
牛畜　二千頭
マンデオカ製粉工場年産　二万五千俵
コロノ住宅　六百戸

耕地内に延長二十四キロ四百メートルの鉄道を有し、三つの駅に通ず。機関車二台と貨車十八両あり。珈琲樹三十万本に対する潅漑設備と発電所を有し、九千メートルの水道管による給水設備あり。

ちなみに同年度の経費一切（税金を含む）は、二千七百四十一コント五百八十二ミルレースとなっている。その当時の貨幣価値からすれば、一ミルレースは現在の百三十クルゼイロにも相当する。従って一九二七年のグワタパラ耕地の資本金五千コントは、今日の六十五万コントにも当たるわけである。

以上はグワタパラ耕地を時代の変遷による一例としてあげたにすぎないが、ブラジル全土にはこのような旧耕地は多い。

それらの耕地の、昔日のはなやかなりし思い出を聞くのは何だか夢物語りのような気がする。

サンパウロ出身の文化人

エドアルド・プラード

文化人という言葉がいつごろから用いられるようになったかは知らないが、私の尊敬するサンパウロ出身の文化人では、マリオ・デ・アンドラーデとエドアルド・プラードをあげたい。この二人はいずれも過去の人物だが、生前のマリオ・デ・アンドラーデには二度ほど面接したことがある。

彼は一八六〇年生まれだから、昨年（一九六〇）でその生誕百周年であり、また一九〇一年に他界したので、今年（一九六一）は没後六十周年に当たるわけである。

私どもは未知の人や見知らない過去の人物に親しみを持つことがあるが、エドアルド・プラードに対する私の尊敬の念はそれに似たものだ。彼の著作とその経歴を通して、なんとなくその人柄にひかれるというのが当たっているであろう。もし過去のパウリスタ（サンパウロ人）で典型的文化人はだれかと問われれば私はまっさきにエドアルド・プラードに指を屈したい。

今一つ彼に心服するのは、たゆまぬ努力家と精力絶倫の情熱的著述家であったことだ。

私は昨年半ばにセバスチョン・パガノ著の“Ｅｄｕａｒｄｏ　Ｐｒａｄｏ　ｅ　Ｓｕａ　Ｅｐｏｃａ”を読み、あらためてエドアルド・プラードの全容にふれることができた。最近では昨年十二月三十一日版のエスタード紙の文芸付録にのった、評論家ルイス・マルチンとジョアン・アルベス・ダス・ネーベスの「エドアルド・プラード論」を面白く読んだ。特に「エサ・デ・ケーロスとエドアルド・プラード」は興味深く参考となった。

肖像写真に見るエドアルド・プラードは、美しい口ひげと広い額、理知的なひとみがいかにも教養人らしく、しかも親しみのある風格である。数日前に、所用あってサンパウロのエドアルド・プラード街を歩きながら前世紀末のサンパウロをしのび、ふとこの短文をつづる気がわいた。

珈琲豪農と長老制の都サンパウロに育ったエドアルド・プラードは、年少にして外国旅行の夢を抱いて胸をおどらせた。

彼はその四十一年の比較的短い生涯に、二十数回にわたって外国旅行をしていることは、十九世紀末のブラジル人としては傑出した存在であった。事

実、あの豊富な教養と博学は外国旅行による知識の蓄積といえる。

彼が旅の歩を印したのは南米各国を始めヨーロッパ、アジア、アフリカ、オーストラリア、ハワイ（当時ブラジルではサンドウイッチ島と呼んでいた）にまで及んでいる。

彼のアンデス横断旅行と、シシリー島、マルタ島、エジプト、ハワイ遊記は、優麗しゃ脱な文体で叙されていて興味尽きない。

彼は大学時代から同窓の間でスタイリスト（美文家）で知られたほど文筆では頭角を抜いていたようである。同時に彼はユーモリストでもあった。彼は富裕な家庭の人にありがちな軽薄な悪趣味はなく、専ら勉学と旅行に精力を散じた。

彼は外国のうちでも特にフランスとポルトガルに多く滞在したが、その間両国の著名文学者の知遇を得たことは幸いであった。

ポルトガルでは、エサ・デ・ケーロスとオリベーラ・マルチンス、ラマーリョ・オルチゴン、マリア・アマリアなどと親交があった。わけてもエサ・デ・ケーロスは、エドアルド・プラードから少なからぬ影響をうけている。そのことが彼の作品にも見られる。また、エドアルド・プラード自身もエサ・デ・

ケーロスに学んだところが大きかったようである。
彼の作品の風格と特徴は、祖国愛に徹していたことにあるというも過言でなく、彼が長らく外国に遊んだために、高度の愛国の情熱をわかしめた点にうたれる。
彼は進歩的であった反面モナルキスト（君主主義者）であり、ことに反軍国主義者であった。一八九一年には『軍閥政治をつく』の書を公にしたが、これは当時のテオドロ政府の手によって押収された。
また、彼はブラジルの発展のために移民問題に非常な関心をもち、たびたびブラジルの外国移民を論じた。彼がフランス滞在中にフランス語で叙述した“Ｌ’ｉｍｍｉｇｒａｔｉｏｎ　ａｕ　Ｂｒｅｓｉｌ”は英、独、ポルトガル語に訳され、貴重な文献となっている。
当時はまだ日本移民はブラジルに入れられていなかったが、当国の植民史に筆を起こし、各国籍別に詳細に移民導入が記述されている。エドアルド・プラードはサンパウロ歴史地理学会、ブラジル歴史地理学会会員、並びにブラジル翰林院会員としてリオ・ブランコ子爵のいすを占めていた。
彼の人物と作品批評はエサ・デ・ケーロス、アフォンソ・アリノ、バチスタ・ペレーラ、マリア・マリ

アノ・カルヴァリョ、ジョゼ・ヴェリッシモ、プリニオ・バレットなどのモノグラフィアに見られる。

コロニアの刊行物にもサンパウロの誇りである文化人エドアルド・プラードが、種々の面から紹介されるならば有意義と思う。

Ｅｄｕａｒｄｏ　Ｐａｕｌｏ　Ｓｉｖａ　Ｐｒａｄｏ

２７－２－１８６０　　３０－８－１９０１

「新聞の日」九月十日

―ジャーナリズムは社会の燈火―

九月十日のブラジルの「新聞の日」を迎えるに当たって、当国とコロニアの言論界の過去現在を思いあわせて頭に浮かぶことが多々ある。

一八〇八年に手刷りの新聞『ガゼッタ・ド・リオ・デ・ジャネーロ』が発刊されてから百五十三年になるが、その間、多くの新聞は短命で終わり、きわめて少数のものが顕著な発展を遂げて今日に至っている。

特に近来は、強力な資本と人的機構に加うるに高度の通信網と印刷技術の発達によって、名実共に大

新聞の風格をもつものが現われている。堂々たる社屋を造営し、最新優秀の輪転機をすえるようになったのも戦後の傾向だ。これは二面、新聞社相互の激烈な競争を物語るもので、へたをすると落後するおそれがある。

邦字紙にしても同じで、かつては週刊であったのが日刊に飛躍し、紙面の増大と共に発刊部数が戦前の数倍にもなるなどは想像もされなかったことだ。これは帰するところブラジルの社会、経済、文化の向上に伴う日系コロニアの繁栄の証左であろう。あえていえば、広くブラジル社会と日系コロニアのいずれを問わず、読者の新聞に対する希望や批判の声を聞けないのがはがゆい気がする。

これでは当の新聞人にとっても張合いのないことであり、真によい新聞のできるわけがない。世界のどこを見てもうなずけることだが、すぐれた新聞を生むには読者の協力が何よりも必要であり、そこには良識に発した新聞批判があってしかるべきである。

戦前の邦字紙の特徴は、いかにも移民地の新聞らしく、経営者と担当記者の性格や個人的感情が露骨に紙面に表われていることであった。現在はそのような色彩は殆んどなく、日本語で書かれたブラジル

の新聞として大きく成長した観がある。報道の迅速と記事取材なども昔日の比ではない。

しかし、心ある読者には邦字紙の向上のために更に望むものがあろう。それは結局コロニア社会の進歩を願うことに通ずる。それには読者の新聞への愛情と進歩性に富む批判が寄せられるべきではなかろうか。

一般論としては、当国の数多い新聞の中には体裁のみ美しくて内容の貧弱なものがある。これは麗しい器に盛られた栄養価に乏しいごちそうと同じだ。

要約的に記述しうる、たいして重要性のない記事に多くの紙面を埋める反面、ブラジルの新聞として当然報ずべき当国の事柄が一行だに見当たらないことがあるのはいかにも物足りない。このことを、リオの一流紙の某記者に率直に述べたところ、不得要領の説明があったのみだった。いずれにせよ、戦後のジャーナリズムが、時に不可解な方向に進みつつあるのは事実のようだ。

邦字新聞の場合は、読者に対する単なる報道機関でなく、日本、世界事情のほか、ブラジルの経済、文化、政治、社会の全般について教示する責務があるところに編集上の複雑さと苦心がある。

こう考えるときに、新聞の経営と新聞人の責任は

実に大きく、それだけにやりがいのある仕事だ。あの締切り前の緊張と、よい新聞をつくらんがための編集局の雰囲気とは、他の事業では味わい得ない。

ジャーナリズム、の語が力強く魅力ある響きを人々に与えるのはそのためであろう。また、ジャーナリズムは社会の燈火の感を深くする。

この意味からも、「新聞の日」は新聞人の反省と読者の新聞批判の日でありたい。

一八〇八年九月十日にブラジルで最初の新聞『ガゼッタ・ド・リオ・デ・ジャネーロ』が誕生した。これは摂政王子ドン・ジョアン（後のドン・ジョアン六世）によって王室公報として発刊されたものだ。

ドン・ジョアンがポルトガルから王室をブラジルにうつした直後に、鎖国状態にあったブラジルを諸外国に開港し、ついで政府言論機関を設けたのは賢策であり、彼がすぐれた文化人たることを物語っている。

「ガゼッタ・ド・リオ・デ・ジャネーロ」の創刊号の出た一八〇八年九月十日は土曜日であったが、今年（一九六〇）の九月十日も土曜日に当たるとは面白い偶然の一致だ。

ポルトガル王室のブラジル遷居までは、ブラジル

での新聞はいうまでもなく、印刷機のすえ付けからおよそ印刷物と名の付くものは、すべて王室令によって厳禁されていた。

一七〇六年のころ、ブラジル人某（名は不明）がレシフェに初めて印刷機を設けたが、それはペルナンブーコのカピタニア領主、フランシスコ・デ・カストロ・メネゼスによって押収された記録がある。

その後一七四二年に、アントニオ・イジドロ・ダ・フォンセッカというポルトガル人が、リオに印刷工場を設置し、当時の名コヴェルナドール、ゴーメス・フレーレの賛意を得て何かの印刷物を出したといわれるが、これもポルトガル王室の知るところとなって押収破壊された。このように植民期のブラジルでは一切の印刷物は許されないばかりでなく、金銀の加工、織物工業すら持つことが認められなかった。

米州の新聞史を見ると、メキシコでは一五二〇年に初めて新聞が刊行され、ペルーでは一五八三年、アメリカ合衆国は一六三〇年となっている。ところがブラジルはいかにポルトガルの属領植民地とはいえ、一八〇八年にようやく新聞の発刊をみたとはおそきに過ぎたようだ。

ブラジルの王室公報『ガゼッタ・ド・リオ・デ・

ジャネーロ』の活字と印刷機はロンドンから取寄せられ、その編集担当はジョゼ・ダ・シルバ・リスボア（カイルー子爵）、ジョゼ・ペレーラ・ダ・フォンセッカ、ジョゼ・ベルナルデス・カストロ・マリアーノらの優秀な人物が選ばれた。

この『ガゼッタ・ド・リオ・デ・ジャネーロ』は、ブラジルの独立直後の一八二二年九月三十一日に廃刊され、それに代わって一八二三年一月二日から『デアリオ・ド・ゴヴェルノ』が発刊された。これは同年三月三十一日に『デアリオ・フルミネンセ』と改称された。その後政府公報は『コレーオ・オフィシャル』や『ガゼッタ・オフィシャル』と改められ、一八八九年の共和制以来『デアリオ・オフィシャル』となった。

民間の新聞では、『ガゼッタ・ド・リオ・デ・ジャネーロ』誕生の同年一八〇八年十月に出された『コレーオ・ブラジリエンセ』が最古のものだ。これは有名な新聞人イポリト・ジョゼ・ダ・コスタ・ペレーラによって英国のロンドンで刊行されたことは、ブラジルの新聞史に特筆されるべきである。

同紙は一八〇八年から一八二二年まで続いたが、その編集方針はブラジルの独立提唱と奴隷制度の撤廃に終始した。おそらく古今を通じてイポリト・ダ・

コスタほど祖国ブラジルの進歩を目標とし、主義主張のために鋭筆をふるったものはないであろう。

『コレーオ・ブラジリエンセ』に次いで、民間新聞としては一八三一年に生まれたＯ　Ｐａｔｒｉｏｔａがある。同紙の主筆にはジョゼ・ボニファシオやシャビエル・ブリトなど、政界の大元老が当たり非常な声望を高めたにもかかわらず、僅か二年で姿を消した。

一八二二年のブラジル独立後に発刊された新聞には、『デアリオ・ド・リオ・デ・ジャネーロ』『レヴェルベロ・コンスチッィショナル』『ジョルナル・ド・コメルシオ』『アウロラ・フルミネンセ』などがある。この中の一つ、『ジョルナル・ド・コメルシオ』だけが現在までつづいている点で、当国最古の歴史をもつものといえる。

『アウロラ・フルミネンセ』は、政治家著述家として著名のエヴァリスト・ダ・ヴェーガによって主宰され、その高い風格と自由活発な論説は世評を高めた。

急進党の機関紙でカルネーロ・デ・カンポスを主幹とする『オ・タモヨ』が創刊されたが、これは一年数カ月の短期で廃刊となった。他方、サンパウロで発刊された『オブゼルヴァドール・コンスチッィ

ショナル』は、イタリア系の新聞人リベロ・バダロが主筆であり、ドン・ペードロ一世の専制政治を批判してあくまで所説を曲げずに、ついにその犠牲として刺客の手にたおれた。彼は絶命のきわに「一人の自由主義者は死んでも自由は滅びず」と叫んだ。

このリベロ・バダロの死に刺激されて、すぐれた新聞人が相次いで現われた。

『エスタード・デ・サンパウロ』の前身である『プロビンシア・デ・サンパウロ』や『コレーオ・パウリスタノ』については、いずれ稿を改めて述べる必要がある。

大アマゾンの流れに思う

去る七月三十日、サンパウロで催された第十三回海外植民学校校友会の集会に出席した。当日は崎山比佐衛先生の二十周忌の記念集会であったためか、例年より参会者が多かったようである。

この席で、多数の知人のほかにベレンの山内登氏に面会して語り合うことができたのは、望外の幸いであった。

私は海外植民学校の出身ではないが、数年前から

同校校友会の一員に参加しているのは、故崎山先生の人格を敬慕してやまないものがあるからだ。おそらく他の校友諸兄姉にしても私と同感かと思われる。ましてや崎山先生から直接教えをうけた人においてである。この点が世間に多い「会」とは趣きを異にする。つまり、海外植民学校校友会の特色は、なき崎山先生を中心に結合され、心と心のつながりにあることだ。この事実は崎山先生の道徳というか人間的魅力を物語っている。

当日は好天気に恵まれ、会場には植民学校校友会の特異色ともいうべきなごやかな空気がかもされた。しかも宗教的雰囲気の中に厳粛な第一部の式を終え、来会者が交互に立って崎山先生の追憶談を述べ、自己紹介をやり、また崎山未亡人に寄せ書きをするなど、親しみと喜びに満ちたつどいであった。

ことにこの会合は男子だけでなく、婦人と二世男女を加えた家庭的な楽しいものであるのが見る目にも美しかった。

私はこの集会に臨んで、崎山先生は自身の開拓地アマゾンの一角に骨を埋めたことによって、拓人の面目躍如たるものがあり、この世を去って二十年を経る今日、かくも多くの人々から追慕されるとは何という果報な人かと思った。もし彼が本来の志に反

して実業家になり、都会の宅地商売などやっていたならばどうであったか。

さて私はかねてからアマゾンと結び合わせて崎山先生の人物を解剖するが、どうしてかその結論が出ない。それは彼の人柄があの茫洋たるつかみどころのない大アマゾン、そのものに通ずるからだ。そこに常識論で割り切れない人間崎山比佐衛の線の太さがあるといえる。彼がいうところの誇大妄想狂か、すぐれた先覚者であるかは未来にまつほかはない。従って、崎山先生が真に人々に理解されるのは、今から五十年ないし百年後であろう。その時こそアマゾンが世界人類の理想郷となり、アマゾン文化の開花期であるかも知れない。

いずれにせよ、現在アマゾンは、世界の移植民事業に関心をもつものの注視の的となっている。

ある見方からは多少なりともアマゾンを論じることが今日の流行でもあるようだ。しかし、そのアマゾン観が人各々によって著しく異なる。それだけにアマゾンの将来について確固たる結論を出すのは至難である。

ところが、飛脚旅行者がアマゾンの一部をのぞいただけで、いかにもアマゾン通らしい意見を吐く。僅かの日程であわただしく駆け回り、機上からアマ

ゾンをながめ、ベレンの空港で小便をしただけでアマゾンを論じられてはたまらない。そのような軽率な文章に接すると、腹だちを越えてばからしくすらなる。

アマゾンは一つの研究課題としてはあまりに膨大で、実地に深く学ぶほど憶病になって容易にペンを執り得ないことがうなずける。しかるに短日の視察旅行で得た知識で、アマゾンの大蛇や土人の生態を興味本位に叙した内容空疎のものが、真のアマゾンを知る上にどれほど役だつか。この類の書物がいかに多く出ても文献とはならない。

もっとアマゾンの大自然の前に謙虚となり、開拓の犠牲となった先駆者に敬意を表わす気持ちからもアマゾンをよく学び、真面目な筆を執って欲しいものである。それにつけても今から四、五十年あるいは七十年もの昔、外国人のアマゾンの実地踏査による記述の綿密さと執筆の真面目さに自ら頭の下がるものがある。

人々はアマゾンの参考文献として次の著者の名を記憶するであろう。

A・R・ウォーレス

カール・フォン・マルチュース

ジェームス・オートン
セオドール・ルーズベルト
H・M・トムリンソン
ポール・レコンテ
H・W・ベーテス
O・E・ホワイト

先日の植民学校校友会（J・F・ウードロフィ）の席上でも述べたことだが、もし私がアマゾン旅行の好機会に恵まれるならば、まずもってマラジョ島をつぶさに知りたい。山内登氏の説ではそれのみに二、三カ月を要するとのことであった。また、一九〇八年から一九一二年にわたるマデーラ・マモレ鉄道の建設史にからむ資料をうるためにも現地を訪れ、同鉄道工事中に悪疫のために倒れた千五百名の犠牲者の跡をしのびたい。

崎山先生二十周忌の記念集会に列席した私には、アマゾンについての種々の構想がわくが、さとてそれによって文章をものする識見はなく、勇気もない。せめてマウエスの地に眠る崎山先生の霊、安かれと祈るのみである。

聖州人の典型
フランス生れのヘラクレス・フロレンセ

サンパウロのドン・ペードロ二世公園に沿って運送屋が軒を連らねる場所がある。そこからビンテシンコ・デ・マルソ街に通じるところにルア・ヘルクレス・フロレンセがある。このルアは少しも目だたず、しかもごみごみした感じで、およそヘルクレス・フロレンセの人物を思わせるには遠いものだ。これは畏友古野菊生氏のかつての説の通り、サンパウロのルア・ダス・フロレスにそれらしい観が全くないのと同じである。詩人や文学者、芸術家の名をつけられたルアに一本の街路樹もなく、山羊、豚、ニワトリの卸屋が並んでいるのは興ざめだが、事実そんなのが多い。

さてこのごろ、思いつくままに二月二十九日生まれのブラジルの著名人（過去現在を通じて）を調べたところ、ヘルクレス・フロレンセの名が目についた。

私はイピランガのパウリスタ博物館を訪れるたびに、あの数多いサンパウロ州の風景、風俗、人物を描いたヘルクレス・フロレンセの作品を見て感服していたが、彼が二月二十九日生まれとは知らなかっ

た。

彼は画家、著述家として知られていたが、その専門は博物学であった。また彼はいうところの博識家で、あらゆる科学にひいでるほかに音楽に造詣の深かったことは、前世紀の典型的文化人といえる。更に、彼は博物学者にあわせて医学にも通じ、土木建築の経験もあるなど、まさしく驚異的人物というほかはない。前世紀のブラジルでは、このような人材こそ要望されたわけである。

ところで、ヘルクレス・フロレンセは、一八〇四年二月二十九日フランスのニースに生まれているから国籍的にはフランス人だ。が、彼ほどブラジルの山河風物を愛し、ブラジル人になりきったものは少ない。

彼は郷里で高等教育を終えてからブラジルに渡り、五十余年の生涯を当国の博物、地質、社会、人類、風俗の研究にささげ、七十五歳でサンパウロ州のカンピーナスに没した。

彼は富裕ではなかったが経済的には割合いに恵まれていたので、サンパウロとその隣接州をくまなく踏査し、綿密な博物研究をつづけた情熱には頭の下がるものがある。

特に、彼はすぐれ文筆家であると共に、絵画を得

意としていたので、多くの植物や鳥類を写生し、風俗、風景を描いたが、それは数千点にも達する膨大なものである。写真の普及していなかった当時として、彼のようにスケッチのできる博物学者は貴重な存在であったことは言うまでもない。

現在パウリスタ博物館に蔵されている彼の作品は一部分に過ぎない。

ヘルクレス・フロレンセは、広くブラジルを学ぶというよりは、サンパウロ州の調査と研究に重点をおいていたところに、他の博物学者と異なる点がある。

その意味で、サンパウロ州に関する限り、彼ほど細密かつ奥深い研究をした学者はなく、彼がフランス人でもブラジル人でもなくパウリスタと称された理由である。

彼によって紹介された景勝地は実に多く、イツーやアバニャンダーバ及びイタプーラの瀑布などは、彼独特の壮麗な文章で叙されている。

交通不便の前世紀半ばに、ブーロやカノアによって踏査した区域は六千キロにも達している。

ヘルクレス・フロレンセは専門の画家ではないが、パウリスタ博物館に秘蔵される絵画では数において彼の作品が最も多い。その代表的なものをあげ

ると次のようである。

マット・グロッソに向かうモンソン隊
ソロカバの馬市
カンピーナスの製糖工場
サンパウロ州西部の珈琲耕地
トロペーロ（馬匹行商）の生活
カンピーナスの珈琲耕主の生活
イツー、ソロカバ、サントス、カンピーナス、クヤバの市街風景
インジオの生活
イツー及びアバニャンダーバの瀑布

その他人物の肖像画にはデオコ・アントニオ・フェージョ、ヴェルゲーロ上院議員、アルヴァレス・マッシャードなどが見られる。

以上数十を数えるヘルクレス・フロレンセの作品には、豊かな郷土愛の感情があふれている。

Ｈｅｒｎｌｅｓ　Ｆｌｏｒｅｎｃｅ

Ｂ　２０－２－１８２４　　Ｄ　２７－３－１８７９

道路開設と自動車

時代を生んだ功労者

ワシントン・ルイス

今年（一九六一）の八月四日で、ワシントン・ルイスが没して四周年になる。

彼の死が報じられて五日間、ブラジル全土が喪に服して弔意を表したが、官庁や学校に掲げられた半旗が今もなお私の眼底に残っているようである。

いうまでもなく、ワシントン・ルイスは前期共和制最後の大統領であり、歴代大統領の中で彼ほどサンパウロに縁故深く、サンパウロ人に親しまれたものはないであろう。特に一九三〇年の生々しい記憶が、彼を忘れ難い人格者としてサンパウロ人に印象づけていることは否めない。私個人としても彼の人物に少なからずひかれるものがあるのは、私の渡伯した一九二二年当時のサンパウロ州統領であったからだ。それは、あたかもブラジルが独立百周年を記念した年でもあった。

サンパウロが一九三〇年の護憲革命に破れ、ジェツリオ独裁権が樹立されるに及んで、ワシントン・ルイスは外国に亡命し、十七年をヨーロッパとアメリカ合衆国に過ごし、その間に愛妻を失って単身祖国ブラジルに帰った。それ以来彼が全く政治にふれ

ることなく、沈黙を守り続けたことはまれに見る人柄である。だれしも人間である限り、時には過去のグチをこぼしたくなるのが人情だが、彼にはそれがいささかもなかった。

彼が死の病床につく約三カ月前、サンパウロのハドック・ローボ街の質素な住居を訪ね、バンデーラ史について彼と語り合ったことが、私には最近のことのように思われてならない。

ワシントン・ルイス・ペレーラ・デ・ソーザが彼の全体の名であり、リオ州のマカエーの出身であるから、厳正にはフルミネンセだが、サンパウロ州のバタタエスの市長を振り出しに、政界人としての活躍舞台は殆んどサンパウロであったところから、彼がパウリスタであるかの錯覚を人々に与えたものだ。事実、サンパウロ人の大統領としてプルデンテ・デ・モラエス、カンポス，サーレス、ロドリゲス・アルベスと相並んでワシントン・ルイスの名もあげられている。彼がマカエー生まれのサンパウロ人といわれる理由である。サンパウロ市会議員を初め州議員、司法局長、サンパウロ市長、サンパウロ州統領を経てついに一九二六年に大統領に当選し、アルツール・ベルナルデスの後継者として登場した。

ところでワシントン・ルイスが、当国の自動車普

及とエストラーダ・デ・ロダージェン（車道）建設の功労者であることが、一般にはどれほど知られているであろうか。

およそブラジルに自動車が入れられたのは一九〇三年のころだが、当時は専ら上流人のスポーツとされたにすぎなく、将来それによって物資輸送の問題が解決されるなどは想像もされなかった。

その当時にしてワシントン・ルイスは、この内燃エンジンによって走る車に多大の興味をもち、これが未来の重要な交通運輸機関たることを予想し、道路の開設を力説したことは驚くべき先見であった。

一九〇四年にはフランス人のレスダン伯爵によって、初めてリオとサンパウロ間の自動車旅行が試みられて世評に上った。

次いでワシントン・ルイスと彼の親友アントニオ・プラード・ジュニオール、シルビオ・ペンテアードが、サンパウロ、サントス間の自動車旅行を企てて新聞のトップ記事となった。更にサンパウロのイタペセリカ街道で自動車競争をやり、また、サンパウロとカンピーナス間の自動車旅行を航空界の先駆者サントス・ズモンの参加を得て決行するなど、現世紀初めのサンパウロに自動車時代が現出された観があった。

一九一七年と一九一九年の二回にわたって、サンパウロでワシントン・ルイスの発案による道路建設会議が開催され、一九二〇年には既に彼は「ビア・アニャンゲラ」の道路開設を企画した。

一九一九年度の調べでは、当時のサンパウロ州に三千三百十六台の乗用車と、百三十六台のカミニョンがあり、その大部分がサンパウロに存在した。これは当時の道路の不十分を物語っている。

ワシントン・ルイスがアルチノ・アランテスの後継としてサンパウロ州統領に就任してからは、大幅の道路建設予算を計上し、その実行に全力を注いだ。彼の施政要綱の第一義を道路開設におき“ＧＯＶＥＲＮＡＲ　Ｅ　ＡＢＲＩＲ　ＥＳＴＲＡＤＡＳ”をスローガンとした。

この点は、ジャニオ・クワドロ前州知事と現在のカルヴァーリョ・ピント州知事の、プラーノ・デ・アッソンに似るものがある。

一九二〇年度に、ワシントン・ルイスが州内の道路開設に投じた予算は一千十五コントだが、これは前期十年間の道路予算に相当するものだ。彼による道路建設の効果は顕著で、一九二一年にはサンパウロ州内に六千五百八十八台の乗用車と、三百二十九台のカミニョンが数えられるまでになった。同年度

の道路新設費は二十八百十七コントに達し、一九二二年には一躍八千八百三十一コントを示した。

彼のサンパウロ州統領任期中の道路開設工費は一万三千九百六十八コントで、その開設距離は一千二百三十六キロである。

リオ、ペトロポリスの車道開通は、あたかもワシントン・ルイスが大統領に当選した一九二六年であるが、この車道建設にしても彼の提言に負うところが大きい。

この十数年間に、南米の誇りともいうべき「ビア・アンシエッタ」が開通し、次いで「ビア・ズトラ」が造られ、また「ビア・アニャンゲラ」と「ビア・フェルナン・デーアス」が完成した。そのほか国道、州道は四通八達の観がある。

先日、アチバイアに催されたスール・ブラジル産業組合の講習会に出席しての帰り道、坦々たる「ビア・フェルナン・デーアス」を疾駆しながらふとワシントン・ルイスに思いをはせた。彼は故人となったが、彼の理想と夢がこのように着々と実現されつつあるのだ。ワシントン・ルイスこそブラジルに自動車時代を生んだ功労者だが、彼が亡命の旅から帰っては質素な借家住いをし、一台の高級車も持たなかったのは何を物語るであろうか。

誇らしき話題

女流作家ラケル・デ・ケーロスの誕生五十周年に寄せて

数年前リオのパケタ島に遊んだ時に老評論家ビバルド・コアラシー氏（Ｖ．Ｃｙ）を訪れたことがある。想像のほか質素な住居で、ベルを鳴らしたら二匹の堂々たるジャーマン・ボキサーがのっそり現われたのには面くらった。

やがて痩型の節くれだったという感じのコアラシー氏がやって来てほほえみながら、「この犬はものすごい顔をしているが、訪問者を識別して、やたらにかみつくことはしませんから心配いりません。」と、私を招じ入れた。

それは二月の蒸暑い午後であったが、コアラシー氏と私が語る間、二匹のジャーマン・ボキサーはいかにもだるそうにかたわらに寝そべっていた。そして時々眼を開いてはコアラシー氏の顔をみつめるのがおかしくもあった。

コアラシー氏が言うには、この愛犬たちは、ラケル・デ・ケーロスがこの島を去るに当って、彼女から記念にもらったのだ、と。

女流作家ラケル・デ・ケーロスの名はかねて聞い

ていたが、彼女がパケタ島に住んでいたことをコアラシー氏の話によって初めて知った。

話のついでに、私は半ば好奇心から

「ラケル・デ・ケーロスは今いくつですか。」

とたずねたところ、コアラシー氏は、「さてね何歳ですか知ら、婦人の年齢を知るのはむずかしいですよ。」とてアイマイな返事をして語らなかった。

これは老著述家コアラシー氏が親愛の女流作家に対する尊敬と思いやりであったかも知れない。

私は女性の年齢をみだりにきくべからず、の処世訓を如実に感じた。もっとも、いかに私とてラケル・デ・ケーロス女史直接にはこんなヤボな質問はしなかったであろう。

コアラシー氏と意気投合した私は意外に長時間話し込み、夕刻同氏宅を辞してリオ行きの船に乗った。コアラシー氏から聞いたラケル・デ・ケーロスの処女作『オ・キンゼ』を忘れないため手帳に書きとったのもその時である。

その後、ブラジル文部省出版『ブラジル文学年譜』によって、彼女がセアラのフォルタレーザ出身で一九一〇年十二月十九日生まれであることを知った。つまり昨年（一九六〇）末で彼女は誕生五十年を迎えたわけである。それは私が想像していたよりも若

く、今がむしろバルザケアナの花盛りといってよい。

ラケル・デ・ケーロスの名が当国の文壇に現われたのは、一九三〇年に彼女の処女作Ｏ　ＱＵＩＮＺＥ”が発表されてからである。

当時これはジョゼ・アメリコ・デ・アルメーダの“Ａ　ＢＡＧＡＣＥＩＲＡ”に比肩する、と評されたほどだ。一九三〇年といえばラケル・デ・ケーロスが十九歳の時だが、これは彼女が世間でいう文学少女ではなく、非凡の文才に長じていたことを物語っている。

ノルデステ文学と聞けばジョゼ・リンス・ド・レーゴ、グラシリアノ・ラーモス、ジョルジ・アマードなどを連想するが、それらに並んで女性のラケル・デ・ケーロスが三十年の作家生活をつづけてきたことは、高く評価されてよいであろう。しかもジョゼ・リンスとグラシリアノのなき今日では、彼女の存在は貴重なものといえる。

近くジョゼ・オリンピオ出版社は、ラケル・デ・ケーロス誕生五十周年を記念して、彼女の代表作四編を一書にまとめて出版する。それは「オ・キンゼ」のほか「ジョアン・ミゲル」「カミーニョ・デ・ペドラス」および「アス・トレス・マリアス」である。

また昨年末のエスタード紙の文芸付録にのつた評論家ルイス・マルチンスの、ラケル・デ・ケーロス誕生五十周年の感想に、約三十年前のリオでの文筆家の集まりが叙されていた。その場所は当時有名なバール・ダ・グロリアで、数名の常連にサンパウロ人のマリオ・デ・アンドラーデが加わり、何かのテーマで大いに議論を戦わせた。その時にルイス・マルチンスがラケル・デ・ケーロスと初対面したと記されている。当時の彼女は二十一歳ぐらいであったと思われるが、そのような場面を想像するだにほほえましい。

今度ジャニオ氏が新政府にラケル・デ・ケーロス女史を起用する案があるとか。もしそれが事実とすれば、当のラケル女史にとってもさることながら、ブラジルの全女性の自覚と向上のために喜びたい。なぜかというに、当国の社会では、女性の立場や権利は擁護されながらも、ややもすれば、女性の人格が無視される矛盾と封建性がいまだにあるからだ。これでは善意の女性の尊敬とはならない。

ブラジルの内国映画史

ブラジルの内国映画史を書くつもりで、その資料をさがしたが殆んど見当たらない。というのは当国の内国映画史らしいものがないからであろう。

まれな存在として、英国の映画界に名を成したブラジル人の映画監督アルベルト・カバルカンテが、約九年前にブラジルに帰つたのを機会に、ベラ・クルース映画会社によつて数本の映画が作られたことがある。この時期が今までの内国映画の全盛期であつたようだ。

またリーマ・バレットが、「オ・カンガセイロ」と「シニャ・モッサ」を作製したほかには、ブラジル映画として内外に誇りうるものがあまりない。

近年では一九五八年度のカンヌ国際映画祭直入賞した「オルフェウ・ド・カルナバル」が傑出しているだけで、一般にはブラジル映画の水準は向上していないのが事実だ。

およそブラジルの内国映画は、ミュージカル・コメディに毛のはえたような、ラジオやテレビ歌手の出演する卑俗なものが多い。だから少年少女に安心して見せられない。

喜劇ならそれなりに、どうしてもっとテーマのよいものが作れないのであろうか。ところが俳優には、舞台俳優を動員すれば相当すぐれた人がいるのだから、現在の内国映画のレベルの低いのが不思議なほどだ。

まれには好奇心から内国映画を見るが、他愛もなく笑いこける観衆に腹のたつことがある。全部をみる勇気がなくなり、途中で出るありさまである。ブラジル人は内国映画の俗悪さに恥を知るべきであると叫びたくなる。

ブラジル映画の振るわない最大原因は、製作費が非常に高くつくことで、これでは現在の為替でも外国映画を輸入する方が得策となる。当国の映画会社は一本の映画を作るにすら銀行から融資をうけるのがあるらしく、そのことがごていねいに初めの字幕に現われるのは興ざめだ。

さて、最近手に入れた少しばかりの資料によると、ブラジルの映画全社では、サンパウロ州のカンピーナスに創立されたのが最初で、当国の映画史の発端のようだ。

面白い現象として、一九二二年から一九二五年にかけて、フェニックス、アパ、セレッタ、コンドー

ルの四社が前後していずれもカンピーナスに設立されて、内国映画のカンピーナス時代を現出した観があった。つまり、カンピーナスは内国映画の先駆として、ブラジルのホリウードになりかけたのである。しかし、四社の中には一つの映画も完成せずに解散したのがある。

当時の記録を拾ってみると、フェニックス社の第一回の作品であるアミリカル・アルベス原作の「ジョアン・ダ・マッタ」は、その撮影技術がすこぶるまずく、ストリーの良否はともかく、画面に現われているのが何であるかを判断せねばならないシロモノである。しかしこれがブラジル最初の内国映画として、断片的にブラジル文部省のフィルム・ライブラリーに保存されている。

アパ映画会社は一九二二年に百コントの資本で創立され、その付属俳優学校とともに世評に上ったものだ。同社の第一回作品はアメリカの西部劇をまねした“Ｓｏｆｒｅｒ　Ｐａｒａ　Ｇｏｚａｒ”の題名で、その製作費は四十コントを要した。この映画の主演俳優サントス・ガルボンは早川雪州に似ていると評判された。また銀行家に扮したロベルト・ゴンザーガは、ブラジル製ロン・チャニーだと言われた。これをみてもそのころ、早川雪州やロン・チャ

ニーの人気は相当なものであったことが想像される。

創立当時のアパ映画会社のスタッフは、ルイス・アウダスト・カルネイロの営業部長、オタシリオ・ファグンデスのプロデューサー、ロベルト・リッチの技術部長に、サントス・ガルボンとロベルト・ゴンザーガの俳優陣であった。

第一回作品の「ソフレル・パラ・ゴザール」が思いのほか好評で、かなりの純益をあげたので気炎万丈、直ちに二百コントに増資した。スタジオはジェネラル・オゾリオ街のガラージの建物であったが、これでは不十分とあってスタジオの新設地を購入するという豪勢さであった。

しかし、第二回の製作企画にジュリオ・リベイロの「ア・カルネ」を選び、シナリオ、演出の万全を期して製作に乗り出したが、肝心の主演女優が期待に反するほかに幾つかの難問題を生じて、これは製作半ばで失敗に帰した。ヒロインのレニタに扮した女優の写真を見るとなかなか魅惑的で美しいが、どうやら演技がまずかったらしい。

アパ社はこの未完成の「ア・カルネ」に百コントを投じたのが致命傷となったようだ。そのばん回策として、アメリカのホリウードからアーテー・ア

コット、ルイ・ウォーレンの俳優を、映画一本当たり一万ドル（当時の換算で六〇コント）の契約金で招いたのはよいが、イジドロ将軍の革命の勃発となり、その二人の俳優は上陸不可能でそのままアメリカへ引返すという大きな手違いが起こった。これがアパ映画会社が解散を余儀なくされた第二の理由となっている。

このようにカンピーナスがブラジル内国映画の発祥地であるのが面白い。

ブラジルはあらゆる分野で将来性に富むが、この広大な国土には多くの映画の題材が蔵されている。従って開拓の余地が大いにある。この国の社会、歴史、人情、風土色をテーマとしたすぐれた映画が作られない根本原因はどこにあるか。まずそれから検討する必要がある。

結論として、ブラジル映画の質的向上を促すのは観客である大衆といえるが、当のプロデューサーの良識にまつところが大きい。いつも低俗卑猥な喜劇映画ではうんざりする。

ユーカリ樹下の思い出

農学者・文学者 エドムンド・ナバロ・デ・アンドラーデ

私が故エドムンド・ナバロ・デ・アンドラーデに初対面したのは一九三二年、パウリスタ鉄道会社の重役室であった。

広大な彼の事務室には、美しくみがかれた巨大なユーカリ樹の年輪を示す標本が幾つか飾られていた。

彼はスペイン系ポルトガル人の子孫らしく、堂々たる体躯によい血色をして、いかにも精力的な風格であった。当日の彼と私との対談は、専らユーカリの植林に集中された。

その後数年を経て彼はサンパウロ農務局長に就任し、ついで連邦農務次官になった。

今ではエドムンド・ナバロ・デ・アンドラーデの名を記憶する人は少ないが、彼がブラジルのユーカリ植林の創始者であり、また三十八年間パウリスタ鉄道の林業部長であったことなどを知れば、思い出すことがあろう。

現在ブラジル全土、特に南部にはどれほどのユーカリ植林があるかは知るべくもないが、殆んど至るところにユーカリが見られる。ユーカリの樹皮は白

樺に似て白色を呈し、葉の裏面は太陽の直射をうけて銀色に輝き、芳香を放つ特徴がある。従ってユーカリの樹林はその土地に美観を添えるばかりでなく、文化的な感じを与える。

暁の農園で見るユーカリ林は例えようもなく美しく、真昼の沿道のユーカリ樹は道行く人の疲れをいやし、夕陽の下に立ち並ぶユーカリはさながら一幅の絵である。

ところでこのユーカリをブラジルに移植したエドムンド・ナバロ・デ・アンドラーデとは、どんな人物か。

彼は一八八一年にサンパウロに生まれ、ポルトガルのコインブラに留学し、農学を専攻した生粋の農学者でありながら文学者としても知られ、パウリスタ文学院の会員でもあった。彼が一流新聞の寄稿家であり著述家であったことは有名だが、その著作はすべて農業文学に終始した。彼の文才は叔父エドアルド・プラードの指導によっても相当みがかれたようである。

ナバロ・デ・アンドラーデはコインブラに留学中に、かのモンデゴの山野のユーカリ樹林に感嘆し、これこそ祖国ブラジルの地にも植えられるべきものだと思った。

彼はポルトガルから帰国後、一九〇三年にパウリスタ鉄道会社の林業部長に任ぜられると、ブラジル在来の樹木とユーカリの比較研究をし、成長に多くの年数を要するものが必ずしも良材でないとの結論を得た。この点ユーカリの成長は著しく早く、電柱、建築用材、鉄道枕木、製紙パルプ原料となるなどの特点を知った。

彼はこれらの事実を確証すべく、一九一〇年に北米カリフォルニアを訪れ、一九三一年にはユーカリの原産地オーストラリアに旅行し、ユーカリ研究の権威メーデン博士の知遇を得たことは幸いであった。そして百二十五種類の種子を得てブラジルに帰り、その栽培に着手した。彼は当時オーストラリアから足を伸ばして日本をも訪れている。

ユーカリの種類は厳密に数えれば四百種もあるといわれるが、ナバロ・デ・アンドラーデが百二十三種類を試栽培し、その中の二十四種がブラジルの気候、土質に最適であることを確かめた。彼がユーカリの生理現象を調査発表したところによると、ユーカリの地中よりの吸水力と、葉による蒸気発散力は驚くべきもので、水源地や井戸の付近に植えるのは避けるべきである、などの注意書きがされている。

彼が二十数年間、リオ・クラーロのパウリスタ鉄道会社林業試験場長としてユーカリの研究に献身したことは、まれに見る人物といえるが、彼はその著書の中で、長い間都会を離れて植林研究に没頭できたことは、妻の理解と協力に負うものである、と述懐している。

古い記録ではあるが、一九四一年までにパウリスタ鉄道会社の林業部は、二百万立方メートルの薪、二十万トンの木炭、二十六万三千本の電柱を生産している。

ナバロ・デ・アンドラーデは、リオ・クラーロ林業試験場内のユーカリ樹林と湖水を望む景勝地に山荘風の邸宅を建て、そこを天国として日々の生活を楽しみ、仕事に精励したものである。また彼は、試験場内に林業博物館を設け、植林に関するあらゆる標本と資料を集めた功績も大きい。

彼の著書『ユーカリ』に、ブラジルでのユーカリの大敵はサウバ蟻である、と叙されているところがあるが、その文章は植林の技術的記述というよりは立派な文学である。

また、サウバ蟻の撲滅剤として二硫化炭素の研究をやったのも彼である。その研究論文も実に面白い。彼の父ジョアン・カンポス・ナバロ・デ・アン

ドラーデが著名の新聞人であったことを思えば、彼が文才に恵まれていたのは偶然でないことがわかる。

彼は前述の通り日本を訪れているが、訪日と同時に親日家に早変わりするようなところはなく、当時彼の日本印象はあまり芳しいものではなかったようだ。もっとも、一九二二年（第一次欧州大戦直前）の日本といえばうなずけるものがある。

彼はユーカリだけでなく、アラビア珈琲と熱帯農業の研究家としても名高く、そのために南洋の視察をしたこともある。

今年でナバロ・デ・アンドラーデが死去して十八年になるが、広大なユーカリ樹林を見るにつけ彼の面影が思い出される。

パンの味

パリーに遊学中の義妹からの手紙に「フランスのパンはとてもおいしいです、だからバターをつける必要がありません。パリーの人たちは町をむき出しのままの長いパンを持ち歩くので、うっかりするとパンにつき当たります」とあった。

これは面白い観察であり、またパンをうまく食べられるのはうらやましいことだと思った。というのは、私はずいぶん久しい間、ほんとうにうまいパンを食べたことがないからである。

これは一つには年齢のせいで、食物について贅沢になったためでもあろうが、このごろのパンの味のまずいのはたれしも同感かと思う。およそパンがうまいのは製法もさることながら、原料の麦粉が純良だからであろう。

この点ブラジルでは、第二次大戦の際の食料物資配給統制以来、何によらず純粋のものが食べられなくなった。麦粉にしてもあまり上等でないマンジョカ粉やこわれ米の粉が混ぜられているらしい。従って麦粉は純白でなくて暗白色である。これではおいしいパンができるわけがない。こんな材料で焼き上げたパンを割ってみると、カボクロの膚を思わせるようなシロモノで、見ただけで食慾がなくなる。他方、純粋？　の麦粉はファリーニャ・プーラと称して一キロずつ包装して特に高価で売られているとはいかにも人を食った話である。

次にパンの製法だが、昨今は、高度の機械化で粉をこねるのからパン焼きに至るまで全部機械によるのも、パンの味をまずくする原因かと思う。パン焼

きに薪をたくのはまだしもよいが、最近は電熱と燃料油を用いるのが多い。時には燃料油の臭みがパンについているのがあって閉口する。

フランスのパンがうまいのは原料が純良であるほかに、過度の機械化によらずして旧来の製法によるためと想像される。

これはパンに限らず他のものにも言える。手打ちうどんがうまい理屈と同じだ。

パンについて昔を思い出すと、私が農村にいた若いころは食欲が盛んであったためか、パンが何よりもごちそうであった。とりわけ午後のトマカフェーが楽しみであったのは、自家製のうまいパンが食べられるからであった。現在では農村でも自家でパンを焼かずに殆んど購入するらしいが、なんといっても三十余年前のいなかのパンには味があった。

パン焼きのために農村婦人はずいぶん忙しい目にあっているが、私は日曜日に喜んで薪割りをして手伝ったことを思い出すとほほえましくなる。そしてトマカフェーに食べる焼きたてのパンには格別の味があった。また他の家を訪問してもよくパンを出されたが、それがうれしくもあった。

何を食べてもうまい若いころのことであるから、

パンがごちそうであったとも言えるが、これは確かに昔の麦粉が純良であったのと、パン製法がきわめて原始的であったからであろう。しかるに当今はどうか。毎朝配達されるパンを見たとたんに、またしてもパンかという感じがする。そのパンを味わいながら食べるのでなくて、無意識にのみくだすというのが当たっている。

これでは人間の食物でなく家畜の飼料にも等しい。私は時々外のパン屋からうまそうなのを買ってくるが、これとても昔日のパンとは比較にならない。さても情けない時代とはなったものだ。

月の裏側探険、天然色テレビジョン、シネラマ、立体音の出るレコード等々、世の中は長足の進歩をしているが、その反面純粋の麦粉のパンが食べられないのはどうしたことか。しかもその粗悪のパンが高価ときている。パンがまずいために勢い多量のマンテーガをつけ、更にケージョ（チーズ）やプレズント（ハム）がなければ朝のトマカフェーができないからますます高価につく。これは米のメシがまずければ、他のオカズを多く食べるのと同じだ。

食べることばかり書き連ねては、なんだかかつえているようだが、一日の活動が朝のトマカフェーに始まることを考えれば、パンの味はおろそかにでき

ない。もっとも、前夜の料亭での豪遊がたたって朝のトマカフェーどころではないというご仁には、パンの味はどうでもよいであろう。

ところでまた、いかに粗悪のパンでもうまく食べられるのはある意味で悲哀だが、常に夜ふかしと二日酔いのために朝のパンを味わえないのは悲劇かも知れない。

聖業一筋に

イタケーラの「子供の園」に挺身する人々

不毛の地に咲く愛の花

かつてはバルバ・デ・ボーデの荒蕪地であったイタケーラに、いま見るような美しい農園がつくられ、「桃の里」として全ブラジルに有名になることをだれが想像したであろうか。それは邦人のたゆまぬ努力の結果だが、この努力こそ愛土の二字につくされるであろう。あの季節ごとに咲く桃の花は、サンパウロの誇りであると共に愛土の象徴である。

そのイタケーラの一角に隣人愛の象徴ともいうべき子供の園が設けられ、現在四十名に近い児童が収容されている。

「子供の園」とはいえ、それは幼稚園や孤児園ではなく、または感化院でもなく、精神薄弱児のための教導施設である。

〃精神薄弱児〃ほかにこれに代わるコトバがないかと考えられるが、これが事実であればやむを得ない。従って彼ら（園児）はこの人間社会での最も哀れ且つ気の毒な存在である。しかし哀れとか気の毒とかは第三者にのみ用いられる表現であって、当の園児はそれを意識せぬところが他の病弱者と根本的に異なる。そこに一層の悲哀があり、児童の父母の立場ともなれば言語に絶する苦悩があろう。

数多い健康児の中でどうして彼らだけが生まれながらの精神薄弱児であらねばならないか。それは彼ら児童の罪ではなく、父母の罪でもない。さりとて天の摂理だなどというのも、当人とその父母兄弟にとってはあまりに冷酷な世間の態度であろう。

いかにしても彼らを救わねばならない。その救いが完全でないまでも、せめて彼らの特徴を生かし、社会に出て何らかの働きのできるまでに指導したい、というのがイタケーラの「子供の園」に奉仕する人々の切なる念願である。

それは想像するだに難業であり、一時的の感激や情熱でとりつけることでなく、深い信仰による隣人

愛に徹せずしてなせるものではない。

この「子供の園」の雰囲気は、いうところの精神病院とは全く異なり、あくまで家庭的で慈愛に満ちていることである。そこには鉄格子もなく、病院特有の薬品の臭気もない。

いまやイタケーラの「子供の園」は、広く人々の関心の的となりつつあるが、これは二年前に設立されたパウリスタ児童療護会により維持経営されるもので、その理事長は大河内辰夫氏である。

同園長は佐々木陽明氏で、保母には日本以来七年の経験ある市川幸子女史が当たり、親身もおよばないあたたかい情愛の中に四十名の児童が生活を共にし、指導をうけている。

その背後には「子供の園」の敷地を寄附された井口氏のような奇篤家をはじめ、千五百名のパウリスタ児童療護会員のあることを記さねばならない。

運動会

去る五月二十八日の日曜、イタケーラの「子供の園」で催される運動会に招待をうけた私は、半ば好奇心から出かけた。

イタケーラの市街から約六キロ、半アルケールの

面積に質素な建物が造られている。目下建築中の食堂が完成すれば更に数十名の収容が可能とか。土地の周囲に柵はなく、建物にも鉄わくなどつけられていない。全く自由の天地である。

天気快晴、空には一片の浮雲もない。イタケーラ青年会会員の協力で準備された運動会場には日伯両国旗がひるがえり、黒色土にひかれた白線の中に数人の児童が遊んでいる。

私の眼に映じた園児は肉体的にも普通の健康児に劣り、手足の動作も鈍いことであった。中には挙動の比較的敏捷な児童もいるが、それは優良の部に属し、およそ精薄児の特徴は身体活動の遅鈍であることのようだ。聞くところでは、彼らのあるものは用便すらもできず、担架で運ばれて来たのがあるとのこと。そのような児童が当日の運動会で競争に出るのだから驚くべき向上である。

ぁの元気に競技場を駆ける児童の姿を見たならば、当の父母は感涙にむせぶであろう。競技プログラムは五十、百メートル競走、障害物競走、リレー、紅白玉入れ、綱ひきなどであったが、特に興味の中心となり、人々を熱狂させたのは「子とり競争」であった。それは、園児がそれぞれ番号札をつけて立ちならぶのを、観客であるおとなが走りながら拾い

上げた番号と一致する園児をつれて決勝点に走るという競技であった。これには私も参加し、一人の園児を伴って決勝線に走りながら一種の興奮を感じた。

大河内氏も幾度か競技に出られたが、なにかしら感慨深げであった。

また、昼食の時間を利用して園児の手芸品展覧会を見たが、これまた彼らの作品とも思われない立派なものだ。男子児童はおもに図画と貼り紙による絵画で、少女の作品には刺繍を施したクッション、卓布、婦人服などがあった。

これによって見ても、彼らには各々の好みと得意とするものがあるから、その特技を伸ばし適切に指導すれば、一芸に長じて将来社会に役だちうるものと思う。

男子の園児は耕作や養鶏、養豚を担当し、相当の業績をあげているとのことである。

しかし、また、職員の西本氏の語るには、僅か十日間に三回も脱走を企てた園児があると。それは徒歩でサンパウロに出たものらしく、そのつど脱走児を捜し回り、未成年者保護局の助力によって連れもどったなどは涙ぐましい努力である。少女にはその生理期に夢遊病者のように出奔するものがあるそう

だ。このような精薄児は、彼らの家庭では座敷ろうに入れられ、父兄の悩みの種であろうが、子供の園にいればこそ自由に生活し、手あつい教導をうけて次第に良好に向かい、技能的にも進歩することができる。

しかし思うに、この世にこれほど地味にして犠牲と負担多く、しかも報いられることの少ない仕事があろうか。ところがこのような児童は、日系コロニアだけで約三千人もいるとのことだ。

それを一人でも多く救うことが、すぐれた人材を育成すると同じく重要事であろう。

「子供の園」からの帰路、私は、人間社会には多くのはなやかなものが存在する反面、精薄児という先天的に不幸を背負って生まれた者のあることを痛切に感じた。それに救いの愛の手をさしのべることは、健康に恵まれる者の義務ではなかろうか。

コロニア狂想曲

もし、私に作曲の才能があるならば、ブラジルの日系社会の種々相をテーマとした「コロニア狂想曲」をつくってみたいと思う。とくに、恋愛と結婚に焦点をしぼるならば、面白いものができそうだ。

まず、結婚の前奏曲ともいうべき恋愛から始めると、現在中年以後の一世には、恋愛と聞いても一向に実感がわかない。つまり恋愛とは文字で見るだけで、別世界の消息を耳にするのと同じだ。

自身には全く無関係のものこそ恋愛であり、また結婚とても既に用済みである今日では、遠い昔物語りの感がある。しかも結婚前の恋愛の思い出などは皆無というのが真実であろう。

ところが現在はどうか。僅かの例外ではあろうが、相当の社会的地位あるご仁が金のあるにまかせて、〇号とかを囲っているとか。しかし、それは恋愛や愛人とはおよそ異なるものであろう。

高血圧を気にしながら、一方では人目を避けて〇〇に会う瀬を楽しむスリルを味わうのは、一面事業欲をそそることかも知れないが、これもたび重なると白昼平然として繁華街の角で会うようになる。こんな光景は見る方が顔をそむけたくなるほどだ。これが更に進行すると、小ぢんまりしたアパートを購入して〇〇を住まわせるという熱中さである。近ごろ小型のアパートがよく売れるのは、そのせいでもあるらしい。あるアパートのごときは、さながら「愛人アパート」の観を呈している。こうなればアパート通いは半ば公然で、やって来る人同志がエレベー

ターの中でいっしょになって、インギンに挨拶するとは滑稽だ。それはいずれも総白髪か禿頭組の、産成り名遂げた人たちである。あえてコジつければ、落日の恋愛とでも言えるであろう。

さて、これらのご仁には自身の行動に対してそれ相当の理屈があるらしい。

「自分の青年時代には苦闘また苦闘で恋愛どころではなかった。しかるに今は、二十歳前後のむすこや娘は盛んにナモラをやっている。おれがおそまきながらナモラすることがどうして悪いか。」「然り、西洋の風雲児ナポレオンも、日本の豊臣秀吉も、中年以後に猛烈な恋愛をした。それがよい刺激となって天下をとったではないか。」と自問自答している。

しかしこの精力オヤジは勝手なもので、かつての見合い結婚の相手である現在の老いた糟糠の妻の立場を、考えようともしない。老妻は夜ともなれば夫の留守宅に一人でテレビを見、またはレコードの長唄を聞くのが楽しみとは他愛のないものだ。この老妻は果たして夫の行状を知るや否や、もしそれを知って黙認しているとすれば悲哀といわざるを得ない。

こうした一世オヤジは、率においては極く少ないであろうが、決して自慢にはならない。これをもっ

てコロニアの経済力の反映だなどというのはどうかしている。

予想以上の長い歳月と莫大な経費、労力を費やして完決を急ぎつつあるコロニア実態調査にも、まさか〇号とそのパトロンの数までは現われぬであろう。

いずれにせよ一世オヤジの恋愛は、枯木に造花をつけたようで自然さがなく、いかにもパッとしない。やはり恋愛は打算やすべてを超越した情熱で突進する、若い世代の特権であるようだ。

ところで二世のレン愛だが、これまたあるものは自由奔放に過ぎて目に余るものがある。彼らの父母である一世の殆んど全部は、封建社会のしきたりの見合いによって結ばれ、平凡ながら平和な家庭を築いてきたに反し、その子たちは思慮分別もなく、断崖を飛び降りて自由の野におどり出た感じだ。この傾向は末子であるほどはなはだしく、さすがに長男長女は苦闘期に生まれているだけに、父母と変わらない苦労を経験している。いわば貧乏クジを引いたことになる。二世の恋愛も農村と都会では自然と異なるが、三世や四世の時代ならともかく、一世から二世に移行しただけでかくも変わるものかと、驚き

よりはあきれるばかりである。しかもある二世の恋愛の態度と考え方は自由を過ぎて乱脈とも言いたいのがある。

この点、純然たるブラジル人の間では、全く自由に見えて恋人同志に自ら秩序が保たれ、その交際にも一定の線を超えない。しかし日系の二世には「二世の恋愛」ともいうべき一種独特の型ができているようだ。これは概して教養がなく、家庭の事情と当人の不勉強から中途半端の学校教育をうけた程度のものに多く、決して全部の二世ではないが、その自由？　な男女の交際やレン愛遊びを見ていると羨望を感じるよりはむしろ不快な気持ちになる。ところが当人たちは、これ見よがしにいとも得意然としているので顔負けする。

サンパウロあたりでは、レン愛の見地からすれば日系二世を大体次の二つ、ないし三つの型に大別できると思う。

一つは、いうところの上層で、勉学に熱心のため時間的に社交や恋愛の余裕のない人。よしんば異性と交わる場合でも相互尊敬の念を持し、自ら交際の節度を守る人。

他の一つは、いわゆる自由奔放型で、理性よりは

本能のおもむくままに行動する。こんな二世の父兄に限って子のふるまいや行状に何らの干渉も注意もせず、全く放任主義である。子はそれをよいことにして底抜け遊びをして回る。それはまじめなレン愛でなくてレン愛遊戯だが、その父兄の言うには「子の人格をあくまで尊敬するのだ」と。

第三のレン愛型は、さきの第一でも第二でもなく、優秀な男性または女性が、ある異性につきまとわれて知らず知らずの間にそれに引きこまれるという、一方的なレン愛現象である。これは比較的女性が目ざす男性につきまとう例が多いようだ。それだけに女性にとっては、よい配偶者を求めることがより切実であり、真剣だともいえる。

知性や教養には乏しいながらも、少しばかり器量がよく化粧がじょうずで、しかもレン愛の技巧に長じているところから、優秀な男性を物色してこれにしつこく交際を求め、あらゆる手段を講じて目的を遂げる女性が案外多いようだ。つまりアツかましいナモラデーラが勝利を占めるが、こうなると男はバカなもので、人物本位よりはレン愛に積極的な女性に結局はなびくものらしい。その反面、真に立派な家庭の主婦たりうる女性が婚期を逸してゆくのがあるのが遺憾だ。このような女性はおよそレン愛への

積極さがなく、第三者が好意的に気をきかせて、理想と思われる男性（候補者）への紹介の労をとらざる限り、表面に現われないのが残念である。これと同じことは、男性の場合にも言える。世間には真面目であるほど内気で、社交性に乏しい人がある。

ところで、未婚の男女がよい配偶者を物色するのには、バイレなどが絶好の社交場であろうが、必ずしも全部の人があの雰囲気を好むわけではない。むしろ、バイレを好まない人にこそ誠実さがあって頼もしく、努力家である場合が多いようだ。私はあながちバイレを排撃するものでないが、あの夜半に始めて夜明けまでも踊りつづける気分には賛成できない。バイレとはもっと家庭的なものであるべきで、中年あるいは老人夫婦が踊り、または父と娘が踊るなどは見る目も美しい。ましてやあの喧騒と狂躁そのもののロックンロールやマンボ踊りの雰囲気から、どうして健全で高尚なものが生まれるであろうか。これが青春の血を発散させるためといえばそれまでだが、もっと別の情熱の打ち込み方があるべきだ。

レン愛に関連して結婚だが、今年（一九六一）の五月には、十一通の結婚式への招待状をもらった。

ブラジルでは五月は俗にメース・デ・マリアといわれて、結婚式に招待されては祝福の言葉を贈るだけでなかなか忙しい。

いずれにしても結婚までこぎつけるのは容易でなく、レン愛、見合い、あるいは紹介によって交際を通して結ばれたものもあろう。私をして言わせるならば、レン愛結婚では、どうしても狭い範囲から配偶者を捜し出さねばならない難点があるに反し、第三者の紹介と交際を通して結ばれるものは、広い視野から配偶者を得られるのではないかと。

問題は結婚挙式だが、一時はコロニア社会の生活改善運動として、結婚披露宴の簡略化が損唱されてよい傾向だと喜んだものだ。しかるに昨今では、またしても以前に輪をかけたように派手且つ軽薄になりつつあるのはどうした事であろうか。中には結婚式というよりは、世間に見せるためにやるようなのがある。

また招待をうけた人たちも、厳粛な結婚式場である教会には出向かずに、披露宴にだけ出席するのが多いのも、日系コロニアの結婚風景かも知れない。結婚式によばれるのは、披露宴でごちそうになることと早がってんしている人が案外に多いようだ。もっとも、日本流の三三九度では新郎新婦に数人の

近親者がつき添って挙式し、他の会衆はそれを見ることができない。この習慣が観念的にブラジルでの結婚式にも及んでいるのであろうか。それにしても当国では、披露宴に参列しなくとも教会の挙式にこそ列席して、新しく結ばれる男女の前途を祝福するのが本筋であろう。

次に結婚披露宴を論ずると、ブラジル人の名門富裕の家庭ですらこのごろは披露宴が極度に簡略化され、または全く省かれているに反し、コロニアではますます盛大に行なわれるのはかえって奇異に感じるほどだ。見方によっては、日系社会には善悪いずれの意味にも移民地的気分が非常に強い。もっと社会的に洗練されねばならぬと思う。

いうまでもなく結婚披露の派手さは、結婚当人よりは父兄の希望によるのが多く、それが世間的に成功者といわれる人の誇りでもあるらしい。その気持ちはわかるが、それならば他にも有意義な意志表示の方法が考えられてしかるべしだ。

私の書くモノには修養臭みがあるというが、これも私の個性の表われでやむを得ない。

これは一つには私自身が、まだ絶えざる修養を必要とするからでもある。

サンパウロの水道物語り

現在サンパウロ市の人口は三百八十万を超えるであろうが、この中で水道の恩恵をうけているのはせいぜい二百十万で、それ以外の人口は井戸水を使っている状態だ。また水道区域内でも時々は水不足に悩むありさまである。

およそ代表的文化都市の人口一人当たりの水消費量は、一日百二十リットルというのが常識らしく、これには各家庭の炊事、洗濯、水浴、便所用水のほかに工業用のものも含まれている。

ところが、サンパウロ市内の水消費量は、一日一人平均が七十リットルを出ないようだ。文化都のレベルが水の消費量にも反映するとすれば、サンパウロはまだ高度の文化都とは言えない。もっとも水飢饉で消費節約が強制される現状ではやむを得ない。

しかしサンパウロはまだしもよく、リオの高級住宅区のコパカバナなどは毎年、しかも真夏に水不足で困惑しているが、あの一帯は高層アパートが多いために、よほどの水圧がなければ屋上の水槽まで水が上がらないからである。ある金持ちはアグア・ミネラル（ビン詰の鉱水）でふろを使った、などの話すらあるほどだ。

さてこの数年来のサンパウロの水道予算は膨大なものだが、特にカルヴァリョ・ピントの「プラノ・デ・アソン」が実施されてからは顕著な向上を見せている。近ごろは水道料も驚くほどあがったが、この物価高に加えて水道施設に莫大な費用を投じているとすれば文句も言えない。

最近はサンパウロ市内の各広場で、水道設備の種々の部分品を陳列して公衆に水道常識を与え、同時に州政府が水道工事にどれほどの予算を計上し、どんな活動をしているかを示して好評をよんだ。直径二メートルもの水道管や、一個一千五百コントのバルブラ（活栓）、タービン・ポンプなどが人目をひいた。

ところで、サンパウロにいつから水道が設けられたかをみると、一七四四年に、フラシスカンがその教団付属の修道院に石造りの水道管で用水をひいたのが初めのようである。それは公衆用ではなかったが、近隣の住民がその便宜をうけたと記されている。

一八四二年となっては、プロビンシア政府の技術顧問、ジョゼ・ジョアキン・ダ・コスタがサンパウロの水道工事の企画と予算を提出したが、これは実現されなかった。当時のサンパウロ市民はシャファ

リス（給水所）へ水をくみに行くか、さもなくばアグアデーロ（水売り）から購入するほかはなかったのである。

その後一八六三年には、カンタレーラ山脈のわき水を水道管によって市内に配給する計画がたてられたが、これも実施されずに十二年が過ぎた。

一八七五年となって、ようやく一民間会社とプロビンシア政府との契約が成立して、水道工事が始められることになった。

それよりも四年前に、英国系資本のサンパウロ・ガス会社が設立され、二年後には市街にガス燈が点ぜられたとは皮肉だ。

さて、サンパウロの水道会社の初代重役は、コロネル・アントニオ・プルート・ロドバーリョ、マジョール・ベニジット・アントニオ・ダ・シルバ、ダニエル・マキンソン・フォックス（英国人）などであった。同社とプロビンシア政府との契約が調印されたのは一八七五年十月九日である。

そのころのサンパウロの人口は三万六千で、配水網はセー広場を中心にルス、アローシェ、サンタ・セシリア、カンポス・エリゼオス、コンソラソン、リベルダーデ、ブラスを主とするものであった。

その契約有効期間は七十年で、調印から二年以内

に工事開始の条項があり、更に工事施工のため必要とする土地や建物は、官有と私有を問わず実費で買収する権能が与えられた。この実費が問題になったとは面白い。このようにして創立したのがコンパエア・カンタレーラ・デ・アグア・エ・エスゴットである。

まずカンクレーラの水源地に貯水池が築かれ、そこからサンパウロ市内までの水道管が設けられたが、この配置路が、後にカンタレーラ鉄道の床となった。

昔、コンパニア・カンクレーラ・デ・アグア・エ・エスゴットによって構築された貯水溝は、今でもそのまま保存されている。

カンタレーラ山脈のわき水は、よほど良質であったらしく、サンパウロの水道がそこから始まっているのをみてもうなずける。

カンクレーラの貯水池からコンソラソンの貯水溝に入れられた水が市内の各住宅区に配給され、夜ともなればガス燈が点ぜられて、サンパウロはあっぱれ文化都の趣きを呈したわけである。それは今から八十年前の一八八一年のことで、奴隷解放に先だつこと七年である。

ところが、その後の水道工事がサンパウロの人口

増加に伴わぬとの理由で、政府は一八八九年八月にコンパニア・カンタレーラ・デ・アグア・エ・エスゴットとの契約を無効とし、政府自らがその経営に当たることになった。そこで一八九三年一月三十一日発令をもって、スペリンテンデンシア・デ・オブラス・プブリカス所属のレパルチソン・デ・アグア・エ・エスゴットが組織された。

これがいうところのR・A・E（サンパウロ水道局）の始まりである。

十九世紀末まではサンパウロ市民は水道局の水を消費する義務はなかったが、一九〇〇年十一月十九日付の法令で、水道区域内の住民は義務的にそれを消費することになった。進んで一九五四年には、従来のレパルチソン・デ・アグア・エ・エスゴットはその重要性から、デパルタメント・デ・アグア・エ・エスゴット（D・A・E）に変わった。

現在のサンパウロの水源地は、コチア、サント・アマロ、グワラピランガ、カンタレーラが主だがその貯水量はまさに天文学的数字である。それにもかかわらず、百数十万の人口がまだ水道区域外にあるとは、サンパウロの目ざましい人口膨張に驚歎するばかりである。

愛国の文学者

モンテーロ・ロバット

一九六一年七月四日で、モンテーロ・ロバットが没して十三年になる。

ブラジルの経済的独立のために鉄と石油の天然資源の開発を主張した彼が、あたかもアメリカ合衆国の独立記念日に永眠したとは皮肉だ。

一九四八年七月四日、霜の降るような寒い日の早暁四時、モソテーロ・ロバットは心臓麻痺で倒れ、六十六歳で世を去った。当時、あの一線にひく太い眉毛の印象的な彼の肖像写真が、各書店に飾られて弔意を表したことを記憶する人もあろう。

モンテーロ・ロバットが文壇に頭角を現わしたのは一九一八年、彼の三十六歳のころである。今にして彼の人物に魅力を感ずるのは、彼がすぐれた文学者であるほかに、農園主、出版会社経営、外交官、石油試掘会社社長などの風変わりな経歴をもつからであろう。

つまり彼は、書斎に閉じこもって思索しペンを執るだけの文学者でなく、時には自らミーリョ、フェイジョンを作り、また血みどろになってブラジル国家の社会経済問題と取組んだところに面目躍如たる

ものがあった。

彼の代表著作が『ウルペス』と『ジェカ・タツー』であることはいうまでもないが、更に彼が純正なブラジル児童文学の分野を開拓したことを知らねばならない。しかもすべての作品には豊かな地方色が盛られ、ブラジル的な素材による愛土の至情にあふれている点にうたれる。

特に『ウルペス』と『ジェカ・タツー』はカボクロを主題として、当国の社会経済の核心をなす農村事情を諷刺的に描写しているのがいかにも興味深い。

彼が比較的文壇人の少ないサンパウロ州の出身であることが、パウリスタの誇りとする理由の一つであろう。

ヴァーレ・ド・パライバ（パライバ盆地）、あのまがりくねるパライバ河の沿岸から、はるかに南部ミナスの連山を望むタウバテがモンテーロ・ロバットの郷土だ。

セントラル地方といえば、世界的科学者オズワルド・クルースと、第五代大統領ロドリゲス・アルベスを生んでいる。それに文学者モンテーロ・ロバットを加えてセントラル地方の三偉材というべきであろう。

一八八二年四月十八日にモンテーロ・ロバットは生まれ、姉妹の中で彼が唯一の男児であった関係から、祖父と父母との慈愛を一身に集めて成長した。彼の父と祖父共に農園主であったので、奴隷解放前後の農村の雰囲気の中で彼は養育されたわけである。そうした時代と社会の風潮が、彼の思想的成長に大きな影響を及ぼしている。

彼は少年期に父と母を相次いで失ったため、祖父のもとで約二年を過ごした。祖父はトレメンベ子爵であと継ぎの男子がなく、必然モンテーロ・ロバットがその遺産を継がねばならなかった。

さて十八歳の時に、彼は祖父の希望でサンパウロの法科大学に入学した。入学はしたが、法学よりも文学を好む彼は、一九〇四年十月に「オンゼ・デ・アゴスト会」の機関誌にコントを寄稿して第一位を獲得した。これがおそらく彼の文壇への登場第一歩であったろう。それを手始めとして、周囲にすすめられるままに新聞、雑誌などにも執筆したが、まだ当時の文才は広く認められるまでに至らなかった。

一九〇四年末、彼は二十二歳でサンパウロ法大の卒業証書を手にして、郷里タウバテに帰った。

しかし、彼の目に映じるすべてのものが意に満たなかった。彼はミナス出身の親友ゴッドフレド・ラ

ンジェルと文通していたが、その書面に、法大は出たが法律で立身出世を願う意欲もなく、また人生社会への情熱もわかない。むしろモーパッサンやキップリングのようなコントでも書いてみたいなどと述べている。一時彼は画家を志望してパレットを持ったこともある。しかしロクな絵もかけず、それも断念した。

その後彼は、同じセントラル地方のさびれた町、廃虚を思わせをようなアレアース町の判事として赴任したが、多感な彼の血をわかすほどの事件や問題もなく、無聊やるかたないままに、好きな文筆に親しむようになった。これが彼をして文壇に名を成さしめる動機となった。

そのころ（一九〇八年）、彼は新聞「エスタード・デ・サン・パウロ」にＣＯＮＦＥＳＳＯＥＳ　ＩＮＧＥＮＵＡＳ（素朴な告白とでもいうか）の一文を寄せたが、これがヒットして世間の話題に上った。次いで当時のブラジルの一流誌『レビスタ・ド・ブラジル』にも寄稿するに及んで、彼の名は次第に有名になった。当時の同誌にはマッシャード・デ・アシスをはじめ、コエーリョ・ネット、エウクリーデス・クーニャ、オラボ・ビラックなどの一流の寄稿家がいた。

元来彼は、コント作家で知られているが、外国文学の訳者としても第一人者であった。

彼が紹介した外国文学のおもなものは、キップリング、ジャック・ロンドン、ヘミングウエー、バートランド・ラッセル、メーテルリンク、コナンドイル、マークトーウェン、デッケンズなどである。ある時は反キリスト的なニイチェの哲学を要訳して、カトリック教会の反感を買う茶目ぶりも示した。ところで彼の稿料の初収入は、新開『エスタード・デ・サンパウロ』に一つの翻訳文を送って、十ミルレースを得たことであるとは面白い。

一九一一年三月に祖父の急死にあい、その農園を経営することになったが、この間社会的に最下級の農民カボクロの生活を直視して、深く悟るところがあった。およそブラジルの文学者でモンテーロ・ロバットほど農村を愛したものは少なく、特に彼のタウバテの農園生活を通して「ジェカ・タツー」の構想が生まれ、あの名著が創造されたのであろう。

一九一七年に彼はタウバテの農園を売却して第一回の単行本『サシー・ペレレー』を出版した。

その翌年には雑誌『レビスタ・ド・ブラジル』に連載したコント集『ウルペス』を出版したが、これは当時の沈滞した文学界に巨弾を投じた観があっ

た。そのころは取り立てていう新人の登場はなく、大家の著作の発表もなく、マッシャード・デ・アシスやアルイジオ・アゼベド、コエーリョ・ネット、ジョアン・ド・リオの旧著が人々に再読される状態であった。

モンテーロ・ロバットが児童文学に着眼して、あの美しい純ブラジル的な物語りを書き始めたのは、一九二一年ごろからである。あわせて彼が当国の児童のために、アンデルセンやグリムス兄弟の作品を訳出紹介した功績も大きい。

彼がブラジル領事館付き商務官としてアメリカ滞在中には、ブラジルのＰＲＯＢＬＥＭＡ　ＶＩＴＡＬ（動脈的問題）に関して研究を遂げ、帰国するや私財を投じて内国石油試掘会社を設立したが、この事業はついに失敗に終わった。

つづいて彼は出版界に乗り出し、コンパニア・エジトーラ・ナショナルを創立した。しかし、その経営は、彼が商魂に乏しく理想にとらわれ過ぎたため、これまた破産を余儀なくされた。それが債権者や株主などに迷惑を及ぼす結果となって、彼に対する善悪の世評はとりどりだが、個人的感情を離れて広い見地から愛国文学者としての彼を思う時、おのずから頭の下がるものがある。

彼の数多い児童文学作品のほかの代表作には「シダーデス・モルタス」、「オンダ・ヴェルデ」、「ネグリーニャ」などがある。

モンテーロ・ロバットはその六十六年の生涯の中で、二十年をタウバテに、二十七年をサンパウロ市、三年をアレーアス、七年を石油試掘のためブキラ耕地、三年をリオ、五年をニューヨーク、一年をブエノス・アイレスに過ごしている。

附記　モンテーロ・ロバットの生涯と作品研究の好個の文献としては、エドガー・カヴァリェーロの著書『モンテーロ・ロバット』をおすすめしたい。

サン・ジョン祭り

六月の澄み通った寒空に花火の音を聞いて、サン・ジョン祭の近づきつつあることを感じる。ノイテ・デ・サン・ジョン（サン・ジョンの夜）、ヴェスペラ・デ・サン・ジョン（サン・ジョンの前夜）、なんと親しみのあるリズミカルな語であることか。

ブラジルのサン・ジョン祭は日本のお盆祭りにも似て、昔から当国全土のあらゆる階級を通じてのお

祭りになっている。

このサン・ジョン祭は一つの宗教祭りの意義をもつが、そのカトリック的な感じと共に、ＦＥＳＴＡ ＦＯＬＣＬＯＲＩＣＡ（民謡祭り）というか、国民祭りの趣きがある。

もしこの国の老若男女が一つとなり、人種と階級の差別を忘れて歌い且つ踊り興じる日があるとすれば、それはサン・ジョン祭であろう。そこにはあのカルナバル祭の狂乱騒ぎとはおのずから異なる雰囲気と秩序がある。

サン・ジョン祭と聞けば、赤々と燃える焚火を囲んでビオロンをかなで、和気藹々として輪を描いて踊る人々の姿が目に浮かぶ。

ブラジルのコロニア期の砂糖農園では、常に鉄鎖でつながれる奴隷ですら、サン・ジョン前夜と当日には自由に踊ることが許された、などの話もある。またサン・ジョンの日に農園から脱走すれば、天罰をうけるというのが奴隷の通念であったようだ。

従ってサン・ジョン祭には、黒奴は鉄鎖から解放されて踊り狂ったらしく、それを題材とした俗謡やコントも多い。また著名な文学作品でサン・ジョン祭をテーマにしたのもあり、前世紀にブラジルの奥地を訪れた外国の科学者の旅行記にも、サン・ジョ

ン祭を叙したものがあって興味深い。

さてこのサン・ジョン祭は、いつごろからブラジルに始まったのだろうか。

これは大体がイベリア半島に発したもので、植民初期に移住したポルトガル人が、その郷土の習わしを移植したのがそもそもの始めをなしている。

昔日のポルトガルの農村では、サン・ジョン前夜に焚火をして、その周囲に集まって踊る習慣があった。それは専ら未婚の男女に限られ、既婚者や老人はそれを見物して祝福したとか。独身の男子がある女子に踊りの相手を申込むのは求婚を意味し、それに同意して踊るのは婚約を認めることであった。つまり、サン・ジョン祭は未婚の若い男女には縁結びの機会であり、結婚の前奏曲であった。そこで日ごろから慎重に配偶者の候補を観察して、サン・ジョン祭に臨んだことが想像される。二、三十年も前には、老人夫婦でその昔このサン・ジョン祭で結ばれたのがあつたとは、聞くだにほほえましい話である。

次は花火だが、これはブラジルには後日伝わったもので、比較的新しい習慣である。

それを語るには同じ六月の二十九日のサン・ペードロ祭について述べねばならない。

イベリア半島の住民には、サン・ペードロは軍人の神様であるので、サン・ペードロ祭には天空に向けて銃を発砲する習わしがあった。それがブラジルでは花火にかわり、六月を通して花火揚げが行なわれるようになった。以前は六月二十三日のサン・ジョン前夜からサン・ペードロにかけて花火揚げが行なわれたが、現在は六月を通じて行なわれるので書ぶのは花火製造業者である。

昔のポルトガルの質朴な農村の男女には、サン・ジョン祭が縁結びの幸福をもたらしたものであったとして、ブラジルのサン・ジョン祭にも、必ず新郎新婦に扮する者が現われて喝采を浴びる。

また元来がサン・ジョン祭は農民のお祭りであるので、都会人までが特にカイピーラの服装をして踊るのがこのお祭りの特徴である。サンパウロやリオでも、種々の社交クラブの発起で、サン・ジョンのフェスタ・デ・カイピーラが催される。

忘れもしない、私がノロエステのいなかから青雲の志を抱いてサンパウロに出たのが一九二七年三月であった。それは今から三十数年前だが、当時アニャンガバウー盆地には、フランス人のジュレー・マルタンが設計架設した鉄骨のお茶の水橋があり、夜のサンパウロに詩的情緒を添えていた。また満員

電車の踏み台にぶらさがるほど、世知がらい世の中でもなかった。

そのころのサンパウロの市内には至るところに空地があり、サン・ジョン祭の焚火をするのには好都合であった。夜になるとたくさんの火のついたバロン（風船玉）が飛んで美観を呈した。当時は特に火災のおそれもなく、消防隊がまれに出動する程度で消防夫が退屈していたものだ。

あるサン・ジョンの前夜、私は通りがかりに焚火で焼いた芋をもらって食べたことがある。なんとその場所が現在高層建築の立ち並ぶドーナ・パウリーナ大通りであったとは、隔世の感である。

それから更にさかのぼって、前世紀末から現世紀初めのサンパウロでは、市中に大きな農園があり、サント・アントニオ街やタバチンゲーラ街には所々に家が散見されるのみで、大面積の空地があったという。サン・ジョン祭には、それらの空地で山と積まれた薪が燃されて壮観であったらしい。そこには現在の人々には想像もつかないサン・ジョン祭の風情があったといわれている。

現今のサンパウロは、空地がなくなったため子供が街路で遊んで自動車にひかれ、コロニア風の旧家が消えて高層アパートが出現するようになり、サ

ン・ジョン祭の趣きもすっかり変わった。
寝台兼用のソファに腰かけて、テレビでサン・ジョンのフェスタの光景を見るのは便利だが、現代化されたサン・ジョン祭のかん詰を味わうようなもので味気ない。
それにしても、六月に入って花火の音を聞くにつけ、往時のサン・ジョン祭が思い出され、格別の感興がわいてくる。

コロニア言論界の元老

黒石清作翁の永眠

老いたる者が死ぬのは当然だが、最近病床にあった黒石清作翁が、去る四月十二日夜、急逝された報に接した時は愕然とした。
享年九十一歳、これは長寿の模範ともいうべきものである。
戦後の黒石氏はいわば不遇時代であったが、戦前の新聞人としての活躍は高く評価されるべきであろう。わけても活字による邦字紙の発刊では、日伯新聞と相並んでコロニア言論界の先駆をなすものであった。

それは一九一七年に、海外興業会社の機関紙として出発した「ブラジル時報」発刊の歴史から始まる。あの漢字つづりによる『伯刺西爾時報』の題字が眼底に見えるようだ。その黒石翁が忽然として逝き、告別埋葬式に臨んで感慨無量であった。

三年前の五月であったが、私は拙著『ブラジルの風味』を贈呈すべく黒石氏を訪門して一時間ほど語り合った。それが私にとって黒石氏との最後の面接であったのだ。

当時体力はかなり衰えておられたようだが、元気に話をされたのはむしろ意外であった。とくに記憶力がはっきりしておられ、私が三十数年前の昔話をしたのに笑ってうなずかれた。

私が初めて黒石氏に面接したのは一九二三年のころ、ノロエステの上塚周平氏の宅であった。当時の黒石氏は五十台の働き盛りであったが、殺伐な移民地の新聞人に似合わない洗練された紳士としての印象をうけた。

その当時に私は新体詩など書いて『ブラジル時報』に投稿していたので、それを黒石氏は思い出して微笑しながら「貴下の投稿を大いに歓迎しますからせいぜい精出して下さい」と言われたことが忘れ難い。

あのころのつたない新体詩や、「平原の南十字星」などの短篇小説が私の文筆生活の発足をなしているのだ。それから数年が過ぎ、一九二七年に私が上聖して雑誌「農業のブラジル」社に入り、その経営を任せられるに及んで「ブラジル時報」社と隣り合ったとは面白い因縁であった。

「農業のブラジル」社はファグンデス街に移転する前はガルボン・ブエノ街にあったが、まだ印刷部がなかったため「ブラジル時報」社に印刷を依頼していたので、よく時報社を訪れたものだ。

私一人で原稿書きから広告取り、製本までやった忙しさは今でも懐かしい思い出である。そのころは黒石氏をかい間見る程度で、親しく語ることもできず、私どもには近寄り難い高貴な人という感じであった。それは黒石氏との比較で、私があまりに若輩であったせいでもある。

やがて私が「農業のブラジル」社の安住者となり、コロニア（邦人間）唯一の農業雑誌として大いに張り切っている時に、黒石氏と三浦日伯との論戦が始まった。

同じく言論機関とはいうものの、月刊誌という特殊な立場にあった私は、黒石時報と三浦日伯の間を自由に往復して双方の話を聞くことができた。これ

は決してスパイ的な行為ではなく、私にとってはよい勉強であった。

いずれにせよ三浦一流の毒舌と黒石独特の筆致は面白い対照をなし、邦人社会の話題をにぎわしたものだ。あのころの邦人間にはたいしてノビダーデもなく、忙しい中にもひま人の集りが至るところにあった。そして話題は期せずして邦人新聞の記事に及んだものだ。ことに論争やスッパ抜きが喜ばれたことはいうまでもなく、人の悪口を読んで腹をかかえて笑う他愛なさであった。

黒石氏は南鳩生のペンネームでよく社説や紀行文をつづったが、それに刺激され、発奮して上聖する者も少なくなかった。現在のように活動分野が開拓されていなかったころとて、それらの青年はきまって時報社の門をたたき、就職を依頼したものだ。従って時報社には編集部と印刷部、営業部を問わず、常に邦人青年の新顔が見えた。おそらく、ブラジル時報社の飯を食べた人は数百名にも上るのでなかろうか。それらの人々は現在名を成し、相当の社会的地位を得ている。こうした見地からも、コロニアに将来有能の人材を育てた黒石氏の功績は非常に大きい。

また、特に読物とてなかった時に、新聞に文芸欄

を設けてコロニアの精神面を潤したことも忘れてはならぬであろう。それから、戦前に出版された『ブラジル時報年鑑』は、コロニアとブラジルを学ぶ貴重な文献である。

次に黒石氏によって思い出すのは、同氏が集会の場所で一席弁ずるのが好きだったことだ。少しく型は古いが開口一番「満堂の諸君……」とやったことが今でも耳に残っている。

しょせん一個の人間である限り、だれにも短所や欠点がある。黒石氏に対する世評もとりどりだが、同氏がコロニア操觚界の先駆者であり、新聞人に終始したことには敬意を表したい。言いかえれば黒石氏の生涯は、戦前のコロニアの言論史でもある。

黒石氏がなくなられた当夜、私は近く催される文協音楽研究会のレコード・コンサートの曲目をつくりながら、その中にハイドンのシンフォニー四十五番の「訣別」を組んだ。不思議にもこれが黒石清作翁の訣別になるとは。

珈排談義

「どこかでうまいカッフェが飲めないかね。」

「そうだね、近ごろのカッフェはどこで飲んでもまずいね、全く口よごしというシロモノさ」

これがサンバの国、珈琲の国、しかも、その中心であるサンパウロの繁華街での会話とは情けない。事実、昨今のカッフェの味のまずいのは話にならない。第一焙煎珈琲の広告文句に純粋の珈琲云々とあるのは人をバカにしている。そうかと思えば景品付きで宣伝をし、肝心の珈琲の品質のイカサマものがあるから油断がならない。一家の主婦たるものは抽選や景品につられることなく、良質珈琲を求めるために断固粗悪品を排撃すべきだ。これはブラジル珈琲の名誉と国家的見地からも必要である。亭主のコキおろしをするだけが能ではない。

ここであまり悲憤コウガイしても始まらないが、それにしても今から三十余年前の二百レースののニッケル貨一つで、悠々と腰かけて風味のよいカッフェをのめた時代が懐かしい。あのころは、電車賃も同じく二百レースで、サンパウロのポンテ・グランデからビラ・マリアナまであくびをしながら行けたものだ。鼻下にヒゲをたくわえたご仁の月給が三、四百ミルであったから、収支の均衡がとれていたわけだが、焙煎珈琲一キロ二ミル五百レースとは今から考えればウソのようなものだ。その当時はそ

れなりに生活難はあったとしても、労働組合もなく、従って労働者のストライキなどもなかった。

サンパウロの目抜きの場所はカッフェ店とロテリア店で占められ、午後ともなれば、カッフェ店はひま人のバテパッポで盛況を呈したものだ。昔日のサンパウロを知る人は、カッフェ・アカデミコや、カッフェ・グワラニーの名を記憶するであろう。今では忙しげに立飲みするカッフェだけで旧式のカッフェ店は見られなくなった。

しかし、リオには、いまだに腰かけてカッフェを飲めるところがあるのはまさしく時代錯誤の存在だが、あの感じには金銭を超越するものがある。その一つに、ドン・ペードロ二世高等学校の前角のカッフェ店がある。私の織物工場の代理店がその近くである関係上、私はリオを訪れるごとにこのカッフェ店でゆっくり腰かけて珈琲をのむ気分を味わうのが好きだ。それは華美とはおよそ遠く、古色蒼然たるものだが、ボーイが珈琲をついで回る昔風の感じに貴重さがあるのかも知れない。また、これとは別の意味の対象をなすのが、リオのサン・フランシスコ広場とオウビドール街の角のカッフェ・パリエタだ。このカッフェ店については、拙著「ブラジルの

風味」に書いたためかコロニア人の間でかなり有名となったようだ。特に日本からの新来者が、半ば好奇心からカッフェ・パリエタを訪れるらしい。今までにそういう人々にたびたびお会いしたが、中には真面目にブラジル珈琲史を尋ねる人があるのにはいささか面くらった。こうなると、うっかり口もきけずモノも書けない、筆は災いのもとの感を深くする。

さてこの辺で本論に入るとして、人は時にきわめて常識的なことについて考えることも必要だ。

という意味は、当然知っているべき事を、ややもすれば知らないからである。そのためにとんでもない恥をかくことがある。卑近な例が、有名なファゼンデーロが必ずしもブラジル珈琲の歴史を知らない。日系コロニアの経済力も昔とはケタが違って、現在は数十万本もの珈琲耕主もあるが、失礼ながら珈琲の栽培技術と市場の動きのほかに、どの程度の「珈琲知識」をもっているのであろうか。ここで珈琲談義の必要を生ずるわけだ。

ブラジルで「珈琲談義」をつづるのは、日本の「米談義」を書くようなものであまりに月並みとも言える。しかしながら、日本人の全部が米の歴史を知っ

ているとは限らず、当のブラジル人でブラジル珈琲の歴史を知らない者も決して少なくない。当国の新聞や雑誌に、当然わかりきったようなブラジル珈琲の記事がのるのがそれを物語っている。

ところで、一つ珈琲に限らず、ブラジルの主産物には当国の原産でなく他国から伝来したものが多い。たとえば、フルタ・デ・コンデはアフリカの原産だし、ゴイアバはアンチーリヤ、アバカテは中米から伝来し、マンガとジャカはインド、パンの実は大洋州、カキ（柿）は日本、カランボラは支那が原産地だ。

南部ブラジル色豊かなコーヒー採収状況

それらの植物はブラジルの開発期に、ポルトガルを筆頭にスペイン、フランス、オランダの航海家やコロニザドール（植民）によって当国に移植されたものである。特に、ドン・ジョアン六世が南洋方面から輸入した熱帯植物の種類はおびただしいもので、その大部分はリオの植物園とレプブリカ広場に見られる。その当時（十九世紀初頭）に南洋から二隻の船で植物を取寄せたというからドンジョアン六世はすぐれた文化人であると同時に、植物愛好家でもあったことが想像される。それほどの彼も、ポルトガル王室をブラジルにうつした一八〇八年に、既に珈琲がリオのグワナバラ湾の周辺に栽培されていたのを見て、それが将来の大産業になるとは考えなかったようだ。

珈琲がリオ州に植えられたのは一七六〇年で、植物とは全く畑違いのリオ市高等裁判所判事アルベルト・カステロ・ブランコが、数株の苗をパラー州から取入れたことに始まっている。その当時から約四十年間は専ら鑑賞用として庭に植えられたというから、ドン・ジョアンがブラジルに移住したころは、珈琲がようやく鑑賞用の時代から一つの産業として、人々の注目をひき始めた時であったと思われる。

十八世紀末までは、珈琲樹はチジュカの貴族の荘

園やベネジット派、カルメリッタ派の僧院の庭に散見されたに過ぎなかったものだ。それが南部ミナスからサンパウロ州のパライバ盆地に移植されるに及んで、新産業としての珈琲時代を現出したことは歴史に見る通りである。

ここで話は逆転して、いかにして珈琲がブラジルに伝来したかを述べねばならない。それには順序として、ブラジル珈琲の始祖フランシスコ・デ・メーロ・パリエタを紹介すべきだが、彼の人物についての史料はまちまちで、いずれが正しいかは断定しかねる。しかし、彼が十八世紀前半のマラニョン庁付き武官であったのは事実で、風姿堂々たる美丈夫であったようだ。また彼はポルトガル生まれとブラジル生まれの二説があるが、種々の史実に照らしてブラジル人が真実らしく、彼が仏領ギヤナからブラジルに珈琲を移植した一七二七年にはサルジェント・モール（現在の少佐）であった。もっともその時代にはブラジルの軍隊とてはなく、ポルトガルの植民軍制下にあったことは言うまでもない。

話題のフランシスコ・デ・メーロ・パリエタは、数回にわたってアマゾン本流と支流の探険をやっているから、その当時ではまれにみるアマゾン通であっ

た。彼は一七二二年から一七二四年にかけてトカチン、マデーラ、グワポレ、ママモレ流域の探険を企てたが、それらの探険記録はマラニョン庁長官ジョアン・ダ・マイア・ガーマによってポルトガル王室に送られて、ブラジルにはその断片すら残っていないのが遺憾だ。いずれにせよメーロ・パリエタはマラジョ島とアマパ地帯の地理に精通していたことが、仏領ギヤナとブラジルの境界問題の解決のため現地調査に当たる原因となっている。ついで、彼が、仏領ギヤナの総督との折衝の重大使命を帯びてカインに派遣されたことが、ブラジル珈琲の歴史の発足となっている。

一国や人各々に運命があるように、一つの産業にもその運命というものがある。珈琲がブラジルの主産物として登場するについては、フランシスコ・デ・メーロ・パリエタに負うところが大きい。わけても、仏領ギヤナのクロード・ドルヴィール総督夫人はブラジル珈琲の恩人である。従って、もしブラジルと仏領ギヤナの境界問題がなければ、珈琲がブラジルに移植されることもなく、当国の経済史も大いに変わっていたであろう。

パリエタは、マラニョン庁長官ジョアン・ダ・マイア・ガーマから仏領ギヤナ訪問の指令を受ける

や、豊かでない財政の中から無理をして服装を整えたのは何かのコンタンがあったようだ。刺繍を施した大型の帽子に、絹のシャツと赤と緑色を配した服を着用し、剣をつけた扮装は堂々たるパリエタを一層立派な剣士にした。彼は立派になり過ぎた自身の姿に微苦笑したに相違ない。次に彼はフランス語の会話練習を始めた。大体がフランス語の素養のあった彼だが、美しい上流社会語を話すに苦心したわけだ。やがて出発の日が到来し、彼は自信満々として目的地の仏領ギヤナの首都カインに向かった。カインに着いたパリエタは国賓としていとも丁重に迎えられ、しかもクロード・ドルヴィール総督との折衝も至極順調に運んだのは好運児というほかはない。それは彼に、出発前の周到な準備があったからだ。実地調査による明細緻密な証言には異論をさしはさむ余地なく、ブラジル側（ポルトガル王室）に有利の裁決が下されたことは、一つにパリエタの努力によるものである。クロード・ドルヴィール総督は完全に敗北した形だが、かつてない満足感を覚え、一夜パリエタのために祝宴を張ることになった。

メーロ・パリエタが総督邸の賓客となって以来、彼に少なからぬ好意をよせたのが総督夫人であっ

た。それは、パリエタが典型的男性美の持主であったばかりでなく、当時のコロニザドールなどには見られないジェントルメンであったからだ。彼の上流社交人としての所作振舞いはにわか仕込みではなくて自然に身に付いたものがあった。ことに女性に対して洗練されたガランテーロであったことが、殺伐たる植民地の雰囲気にあきたりない総督夫人にとって少なからぬ魅力となったらしい。祝宴の夜、月下のバルコーニで、耳ざわりのよい底力のこもる声調で語るパリエタの一言一句は美しい詩であった。総督夫人は陶然となって彼の話に聞き入るのであったが、その時に侍女がうやうやしく運んで来た黒色の液体の飲物がカッフェであった。パリエタは内心しめたと思ったかも知れない。当時の仏領ギヤナでは、珈琲は貴重なものとして他の国へ持出しを禁じていた。つまり禁断の実で、特殊の場合を除いては総督邸ですらあまり飲むことをしなかったものだ。

素晴らしい芳香の珈琲をごちそうになったパリエタは、最大級の賛辞を総督夫人に呈した。その時のパリエタと総督夫人のささやきが、ブラジル珈琲の運命を決したとは、何が幸いをもたらすかわからない。

「これはカッフェというものです。そんなにあな

たのお気に召しましたか。」
「全く別世界にある感じです。この風味のよさは私の生涯を通じて忘れることができません。それは総督夫人の御好意が私の永久の思い出となるようなものです……」
「それでは、あなたのカイン訪問記念として、カッフェの種子をさし上げましょうか。」
「まことに恐縮です。それは私にとって光栄この上もありません。」
メーロ・パリエタが仏領ギヤナ訪問の使命を果たしてブラジルへ引返すに当たり、総督夫人はわざわざ一袋の珈琲種子を彼に分け与えたのであった。その袋の中には一千余粒の珈琲がはいっていたので、これが後日に一千余株の珈琲苗となったわけだ。船に乗り込んだパリエタが驚いたのは、別に五本の珈琲苗が届けられていたことであった。これは珈琲の木はどんなものかを如実に知らしめる総督夫人の女性らしい心づかいによるものである。
以上の経路から考えられるのは、もしこの物語りの主人公のメーロ・パリエタが、あの時代の探険家に有りがちな猛者型で礼儀作法もわきまえぬ無粋者であったならば、仏領ギヤナの総督夫人を引きつけることもなく、珈琲種子も手に入れられなかったこ

とだ。換言すれば、パリエタの総督夫人への巧みなお世辞のお陰でブラジル珈琲の運命が開けたのである。

このように、ブラジル珈琲の大の恩人であるフランシスコ・デ・メーロ・パリエタは、不遇の晩年を送って世を去つたとは皮肉といわざるを得ない。せめて珈琲の都サンパウロに、彼の記念像を建立してもよいであろう。今一つは、現在のブラジルで風味のよい純粋の珈琲を飲めないのは、パリエタの霊に対して申し訳けない気がする。

ブラジル政治史上の疑問符

―二つの政変の性格―

帝政期一八三二年のドン・ペードロ一世の退位と、今度のジャニオ・クワドロス大統領辞任を考え合わせると、時代の差こそあれ、この二つの政変には性格的に相似るものがあるようだ。

それはドン・ペードロ一世とジャニオ・クワドロス両者の性格が似ているというのではなく、政変勃発までのいきさつに同じようなものがある点を指摘したい。この考え方はあくまで私の個人的なもので

あることを前提としてペンを進めることにする。
ブラジル史の研究に興味をもつ私は、時にブラジル政治史を点検するが、今回のような政変の例を全くみない。当国の共和政治史の上に、第十五代大統領ジャニオ・クワドロスに至って一つの疑問符が印されることになったのだ。果たしてこの疑問は、いつ解かれるであろうか。
いうまでもなく、帝政ブラジルは一八三年のドン・ペードロ二世の退位と、一八八九年の軍部革命による帝政終局という大きな政変を経験している。
共和制となっては、初代大統領デオドロ・ダ・フォンセッカと第二代大統領フロリアノ・ペイショットの任期にわたる政情悪化のため、リオ市民と海軍の暴動があった。ルイ・バルボーザが英国に亡命したのもその当時である。
また第三代大統領プルデンテ・デ・モラエスの時にも、バイアのカヌードスの叛乱や共和党新聞の焼打ち、陸相ビッテンコー将軍の暗殺事件などがあった。
更に第五代大統領ロドリゲス・アルベスの在任中には、リオ市民と陸軍兵学校の暴動があった。
しかしそれらは、いずれも原因不明の政変や動乱ではなく、明らかな理由があったのだ。

一九三〇年のジェツリオ独裁政権に対するサンパウロ人の決起による革命にも、憲法擁護というレッキとした理由がある。

考えれば考えるほどわからないのが、今回の政変の根本原因をなすジャニオ・クワドロス大統領辞任の真相である。これはあるいは、当のジャニオ・クワドロスにもわかっていないのかも知れない。つまり施政の行き詰りよりは、ジャニオ氏自身の精神的行き詰りともみれるのである。

昨年の大統領選挙に圧倒的勝利を占め、ブラジル全国民の信望を一身に集めて登場したジャニオ・クワドロスが、在任僅か七カ月で突如辞任するとはたれが想像したであろうか。しかもその辞表の内容が簡単かつ不明瞭で、いくつかの謎が秘められているようでもある。反動勢力とか内外の圧迫はどんなにも解釈される。全く奇怪、不可思議な話ではある。

カルロス・ラセルダ知事の弾劾演説やカラザンス神父の演説、中立主義による社会主義国家との外交政策の行過ぎなどが、彼の辞任の直接原因とは考えられない。あるいは彼の自己過信の失態ともいわれるが真実は知るべくもない。

ここでドン・ペードロ一世とジャニオ・クワドロスを対照的に叙すならば、ブラジル国民の熱望によ

り、ドン・ペードロがポルトガルへの帰遷を断念して一八二二年一月九日にＦＩＣＯ宣言をした時と、ジャニオ・クワドロスがひとたびは大統領候補を棄権したが、国民の要望を入れて再び立候補したところがやや一致する。

すすんで一八二二年九月七日に、ポルトガルの属領植民地の境涯を脱してブラジルの独立を宣言し、皇帝に即位したドン・ペードロと、絶対多数の投票を得て大統領に当選したジャニオ・クワドロスの栄光と悲壮の心境には、相通じるものがあるかに思われる。

ところでドン・ペードロの決意によって独立帝国となったブラジルが、その当初において幾多の難問題にぶつかったのは当然である。そのあるものは速決を要し、ドン・ペードロ自らが重臣に計ることなく処決することがあった。性来が英才型で自由奔放のドン・ペードロは、ついに憲法と議会を無視する態度が露骨となり、閣僚と国民の反感を買った。

こうしたドン・ペードロの人物と政治手段が、少しくジャニオ・クワドロスに似るものがあるようだ。ドン・ペードロの専制政治をまっ向から攻撃したのはサンパウロの新聞人リベロ・バダロで彼はそ

のために暗殺された。リベロ・バダロは最後に「一人の自由主義者は死んでも自由は滅びず。」と叫んだというが、これはかつての日本国士、板垣退助を思わせる。

ドン・ペードロの専横な政治に対してまっ先に反旗をひるがえしたのがペルナンブーコのマヌエル・カルヴァーリョ・パエスを主導者とする「コンフェデラソン・ド・エクアドール革命」である。これはペルナンブーコの独立を目的とするもので、その主謀者の処刑によって一応は鎮圧されたが、ドン・ペードロに対する悪感情は消え去らなかった。

他方、ドン・ジョアン六世によって創設された、現在のウルグワイ領プロビンシア・シスプラチナに独立革命が起こり、ドン・ペードロは急ぎ現地にとんでブラジル軍を指揮し、多大の犠牲を払ったがついにブラジル軍の敗戦となり、プロビンシア・シスプラチナは独立するに至った。

ドン・ペードロ一世の退位の直接原因はこのシスプラチナの敗戦だが、これとジャニオの外交政策とを比較して論じるのは当を得ないとしても、何か宿命的に似るものがあるようだ。

しかしドン・ペードロの場合は政情悪化から国民の彼に対する信望薄れ、やむにやまれず退位してポ

ルトガルへ去ったのだが、ジャニオ氏にはこのやむにやまれぬ理由があったかどうか。彼の純情、正直、清廉の人柄には国民の全幅の信頼があっただけに、彼の突然の辞任にはたれしもアッケにとられた形である。して見れば彼をして辞任の窮地に陥れたものは、政局の行詰りよりは彼自身の性格から来ているのではなかろうか。

今回のブラジルの政変については軽々しい憶測や批判は慎まねばならないが、冷静な見地からはジャニオ氏の性格の癖がこの事件の要因となっているとも考えられるのである。従って純科学的な理論として、失礼ながらジャニオ・クワドロス氏はフロイドの研究型の人物ともいえるであろう。

それは傑出する天才児にこのような人物が多いからである。

それにしても、この政変十数日間ほどブラジル国民に真剣に政治のあり方を考えさせたことはないであろう。当国の人々が、去る八月二十五日以来の試練によって政治的良識を養い得たのは大きな進歩であり、成長である。特に流血の惨禍を見ずに憲法がまもられたことを喜びたい。そこには国民性のもたらす善意のブラジル的のものがある。

大統領制から議院内閣制への転化、少し無理とい

えば無理だが、それに異議を唱えるよりは閣僚と議員各位の自重を促したい。これは結局ブラジルの過去にあった君主制に逆もどりした観があるが、昔日の閣僚には人格識見共に卓抜した人材がいた。現在の政界にはどうひいき目に見てもそれほどの人物が見当たらないようだ。ここで過去の歴史に学ぶ必要がある。

歴史は過去の記録として見るだけでは意義がない。それを生かす気構えが必要なのだ。ブラジル国民にこの気慨があれば、選挙も自然に慎重となり、優秀な人材も現われてくるであろう。

今回の政変のためブラジルが国際信用を落とすはめになったのはやむを得ないが、これによって国民が自覚し、将来に備えるところがあればむしろ発展の一歩を印したことになるであろう。

ジャニオ氏は今ごろ英国で何を考えているであろうか。

コーヒーの地理学

いつか地理学的なコーヒー物語りを書きたいと思いつつも、今までその機会を得られなかった。

幸い、今日は宗教祭日で休みだ。

天気快晴、庭の深緑の樹木をながめ、風味のよいコーヒーを飲みながら、ふとこの一文を草する気持ちがわいたが、果たしてどんなものができるか。ウイスキーや芳醇な日本酒は、ノンベイには大きな魅力だろうが、下戸には無用の長物だ。タバコにしても同じで、あの紫煙をくゆらす爽快さを知らない者には、トルコ煙草やハバナの葉巻きも猫に小判であろう。

この点コーヒーは、たいして好きでなくても、全く飲まないという人はまれであろう。

早い話が、アメリカではコーヒーが嗜好物としての対象ではなくて、生活必需品となっている。

それなればこそ、アメリカの家庭の主婦は、コーヒーの市価に多大の関心をもち、不当に高値のものは断固これを排撃して不買運動を起こす。それはいうまでもなく、コーヒーが贅沢品でなくて日常不可欠のものであることを物語っている。

とにかく世界全人口の八十七パーセントが、多少にかかわらずコーヒーを消費することは多くの統計によって明らかだし、しかもその消費量が次第に増加の傾向にあるのは、コーヒー生産国にとつての強味である。サントスの港に並立する珈琲倉庫が廃虚

となる心配はまずないであろう。
サントスに着いた外国移民が、ドギモを抜かれるのはあの珈琲倉庫の偉観と、山と積まれた青いバナナだが、それがどうやら新来移民の眼に映じるブラジルの玄関風景のようだ。

コーヒーの起源

文献によれば、この世にカッフェ（コーヒー）というものが現われてから一千年以上になる。つまり、十字軍遠征のころには、既にコーヒーが近東の人々に知られ始めていたのである。
今でこそブラジルは世界最大のコーヒー生産国だが、その栽培史は二百余年にしかならない。しかも、本格的に一つの産業となったのは百年そこそこのことだ。だからコーヒー生産国としてのブラジルは、アフリカやジャバとの比較でははるかに後輩であってあまり自慢ができない。
では、どんな経路をたどってコーヒーがブラジルに入れられたか。ここでコーヒーの歴史を点検する必要があるが、いまペンを執りながらこの記事の表題を『コーヒーの地理学』とするのが適切であることを悟った。

はじめに、コーヒーについての文献はどんなものが代表的かといえば、その傑出したものとしては、ウイリアム・ユーカース（Ｗｉｌｌｉａｍ　Ｕｋｅｒｓ）のオール・アバウト・コッフィー（ＡＬＬ　ＡＢＯＵＴ　ＣＯＦＥＥ）であろう。おそらく世界のコーヒーに関する限り、これほど膨大で完璧なものはなく、著者はコーヒーの研究に全生涯をかけたといって過言でない。拙稿をまとめるに当たってウイリアム・エーカースの著書を参考としたところが少なくなく、彼のコーヒー研究に打ちこんだ情熱に敬意を表するためにも、その名を銘記しておきたい。

ブラジルのコーヒー史では、史家アフォンソ・デ・トウネーのＨＩＳＴＯＲＩＡ　ＤＯ　ＣＡＦＥ　ＮＯ　ＢＲＡＳＩＬがある。これまた十五冊から成る巨作で、その全部を読み上げるだけでも非常な努力を要する。

栽培技術の面ではブラジル農務省出版ロジェリオ・デ・カマルゴとアダルベルト・デ・テーレス・ジュニオール共著のＯ　ＣＡＦＥがある。また文学的著述ではブラジリオ・マガリャンエスのＯ　ＣＡＦＥが最も知られ、更にサンパウロのコーヒー史としては、サンパウロ文理科大学教授アルフレド・エ

リス・ジュニオール著のＯ　ＣＡＦＥ　Ｅ　ＡＰＡＵＬＩＳＴＡＮＩＡがある。ほかにも著述家オリベーラ・ビアンナ、ジルベルト・フレーレ、セルジオ・ミリエー、カイオ・プラード・ジュニオール、ブアルケ・デ・オランダなどの著作に経済、社会学的見地からコーヒー産業が叙されている。

コーヒーが北東部の砂糖産業と共に、南部というよりは全伯の経済に大きな役割りをなしているが、コーヒーとブラジル社会の関連性について一つの興味深い研究課題となるであろう。その一例として、サンパウロを中心とする南部ブラジルにもしコーヒー産業がなかったならば、日本移民の歴史も大いに変わっていただろうと想像される。日系コロニアの人口も現在の五十万などにはとても達していなかったかも知れない。こうした研究は、経済、社会学者の領域だが、コーヒーの地理学のテーマに添って、コーヒーの超こりから述べてみよう。

原産地はエチオピア

いずれの文献によっても一致しているのは、コーヒー科植物がアビシニア（エチオピア）の原産ということだ。既述の通りコーヒーの実が発見されたの

は一千余年前だが、その後数百年間の史的記録がなく、空白期がつづいている。ややコーヒーの歴史が明確になったのは六百年前からであって、初めはアラビア人がコーヒーを薬用にしたとある。またマホメット教徒がコーヒ、の実を宗教儀式に用いたらしいが、それについての詳細な資料はない。

六百年の中の初めの二百年は、単に乾燥したコーヒーの実を薬用とし、焙煎した実が用いられたのはそれ以後の四百年といわれる。しかもこの四百年の前半は濾過した飲み物ではなく、コーヒーのかすと共に飲んだものだ。

当時最も多くコーヒーを飲んだのはトルコ人で、トルココーヒーの名称が生まれたほどだ。従って飲み物としてのコーヒーの普及については、トルコ人の功績が大きい。

コーヒーが薬用でなく嗜好物として飲まれるようになったのは、ここ二百数十年来のことであって、それからブラジルのコーヒー史は発している。思えばブラジルコーヒーは、ちょうどよい潮時に登場したというわけである。

ところで、コーヒーの焙煎とだし方だが、これは二百余年前と現在はたいして進歩していない。

あえていえば焙煎が大規模の機械により、だし方

にしても蒸気圧搾式になった程度で、このように機械化したために、かえって風味のよいコーヒーが飲めなくなったのは皮肉だ。むしろ極度の機械化がコーヒー本来の持ち味をそこなうらしく、これはアイスクリーム製造の工業化などにも言える。ピンガ(甘蔗酒)でも改良種の甘蔗よりは、野生種の甘蔗で原始的な方法でつくられたものがより美味であるのは、あながち科学論では説明できないようである。スコットランドのウイスキーやボルドーの葡萄酒の製造法が余り機械化されていないのは、それを意味するのではなかろうか。

ブラジルでは自分の名も書けないカボクロや黒人が、非常にうまいコーヒーをだす術を心得ているのがあるのは、彼らのみの知る秘訣かも知れない。もっともよいコーヒーをだす根本条件は、良質コーヒーを用いることであって、コーヒーそのものが不純の粗悪品では話にならない。

再び繰り返すが、一千余年前にバクダットの医学者ハーゼスが、エチオピアで奇妙な木の実を発見した。それがコーヒーであった。

十六世紀の中葉からトルコやシリアの異教徒は、これを宗教儀式に用いるようになった。

コーヒーは発見されてから相当長い間カッフェと

は呼ばれずにＢＵＮと言われていたが、トルコでカッフェの原語が生まれたのであった。

初めは薬として使用

一四五四年のころ、アデンの僧シェーク・ゲマルディンがエチオピアを訪れてコーヒーを知った。その後病気となりコーヒーを取り寄せて薬用としたところ、顕著な効果があったという。彼の病気が何であったかは知られていないが、それからコーヒーが薬用に特効があるとして世評に上ったようだ。当時はコーヒーがアデンからメッカ、メジナ、バグダット、ペルシャ、シリア、エジプトまで知れ渡ったと記録されている。しかし、焙煎したコーヒーに熱湯を注いで黒褐色のしるを出して飲むようになったのは、いつごろからであるかは明らかでない。

十六世紀中葉といえばトルコの全盛期だが、首都コンスタンチノーブルに二、三軒のコーヒー店が現われた。そこには宗教的な雰囲気はなく、専ら富貴人の社交場の観を呈した。そのころから西ヨーロッパ人の近東と東洋を訪れる者がふえたが、シリア、トルコ、ペルシャでかつて見たことのない異様な飲み物として注目をひいたのがコーヒーであった。

十六世紀初めにメッカを訪れた巡礼者が、インドのゴヤにコーヒーを移植したといわれるが、もしそれが事実とすれば、ジェズイットのフランシスコ・シャビエルが伝道のためポルトガルからゴヤに行った一五四一年には、コーヒーが存在していたであろう。

コーヒーがヨーロッパに紹介されてからその普及に長い歳月を要した理由は、コーヒーが異教徒の飲み物であったことと、十字軍以来のイスラム人（トルコ人）に対する根強い反感にあったようだ。加うるに砂糖を用いなかったので、黒い苦い汁のコーヒーがたいして喜ばれなかったのも不思議でない。それにしても十七世紀の前半には、ヨーロッパの主要都市にぼつぼつコーヒーが現われた。ある薬店の宣伝文にコーヒーは病気をなおし、睡気を去って頭脳を明晰にし、しかも副作用を伴わぬ、とあつたというが、なかなかうがっている。

当時エジプトのカイロにも数軒のコーヒー店が現われ、しかも砂糖をコーヒーに混じるようになったとあるのも面白い。

コーヒーに主婦が反対

一六四〇年には、東西文化の合流点であるヴェニスにコーヒー店が出現した。これが西ヨーロッパでの最初のものとされている。次いでローマにもコーヒー店ができて文化人の集会所となった。

なお一つ面白い事実は、それより早く一六一〇年にメイフラワー号が新天地アメリカに運んだものの中に、焙煎コーヒーを砕く木製の臼と乳棒があったということだ。

英国にコーヒーが入れられたのはヴェニスと前後し、ドイツよりも早い。一六三七年に、クリート島生まれのギリシャ人の学生ナタニエル・コロビオスが、ロンドンにコーヒーを持ち込んだことに始まる。

一六五〇年にはユダヤ人のヤコブが、オクスフォードにコーヒー店を開業したが、それから数年を経て、たくさんのコーヒー店が現われ町の趣きを一変した。時あたかもメリー・アン王朝で、カッフェ・ハウスの雰囲気から名高い文学者、芸術家、新聞人が現われたとは幾分の誇張があるとしても、コーヒーはそれらの知識人の思索力の源泉となったのかも知れない。

ところが、ロンドンに多くのカッフェ・ハウスができてから、家庭の主婦がこぞって猛烈な反対を唱

え出したものだ。その理由は、夫たちがコーヒー店に非常な魅力を感じ、家庭を外にして長い時間コーヒーを喫しながら友人知人と語りつづけることであった。

当時ロンドンで有名なコーヒー店には、キングス・コッフィー・ハウス、ホワイトス・コッフィー・ハウス、パットン・コッフィー・ハウス、コヴェント・ガーデン・コッフィー・ハウスなどがあった。

ドイツにコーヒーが入れられた時にも、英国の場合と同じように主婦たちの強い反対があったようだ。

作曲家ヨハン・セバスチャン・バッハは非常なコーヒー愛好家であったらしく、彼の作品カンタータ二百二十一番“Ｃｏｆｆｅｅ　Ｃａｎｔａｔａ”があるほどである。

ともかく封建的中世から近世への過渡期に、コーヒーが現われたのは時宜を得たものといえる。

ドイツのベルリンにコーヒー店ができたのは一六七〇年から一六七九年であり、オーストリアは一六八〇年である。ウィーンに彫刻家クルチエッキーＫｕｌｃｚｃｋｙ（クビチェック前大統領の名に似る）の制作したコーヒー記念塔があるというが、これは世界にまれなものであろう。

フランスでは一六八九年にコーヒー店が姿を現わし、店内から歩道まで卓を並べるという特異風景を生んだ。時代的にはそれより後になるが、文学者バルザックも大のコーヒー愛好家であった。

彼はコーヒーは酒のように飲む量を超えることなく、従って酩酊もせず、悪い副作用も起こさない、と言っている。

事実、コーヒーを飲み過ぎてのけんか騒ぎなどは聞かない。ビクトル・ユーゴーもコーヒーの愛飲家であったようだ。

二百三十年前に伯国に移植

現在コーヒーは熱帯国ではどこの国でも栽培されている。アフリカ原産のコーヒーが発見後に数百年の空白期を経て世に知られ、それが二百年にして全世界に消費されるまでになったのは何によるか。それは人間の生活にぴったり合致するものがあるからであろう。あの活動的で能率主義のアメリカ人の生活にコーヒーが不可欠であることは、日本人と米のようなものだ。

第二次世界大戦の戦線のアメリカ兵士への配給物

資の中に、必ずコーヒーが入れられてあったのはそれを物語っている。

十六世紀初めにインドのゴヤにコーヒーが移植されたことは先きに述べたが、十七世紀にはセイロン島に植えられ、更に十七世紀末にはオランダ人がジャバに移植した。しかしそれは低地であったため河川の氾濫で失敗し、その後オランダ東インド会社がセレベスの高地に栽培して成功した。

同時にアムステルダムに観賞用としてコーヒーが温室栽培された。その苗をフランス人が手に入れて、一七一〇年のころインド洋のボールボン島に移植した。これがボールボンコーヒーの起源となっている。

ついで一七一五年に西インドのマルチニカ島に移植され、更にそこから仏領ギヤナに移し植えられたものだ。

一七二七年にブラジルのパラーに移植されたコーヒーは、仏領ギヤナから入れられたことを思えば、ブラジルコーヒーの原種はボールボン島とマルチニカ島に発していることになる。

ここで年代を迫ってコーヒー移植の経路を一見してみよう。

一七二七年　仏領ギヤナからブラジルのパラーに移植さる。
一七二八年　ジャバからドミニカに移植さる。
一七三〇年　英国人がジャマイカに移植す。これが後にブルー・マウンテン・コッフィーと呼ばれる。
一七四〇年　スペイン人の宣教師がジャバからヒリピンに移植す。
一七四七年　ドミニカからキューバに移植さる。
一七五〇年　ドミニカからグワテマラ、ハイチ、ホンジュラス、ポルト・リコ、トリンダード、エクアドールに移植さる。
一七七九年　スペイン人がキューバからコスタ・リカに移植す。
一七八四年　仏領マルチニカ島からベネズエラ及びコロンビアに移植さる。
一七九〇年　西インドからメキシコに入る。

以上によって、十八世紀を通してコーヒーの栽培が中米諸国にほとんどもれなく普及したことが知られる。

コーヒーの飲み方

次はコーヒーの種類だが、アラビア種が全世界に栽培されるものの八割を占める。他の二割がロブスタ、リベリカ、モカ、マラゴジッペなどである。

エクアドールを初めドミニカ、ジャマイカ、トリンダードではロブスタ種が多く、これはハイランド・コッフィーとして名声を高めるものだ。

ブラジルコーヒーの中で、特にサンパウロとパラナで栽培されるのはアラビア種とボールボン、アマレーロ、ボツカツであり、他には新種のノーボ・ムンドがある。コーヒーの種類は栽培技術に属するからその記述は避けるが、よく人に聞かれるのはコーヒーの栄養価だ。厳密にいえばコーヒーそのものには人体の血や肉となるものはない。しかしコーヒーのカフェインに含まれるアルカロイドは、頭脳の細胞や心臓の機能の新陳代謝を助長する効果があり、またタンニン素は動物性蛋白質をよく消化する。肉食をした後のコーヒーは消化を助け、午後の眠気を去って元気を回復することはおのずからうなずけるであろう。

つぎにコーヒーのだし方だが、早く抽出するのが第一の秘訣で、長い時間をかけるほど風味を失う。熱湯を注いで抽出した液を再び沸騰することは禁物だ。また濾過用（コアドール）の布は使用後によく

洗ってから、かわかさずに冷水に浸しておくのがよい。拙著「ブラジルの風味」に某コーヒー耕主の説として、濾過用の布はかわいたのを用いるとあるが、あれは訂正の必要がある。なおシーカラ（コッフィー・カップ）は使用前に熱湯に浸すのがよい。

コーヒーの飲み方は消費国の習慣と人各々によって一様でないが、概してトルコ人は砂糖を用いないようだ。アメリカ人などにも砂糖を混ぜないのが相当ある。また、だし方にも英国式、アメリカ式、トルコ式、イタリア式などあっ一律でない。アメリカではブラジルのように黒色を呈するまでコーヒー粒を焙煎しないが、その方がカフェインの含有量が多い。

アメリカとの比較で、日本でのコーヒー消費はまだ問題にならぬほど少ない。最も消費量の多い東京都を見ても一年人口一人当たりは〇・三ポンド（四十匁）に過ぎない。日本全国ではこれよりはるかに少ないことが想像される。これは一つには日本の昔からの習慣もさることながら、気候風土、食生活の影響からきている。アメリカのおよそ乾燥した気候と、動物性蛋白質に富んだ食物にコーヒーが適合することはいうまでもない。ところが日本の湿気の多い気候と澱粉質の食物には、古来の日本茶がよく合

うようだ。従って、日本でのコーヒー消費が増されるには日常の食生活からして改められねばならない。日本人が米を主食物とし、コーヒーを贅沢品とする間はコーヒーの消費増加は望まれぬであろう。

いずれにしても一つのものが一国の社会にはいり、生活に取り入れられるのは容易でなく、半世紀または一世紀もの期間を要する。これは各国の実例を見ても明らかである。

ブラジルコーヒーの由来

これからブラジルのコーヒー物語りに移ろう。

一八一〇年から一八一九年にブラジルを訪れた英国人の歴史家ロバート・サウシーの著書ＨＩＳＴＯＲＹ　ＯＦ　ＣＯＦＦＥＥの一節に、一五八〇年のころインドのゴアからブラジルのバイアにコーヒーが移植されたが、ポルトガル王室のインド貿易政策のため、バイアのコーヒー栽培は法令によって厳禁されたとある。これはどうやら誤りのようだ。ほかにもブラジルコーヒーの発端についての伝説めいたものはあるが、ブラジルコーヒーの栽培史は一七二七年にフランシスコ・デ・メーロ・パリエタによって、仏領ギヤナから移植されたことに始まるのが正し

い。

ブラジルコーヒーの始祖、フランシスコ・デ・メーロ・パリエタはマラニョン庁付き武官であって、サルジェント・モール（現在の少佐）であった。

ブラジルに珈琲を移植したフランシスコ・デ・メーロ・パリエタ

彼が数回にわたってアマゾンの探険をなし、アマパ地帯の地理に精通するところから、仏領ギヤナとの境界問題の解決のため、仏領ギヤナの首都カインを訪れたことがブラジルへコーヒーを移植する動機となっている。

パリエタがアマゾンの探険をやったのは一七二〇年から一七二五年のポルトガルの王ドン・ジョアン五世の時代で、マデーラ、トカチン、マモレ、タパジョスの流域を踏査し、ペルーに通じる河川航路を開き、且つ銀鉱発見を企てるという欲の深いもので

あった。これはマラニョン庁長官ジョアン・ダ・マイア・ガーマの指令に基づいてなしとげたもので、パラー生まれのパリエタは当時唯一のアマゾン通であった。

さて問題の仏領ギヤナだが、これは十七世紀初めにフランス人が占有し、一六三五年にはスペイン人によって占拠され、それを一六六七年にオランダ人が放逐し、一六七四年になって再びフランス人が奪回したというすこぶる曰くづきのものである。

このように仏領ギヤナで戦争が展開されるごとに、ブラジルのアマパ領地との境界が不明瞭となり、時にはフランス人がブラジル領に侵入するなど、境界紛争が絶えなかったものだ。ブラジル側ではリオ・オヤポクの沿岸に城塞を築いてフランス人の侵入防衛に当たったが、これはたいして効果がなかった。

フランシスコ・デ・メーロ・パリエタが境界問題の折衝のためにカインを訪れた当時のフランス総督は、クロード・ドルヴィエールであった。パリエタはそのころの探険隊にはまれな教養を備えた風姿堂々たる美丈夫であったので、ドルヴィエール総督夫人が少なからず彼に好意をもち、内密でギヤナ産のコーヒー種子を与え、そのほかに五株のコーヒー

苗をもパリエタの便乗船に届けるという親切さを示したものであった。

このようにして、仏領ギヤナ総督夫人の好意でブラジルのパラーにコーヒーが移植され、数年後には何十キロかの初収穫をうることができた。その後のパリエタの動静については詳しい記録はないが、彼はコーヒーが将来ブラジルの大産業になるとは想像もしなかつたらしく、不遇の晩年を送って寂しく死んでいった。

この時のいきさつは、前の珈琲談義の中でも既に述べてある。

北伯から聖州へ移る

ではブラジルの北部に始まったコーヒー栽培が、どうして南部に移ったか。

それは、パライバ流域の豊穣地とサンパウロのカンピーナスを中心とするテーラ・ロシャ地帯が、北部よりはるかに生産力に富み、且つ十九世紀の蒸汽船の出現による産業革命のためである。

つまり、帆船によるコーヒーの輸送には距離が重要問題であったが、蒸汽船が現われてからは距離は第二次的問題となったからである。

北部のマラニョンからリオに初めにコーヒーを移植したのは、リオ市の高等裁判所判事アルベルト・カステロ・ブランコであり、それは一七七〇年だから、パリエタがパラーにコーヒーを移植して四十三年後である。

ブラジルの植民期の経済は、北東伯の砂糖産業とミナスの鉱業によって成り立っていたが、鉱業が衰微するに及んで新産業としてコーヒーが現われたことは、ブラジルのため幸いであった。ほかに一つ、当国の経済に重要な役割りをなしたのがブーロだ。鉄道が現われる以前に輸出港への物資搬出はブーロの背で行なわれたのは当然であり、これが唯一の運輸機関でもあった。

従ってブーロの飼育とその商取引きは、植民期ブラジルの大きな財源となった。

次に、年代順にブラジル・コーヒーの栽培普及状態をみることにする。

一七二七―一七五〇年　パラー及びマラニョン

一七七〇―一八二〇年　リオのグワナバラ週辺

一八二五―一八三〇年　リオのパライバ盆地（海岸山脈とパライバ河の中間）

一八三五年　南部ミナス、パライバ盆地のロレー

ナ、グワラチンゲタ、ピンダモニャンガーバ、及びタウバテ

一八四〇年　カンピーナス、イツー、ソロカバ
一八七〇年　リベロン・プレート
一八八五年　リオ・クラーロ、サン・カルロス
一九一〇年　ノロエステ
一九一五年　ソロカバナ
一九二〇年　奥ソロカバナ
一九二五年　アルタ・パウリスタ
一九二八年　北部パラナ

一七七〇年にリオに移植されたコーヒーは、それ以来三十余年間は専ら観賞用として庭園に植えられたに過ぎない。一七八〇年のころオランダ人のホップマンが、グワナバラ湾を眼下に望む高台に、数百株のコーヒー園を作ったのが小規模のコーヒー栽培の始まりである。

一七八八年にはカルメリッタ派の僧侶コート・デ・フォンセッカが、僧院の庭に約二千株のコーヒーを植えたのが人々の注目をひいた。また一七九〇年にマレシャル・アローシェ・ロンドンが、これまた観賞用として数十株のコーヒーをサンパウロの自身の農園に植えた。その場所は現在のラルゴ・ド・

アロウシェである。すすんで一八〇八年にドン・ジョアン六世がポルトガル王室をブラジルに移したころには、コーヒーが新産業としてようやく人々の興味をひき始めていた。

国の紋章に珈琲の葉

ドン・ジョアン六世が王位につき、ポルトガル本国とその植民地を統治するブラジル王国の紋章を考案するに当たって、オルデン・デ・クリストの十字を十九の星（十九のカピタニアを意味する）で囲み、下部から中央部に向けてコーヒーとタバコの葉を配したとは面白い。ドン・ジョアン六世はコーヒーが未来のブラジルの主産物たることを予想していたのであろうか。

今一つ興味ある事実は、帝政第二期の一八二五年に、リオからハワイにコーヒーが移植されたことだ。ハワイの王様ＲＩＨＯ・ＲＩＨＯ（タメハメ十二世）あてにブラジルコーヒー苗が送られ、同時にブラジルとハワイ両国親善のためにそれぞれ自国産の宝石が交換された。ハワイの王様からドン・ペードロ一世に贈られた宝石は、リオの国立博物館に秘蔵されている。

サンパウロのパライバ盆地に本格的なコーヒー栽培が行なわれたのは、一八四〇年後であり、その生産コーヒーは、険阻な山岳路をブーロによって越え、輸出港のアングラ・ドス・レース、パラチー、ウバツーバあるいはサン・セバスチョンに搬出された。いまだにそのコーヒーの道といわれた旧道が部分的に見られる。

珈琲で勝ったパラグワイ戦争

帝政第二期にはコーヒーはブラジルの重要な財源となった。それを如実に物語るのが一八六五年から一八七〇年に及んだパラグワイ戦争だ。もし多くのコーヒー耕主の納税がなかったならば、ブラジルは五カ年もの長期の戦費をまかなって勝利を収め得たかどうか疑問である。

帝政第二期には金力にものをいわせて授爵されたバロン・ド・カッフェ（コーヒー男爵）が六百名にも達した。それらに関してはネルソン・ウェルネック・ソドレの著書ＯＰＡＮＯＲＡＭＡ　ＤＯ　ＳＥＧＵＮＤＯ　ＩＭＰＥＲＩＯに記述されている。

さて、北伯には多くのラチフンジオ・アスカレーロ（砂糖豪農）が存在したが、サンパウロに大規模

のコーヒー耕地が形成されるに至って、ラチフンジオ・ド・カッフェ（コーヒー豪農）が現われたのは当然の成行きである。これは英国流にＬＡＮＤ　ＬＯＲＤとも呼ばれた。

ラチフンジオの資格は大体において二ないし三レグア平方の土地を所有するものだが、北伯では五〇レグア平方もの大地主もまれでなく、それらはほとんど購入地でなくてセスマリア、政府から無償分譲された未開拓の土地であるのが多い。サンパウロでのラチフンジオ・ド・カッフェの代表的なものはリオ・クラーロ子爵であり、彼は幾つかの大耕地を所有したが、それは一つの長老制社会の標本でもあった。

しかし、ブラジルが帝政から共和制になってからの貴族は前代の遺物となり、新しい社会的風習が生まれて、中小農が現われるようになった。特に一八七〇年以後の鉄道の開通と奴隷解放は、豪農の存在を困難ならしめ、かつての大耕地で廃虚と化したものも少なくない。また生産力が衰えた旧耕地を数人の子に分割したはよいが、彼らは高等教育をうけているにしても、耕地経営の実地経験に乏しいため、これまた経営不能に陥ったものがたくさんあった。

ともかくも、ブラジルのコーヒー産業には百数十

年の歴史があるが、その間、幾多の経済恐慌、政変、降霜などの天災、人災に遭遇している。それらの盛衰波乱の記録や歴代大統領のコーヒー政策については、稿を改めて述べてみたい。

また、文学、詩歌、音楽、美術、民謡、伝説などに現われているコーヒーについて叙述すならば興味尽きないものがあろうが、それらも今後の機会にゆずりたい。

（随想録第一編　了）

随想録第二編

ブラジル史話

旅行記

サンフランシスコ盆地の特色カボクロの水売り

サンパウロ物語

―初めは土人教化村―

サンパウロの創設記念日を迎え、ジェズイットの隣人愛によって生まれたささやかな土民教化村が、大都市サンパウロに成長したことを思って、いっそう感慨を深くするものがある。同時にサンパウロ村の建設に献身した先駆拓人の風姿が描き出される。それはマノエル・ダ・ノブレガ神父をはじめジョゼ・デ・アンシェタ僧、アントニオ・ロドリゲス修道士などである。

ポルトガル王室が、さきに経験したカピタニア制の失敗によって、ブラジルの開発には土人との摩擦を避けるために土民教化の必要性を悟り、ジェズイットを初代総督と共に派遣したことは賢明であった。特にサンパウロ村の建設には、ジェズイットの功績が絶大である。

ラテン・アメリカ諸国の建国史を見ると、アルゼンチンやウルグワイ、パラグワイは、スペイン系ジェズイットによってミッションが設けられ、土民教化が行なわれたが、サンパウロ以北アマゾンまでの広大な土民教化区は、ポルトガル系ジェズイットが開拓した。そこにルーゾ・ブラジルの社会文化の

特異性がある。単にポルトガルのコロニザドール（拓植民）の渡来だけで、今日のブラジルの偉大をなす素地が築かれたかどうかは疑問である。

とりわけサンパウロの創設には、ジェズイットは不離密接の関係があった。また、マノエル・ダ・ノブレガ神父とジョゼ・デ・アンシェタ僧が、サンパウロの創設者であることは改めて言うまでもない。

ところで、個人の運命があるように、一国にもその運命がある。マノエル・ダ・ノブレガとジョゼ・デ・アンシエタの場合は、彼ら両者の運命がサンパウロを創設し、ブラジルの将来に大きな影響を与えた。

マノエル・ダ・ノブレガは、コインブラ大学を卒業すると同時に同校の教授たることをすすめられたが、生来のどもりであることから教壇に立つ不適さを感じ、恩師シモン・ロドリゲスとドン・ジョアン三世の要請を入れて、ブラジルの土民教化に尽くすことになったのである。それはイナシオ・デ・ロヨラと共にジェズス会を創立したフランシスコ・シャビエルが、東洋への伝道のためにインドのゴヤに出発して七年後のことだ。

かくして、ノブレガ神父がブラジルの初代総督トメー・デ・ソーザと共に、五名のジェズイットを率

いてバイアに到着したのが一五四九年であった。
それはサンパウロ村創設の五年前であり、ここにブラジルにおいてのジェズイットの土民教化活動が始まるが、もしノブレガがドモリでなかったならば、彼は大学教授として安らかな生涯を送りブラジルの歴史も大いに変わっていたであろう。またサンパウロ村が建設されたかどうかも疑わしい。こうした事実から、一つの都市の建設には、一個人の考えや行動が大きく影響することを知って意外の感に打たれる。
ノブレガ神父はサンパウロ・デ・ビラチニンガ村を設ける以前に、ピラチニンガ高原一帯の綿密な実地調査をした。これで彼が土民教化村の建設にいかに慎重であったかが知られる。
彼がブラジルに渡ったのは三十二歳の働き盛りで、それはジェズス会がローマ教皇から公認されて八年目であった。
ノブレガ神父は、一五一七年十月十八日にポルトガルの一寒村に生まれ、一五八〇年十月十八日に五十三歳でリオのジェズイット神学校で永眠した。つまり彼は自身の誕生日に死んだことになるが、こんな例もまれであろう。
彼はブラジルに二十一年の布教伝道の生活を送

り、その間一度も祖国を訪れずして骨をブラジルの地に埋めた。彼こそ文字通りの神の使徒であり、すぐれた先党者、指導者であったのだ。

つぎは、ノブレガ神父の片腕としてサンパウロ村を創設したジョゼ・デ・アンシエタだが、彼は一五三三年に、スペイン領のカナリア群島テネリフェ島のラグーナに生まれたから、厳正にはスペイン人である。

彼は幼くして神童といわれ、十四歳でコインブラ大学に入学し、ジェズイット教団に入門して修道士の聖衣をいただき、ブラジルに渡ったのは十九歳であった。

彼は一五五三年にブラジルに着き、バイアに数カ月居たが、その間にツピー語のあらましを修得したほどの語学の天才であった。

その後彼は、ノブレガ神父の命によってサン・ビセンテを訪れて準備を整え、十三名のジェズイットの一人としてピラチニンガ高原に達し、サンパウロ村を創設したのが一五五四年の一月二十五日である。それはアンシェタにとって土民教化のための愛の種まきであったのだ。もしこれが人間至上道義の愛の発露でなくして搾取を目的とするものであったならば、彼は多くの土民から尊敬されることもな

く、サンパウロは健全な成長をなし得なかったであろう。

アンシェタの土民教化と布教への献身は超人間的で、一日の睡眠は三時間に過ぎなかった。土人子弟への教授用のポルトゲース、ツピー対訳書も彼自らが書き上げたものである。彼には非常な人徳があって、土人は彼を敬愛し、児童は慈父のように慕ったことが、その教化活動の実績をあげた根本である。

アンシェタは小柄にして少し猫背で、風姿は立派ではなかったが、なにかしら人をひきつける人格的魅力があった。オンサのような猛獣ですら、彼の前には温和になったという逸話がある。

ノブレガ神父の死後は、アンシェタがジェズイット教団のブラジル教区長に任ぜられ、リオ、バイア、エスピリト・サントの教化伝道に尽くした。またたびたびサンパウロの海岸地帯を訪れているが、イタニャインがその教化陣営であった。従ってイタニャインにはアンシェタの土民教化に関する史蹟が見られる。アンシェタの寝台といわれる海岸の岩やノッサ・セニョーラ・ダ・コンセーソン教会などがそれである。

アンシェタの土民教化と布教についての感想文や書簡はおびただしい数で、それはブラジルのジェズ

イット史研究の貴い資料である。
アンシェタは一五九九年七月九日に、六十三歳でエスピリト・サントのレリチーバ（現在のアンシェタ）に永眠した。その葬儀に参列した土人の数は、実に千数百名に達したといわれるが、それは何を物語るであろう。

サンパウロの創立記念日

サンパウロ州の首都というよりは、ブラジルまたはラテン・アメリカの工業文化都を誇るサンパウロが、誕生四百八周年を迎えた。現在その周辺の接続工業区を加えれば、サンパウロの人口は四百万を超えるであろう。
この目ざましい発展は第二次世界大戦以後の傾向であるが、最近の二十年間に、これほどの成長を遂げた都市はサンパウロを除いては世界に例を見ない。コンゴニャス空港の航空機の発着と旅客の数が、世界第二位といわれることがうなずける。
このサンパウロの著しい膨張は、外国企業の進出による工業の勃興と、農村人口の都市集中の奇型的発達ともいわれるが、四百万の人間が、それぞれ活路を開いていくところにサンパウロの偉大さがあ

る。それは、ブラジルの無限の底力というか抱擁力を如実に物語っているといえよう。

一五五四年一月二十五日に、十三名のジェズイットの一団が海岸山脈の険路を越えてピラチニンガ高原に達し、粗野なかやぶきの教会と学校を建て、マノエル・ダ・パイパ師によってサンパウロ・デ・ピラチニンガ村創設の野外ミサがあげられた。ここにサンパウロの建設史が発している。

史家アフォンソ・デ・トウネーの『サンパウロ創設史』の巻頭の文字は、リズミカルに響いて美しい余韻を感じさせ、またバンデーラスの探険記は、サンパウロ開拓の大史詩でもある。

さて一五〇〇年にブラジルは発見されたが、その後一五三二年のマルチン・アフォンソ・デ・ソーザによるサン・ビセンテ村の建設まではブラジルの空白期であった。財政難にもかかわらず、アフリカとインド貿易に主力を集中していたポルトガルには、新発見領土ブラジルに対する確固たる開発も植民政策もないままに三十年が過ぎた。その間、フランス人が北部ブラジルの海岸地帯に侵入して染料のパオ・ブラジルを切り出したことに刺激され、ブラジルの防衛のために貴族マルチン・アフォンソの探険隊を派遣した。マルチン・アフォンソは単なる探険

が目的でなく、ブラジル防衛の本拠たる村を築くべく一五三一年にバイアに到着し、ついで南航してラプラク海域に達し、再び北上してサン・ビセンテを選定し、村落を設けたのがブラジル最初の公認村である。それが現在のサン・ビセンテで、あの名称は、ポルトガルの大洋航路開拓の主導力となったドン・ジョアン一世の第三王子ドン・エンリッケに敬意を表してつけられたものである。なぜかなら、ナヴェガドール（航海者）のあだ名で知られるドン・エンリッケ王子は、ポルトガルのサン・ビセンテ岬からはるかに大洋を望みながら逝去したからである。

ところで、サン・ビセンテ村の建設に多大の協力をしたのがピラチニンガ高原の唯一の白人ジョアン・ラマーリョであった。このジョアン・ラマーリョの人物については、史家の間に各々異なった意見があり、一説には彼はユダヤ系ポルトガル人であったとされている。彼がいつブラジルに渡ったかも明らかでないが、一五一五年がほぼ確実のようだ。また、彼がいかなる動機でブラジルに住みついたのかも史料に乏しいが、ポルトガルの女王のエスクデーロ（護衛兵）であった彼は、宮廷の政治的紛争の犠牲としてブラジルに亡命、または流刑に処されたもののようである。

いずれにせよ、彼が典型的拓人と指導者の風格を有し、強じん且つ独立自営心に富んでいたのでピラチニンガ高原の土人たちに敬愛され、サンパウロ・デ・ピラチニンガ村に先だってサント・アンデレ・デ・ボルバ・ド・カンポ村を創設したものである。あのサント・アンデレの郡役所の広場に立つジョアン・ラマーリョの銅像は、遺憾なく彼の風格を表わしている。

ジョアン・ラマーリョは、ピラチニンガ高原のグワヤナゼス部族の酋長チビリッサの長女、バルチラと結婚して数人の子を得たが、それが生粋のブラジル人の始祖で、それからいうところのパウリスタ（サンパウロ人）の流れを発している。

パウリスタ博物館に秘蔵される画家ウオート・ロドリゲスの代表作品ジョアン・ラマーリョとその長男の肖像画は、サンパウロ創設の史的名画となっている。また酋長チビリッサの退骨がサンパウロのセー寺院に葬られている。サンパウロの創設史には直接の建設者であるジェズイットのほかに、ジョアン・ラマーリョとチビリッサの名が銘記されねばならない。

今から四百八年前のピラチニンガ高原はどうであったか。チエテ河の支流であるタマンドアチーと

アニャンガバウーの中流に囲まれる高台は、森林でおおわれて多くの鳥がさえずっていた。小川にもたくさんの魚が群集し、土人らは狩猟採集で生活していたことはいうまでもない。チビリッサを酋長とするグワヤナゼス部族の土人らは、現在のサン・ベント広場を中心として部落を形成し、他の部族との闘争も比較的少なく平和な日を送っていた。

そのある日、チビリッサの女婿ジョアン・ラマーリョに伴われて一人の白人僧が来訪した。それはマノエル・ダ・ノブレガ神父で、目的は新たなミッション（土民教化村）建設の協力を求めることであった。

ノブレガ神父はさきにサン・ビセンテ村にレオナルド・ヌーネス僧を派遣してミッションを設立したが、そこには海岸地帯の土人子弟のほかに、遠くピラチニンガ高原からやって来る者が多いことに感激した。どうやら昔の土人の方が向学心に富んでいたようである。

マノエル・ダ・ノブレガ神父はジョアン・ラマーリョの先導を得て、現在のイツー方面までも実地踏査をなし、ピラチニンガ高原一帯の気候風土のよいのに感嘆し、多くの土民に接してはその教化の必要性を痛感した。それは一五五三年初めのことである。当時のポルトガル王室のブラジル開発方針は海

岸線を主とするものであったので、ノブレガはあえて総督に計らずして独断で高原進出を決意した。これが後日の奥地開拓の動機となり、サンパウロを根拠としてのバンデーラス探険を促したものである。

以上の史実から考えられるのは、ジェズイットの土民教化のためサン・ビセンテの前哨地として創設されたサンパウロ村が、すべての好条件に恵まれて大都となったことだ。

それは結局はドン・ジョアン三世のブラジル植民政策の賢明さを物語り、またジェズイットの献身と数名のすぐれたブラジル土着の協力者を得た好運によるものである。

しかし、サンパウロ村創設の十六世紀には、幾多の流血の犠牲のあったことが忘れられてはならない。

黄熱病の悲劇

医学者でもない私が、病気について書くのは何だか医師の領域をおかすようで気がヒケるが、これは病気に対する学説や研究論文ではなく、一つの物語りとして読んでいただきたい。

ブラジルのリオ・デ・ジャネーロは今でこそ国際観光都市として有名だが、現世紀の初めまでは悪疫の流行で外国人に恐れられたものだ。サンパウロのパライバ盆地出身のロドリゲス・アルベスが大統領として登場してから、リオが立派な文化都となり、土木技師ペレーラ・パッソスの設計によって、アペニーダ・リオ・ブランコや、海岸大通りが開設されて市街の趣きを一変した。そのリオ市に、これから述べるような黄熱病の悲劇があったことは、人々に忘れられているようだ。

今ごろはフェーブレ・アマレーラ(黄熱病)といってもぴったりこない。つまり、病名は知っていてもホンモノの病人がほとんど見られないからであろう。このほかにもペスト、コレラ、マラリア、天然痘、また黒人奴隷がブラジルに持ち込んだという、エスキストスモーゼなどの芳ばしくない病名がつぎつぎと頭に浮かぶが、それはいずれも現在の人には縁遠いものとなった。それに代わってカンセル(ガン)というすこぶる厄介なシロモノが現われ、病没者の十人の中の二人までがこれにやられるのだからおそろしい。卑近な例では、名高い映画俳優ゲーリー・クーパーがカンセルの犠牲となった。ところが、このカンセルの原因と早期発見の研究すら、ま

だ十分なまでにこぎつけられていないとははがゆい気がする。なるほど人智と科学の進歩はめざましいが、その反面、あるものは前世紀との比較でたいして向上もしていないのはどうしたことか。カンセルの発病原因もわからずに、差し当たり人間社会に福祉をもたらすこともない宇宙探険に莫大な予算をかけるのはどうかしている。

カンセルは、あながち現在だけの病気でなく昔からあったのだが、現代人が特におかされやすいのはなにか生活と結び付くものがありそうだ。ある学者の説では、常に美食をして運動不足、しかも事業のために神経を酷使する人がこの病にかかる率が多いとか。してみれば、大事業家の富裕人ほどカンセルにかかる可能性がある結論になる。従って、あまり財産を積まず適度に貧乏して、自家用車も持たずにテクるのがカンセル防禦の一方法とも言える。

しかしまたカンセルは、老若男女、人種、階級職業を問わず、だれでもこれに犯されるというから油断ができない。ことに働き盛りの人がこの病気で倒れる率が多いことは統計が物語っている。

いずれカンセルの研究が進んでこれで死ぬ人は極少となり、カンセルは昔話になるかも知れない。

その時の一日も早く到来することを願うものであ

る。

さて本論の黄熱病だが、これとて前世紀末まではその原因もわからず、不思議な病気とされていたものだ。ブラジルではバイアに始まり、リオ、サントス、カンピーナス、ソロカバに黄熱病がひろがり多くの死亡者を出したと聞いてぞっとする。ところで黄熱病は、ブラジルよりも以前に北米のニュー・オールリンスに発生した記録があるし、キューバとパナマはこの病気の巣であった。こう考えればブラジルの黄熱病は、外国から伝播したというのが当たっているようだ。しかし、よいものは何でも自分の国を元祖とするが、悪いもの、特に悪疫ときては他国から伝染したと言いたいのが人情である。これにもれず、黄熱病はブラジルが発生地だと流布されたのが前世紀末のことである。そのせいか、リオを訪れるのは自殺的行為とされ、外国の船舶はリオのはるか沖合いを通航したとは皮肉だ。ところが船員には冒険児が多く、それらが好奇心からリオに上陸してわる遊びをするものがあった。

その理由は、当時のリオにたくさんの夜の女がいたからである。彼ら船員にとって、殺伐な船内生活と長い航海中の不満を慰める唯一のものは寄港地の女性であった。わけてもブラジレーラは彼らには大

きな魅力であって、その目的遂行のためには、黄熱病も物の数ではなかったようだ。

前世紀末のリオでは、夕刻ともなれば夜の女がぞろぞろ街頭に出現してコビを売り盛況を呈したという。しかも大ぜいの船員の上陸日には、白昼堂々と怪しげな女が市街の中心で取引きをするようになり、リオは黄熱病と売春婦で有名となった。黄熱病と夜の女を引合いに出してはへんだが、こんなことで、外国の船員によってバイアやリオの港町に黄熱病のひろがったことが想像される。

しかし外国人に言わせると逆で、リオの黄熱病を船員が他国に入れたのだと。これでは勝ち負けのない水かけ論にすぎない。

いずれにせよ、今ではブラジルの黄熱病は昔話となったが、それは黄熱病の研究に献身した学徒のおかげである。ここで人々は、あらためてブラジルが生んだ世界的科学者オスワルド・クルースをはじめ、エミリオ・リーバス、アドルフォ・ルッツ、ルイス・ペレーラ・バレットに感謝すべきであろう。しかしながら、オスワルド・クルースとは、学校の名称であることより知らないご仁がいるには恐れ入る。そこで黄熱病の悲劇の物語りをくりひろげねばならない。

一八四九年のことだが、アメリカ合衆国海軍の帆船「ブラジル」が、親善訪問のため南米諸国を巡航の途次、バイアのサルバドールに寄航した。同船はそれ以前に中米諸国を訪れたのだが、サルバドールに上陸した一兵士が、奇妙な熱病にかかって死亡した。これがブラジルの黄熱病の初めだったようだ。

その兵士はサルバドールで病気におかされ死亡したと艦長に報告させたのだが、事実は、既に中米で病いにかかっていたものらしい。

このエタイの知れない病気は、たちまちサルバドールの市民に伝染した。その翌年は、スペイン船のナバラが三百余人の移民を乗せてバイアに寄港し、ついでリオに着いてから船中に不可解な病気が発生、多数の病死者を出して大騒ぎとなった。それは、病人の顔面が黄色になるのが特徴であったというから、明らかに黄熱病であったに違いない。しかし、これも果たしてバイアで黄熱病におかされたものか否かは疑問である。

それから約二十年を経過し、一八六一年にフランスの帆船「アンナマリア」が、キューバで砂糖を満載してハバナを出港し、カリビアン海を南航して仏領ギヤナのカインに到着した時に、これまた奇妙な病気が現われた。それが黄熱病であるとは気付かず

に航海をつづけ、ブラジルの海域にはいってからあえて船体を海中に浸して塩水で病菌の消毒をやったというから、今から考えればバカげているが、ブラジルには大迷惑で、それがレシフェの市民に伝染した。そのころ黄熱病はリオに流行し、ついでサントス、サンパウロ、カンピーナスにも伝播して相当の病死者が出た。

その後一八九五年に、イタリアの軍艦「ロンバルデァ」がブラジルを親善訪問した。バイアを出帆した同艦はリオのグワナバラ港に入り、岩壁から一マイル隔たるところに止まると同時に黄色の旗を掲げた。それはいうまでもなく、艦内にペスト（伝染病）ありを意味するものであった。「ロンバルデァ」の乗組員は三百三十六名であったが、その中の二百三十三名が一週間の停泊中に艦長をふくめて病死するという惨事が起こった。これも黄熱病によるもので、この事件は直ちに全世界に報道され、悪い意味でブラジルのリオは有名となった。しかし、必ずしもリオの黄熱病で「ロンバルデァ」の乗組員が死亡したとは断定できない。あるいは中米またはバイアで黄熱病におかされていたかも知れないのである。むしろリオこそとんだ災難をうけたことになる。

「ロンバルデァ」の生存者百三名では航海もつづ

けられず、イタリア本国から増員が派遣され、マストに半旗を掲げて喪に服し、悲しみのうちにリオを出帆したものである。同艦の死亡者はリオのマクコ墓地に葬られ、後日イタリア人コロニアによって立派なカララ大理石の鎮魂碑が建立された。今でも「ロンバルデァ」にからむリオでの黄熱病の悲劇が、老人の間に語り伝えられている。

一八九七年となってサンパウロ一帯に大降雨がつづき、ソロカバ河の水があふれたのが原因してか、同年の十二月には黄熱病が非常な勢いで流行した。そのころソロカバ市の死亡者は三千人にも達したという。

ここで話は一八九一年にさかのぼるが、アメリカ合衆国のニュー・オールリンスとメンフェスに黄熱病が発生して四万五千人がこれにおかされ、一万三千人が病死した。同年、キューバ人の医学者カルロス・ファンレーが、黄熱病は蚊によって媒介されるという研究を発表して注目されたが、問題の蚊の種類が判明していなかった。そこで、黄熱病を媒介する蚊と黄熱病の予防並びに治療法の研究に全力を尽くしたのが、ブラジル人の医学者オスワルド・クルースを筆頭にエミリオ・リーバス、アドルフォ・

ルッツ、オリンピオ・ポルトガル、ルイス・ペレーラ・バレットであった。特にオスワルド・クルースとエミリオ・リーバスの協力による黄熱病の研究は、学界の美談ともなっている。ともかく黄熱病の病原すら明らかでなかった時、パリー帰りのブラジル人の若い無名の科学者オスワルド・クルースが、リオ市の衛生局長に任ぜられたことは人々にとって大きな驚きであった。オスワルド・クルースは、キューバ人の医学者カルロス・ファンレーの学説を裏書きするものとして、黄熱病はエステゴミア蚊によって媒介される旨を発表した。そればかりではなく、彼はペスト菌もネズミが媒介するとの第二の研究説を発表したが、その時にリオ市民は大笑いした。

「オスワルド・クルースは気違いだ、蚊だのネズミだのとそれが人間の病気になんの関係があるか、大統領ロドリゲス・アルベスは、とんでもない者を信頼して重大な責任を負わしめたものだ」と憤怒と冷笑を浴びせ、ついには市民の暴動にまで発展した。

しかし真実はいつかは理解される。　オスワルド・クルースの献身的な努力が人々に認められて、感謝される日が到来した。かつてはリオの黄熱病による死亡者は数千人にも達したのが数十人になり、

更に数名に減少した時に、リオ市民はその事実の前に頭を下げざるを得なかったのである。しかし、その喜びと栄冠をうるまでにオスワルド・クルースの払った犠牲はどれほどであったか、また彼の研究に協力したエミリオ・リーバスがこれに生命をかけたことをだれが知るであろうか。オスワルド・クルースの研究に絶対の信頼をもったエミリオ・リーバスは、黄熱病治療法を確証するために、黄熱患者の血を吸ったエステゴミア蚊にあえて自分のからだを刺さしめ、彼自らが黄熱病におかされたことは何を物語るであろうか。

当時ブラジルの黄熱病の研究をめぐって数名の医学者の間にかわされた書面が、いつか新聞紙上に掲載されたのを見た時に、彼ら科学者の熱意と赤誠に少なからずうたれるものがあった。あらためていうまでもないが、リオのオスワルド・クルース研究所とサンパウロのエミリオ・リーバス研究所は、相並んでブラジルが世界に誇る存在であろう。

またここで考えられるのは、黄熱病研究の一分野がブラジル人によって遂げられたように、カンセルの研究とても当国の医学者で成功されぬとは限らないことだ。こんな夢を抱くだけでも一つの書びを感ずる。

ブラジル独立余談

アメリカ合衆国に使いした
ブラジル帝国初めの外交官

十月になってからブラジル独立余談ではおそ過ぎるようだが、この物語りそのものが昔日のブラジルの気長さを表わしているから、むしろ気分がわかるかも知れない。これはブラジル外交史のエピソードとして紹介に値するものと思う。初めにお断わりせねばならないのは、ブラジル独立の承認を得るために、ワシントンに派遣された外交官ジョゼ・シルベストレ・レベロのアメリカ通信をつい数日前に読んだので、この一文を草する気持ちになったことである。

ジョゼ・シルベストレ・レベロは、ポルトガル人と黒人の二代混血児で、ペルナンブーコに生まれ、一八一七年から二年余りアメリカ合衆国に滞在した経歴をもつ人物であった。

彼は元来がリオの商人で相当の教養があり、高度の社会観と商業道徳をもって商取引きに当たっていた。これが政府要人の注目をひくに至ったもののようだ。しかも、その当時のブラジル人としては珍しくもアメリカを訪れたことのある彼が、ブラジル帝

国外交官としてブラジル独立の承認を求めるべくワシントンに使いしたことは、人選のよろしきを得たものと言える。

時の外相ルイス・ジョゼ・デ・カルヴァーリョ・メーロ（カショエーラ子爵）から、細密に及んで訓令をうけたシルベストレ・レベロは、ブラジルを出発するに当たってひそかに決意するところがあった。

アメリカ合衆国大統領にあてた公文書とシルベストレ・レベロの信任状は、一八二四年一月三十一日付であるから、ブラジルの独立後一年五カ月過ぎていたとはずいぶん悠長な話だ。

当時のアメリカの大統領はジェームス・モンローで、一八二二年十二月三日付をもって、あの有名なモンロー主義を内外に提唱して一年を経たころであった。

一八二四年四月三日にワシントンに到着したシルベストレ・レベロは、五月二十六日に大統領を公式訪問してブラジルの独立を認められているから、これまたひどくスローモションな話だ。

それにしても大統領ジェームス・モンローとシルベストレ・レベロの対談が、いともスムースに運んだのは、レベロの周到な準備工作があったからだ。

ワシントンに着いた彼は、まつ先に国務長官ジョン・キンシー・アダムスに面会して敬意を表しついで国務局事務総長チャールス・キャロールを訪れて長時間にわたり意見の交換を行なった。なぜかというと、ブラジル独立についてのアメリカ大統領あての公文書は、事務総長チャールス・キャロールの手もとに一応送られていたからである。

チャールス・キャロールはアイルランド系アメリカ人で、パリーとロンドンに遊学して法学を修めた真面目なカトリック信者であった。彼はその生涯のほとんどを国務局に終始した人で、局内きっての事務通であった。このことをシルベストレ・レベロはブラジル出発前に調べ上げていた。

チャールス・キャロールとシルベストレ・レベロの対談は、ブラジルの独立に関連して共和国の理想とデモクラシーに触れ、大統領選挙の意義について語り合うのであった。

つまり彼ら二人は肝胆相照らしたわけであるが、その時のチャールス・キャロールは大いに気炎をあげて、ブラジル帝国がむしろ共和国なれば、と含みのあることを述べている。

このように彼らの会談は、肝心のブラジル独立の承認には直接ふれなかったが、それは語らずして解

決されていた。外交の秘訣とはこんなものであろう。

シルベストレ・レベロのブラジル帝国外交官としてのワシントン駐在はかなり長かったので、その間に国務長官であったジョン・キンシー・アダムスがジェームス・モンローの後継として第六代大統領に就任した。

シルベストレ・レベロはワシントン駐在中に、アメリカ合衆国の現大統領と四人の前大統領に面接した、と彼の書簡に書かれているが、それは当時の大統領ジョン・キンシー・アダムスを初め、ジェームス・モンロー（第五代）、ジェームス・マジソン（第四代）、トーマス・ジェファーソン（第三代）、ジョン・アダムス（第二代）である。

これらの前大統領は、少しの資産を積むこともなく、ワシントン郊外に簡素な生活を送っていたことがシルベストレ・レベロには意外であったようだ。

シルベストレ・レベロは教養高く英知に富み、洗練された外交官としての印象をこの四人の前大統領に与えたことが、当時のアメリカの新聞に報じられた。

この四人の中のジョン・アダムスは、ワシントンに次ぐ第二代大統領で、第六代大統領ジョン・キン

シー・アダムスの父であるが、高齢で著しい老衰のためシルベストレ・レベロとの対談は十分ほどに過ぎなかった。

このアダムス家は、アメリカではまれな栄誉に輝く名家であり、二人の大統領を出したほかにサムエル・アダムス、アビゲール・スミス・アダムス、チャールス・フランシス・アダムス、ヘンリー・アダムスなどの英材を生んでいる。

アダムス家の訪問によって、シルベストレ・レベロが、かつてない書びに浸ったことも彼の通信でうかがわれる。

ブラジルの今期大統領選挙（一九六〇）に当たり、外交官シルベストレ・レベロのアメリカ滞在記を読み、時代は異なるとしても、学ぶべきものが少なくないのを知った。

コンデ街のお城

サルゼーダス伯爵の旧邸

初期の日本移民に縁故の深いサンパウロのコンデ・デ・サルゼーダス街と、トーマス・デ・リーマ街（旧称ルア・ボニータ）が丁字型に相合する角に、古

い赤色の建物がある。これがサルゼーダス伯爵邸の跡で、一七二〇年ごろの建築というからサンパウロの最古の建物の一つであり、貴い史跡でもある。

この場所はサンパウロの中央に近い関係から、やがて区画整理で取りこわされるとのこと。そのために、今ではまれな存在である十八世紀初めの史的建物が失われるのは遺憾だ。せめてその以前にこの建物の歴史などをたどってみたい。

日本の笠戸丸移民の着いたころのサンパウロには、まだ高層建築もなく人家もまばらであったから、コンデ街のサルゼーダス伯爵邸はとくに目だっていたようだが、現在はそれがかすかに人々の記憶に残されているに過ぎない。

このように、かつて有名であったコンデ街の赤色のお城が次第に世間から忘れられてゆくのは、大都サンパウロのために寂しさを感ずる。

しかも当のサンパウロ人でこの建物の歴史を知るものはきわめて少ない。ましてやサルゼーダス伯爵が、どんな経歴の人物であったかはほとんど知られていない。

従って、コンデ街の坂下に住んでいた日本の、第一回移民に懐かしい思い出のサルゼーダス伯爵邸の史的記録は、今にして少しでも紹介しておかなけれ

ば時機を逸することになろう。

ところで、サンパウロ年表にはサルゼーダス伯爵については僅かに数行記されているのみで、別の資料をうるのに意外に苦心した。

およそブラジルの植民期の建物は、いわゆるコロニア型に限られ、帝政期になってルネサンス型に変わったが、一つサルゼーダス伯爵邸がスコットランド型であるのが面白い。

その建物はウォルター・スコットの名著、『アイヴァン・ホー』の物語に描かれる城閣を思い出させる。

それはイベリア文化の流れをくむ、ブラジル建築を全く離れたもので、あの中から中世紀のよろい、かぶとをつけた馬上の勇将が現われるような気がする。

十八世紀初期のサンパウロは人口一万数千で、たくさんの空地があったが、それがどういう理由であの平坦ならぬ丘上がサルゼーダス邸の建設地に選ばれたか。またその当時のサンパウロの貴族名門は、おもにカンポス・エリゼオス方面に邸宅を構えたものだが、何ゆえにサルゼーダス伯爵は飛び離れて、セー広場に近いあの場所を選定したのであろうか。ある史家は、戦略的にあの地点を選び、特に城閣風

の建築をしたともいうが、あるいはこの説が当たっているかも知れない。

いづれにせよ、サルゼーダス伯爵は祖国ポルトガル文化にとらわれず、あえてスコットランド型の建築をしたところが少なからず変わっている。

十八世紀初期といえば、サンパウロ中心とするバンディランテスの奥地探険と、金鉱探険熱の最高潮にあった時だ。ミナスのゴールド・ラッシュが少し下火となり、それに代わってゴヤスとクヤバの金鉱発見が冒険児の血をわかしていた。バンデイランテのアニャンゲラのあだなで知られる第二代バルトロメウ・ブエノ・ダ・シルバと、レーメ兄弟が登場したのもこの時代である。そのころのサンパウロは、カピタニア庁の所在地であり、南部ブラジルの政治的中心であると共に、金鉱探索の策源地でもあった。

一七一〇年まではカピタニア・デ・サンパウロに併合されていたミナスが、カピタニアとなって独立し、更にゴヤスとマット・グロッソのカピタニア制設定が提唱され、金鉱発見をめぐってバンディランテと政府要人との間に悪企みが練られ、暗躍策謀が半ば公然となされていた。そこで、策動家の陰謀による政府高官の買収、左遷や暗殺事件が相次いで起

こったことはうなずける。

本論のサルゼーダス伯爵について述べると、このコンデ街の邸宅を造営した当主は第四代サルゼーダス伯爵で、本名はアントニオ・ルイス・デ・タボラである。

大体ブラジルの蛮族は功労や財力で爵位を得たのが大部分だが、この点、サルゼーダス伯爵は生粋のポルトガル貴族であった。

彼がいつからブラジルに移住したかは明らかでないが、およそ一七〇〇年といわれるから、今から二百六十年前のことだ。一七三二年に彼は、当時のサンパウロのカピタニア長官代理カルデーラ・ピメンテルの後継としてカピトン・ジェネラル（カピタエア長官の別称）に任命された。彼がサンパウロのカピトン・ジェネラルに任ぜられるについては、次のようないきさつがあった。

一七二六年にポルトガルの王ドン・ジョアン五世の命によってサンパウロのカピタニア長音ロドリゴ・セザールが、自らクヤバの金鉱調査に行くことになり、その長官代理となったのがコロネル・ドミンゴス・ダ・フォンセッカ・レーメであった。しかし、彼が就任間もなく長官代理の職権をカルデーラ・ピメンテルに譲った。そこには何か職権買収の

不正行為があったらしい。

他方、クヤバの金鉱地でロドリゴ・セザールは多量の黄金を手に入れ、それをサンパウロのカーザ・デ・フンジソン（政府直営の鋳造所）で所定の延べ金とし、カピタニア長官代理カルデーラ・ピメンテルを介してポルトガル王室に送った。ところが、王室に着いたのは黄金でなくて鉛であったという事件が起こった。そこでサンパウロの鋳造所員をはじめ、関係者一同が厳重な取調べをうけ、容疑者数名がサントスの獄舎に投ぜられることになった。その中には無実の罪に服した者もあった。

しかるにカルデーラ・ピメンテルは政府高官の間での信望に乏しく、その人柄については面白からぬ世評があったので、再度裁判の結果、彼の罪業は暴露し、カピタニア長官代理を被免され、それに代わってアントニオ・ルイス・タボラと、サルゼーダス伯爵がサンパウロのカピトン・ジェネラルに任命されたのである。

史家アフォンソ・デ・トウネー（バンデイラス・パウリスタ史の権威）は、以上のクヤバの金鉱問題に関連して、サルゼーダス伯爵の人物もあまり芳ばしくなく叙しているが、当時の資料不足のため、この説が必ずしも確実とは認められない。

また同じく史家エルナニ・シルバ・ブエノの著述によれば、一七三五年にはサルゼーダス伯爵によってサンパウロのカピタニア議会が招集され、それに政界の著名人が列してゴヤスとマット・グロッソのカピタニア新設が討議されたが、けだしサンパウロ初まって以来の盛会さであつたと。

その後、サルゼーダス伯爵は病弱であったにもかかわらず、ポルトガル王室の命によってゴヤスの金鉱調査に乗り出し、トカチンスの辺地アライアル・ダス・トライラスに病死した。それは一七三七年八月二十九日で、貴族の身でありながら、奴隷や荒くれ男に取囲まれ、高熱に苦しみつつ相果てたとは聞くだに哀れである。

彼の遺体はポルトガルに運ばれたので、サンパウロにはサルゼーダス伯爵の墓はなく、その子孫についても明確な記録が残っていない。現在のサルゼーダス伯爵邸の跡は放置状態で、まるで廃虚同様であるが、マリアナ派の宗教団体に使用され、建物はイスナルド会社によって管理されている。

内部には僅かながらサルゼーダス伯爵時代の家具、ブラゾン（紋章）、シャンデリア、剣、やり、よろい、かぶとなどが見られ、十八世紀のポルトガル系生粋の貴族の生活がしのばれる。

また美しい天井装飾も部分的に原画のまま残されている。

一時はこの古家の庭にばけものが出るともうわさされたが、それはどうやらマリアナ派の修道士の衣服が干されてあったもののようだ。

この化けもの話も今では忘れられている。

ブラジル開港の功労者　カイルー子爵

ビスコンデ・デ・カイルーことジョゼ・ダ・シルバ・リスボアの名が広く知られるようになったのは、比較的近来のことだ。それは七月十六日が、ブラジルの〝商業の日〟と決定されてからのことである。

特に、過ぐる一九五八年はブラジルが諸外国に対して開港し、自由貿易を認めてから百五十周年に当たるので、その七月十六日を期して記念行事が催され、各新聞は一斉に特集記事を掲載した。

このブラジルの開港令は、摂政王子ドン・ジョアン（後のドン・ジョアン六世）が、ナポレオンの侵略戦をのがれてポルトガル王室をブラジルに移した直後の一八〇八年一月二十八日に署名発布された。

それはドン・ジョアンの賢明な英断であると同時に、ジョゼ・ダ・シルバ・リスボアの先見と、提言によるものであった。

ところで七月十六日が「商業の日」とされたのはジョゼ・ダ・シルバ・リスボアの誕生日に当たるからである。

一八〇八年の開港実施と共に、外国移民導入の法令も公布され、ここにブラジルの社会、経済、文化に新時代が画された。それまでの当国の産業経済には、国家的な方針と機構組織もなく、いわゆる植民地的な社会経済の色彩が濃厚であった。つまり、貴族や豪農豪商の特権社会が各地に形成されていたに過ぎない、いわば群雄割拠である。また外国人のコロニザドールとしても、公に認められた植民や移民でなく、正当な意味ではインヴァゾール（侵入者）にほかならなかった。

このような鎖国状態にあったブラジルの門戸を解放して自由交易を奨励し、外国移民の導入を実現させた功労者が、ジョゼ・ダ・シルバ・リスボアであり、それは日本の笠戸丸移民のちょうど百五十年前のできごとである。

ところでジョゼ・ダ・シルバ・リスボアとはどんな人物か。

彼は一七五六年七月十六日にバイアのサルバドールに生まれた。父はポルトガル人で母は生粋のバイア人であった。

彼は八歳のころ、カルメリッタ派の僧侶についてラテン語を学び、数年間に英語、フランス語、イタリア語、ギリシャ語、ヘブライ語を修得した驚くべき語学の天才であった。

このように各国語に通じ、原書によってあらゆる学科を勉学したことが彼をしてまれにみる博学者たらしめたのである。彼は経済学者として著名だが、法学、哲学者でもあり、あわせてすぐれた政治的才能を有し、新聞人、著述家としても聞こえた。彼によってブラジルの本格的な商業経済の制度と組織がつくられたと言っても過言でなく、ことに金融機関の銀行業の先駆者である。

ジョゼ・ダ・シルバ・リスボアは、十八歳の時にポルトガルのコインブラに遊学したが、父の希望は彼に神学を修めさせることであった。しかし、彼は父の志に反して哲学と法学部に席をおいたために学費を断たれ、苦学でコインブラ大学を卒業した。彼は二十二歳のまだ学生の時に、ポルトガル王室の推挙によりヘブライ語とギリシャ語の教授として王室附属美術学校の教壇に立った。

コインブラ大学を卒業した彼は、ひとまず祖国ブラジルに帰ったが、感ずるところがあって再びポルトガルを訪れて十数年を過ごした。その間、おもに経済学を学び、特にアダム・スミスの経済哲学の研究に没頭したなど、その当時としてはまれな進歩的人物であったといえる。彼の数多い経済学の著述は、アダム・スミスの経済論に負うところが大きい。

彼がポルトガル語に訳したアダム・スミスの“ＴＨＥ　ＷＥＡＬＴＨ　ＯＦ　ＮＡＴＩＯＮＳ”（国富論）は、ブラジルではいうまでもなく、ポルトガルですら唯一といわれた。

さて一七九七年にブラジルに帰った彼は、バイアの農事局長の任についたのがその官職の初めである。

その後約十年を経て、ポルトガル本国はナポレオン軍の侵略をうけ、摂政王子ドン・ジョアンは母君である女王ドーナ・マリアを始め、王族や多くの貴族と政府高官、それらの家族及び軍人など一万五千人の大勢を伴い、三十一隻の艦船でブラジルに移住したことは世界史上特筆されるべき大事件だ。

バイアに到着したドン・ジョアンは、数カ月の滞在でリオに向かったが、その時にバイアのカピタニア長官ポンテ伯爵の推薦で、ジョゼ・ダ・シルバ・

リスボアはドン・ジョアンの法律経済顧問としてリオに住居を構えることになった。

彼は政府の枢要の地位について幾多の仕事に携わったが、そのおもなものはブラジル商法の編さんであった。また彼は商業経済理論、経済社会学、金融論、経済哲学、政治経済に関しての著書を出したが、特に知られるのが次のものである。

PRINCIPIOS DE DIREITO COMERCIAL

LEIS DA MARINHA

PRINCIPIOS DE ECONOMIA POLITICA

また彼は一八二一年に、新聞“O CONCILIADOR DO REINO UNIDO”を創刊し、ひきつづいて他に二つの新聞を主筆するなど新聞人としての活躍も高く評価されねばならない。彼はからだが小柄でねこ背という風彩のあがらない、しかも神経質な一徹者であったので、一般人と相いれないところがあった。晩年の彼は皮肉にも経済的に恵まれず、また世間からも変人として敬遠されて不遇の日を送り、一八三五年八月二十日、七十

九歳で永眠した。

今日、彼の業績をたたえ、その誕生日を商業の日として記念するのは当を得たものだ。

ブラジルの開港と外国との貿易、外国移民の導入、商業経済の確立を思う時に、彼の風姿が大きく浮かび出るようである。

ブラジル全土の商業会議所、商工連合会を始め銀行協会その他の主要経済団体が、七月十六日にビスコンデ・デ・カイルーをしのんで敬意を表すのは、ゆえなきにあらずである。

人間に翼を与えた人

七月二十日はサントス・ズモンの生まれた日であり、また二十三日は彼の死去した日だ。いわば七月はブラジルが世界に誇る鳥人サントス・ズモンを記念する月である。

彼は一八七三年七月二十日ミナス州パルミラ郡のジョン・アイレスに生まれ、一九三年に五十九歳でサントスに没した。それはたいして長寿ではないが、文字通りの栄光の生涯であった。しかも彼の誕生月日が父のそれと同じであるのは面白い偶然の一

致である。従って、彼と父は同日に誕生祝いをやったものだ。サントス・ズモンについては、彼のおいに当たるエンリッケ・ズモン・ビラーレスの著書『人間に翼を与えた人』があるほかに、多くの出版物に紹介されているから改めて語る必要もないほどである。そこで、記録的に彼の生いたちや飛行機研究の経路を述べるのを避けて、彼の人物に関しての感想をつづってみたい。しかし私は直接サントス・ズモンの知遇を得たことはなく、あえて言えば、先般物故されたエンリッケ・ズモン・ビラーレス氏から、その叔父に当たるサントス・ズモンの話を聞いて、その人柄にうたれたことがある程度である。

まずサントス・ズモンがどんな環境に育って、後日の飛行機研究の夢を抱いたかを知るのは参考になるものがあろう。

コロニアの旧移民には、リベロン・プレート管内の有名なズモン耕地に働いた人があろう。そのズモン耕地は、かつてサントス・ズモンの父エンリッケ・ズモンの所有になるもので、そこでサントス・ズモンは少年期を過ごしている。同耕地は一八七九年に鉄道技師であったエンリッケ・ズモンによって買収され、一八九一年に英国系資本団体に売られたから、日本移民がそこに入耕したのはズモン家と直接

の関係がきれてからである。それはそれとして、その後の英国の資本家は、ズモン・コッフィー・カンパニーの名称の下に同耕地の経営に当たり、たくさんの外国移民を入れて世間の話題に上ったものだ。

さて、エンリッケ・ズモンはフランス系の人でミナスのジアマンチナに生まれ、元来が機械技師であったので、ズモン耕地の所有主であった十余年間にすべての生産施設を理想的に機械化し、ブラジル随一の模範耕地の評判を高めた。

その生産力の盛んなテーラ・ローシャに、海洋のようにつづく珈琲樹は百万本といわれ、耕地内に延長三十キロの鉄道を有し、アメリカのフィラデルフィア製のボールドウィン機関車を走らせるなど、ズモン耕地はまさしく珈琲王国の存在であった。

そのころはまだ多くの耕地に奴隷が使役されていたが、早晩来たるべき奴隷制度の撤廃に備え、エンリッケ・ズモンは、ヴェルゲーロ上院議員やコンセリェーロ・アントニオ・プラードと計り、外国から自由労働移民を入れた功績は大きい。彼によって導入されたイタリア移民のごときは相当数に達している。しかし、当時の珈琲市場は不安定の状態にあって、時には生産費とサントス港への搬出費すら得られないこともあったが、エンリッケ・ズモンは国際

産物としての珈琲の将来性に確信をもって、耕地経営に全力を尽くした。そうした彼の進歩的な態度と不屈な魂をうけ継いだのが七人目の末子、アルベルト・サントス・ズモンであった。

耕地内の製材、製粉、製糖工場、煉瓦工場、牛乳加工、珈琲の洗じょうから精選のあらゆる作業が、すべて父の考案した新式の機械によってなされるのを見ていた少年サントス・ズモンは、どんなにか胸を踊らせたことであろう。彼が機械に興味をもちはじめたのは七、八歳のころからであり、それが後に飛行機研究に情熱をわかせる動因となっている。

彼はよく空飛ぶ鳥をながめながら、もし人間があのように自由に大空を飛びうるならば、と想像をめぐらせたものだ。彼は家にあっては専ら冒険小説を読みふけり、机に向かってはしきりに計算をしながら設計図を描くのが常であった。いうまでもなく人材はすぐれた環境に育つが、あの広漠たる珈琲園で多くの機械の回転する音を開きながら、サントス・ズモンは理解ある父母の慈愛の下に未来の発明家たる素質を養ったのである。

このように、将来の大鵬は雛にしてよい雰囲気に恵まれたことは幸いであった。

ところがある日、父エンリッケ・ズモンは、珈琲

乾燥機の実験中に大けがをし、彼自身では耕地経営に当たることが不可能となった。そこでやむなく耕地を売却することになったが、この耕地を買収したのが、名高いパウロ・フロンチン財閥に英国の資本家を参加させたもので、その売買価格は一万二千コントという巨額であった。当時（一八九一年）これは全ブラジルの大きな新聞記事となって騒がれた。

この一万二千コントの三分の一をエンリッケ・ズモン夫妻の生活費にあて、他の八千コントは七人の子にそれぞれ分配手続きをとった。つまりサントス・ズモンは、十八歳の少年時代に多額の父の資産を与えられ、後顧の憂いなく飛行機の研究に没頭できた。これは彼自身とブラジルのため、ひいては世界のために幸いなことであった。

しかし、彼がもし道楽むすこであったならば、せっかくの大金も不生産的な方面に使われ、なんら社会を益するところがなかったであろう。

彼は真によい環境で育てられ、しかも人格者で進歩的な父の性格をうけ、あまつさえ経済的に豊かであったことは、まれにみる好運児と言える。しかし、結局は彼自らの人となりが飛行機発明の偉業を完遂せしめたのである。

彼には富裕な家庭に苦労なく育った者にありがち

な柔弱さはなく、温厚無口の反面、ことに臨んで驚くべき豪胆と不屈さがあった。それは彼の高い教養と不断の向学心、並びに信仰に基づくものであった。

彼はパリーに行き、工芸学校の機械科を卒業して念願の飛行機の発明に乗り出したのであるが、当時パリーの上流人の間には、スポーツとしての自動車が流行し始めた時であった。

サントス・ズモンは、液体のガソリンを燃料とする内燃エンジンに少なからず興味をもち、これこそ飛行機の動力であることを悟って研究をつづけた。面白いのは、作業場にあっては寝食を忘れる彼も、社交界では有名なだて者であった。彼が独特の好みによる型の帽子、ネクタイ、服を着用し、さっそうとしてパリー市街に自動車を走らせる姿は、非常な評判となったものだ。

サントス・ズモンがパリーでの軽気球の製作に始まり、矢つぎばやに十幾つもの飛行船を造ったことは周知の通りである。また、数十回にも及ぶ飛行実験中には、幾度か身を危険にさらし、九死に一生を得たこともあった。

彼の生涯を通じて至上の喜びと栄誉は、一九〇六年十月二十三日に飛行船に乗ってパリーのエッフェ

ル塔上を旋回飛行したことであろう。

ここで考えることは、今でこそサントス・ズモンの名は広く知られているが、数年前までは、飛行機の発明家といえば専らアメリカのライト兄弟を世界の人々は連想したことである。また、いまだにサントス・ズモンについてはエンサイクロペジア・ブリタニカにも僅か十数行に記載されているに過ぎないが、これは往時のブラジルの国力というか、国際的地位を物語るものであろう。

一つには、サントス・ズモンが飛行機の研究を祖国ブラジルでなく、異境フランスで成し遂げたことにもある。

これはイタリア人のマルコニが、無線電信の発明を英国で完成したようなものだ。

つまり、一人の天才発明家を育てるには、背後の経済力もさることながら、それをうけ入れる社会的雰囲気の必要さを痛感する。

ブラジル演劇の先駆者　**ジョアン・カエターノ**

サンパウロのボルジェス・ラゴア街六五〇番に、サンパウロ市役所文化普及部所属の、テアトロ・

ジョアン・カエターノがある。同劇場は、文化普及のために営利を目的としない歌舞演劇に無料貸与されるが、日系コロニアの各種の催しにも利用されるところからよく知られている。

ところで、あの劇場の名のジョアン・カエターノとはどんな人物かと時おりきかれるので、それについて述べてみたい。

ジョアン・カエターノは半ば伝説的人物のように、いつどこで生まれたかが判明していない。しかしリオ州の出身であることは確かで、彼はリオを中心に広くブラジルの演劇界の先駆者である。

事実、当国のテアトロと演劇と言えば直ちに彼の名が連想されるほどだ。

ジョアン・カエターノは、ブラジル演劇の開拓にその生涯を終始したといっても過言でなく、まさしく内国演劇の明星である。従って、当国のテアトロと演劇を論じる限り、彼の名は除外できない。つまり、彼はブラジルの演劇史に特筆されるべき人物である。彼は俳優であると共に劇作家、演出家、興行師でもあった。

ブラジルの古今を通じて、ジョアン・カエターノほど内国演劇の振興に情熱をうちこんだものはなく、彼にはテアトロが生命であったのだ。

一つには、彼は時代的恩恵をうけたが、それはブラジルの文化的開花期と、リオの珈琲景気に乗じ得たからである。彼が血気盛りで縦横の活躍をしたのは十九世紀の中葉で、リオ州の耕主連は珈琲景気に得意になっていた時代であった。そうした珈琲万能の時勢に、ジョアン・カエターノが耕主の生活をうらやまず、専ら演劇に情熱を傾けたとは、風変わりの存在であったと言えよう。彼にとって幸いであったのは、珈琲景気のお陰でリオ州の各地に劇場が設けられたことで、彼は非凡の才能と努力によって演劇界の人気者となった。

さて、ブラジルの首都がバイアのサルバドールからリオに移された一七六三年から四年を経て、カルメリッタ派の僧侶ベンツーラによって、カーザ・ダ・オペラの設立されたのがリオのテアトロの始めだが、それに次いでサン・ジョン、サン・ジャヌアリオが造られ、更にアルカザール、プラシド、エルドラード、サンタ・アンナ、レクレーオ、ルシンダ、サン・ジョゼ、アポロ、フェニックス、ポリテアマ、フルミネンセ、トリアノン、カシノ、チボリ、パラーセ、リアルト、ムニシパル（市立劇場）が現われた。しかしそれらの大部分は現世紀初めに設けられたもので、十九世紀初期からその半ばまでに存在した劇

場では、サン・ジョアンとサン・ジャヌアリオが名高い。特にテアトロ・サン・ジャヌアリオが著名だが、これは元来ポルトガル人の劇団によって建設されたにもかかわらず、ジョアン・カエターノが関係してからはブラジル人の俳優を動員して、名実共に内国演劇時代を生んだ。この意味で彼は、内国演劇界の大きな功労者である。

ジョアン・カエターノの名が広く知られたのは一八二七年で、ニテロイから数レグア隔たる、サン・ジョアン・デ・イタボライー（現在のイタボライー）に設けられたテアトロ・ジョアン・カエターノに発している。

時あたかも、リオ州の珈琲産業の好調期で、サン・ジョアン・デ・イタボライーはその中心をなし、耕主連の勢力は当たるべからざるものがあった。その好機にジョアン・カエターノはイタボライーに劇場をつくったが、それは珈琲栽培地域がリオ州からパライバ盆地を経て、サンパウロ州のテーラ・ローシャ地帯に延びる以前のことだ。

ジョアン・カエターノは、風雲児ナポレオンがワーテルローで敗戦して、セント・ヘレナに流刑された当時に幼年期を過ごし、英雄崇拝の雰囲気の中に成長した。そのころのブラジルの上流社会は、フ

ランスの文化的影響を多分にうけ、文学や演劇はフランスものに集中されていた。従ってポルトガルの劇団がブラジルを訪れても、上演したものはきまってフランス人の劇作であったとは皮肉だ。美丈夫でだて者のジョアン・カエターノは、ご多分にもれずフランス好みの服装をして女性の注目をひき、上流人の話題となった。彼の父はポルトガル人で、植民末期にブラジルに移住したためか、貴族や軍閥の権勢にあこがれ、わが子のジョアン・カエターノには軍人になることを望んだ。

やがて南部のシスプラチナ戦争が起こると、ジョアン・カエターノは少尉の資格で従軍した。

しかし、戦争から帰った彼は、父の希望に反して軍人を断念し、直ちにバイアに行って人形芝居をやらかすという変人ぶりを示した。ところがこの人形芝居が大当たりで、彼は相当の所得をあげた。当時のジョアン・カエターノは二十二歳であったが、この人形芝居で興行師としての確信を得た彼は、シスプラチナ戦争の同僚十数名の協力を得て演劇界に乗り出す決意を固めた。これらのかつての戦友のほかに二、三名の少女の参加を得て劇団を結成し、同時に劇場の建設を企画したが、その候補地にリオ市ならぬ珈琲産業の町、サン・ジョアン・デ・イタボラ

イーを選んだ。
　このようにして成立したのが生粋のブラジル人の劇団、コンパニア・テアトラル・ジョアン・カエターノであったのだ。
　イタボライーは今でこそさびれた町の感じだが、ドン・ジョアン六世がここを訪れた時には、コンセリェーロ・ジョゼ・ベルナルド・バチスタ・ペレーラの邸宅に宿泊したことがある。また、珈琲産業が勃興してからは非常な活況を呈し、ファゼンデーロの生活は豪奢をきわめた。
　ジョアン・カエターノ劇場が造られた場所はボンフィン教会近くの坂道で、開場初夜のだし物は「カリピンテーロ・ダ・リボニア」であった。当日は多くの人々が物珍しさに、遠くから馬や馬車でイタボライーにつめかけるありさまで、これは今も土地の人たちの語り草となっている。
　イタボライーのテアトロ・ジョアン・カエターノが開場されたのは一八二七年四月二十四日で、当日の盛況さはブラジル全土に知れわたった。
　この劇場が有名になると、リオ州のカシアスやアングラ・ドス・レース、マンガラチーバ、パラチー、イリア・グランデにも劇場が設けられ、彼の劇団はひっぱりダコとなった。

しかしその後、カシアスとアングラ・ドス・レースが珈琲積出し港となるに及んで、イタボライーの珈琲景気は次第に衰微した。それは地力の減退による生産減のためでもあった。

イタボライーの珈琲産業が衰亡期に入るころには、慧眼のジョアン・カエターノは首都リオに出て、サン・ジャヌアリオ劇場の経営に当たることになった。

この劇場は、初めテアトロ・ダ・プライア・ド・ドン・マヌエル・ローボといわれて、旧モーロ・ド・カステロに設立されたが数年後には取りこわされ、一八三三年にポルトガル人の劇団によって再建されて、テアトロ・サン・ジャヌアリオと名づけられた。同劇場は特に当時の執政政府の許可によって建設され、皇帝ドン・ペードロ二世の姉、ジャヌアリア姫に敬意を表してその名が付けられたものだ。そのころのドン・ペードロは九歳の少年であった。

当時のテアトロ・サン・ジャヌアリオは、現在のテアトロ・ムニシパルに匹敵する最高劇場で、リオの富裕上層人の社交場でもあった。その入場料は大体一ミルレースが相場で、これは当今の五コントにも相当する金額であったのだ。

一八四一年にはテアトロ・サン・ジャヌアリオは

改築されて、その趣きを一変した。舞台上部の中央に、公正と平和の象徴にブラガンサ王家の紋章を配するなど、劇場よりは民事裁判所の観を呈した。また、名匠バッロス・オリンピオによって、コルネー、モリエール、マリボー、ラマルキスヴォルテールの肖像画がえがかれ、それに一コント五百ミルレースを要したが、これも当時の貨幣価債からすれば、巨額であったのはいうまでもない。

進んで一八五〇年のことだが、フランスの名高い劇作家ジャック・アラゴがリオを訪れ、その劇作をジョアン・カエターノによって演出紹介されることを懇望した。その結果ジャック・アラゴの代表作の「ア・ガルガリャーダ」が上演されることになった。

ジョアン・カエターノはフランス語の脚本の翻訳に万全を期し、台詞の一言一句に細心の注意を払った。またその舞台稽古のため徹夜することもたびたびであった。その甲斐あって、初演当夜は空前の成功を収めることができた。それはおそらくリオ、否、ブラジルの演劇史始まって以来のできごとであり、ジョアン・カエターノの全生涯に忘れ難いものであった。劇場を揺るがすような歓声と拍手に、ジョアン・カエターノはカマロッテ席に幾度か起立して

会釈した。
やがて観衆の熱望によって舞台に現われた劇作家ジャック・アラゴに黄金の月桂樹の葉が贈られジャック・アラゴはジョアン・カエターノに真心からの賛辞を与え、二人は相擁して感激の涙を流すという美しい情景が展開された。
この由緒あるテアトロ・サン・ジャヌアリオは一八六八年に取りこわされたが、その場所が現在のメルカード・ムニシパル（市立市場）となっている。
テアトロ・サン・ジャヌアリオの前身であるテアトロ・ダ・プライア・ド・ドン・マノエル・ローボは、リオの第三十四代総督ドン・マノエル・ローボの名を記念するべく付けられたものだ。ついでながらドン・マノエル・ローボは、ポルトガル王室の命によってサクラメント植民地を建設したが、一六七九年にスペイン軍との戦闘で戦死を遂げた。
かつての劇場と市立市場、武将と演劇家は何らの縁故もなく面白い対象だが、リオのメルカード・ムニシパルの付近を通ると、ジョアン・カエターノがふと思い出される。
ブラジル演劇の先駆者ジョアン・カニターノの銅像というほどのものはないが、彼の胸像がリオのチラデンテス広場に建てられている。

サンパウロのテアトロ・ジョアン・カエターノも、彼の名を記念するために付けられた名称で、今度新築される演劇場にはジョアン・カエターノの胸像を設ける計画があるとか。

リオの名所

チジュカの森

私のリオ訪問も前後を通じて七十数回になるが、その間一度もチジュカの森を見たことがなかった、といえば意外に思われるかも知れない。ところが、当のカリオカ「リオ人」でもチジュカの森を知らない人があるから上には上がある。これはサンパウロ人でも、イピランガの博物館を訪れたことのないのがあるのと同じことだ。

先日、私がチジュカの森に遊んだ理由の一つは、同行の妻の希望によるためであった。どうもいつもの一人旅では、散歩の気分などわいてこないからである。

それは日曜日であったが、ホテルを出た私どもは、気の向くままにイパネマ海岸から一足飛びにシ

ダーデを経て、チジュカの森へ行くことにした。
プラッサ・ダ・バンデーラからアルト・ダ・ボアビスタ行きの電車に乗ったが、ウジナを過ぎてから、山登りの坂道にかかる。
この道程はかなり長く、五クルゼイロの乗車賃では気の毒のようなものだ。
電車が登るにつれて別荘風の建物が見え始める。いずれも凝った建築である。特にアメリカ大使の別館などが目に付く。
リオの市街からこの辺に来て気がつくのは、植物の豊富なことだ。今にしてこれだけの樹林があるのだから、昔はどれほどであったかと思う。
アルト・ダ・ボアビスタは、前世紀のリオの上流富裕人の邸宅地であったのだ。
リオの歴史に描かれる様々の人々を思いつづけるうちに、電車はアルト・ダ・ボアビスタの頂点に着く。そこには公園がつくられていて、芝生と池の周囲にたくさんの子供が喜々と戯れている。
ここから道路がチジュカの森とガヴェア行きの二つに分かれる。
チジュカの天然林は州立公園になっているが、それが入口のコロニア型の門に記されている。また地理的に説明すれば、チジュカ山はオルゴンス山脈の

一部をなしている。

例年にない暑さで、汗を流しながら山道を登るのは容易でないが、アスファルト道路だから悪条件の道とは比較にならない。渓流の音を開き、樹間からもれる陽光を浴びるのはたとえようもなく心地よい。心身爽快なりとはこのことであろう。

歩を進めるうちに、やがて大きな水音が聞こえて、眼前にしぶきをあげる滝が現われた。これが名高いトウネーの滝である。

それは見るだに涼しく、今までの暑さを忘れて感嘆したが、同時にひどく空腹を覚えた。

滝の近くにレストランのあるのはよいとしても、高価な割合に料理がまずく、こればかりは不愉快だった。そのせいか多くの人は弁当持参で、飲物だけをレストランからとっているようだ。こんな場所にはレストランなどを設けずに、野趣のある腰かけでも置いて、人々を冥想の境地に導き入れる方法でも考えた方がよいのではなかろうか。

このトウネーの滝はチジュカ山の玄関に相当し、ここからゆるく曲がった道を通っていろいろな場所に通じる。特に知られるのがピコ・デ・チジュカ（標高一、〇二二メートル）、ピコ・デ・パパガイオ（標高九八〇メートル）、ラーゴ・デ・ソリドン（孤独の

沼)、レストラン・ドス・エスキーロス、マイリンク礼拝堂などである。この中でリスのレストランはかつてのトウネー男爵の邸宅で、いまだにその建築原型が部分的に保存されている。これはトウネー男爵の子息トウネー子爵の代となって更に改装されたといわれるが、外庭にトウネー子爵の胸像が見られる。その碑文には、「トウネーは軍人にして文学者であり、芸術をよく理解した。彼は自然美を愛してチジュカの森に住み、この土地のためにつくした」とある。

チジュカの森の真価は、天然林が大切に保存されていることだ。騒々しさと人工美に疲れている都会人には、これほど精神の休まる場所はないであろう。しかもリオの中心から数十分で到着し、快晴の日にはリオ市街とグワナバラ湾を一望のうちにながめることができる。

一八八〇年に、リオを訪れたフランス人の文学者グスターヴ・アルマンは、チジュカの山頂から見おろして「これほどの美景をかつて見たことがない」と感嘆したと言われる。

チジュカの森は自動車を走らせるよりは遊歩によく、あのまわりまわった道をひと通り歩いても一日はかからず、半日を楽しむに十分である。樹下にた

たずんで恋人や妻と語るもよく、または草原に読書のひと時をもつのもよいであろう。

ここでチジュカの森の由来を語ると、十八世紀まではあの一帯は欝蒼たる天然林であった。

その後、ドン・ジョアン六世によるポルトガル王室のブラジル遷居以来、リオの人口が急激にふえ、それに伴って上流人が高台のアルト・ダ・ボア・ビスタに荘園風の住宅を構えるようになった。もっともドン・ジョアンと共にポルトガルからリオに移住した貴族や高官、軍人、その家族だけで一万五千人あったというから、その状況は十分想像されるであろう。その後更にリオの人口は増加し、給水や貯水池の構築のためにアルト・ダ・ボア・ビスタの樹林は相当切り払われたが、一八五七年のころ、それらの工事を担当したのが帝政第二期の大臣ボン・レチロ男爵であった。

一八六一年になると、アルト・ダ・ボア・ビスタとチジュカ森林の保護案が議会に提出され、マヌエル・ゴーメス・アルシエールがその任に選ばれ、以後十六年にわたって森林伐採地への再植林が行なわれて、今日見るような立派な樹林が形成されたのである。

この仕事を継承してチジュカの森の保護に努めた

のが、トウネー男爵である。
トウネー家は、一八一六年にフランスの美術使節としてリオを訪れたトウネー兄弟に始まる。彼らは一八一七年にチジュカの森の最初の住人として、ここに山荘風の住家を建築したのだった。
兄はカルロス・アウグストで、弟はフェリス・エミリオである。弟のフェリスは画家として著名で、後のトウネー子爵（アルフレド・アドリアノ・エスタノレ・トウネー）の父である。
トウネー子爵（一八四三―一八九九）はドン・ペードロ二世と親交があり、その当時のすぐれた文化人であった。それなればこそ、彼は父男爵の志を継いでチジュカの森の公園建設に尽くしたのである。
彼はパラグワイ戦争に従軍して名著『ラグーナの退却』と、小説『イノセンシア』を書いた。
そのトウネー子爵は、祖父の時代からの住居であるチジュカの森をこよなく愛した。史実に照らして、チジュカの森全体がトウネー家の自然庭園であったと言っても過言ではない。
こんなことを考えながら私どもは山を降り、帰路はウジナからバスでフラメンゴ海岸のホテルに向かった。

移民記念塔の陰に

南リオ・グランデの移民史

ブラジルは移民立国でありながら、どこの都市にも移民の記念塔らしいものは見られなかった。特に外国移民には縁故の深いサンパウロに、それらしいものがないのはいかにも寂しい。

この点、南リオ・グランデのサン・レオポルドとカシアス・ド・スールに建立された移民記念塔は、すぐれた芸術作品であるばかりでなく、あれによってどれほど移民の誇りと開拓精神を高揚させられるか知れない。

サン・レオポルドの移民塔は、一八二四年に始まる同地のドイツ移民を記念し、カシアス・ド・スールは一八七五年に入植したイタリア移民に敬意を表し、移民の象徴としてつくられたものだ。

その碑文のＡ　ＮＡＣＡＯ　ＢＲＡＳＩＬＥＩＲＡ　ＡＯ　ＩＭＩＧＲＡＮＴＥは、人々に壮厳な感を与え、先駆移民に対する尊敬と感謝の念を起こさせる。またこの二つの記念塔は、旧移民には過去の苦闘をしのばせ、新移民には希望と自覚をうながす。

夕焼けの空にくっきり立つあの記念塔には、それ

ぞれの歴史が秘められているが、その前にたたずんで南部ブラジルの開発に思いをはせると、過ぎし日の幾多のできごとが浮かんでくる。

植民初期のブラジルの開拓は、ジェズイット教団の土民教化に負うところが大きいが、特にパラナ、サンタ・カタリナ、南リオ・グランデの三州の開発史には、同教団の活躍が特筆されねばならない。それに加えてブラジルの領土的発展に、バンディランテの探険が多大の影響を及ぼしていることは確かだ。

ところで、南部ブラジルの土民教化に献身したのは、おもにスペイン系ジェズイットであって、その布教地域は現在のパラグワイとウルグワイから、南リオ・グランデの西部を経てパラナのグワイラ地帯にわたる広大なものであった。このスペイン系ジェズイットの布教本拠であったパラグワイとアルゼンチン、ブラジルの境界がミッソンエスと呼ばれ、後日に名外相リオ・ブランコの政治的成功により、正式にブラジル領となった所だ。しかし、過去には、このミッソンエスでポルトガル軍（ブラジル植民軍）と土着人との間に、幾度となく流血の惨事が繰り返されている。

他方、ポルトガル王室が非常な犠牲をあえてして

ブエノス・アイレスの対岸にサクラメント植民地を建設したのは、帰するところスペインの侵略に対する南部ブラジルの防衛のためであり、これがまた幾度かスペイン軍に占領され、その奪回戦がつづけられたことは歴史に見る通りだ。おそらく十字軍の遠征を除いては、南米のサクラメント植民地ほど長年にわたり、数十回にも及んでポルトガルとスペイン軍が戦ったところはないであろう。その戦争のあおりをくつたのがジェズイットに指導されるサンタ・テクラやサン・ミゲルの土民である。土人軍のリーダーであるセペーが、その統率部隊と共にポルトガル軍に殺害される凄絶な物語りを人々は知るであろうか。当時のありさまがバジリオ・ダ・ガーマの詩史「オ・ウルグワイ」に叙されている。

史実の示すところでは、パラナのグワイラにジェズイット・ミッションが設けられたのは一六〇九年で、ついでパラナパネマ流域の最南部サント・アントニオとサン・ミゲル、チバジーが開拓された。グワイラのジェズイット・ミッションが十数年で消滅したのは、一六二八年にバンデーランテの雄傑アントニオ・ラポーゾ・タバレスによって攻撃されたからである。その当時、数千の土人はジェズイットと共にパラナ河の南方地帯にのがれて別の部落を設け

た。

バンデーランテの望むところは土人を捕えて奴隷とすることであり、それにはジェズイットの教化村を襲撃するのが、危険率は多かったが最も早道であった。あのころはバンデーランテが一挙に数千もの土人を捕獲した記録がある。

一六二七年以後には、ジェズイットがウルグワイの東部（現在のブラジル領）に新しいミッションを建設したが、これも一六三七年にラポーゾ・タバレスのために壊滅された。

開拓前線基地　サクラメント

それから四十五年を経た一六八二年、ウルグワイの東端にジェズイットが大規模の教化村をつくり、セーテ・ポーボ・ダス・ミッソンエスと名づけた。これは現在の南リオ・グランデの北西部に当たり、その地域内にサン・ニコラウ・サン・ルイス、サン・ロウレンソ、サント・アンジェロ、サン・ジョアン、サン・ミゲル、サン・ボルジャなどが存在する。この肥沃にして富める牧牛地帯を手に入れるために、ポルトガル政府はリオの総督に命じて軍隊を派遣し、同時にスペインの勢力に対抗すべくサクラメン

ト植民地を創設したものだ。
スペインがそれを黙視するはずがなく、その後コロニア・サクラメントをめぐって、ポルトガルとスペイン軍との間に争闘がつづけられたことは先に述べた。ひと口にいえば、サクラメント植民地の前衛地として南リオ・グランデが開拓されたのである。
サクラメント植民地の建設と南リオ・グランデの開発に関しては、リオの名総督といわれたドン・マノエル・ローボをはじめ、ゴーメス・フレーレ・デ・アンドラーデ、並びにバンデーランテのドミンゴス・ブリト・ペーショトの名が特に記されねばならない。いずれにしてもサクラメント植民地の争奪のために血なまぐさい歴史がつづられ、それが南リオ・グランデの開発を促したことはいなめない。
この問題のサクラメント植民地は現在のウルグワイの一部で、後にウルグワイが独立したことによってスペインとポルトガルの払った多大の犠牲は帳消しにされ、過去の逸話となった。
このようにポルトガル政府とブラジル植民政府は、サクラメント植民地に非常に高い代価を払ったが、そのかわり南リオ・グランデとサンタ・カタリナ、パラナを包含する南部の領土線を保持することができたともみれるのである。

ここで話を十八世紀中葉に転ずるが、一七四六年に、ブラジルの名外交官アレシャンデス・グスモンがポルトガル政府と折衝の結果、ソアーレス島民が南部ブラジルに導入されることになった。

これが公認の移民がブラジルに入れられた初めであり、一七四八年に、第一回のソアーレス移民が南リオ・グランデのビアモン、ポルト・アレグレ（ポルト・ドス・カザエス）、ラゴア・ドス・パトスの沿岸地帯ならびにサンタ・カタリナ島に到着した。

アソリアーノ移民の入植

アソリアーノ移民は、島民の特徴として粘り強い性質と、すぐれた拓人と農夫の素質をもっていた。これが南リオ・グランデの産業開発に大きな貢献をしている。彼らによって小麦の栽培が始められ牧畜が盛んになった。

アソリアーノ移民は、ポルトガル政府から経済的援助をうけたほかに耕作地の無償分譲（セスマリア）の恩典があり、種子、農耕機が支給された。しかし彼らには外侵に備えて軍事教練をうけ、一朝コトあれば銃剣をもって戦う義務が付されていた。

ところで、せっかくのアソリアーノ移民の努力に

よる農産物も、その搬出の困難と市場不足のたか、期待するほどの業績があがらなかった。一説にはアソリアーノによる移民政策は失敗であったともいわれるが、彼らアソリアーノこそ、南部のルーゾ・ブラジレーロ文化の根源をなすものだ。

事実、現在の南リオ・グランデの人口は、アソリアーノ系ブラジル人で高率が占められている。

帝政となっては、一八二四年に南リオ・グランデのサン・レオポルドと、一八二九年にサンタ・カタリナのサン・ペードロ・デ・アルカンタラにドイツ移民が入れられた。ことにサン・レオポルドは創設以来かつて沈滞期を経験せず、ひたすら進歩をつづけてきたところで、全ブラジルの模範集団地である。

移民政策の障害ファラポス革命

南リオ・グランデの移民政策に一つの障害となったのは、一八三五年から一八四五年の十年間に及んだファラポス革命であったが、ようやく革命が終わった一八四九年に、ジャクイー河の航行可能地域を利用してサンタ・クルースの移民村が建設された。また一八五五年には、サンタ・クルースの北東

にサント・アンジェロが設けられた。この二つの移民村は、ドイツ直来の移民と、サン・レオポルド出身のドイツ系ブラジル人によってつくられたものだ。

一八五七年以降は、ドイツ移民ははなはだしく不振状態となったが、それはプロシャ本国で、ブラジルのドイツ移民の取扱いが人道に反するとの逆宣伝がされたからであり、また一八七〇年の晋仏戦争のフランスの敗戦によって、ゲルマン民族の国粋思想と軍国精神がブラジルの為政家の問で問題視され、ドイツ移民の誘入に以前ほどの好意が示されなくなったためである。

このようにドイツ移民の入伯が途絶した時に、北部イタリアで盛んにブラジル移民の宣伝が起こり、一八七〇年から一八七二年にかけて、多数のイタリア移民が南リオ・グランデに入れられた。

かくして建設されたのがカシアス、ベント・ゴンサルベス、ガリバルジであり、この三集団地の葡萄酒工業はブラジルの主要産業の一つとなっている。

カシアス、ベント・ゴンサルベス、ガリバルジでイタリア移民村の建設に成功した帝政政府は、更に北部高原地のタクワリー、アルフレド・シャーベス（現在のヴェラノポリス）にもイタリア移民村をつ

くり、一八八六年にはアントニオ・プラードに集団村を設けた。

こうした見地から、南リオ・グランデの北東部高原地帯は、おもにイタリア移民とその子孫によって人口が構成されているという社会的な特色があるといえる。

共和制となっては、南リオ・グランデの北西部への鉄道敷設と相まって、あの地帯への植民地建設が企てられた。この北西部の鉄道は一八九五年に完成したが、州政府の企画の下に、ドイツ人とイタリア人を主とし、それにポーランド人、ロシヤ人を加えたコロニア・ミスタともいうべき混成植民地がつくられた。それらには、一八九一年創設のコロニア・イジュイー、一八九一年のグワラニー（現在のグワラモ）、一八九七年のイピルバ、一九〇二年にドトール・ヘルマン・メーエルの創設したパナンビとセーロ・ラルゴがある。

一九〇〇年から一九二〇年までは、州政府は専らコロニア・ミスタを企画し、ウルグワイ平原の森林地帯の植民地建設を推進した。

一九二九年から一九一七年に西部の平原地に設けられた移民村には、サンタ・ローザとグワリタがある。

現在の南リオ・グランデには移民集団村の候補地は殆んどなく、むしろサンタ・カタリーナの西部と、パラナの北西部に向かって移動しつつあるようだ。

以上の大ざっぱな記述では南リオ・グランデの開発と移民史を伝え得たとは思われない。しかし、二つの移民記念塔の陰に、およそこのような物語りのあることが知られるであろう。

写真奇談

―帝王の肖像をめぐって―

ブラジル語にフォトジェニコというのがある。これは写真うつりのよい人を意味する。たしかに素顔より写真顔のよい人があるし、その反対に写真うつりのよくない人がある。だから、写真だけでその人の器量や人柄を批評することはできない。ましてや生涯の配偶者を選ぶにおいてである。

写真うつりのよいことは、映画俳優などの資格を決する一要素であろうが、たいして素顔のよくない人で、スクリーンには素晴らしくよく映るのがあるから奇妙だ。これは写真の神秘であろう。

近来は著しい写真技術の進歩で、たいていの人は

美人や美男子になれるからありがたい話だ。女性の場合は化粧法が進んでいる上に写真の神秘で、ホンモノとは似ても似つかないものができることがあるから油断はならない。

写真館でとる写真には、多少にかかわらず必ず修正がほどこされるが、じょうずな写真師はその人の個性美を生かしながら修正する。昔のへたな写真師は、人の顔面に一律に鉋（カンナ）でもかけたような修正をやったのは興ざめだ。祖父母、父母、むすこや娘の顔が皆同じに仕上がったのでは滑稽といわざるを得ない。

今から三十年も昔はそんな写真で縁談をまとめたものだ。しかもそうして結ばれた夫婦が円満な家庭を築いて現在の繁栄をみているのであるから、写其のとり持つ結婚もまんざらではない。しかし、今はさほど簡単にはいかないであろう。

私などは写真うつりがすこぶる悪く、いつも怒ったような顔になるのは閉口である。そのために集会の席で写真をとられるのは寿命をちぢめる思いがする。時にはつとめて笑顔をつくってカメラに向かうが、でき上がった写真はきまって怒った顔をしているのは不可解なほどだ。しかし、これが私の顔の特徴であれば仕方がない。無理に笑ってニヤけた顔に

なってはそれこそ災難だ。
戦前に私が訪日の途上、ロス・アンゼルスで上陸して映画の都ホリウードを訪れたことがある。
その時、R・K・Oの撮影所で名女優アイリーン・ダンと記念写真をとったが、さすがにアイリーン・ダンは花が咲いたかのようにほほ笑みを浮かべているのに、私は怒った顔をしているではないか。どうやら私には写真はあきらめもののようだ。

私の書斎には、ドン・ペードロ二世の晩年の肖像写真が掲げてある。訪問客のなかには、それをひと目見て「ドン・ペードロ二世ですね」と言う人と「これはだれですか」とたずねる人がある。
または「素的なヒゲのおじいさんですこと」と、いともあっさり感嘆する人もある。
そうかと思えば、いかにも博識らしく「この写兵はバートランド・ラッセル（英国の哲学者）かね、それともフロイドかな」と言つ人があるのには恐れ入る。更に奇抜なのは「これはあなたの親戚の方ですか」と聞かれるに至っては、オドロキを越えてアキれるばかりである。また、ある二、三のインテリ青年は次のような会話をした。
「この写真はだれだか知っているかい。」

「知っているとも、ジョゼ・デ・アレンカールさ。」
「バカだなあ、これは作曲家のブラームスだよ。」
「ボクはドン・ペードロだと思うがね。」
それからコロニアの知識層で、ドン・ペードロ一世と二世を混同している人が意外に多いのも事実かこんな人たちに限って、地元のブラジルよりはアメリカやヨーロッパのことに通じている。
先日のこと、拙宅にみえられた某氏はコロニアで屈指のファゼンデーロだが、ドン・ペードロについてはあまり知らなかったらしく、
「この写真の人物はどこかで見かけたようだが、さてだれでしょう」と。
「それは百クルゼーロ札で見たのではありませんか。」
と問い返せば、大きくうなずきながら、
「そうです、たしかにそれに違いありません。」
某氏は語をついで言われるに、
「こりゃブラジルに四十年もいてドン・ペードロを知らないようでは恥です。一つこれからおそまきながらブラジルの歴史でも勉強しますかね。」
彼氏はひどく発奮して帰られたが、その後果たしてブラジル史を学んでいるかどうか。
もっとも彼氏には、毎日のコーヒー市況や為替状

況を知ることの方がもっと切実なのだ。ドン・ペードロ二世肖像写真を見て気炎をあげたのは一時的現象に過ぎなく、事務所にあってはあくなき事業欲と闘志に燃えるのである。必ずしも金もうけが究極の目的ではなく、事業拡張のプランをたて、仕事に精魂を打ちこむ時に彼氏は其の生き甲斐を感じているのだ。もしこの人が永住の地、子孫繁栄の地ブラジルを学び、且つそれをよく理解するならば、社会人として一層みがかれ大事業家の風格を備えるのではなかろうか。

昨今のようなクルゼーロ貨の下落では、百クルゼーロや二百クルゼーロは往時の一ミルか二ミルと同じであり、殆んど一千クルゼーロ札より手にしない人には、ドン・ペードロ父子の印刷されている二百クルゼーロと百クルゼーロ札は縁遠いものになる。こうなれば、富裕階級ほどドン・ペードロの風姿を忘れることにもなりうる。わけてもチラデンテスの肖像のついている五千クルゼーロ札が現われるならば、ブラジル発見のカブラルの面影もうすいものになるかも知れない。

今一つ街頭で拾った話だが、コロニアの一世らしい人数名が、二百クルゼーロ札と百クルゼーロ札について議論するに、父であるドン・ペードロ一世が、

子のドン・ペードロ二世よりも若いのはどうしたことか、と言うのである。なるほど二百クルゼーロ札のドンペードロ一世は二十台の肖像画であり、百クルゼーロ札のドンペードロ二世は美しいヒゲをたくわえた五十台のものだから、こんな疑問の起こるのは一応うなずけるが、それにしてもバカらしい限りである。

ドン・ペードロ一世の時代にはまだ写真がなかったので、彼の肖像は全部描かれたものだ。リオのサン・クリストヴァン宮とペトロポリスの離宮（現在のムゼウ・インペリアル）には、直径四センチほどのメダルにドン・ペードロ一世の肖像を丹念に描いたものがある。これがドン・ペードロ二世の治世には写真に代わった。

『週刊日系誌』に連載された古野菊生氏の『サンパウロ女一代』に、ドン・ペードロ一世の人物がよく描写されているので、彼の生いたちや性格について述べるのは省くが、彼が、ドン・ペードロ二世の父であることは言うまでもない。またドン・ペードロ二世の母レオポルジナはオーストリア王家の息女であったので、彼は父ポルトガル人と母オーストリア人の間に生まれ、しかも父方ではスペイン人の血をひいている。ドン・ペードロ二世が長身であったの

は父に似、金髪碧眼は母に似たものである。

ところで、ドン・ペードロ二世は写真うつりがよかったらしく、どの写真もよくとれている。彼はいうところのフォトジェニコであったのだ。写真に見る彼は、一国の帝王というよりは学者タイプ、特に詩人または哲人の感じがする。私はドン・ペードロ二世の写真を十数葉集めているが、そのいずれにも高い気品がうかがわれる。そこには単に写真うつりがよいとだけでは言い尽くせないものがあるようだ。ただ一つ、彼が病気静養中にサン・クリストヴァン宮の玄関で、家族と共に並んでとった写真があるが、その時の表情はいかにも寂しい。それは、来たるべき帝政の終局を覚悟していたかのようである。

私の書斎のドン・ペードロ二世の肖像写真には、人々にいろいろの話題を与えるがある人は私の話を聞きながら「ドン・ペードロ二世の生涯を知ることは、ブラジル史の大半を学ぶようなものですね」と感慨深げに語られた。それ以来その人は熱心にブラジル史を研究しているとか。

いま私は書斎のドン・ペードロ二世のポートレートを見ながら、ふとこの一文をつづる気がわいたが、これが発表されてどんな反響を呼ぶことであろうか。

サンタ・クルース城塞にいまも散乱する白骨

サンタ・カタリナ州のサンタ・カタリナ島と大陸との間、フロリアノポリスの港への入口の北方に一つの小さな島がある。この島には、ブラジルの史書にも記されない城塞が、全く朽ち果てたまま放置されている。それが十八世紀（一七三九年）に、ノッサ・セニョーラ・ド・デステロ（フロリアノポリスの旧称）の防衛のために設けられたサンタ・クルース城塞であり、島の名はイリア・デ・アニャトミリンである。

このサンタ・クルース城塞は、建設から前世紀末までは城塞というよりむしろ獄舎であった。ところがその後、第二次世界大戦が起こると同時に、この城塞はブラジルの南部海岸線守備の海軍陸戦隊の根拠地となった。しかし終戦とともに、またしても以前の廃虚にかえったのである。

現在はこの島に一つの燈台があって、一、二家族の住民がいるに過ぎない。フロリアノポリスから約二十マイル隔っていて、特に便船とてもなく、小型のモータ船で二時間余もかかる。従ってよほどの物好きでない限り、わざわざこの島を訪れる人はない。

さて、特別雇いの速度のおそいモーター船でアニャトミリン島に着いたのはよいが、さん橋とは名ばかりで、木が朽ちているのでうっかりすると海中に落ちこむ。こんなところで海水浴でもあるまいと、苦笑しながらかろうじて上陸し、現世のものとも思われない世間から忘れられたサンタ・クルース城塞に歩を運んだ。城塞の原型としては、堂々たる城門と階段、城壁の一部分と哨舎があり、かつての流血の舞台となった火薬庫と地下牢が、半ば土に埋もれている。見るからに陰惨そのものの感じである。

ここでウン・ポーコ・デ・ヒストリア（少しばかり歴史）を語ろう。

一七三七年、有名なゴーメス・フレーレ・デ・アンドラーダが、リオのゴヴェルナドール就任に当たってポルトガルの王ドン・ジョアン五世にあて、書面をもってブラジル南部海岸線の防衛強化の必要性を強調した。このゴーメス・フレーレの提案が入れられ、特にサンタ・カタリナから、コロニア・デ・サクラメント（現在のウルグワイ東部）の守備を目的とする城塞が数カ所に設けられることになった。その城塞の建設地に選ばれたのが、デステロを中心とするサンタ・カタリナ島の周辺である。そこで現地

調査と築城の重大使命を帯びて、ポルトガルからやって来たのがブリガデーロ・ジョゼ・ダ・シルバ・パエスであった。彼はポルトガル陸軍の旅団長で、築城の専門家でもあった。当時、彼に対するポルトガル政府の辞令の一節に、できる限り築城費は安価にあげるように、との注意書きのあるのが面白い。

ジョゼ・ダ・シルバ・パエスは、既に一七二六年に、リオのグワナバラ湾のイリア・ダス・コブラス（蛇島）の要塞改築の経験を有し、一七三九年は、彼の再度のブラジル訪問であった。彼は同年三月にサンタ・カタリナの軍令部長の任につき、同時にデステロ村の守備兵団を組織した。その一部が後日に完成したサンタ・クルース城塞の守備兵となった。

このサンタ・カタリナの守備兵団は、緑色連隊のあだ名で知られたが、それは軍服の胸部が緑色で彩られていたからである。

アニャトミリン島のサンタ・クルース城塞の築城工事が始められたのは一七三九年で、一七四四年に完成した。次いでサンタ・カタリナ島のサン・ジョゼ・ダ・ポンタ・グロッサ要塞と、ラトン・グランデ島のサント・アントニオ要塞が建設された。最後にアラサツーバ島のノッサ・セニョーラ・ダ・コンセイソン要塞が設けられ、これでサンタ・カタリナ

の軍事防衛計画が完成した。

ところが、かくまでして築かれた城塞が、その本来の目的に添わずして、おもに獄舎として使用されたとは皮肉である。それはいわゆる刑事犯ならざる軍人や学者、政治家がこの城塞に監禁されて長い歳月を送ったからである。その代表人物にポルトガルの法学者であり、名判事といわれたジョゼ・マスカレーニャス・ペレーラ・デ・メーロがある。

彼は、ポンバル旋風によるジェズイット教団追放の犠牲として、十四年間をサンタ・クルース城塞に過ごした。

一七五七年に、ジェズイット教団がブラジルから追放されるに先だって、同教団所属の資産が押収されたが、その管理に派遣されたのがジョゼ・マスカレーニャスである。しかし、彼はバイアの大司教ジョゼ・ボテーリョ・デ・マットスとともにジェズイットを援護したかどで告発され、ポンバル侯の怒りを買ってサンタ・クルース城塞に投獄された。それは、一七六〇年のことである。

ジョゼ・マスカレーニャスは、高い教養を備えた人格円満の博学者であったので、多くの人々から敬慕された。彼は数年の獄舎生活を送ったが、後に城塞勤務の兵士と、その子弟を教え導いたのは、彼の

人柄と学識のしからしめるものであった。
彼はサンタ・クルース城塞で十四年を経てから、リオの蛇島に移されて更に三年を過ごし、ポルトガルのドン・ジョゼ一世の死と、一七七七年のポンバル侯の死によって、ようやく赦免された。

サンタ・クルース城塞は、サンタ・カタリナの住民にとっては悲惨な思い出の数々があるが、中でも特に血なまぐさい記憶になっているのは、一八九四年の革命軍人の虐殺である。その事件の経路を述べると、一八九三年に、第二代大統領フロリアノ・ペーショット将軍と、その政府に対する国民のごうごうたる非難の声が起こり、政治社会情勢は最悪をきわめた。ついにはクストジオ・テ・メーロ海軍大将を主班とする海軍の革命にまで発展したのが、一八九四年四月二十日である。
その海軍革命軍には、幾多の著名の武将や名門出身の兵士が参加していた。
しかしながら革命軍に利あらずして、最も頑強に戦ったサンタ・カタリナの革命軍は、二隻の軍艦と共に、フロリアノ政府軍に降伏した。それらの兵士は各々獄舎に監禁されたが、その一部隊の送られたのが、このサンタ・クルース城塞であった。

当時、サンタ・カタリナの軍令部長に任ぜられたのは、鬼大佐のあだ名で聞こえるアントニオ・モレーラ・セーザル大佐であった。このモレーラ・セーザル大佐の行為は、武勇の域を越えて残虐性を帯び、時にはてんかん病みかと思われるほどのものであった。

サンタ・クルース城塞に送られたのは、百八十五名の兵士であったが、彼らこそ最も不運であったと一言える。これらの兵士は地下の獄舎に閉じ込められ、生き地獄さながらの日々を送り、太陽の光を見ずして暗い地下道で銃殺の刑に処されたのである。この百八十五名の中には、ガーマ・デ・エサ大将（バトビ男爵）をはじめ、カルデーラ・デ・アンドラーデ大将、エスラエル・デ・サー大佐などがいた。虐殺を終えたモレーラ・セーザル大佐は天を仰いで気味悪い笑声を発したが、彼の形相は狂人そのものであった。

その後モレーラ・セーザル大佐は、バイアのカヌードスの叛乱討伐戦に無残な最期を遂げたが、それはサンタ・クルース城塞での罪の償いであったかも知れない。彼のカヌードスにおいての戦死の様子が、エウクリーデス・ダ・クーニャの筆によって『オス・セルトンエス』に描かれている。

かくして歳月は流れ、サンタ・クルース城塞は、何らの手入れもされぬまま廃虚と化し、地下道に散乱する白骨が、ありし日の悲惨なできごとを物語っている。

ブラジルの乃木将軍
マヌエル・オゾリオ元帥

今年も五月二十四日が間近かとなった。

サンパウロの市立劇場から、レプブリカ広場に通ずるところにルア・ビンチクワトロ・デ・マイオがある。これを日本流にいえば五月二十四日街である。それは、パラグワイ戦史に特筆されるべきツユチー戦勝を記念するためにつけられた名である。

パラグワイ戦争は、一八六四年から一八六九年まで五年もつづいたが、ブラジルは隣邦ウルグワイ、アルゼンチンと同盟を結んで、パラグワイの独裁者ソラノ・ロペスの精鋭を誇る陸海軍に対抗した。しかもブラジルは、皇帝ドン・ペードロ二世を始め各武将に至るまで、あくまで平和推持のために戦い、敗戦の敵軍に対しても紳士的な取扱いをもって終始した。この態度には少なからず学ぶべきものがあ

る。

パラグワイ戦争のおもな戦闘を年代順にあげると、パイサンヅー、リアシュエーロ、ツユチー、ウルグワイアナ、クルパイチー、ウマイター、イトロロ、アバイー、クルズーなどがある。この中でツユチーの陸軍戦が最も大規模なもので、これに動員されたパラグワイ軍の兵力は二万四千、連合軍はブラジル軍二万一千、アルゼンチン軍二万一千四百である。

パラグワイ軍は数においては連合軍に劣るが、その全部がよく訓練された正規兵であり、また一千二百からなる優秀な騎兵隊を持つことが、ソラノ・ロペスの大きな強味であった。

まず戦場となったツユチーの説明をすると、パラグワイ領のパラグワイ河とパラナ河の合流点であるエステロ・ベラコ北部の湿潤地帯にあるのがウマイター、クルパイチー、クルズー、ツユチーで、ツユチーはエステロ・ベラコの最南部に位置して、トレス・ボッカスに近く、沼沢と湿地が多いため、悪性の熱病やマラリアが発生して野営中の連合軍は言語に絶する難渋をつづけた。

ツユチーの戦闘は一八六六年五月二十四日に展開されたが、それ以前に各地で戦って来たブラジル軍

を主とする連合軍は、その風土、地理的事情の不明のため非常な苦戦をしたと想像される。ことにエステロ・ベラコ一帯は、湖沼の点在する不毛の低地であるため、野生の牧草すらもなく、ミーリョ、アルファファなどの軍馬の飼料が欠乏して困窮したことが、当時の記録にみられる。

あまつさえ、多くの兵士は肝臓を侵かされ、腕のはれる風土病にかかったが、四千人で構成される一兵団に、僅か四人平均の軍医しかいない状態であった。このように軍馬はやせ、兵士病むの窮状にあった五月二日、エステロ・ベラコの戦闘となり、危く連合軍が全滅しようとした時に、ブラジル側のオゾリオ将軍の援軍によって敵軍を撃退したことは、パラグワイ戦の名高い逸話となっている。

パラグワイ軍を撃退した連合軍は、そのあとツユチーに向かって徐々に進軍した。そのツユチー攻撃戦のブラジル軍は六個師団と二つの義勇兵団から編成され、総司令官はマヌエル・オゾリオ将軍であった。参考までにブラジル軍の各師団司令官をあげると次のようである。

第一師団長　アルゴロ中将
第二師団長　ルイス・メンナ・パレット大将

第三師団長　サンパイオ中将
第四師団長　ギレルメ・デ・ソーザ大将
第五師団長　トリストン・ピント少将
第六師団長　ビトリノ・モンテーロ中将

他方、四個師団一万一千四百人から成るアルゼンチン軍は、バルトロメウ・ミトレ大将を総司令官とし、パウネロ、オルノス、フロレスの三将軍を各々師団長とするものであった。

ッユチーにおけるソラノ・ロペスの作戦は、連合軍の集中を待って包囲撃滅するにあったが、連合軍が五月二十五日を期して、総政戦を開始することを知った彼は作戦を変えた。それは二万四千の兵力を三つに分散して、連合軍の攻撃に先んじてそれぞれ猛攻戦を敢行することであった。

パラグワイ軍の司令官は、名将をもって鳴るレスキン及びバリオス大将であった。戦場の地理に精通する敵軍が、戦略的に優勢にあったのは当然であり、反対に虚をつかれた連合軍の先ぽう部隊は、多大の犠牲を払わされた。その急報に接したオゾリオ将軍は黙想すること数分、各部隊長に応戦命令が伝達された。オゾリオはいかなる場合にも、沈着をもってことを処する戦略家であった。

ツユチーの戦況を詳しく述べることは不可能だが、これほどの激戦はなく、しかもオゾリオ将軍の作戦は奏功して、連合軍の士気いよいよ揚がり、弾丸の雨下する中に敵軍はじりじり後退を始めた。オゾリオは敵軍の攻撃を待ち伏せて一挙に砲火を浴びせ、歩兵部隊をもって包囲撃滅する戦法に長じていた。

その前年、六月十一日のリアシュエーロの海軍戦で、艦隊の大部分を失ったソラノ・ロペスの唯一の望みは、陸軍戦で連合軍を撃砕することであった。かくして自信満々としてツユチー戦に臨んだソラノ・ロペスが、期待に反して大敗したことは彼にとって償うべからざる痛手であった。

もしツユチーの戦闘に、連合軍がすぐれた騎兵隊をもってパラグワイ軍を追撃したならば、あるいはパラグワイ戦は、それで終局しただろうとも言われている。

しかし、地理に精通せず、また疲労の極にあった連合軍の実状を知るオゾリオ将軍は、あえて退却する敵軍を追撃しなかった。そこに、彼の慎重な戦略と武人的精神があつたと言える。

ツユチー戦による連合軍の犠牲は少なからぬものであったが、パラグワイ軍の損傷はそれに数倍する

ほどであった。そのパラグワイ軍の死傷があまりに甚大であった事実を知ったオゾリオ将軍は沈痛な面もちで「実に遺憾だ」と嘆息した。それを見ても彼が戦勝将軍を誇らず、むしろ戦争の惨禍を悲しんだことがうなずける。日露の役、旅順攻略戦の乃木将軍の心境に相通じるものがあると言えよう。これはカシアス元帥にしてしかり、タマンダレ提督もまた同様であった。

一八六六年五月二十四日、激戦のあととも思われない静けさのうちに、ツユチーの低地に太陽が没せんとする時、偶然の一致というか、オゾリオ将軍をエルバル男爵とする叙爵の報がリオからもたらされた。当のオゾリオ将軍は軽くうなずいたのみで、はるかに戦場の跡を望みつつ瞑目した。

オゾリオ将軍の銅像では、ポルト・アレグレ市にあるものがその碑文と相まって、真に印象的である。

また、サンパウロのソロカバナ駅前の彼の銅像にも、その風格がしのばれる。

以上の記述はブラジル陸軍省出版部発行のＣＯＬＯＮＥＬ　ＭＡＵＲＩＣＩＯ　ＣＵＮＨＡ著“ＧＵＥＲＲＡ　ＤＡ　ＴＲＩＰＬＩＣＥ　ＡＬＩＡＺＣＡ　ＣＯＮＴＲＡ　Ｏ　ＧＯＶＥＲＮＯ　ＤＯ　Ｐ

ＡＲＡＧＵＡ１”を参考にしたことを付記する。

サン・クリストヴァン宮夜話

畏友古野菊生氏が、定評ある優麗しゃ脱な文章で、『サンパウロ女一代』を週刊日系誌に連続寄稿し、読者の圧倒的人気をさらっているのに少しでもあやかるつもりで、私も、女性について執筆する野心を抱いた。もとより女性を叙することに不得手の私に大それたモノは書けそうもないが、いろいろ物色した結果、ある女性をあげてみた。この選ばれた女性こそとんだ災難かも知れない。

幼きドン・ペードロ二世の保母

まず、まともに見たブラジル史でなくて、裏面からのぞいたブラジル史の断片を拾いながら、それに一、二の女性を描き出してみよう。

帝政第一期のサン・クリストヴァン宮廷の名女性といえば、レオポルジナ皇后をはじめ、第二皇后のドーナ・アメリアとサントス女侯爵をあげられるが、ほかにも名高い女性がいた。とかく、正史の著

述には不公平があって、当然記載さるべき人物や事件が一行も書かれていないことがある。

これから述べる物語りの女性がその一人だ。それは、幼少のドン・ペードロ二世の保母をつとめたドーナ・マリアナ・カルロッタであり、彼女から名君ドン・ペードロ・デ・アルカンタラは少なからぬ人格的感化をうけていることが知られていない。

このドーナ・マリアナは、ナポレオン戦争をのがれてドン・ジョアン（六世）と共に、ポルトガルからブラジルに移住したヴェルナ・デ・マガリャンエスこと、ベルモンテ伯爵夫人である。ベルモンテ伯爵は、サン・クリストヴアン宮廷の侍従長をしていたが、それにふさわしく堂々たる風采で、いつもふろ上がりのようなよい血色をしていた。

ところが、ある日の教会でのできごとである。皇帝ドン・ペードロ一世の病気全快の感謝ミサの最中に、突如ドターンと大きな音がした。その時ドン・ペードロは、聖餐式のブドー酒のカリスを手に取って、まさに飲まんとしていた瞬間で、彼は少なからず驚いたらしい。その音は、ほかでもなく緑色の浮き織りを施した礼服をまとったベルモンテ伯爵の、百キロもある肥満したからだがあおむけに倒れた音であった。

宮廷医の診断で脳溢血ときまったが、どうやら高血圧の犠牲は昔も今も変わりがないようだ。それにしても、ベルモンテ伯爵が倒れて幽冥境を異にした瞬間に、ドーナ・マリアナはベルモンテ伯爵未亡人となったわけである。彼女は夫よりもはるかに年若く、しかも世にもまれな美人であったので、何かにつけて宮廷の人々とリオの上流社会のうわさに上ったのはやむを得ない。世間の人はヨケイな心配をするものである。特に現在のようにシネマやラジオ、テレビもなく、無聊なまま、美貌の伯爵未亡人が善悪いずれの意味でも人々の話題になったのは不思議ではない。

ところで、ドーナ・マリアナにまっ先に意味深長なまなざしを向けたのは、ほかならぬドン・ペードロであった。ドンペードロは、オーストリアの王女レオポルジナと結婚して五人の子に恵まれていたにもかかわらず、おりにふれて他の女性に手を出していたとは相当なものだ。これはドン・ファンも顔負けだが、ドン・ペードロには彼なりの考えがあったらしい。彼は目ざす女性を征服するには手段を選ばず、あらゆる障害をものともせず、いとも大胆に迫るところがあった。つまり押しの一手である。このへんのことは古野氏の『サンパウロ女一代』に遺憾

なく描かれている。

ドン・ペードロは乗馬の名手で、かなりの荒馬でも彼は楽にそれを乗りこなし、長距離を短時間で疾駆することが自慢であった。事実、彼は馬術のレコードもちで、ある時には落馬して肋骨を二枚ほど折ったが、平然として一人でサン・クリストヴァン宮までもどったという逸話がある。彼は馬を御する筆法で女性にも当たったようだが、それが奇妙に成功している。しかし、彼のこの傍若無人のふるまいはドーナ・マリアナには効果がなかった。というのは、彼女からみごとヒジテツを食ったからである。

このドン・ペードロの求愛を断固拒絶したドーナ・マリアナは、女官長を辞して、効外チジュカの荘園に静かに孤独の生活を送ることになった。はなやかな宮廷を去った彼女は、寂しくはあったがあくまで自尊心を固持したことに悔いはなく、また平和があった。ところが、またしても事情が一変した。それはレオポルジナ皇后が五人の子を残して二十九歳の若さで他界したことである。

ドン・ペードロは、末子である当時一歳のドン・ペードロ二世の保母たるべき人を探し求めねばならなかった。さすがの彼もわが愛児の養育については真剣ならざるを得ない。しかも彼に唯一の男児ド

ン・ペードロ二世の保母には、聡明にして母性愛に富んだ名門の女性を選ぶ必要があった。宮廷にあっては自由奔放、時には無軌道的な行為をあえてする彼も、レオポルジナ皇后の死後はすっかりふけ込むほど、幼いドン・ペードロの保母選択に悩んだものである。それは、愛するブラジルの将来を、この幼児に託す気持ちがあったからであろうか。大きな歴史の歩みは小さなところから発する。

ドン・ペードロ二世の治世は実に五十年の長きに達し、その間ブラジルは長足の進歩をみたが、その名君の教育に当たったのがジョゼ・ボニファシオであることは周知の通りだ。しかし多くの史書には、ドン・ペードロ二世の保母としてのドーナ・マリアナ・カルロッタの名が記されていない。つまり、ドン・ペードロ一世は考えあぐんだ末、幼児ドン・ペードロの保母をドーナ・マリアナに依頼したものである。生後一年で母に死別したドン・ペードロが、もし母性愛らしいものを感じ、その影響を受けているものがあるとすれば、それはドーナ・マリアナであらねばならない。

さて以前の宮廷での失敗にコリているドン・ペードロは、使者を差し向けることなく彼自身がいとも丁重にドーナ・マリアナの荘園を訪れ、事情をのべ

て彼女の宮廷への復帰を懇願した。これは彼にとってよほどの努力であったに相違ない。それは、彼が一八二二年九月七日にサントスからサンパウロへの帰路、イピランガ丘上でリオからの伝使に会って、あの歴史的叫びをあげたとき以上のものであったかも知れない。

ドーナ・マリアナは熟慮の末、ドン・ペードロ一世のためよりは幼ない王子のために、その保母たることを快諾した。

ドーナ・マリアナの荘園を出たドン・ペードロは自然に気分も楽しく、チジュカの樹林の間からもれる午後の陽光を浴び、小鳥のさえずりを聞きながら馬を除行させてサン・クリストヴァン宮に帰った。これで愛妻レオポルジナに先だたれてやるせない彼も、心安んぜられるものがあった。

宮廷においてのドーナ・マリアナは、真実の母以上の愛情をもって幼児ドン・ペードロに接し、また一歳のドン・ペードロも、彼女に母としてなついたことはいうまでもない。そうした情景をみるドン・ペードロ一世が、ドーナ・マリアナに対してかつての野心を起こせないのは当然であり、彼はつとめて自粛するところがあった。

レオポルジナ皇后の死去で喪に服していた宮廷

に、再びドーナ・マリアナを迎えて、急に花が咲いたような雰囲気が生まれた。事実、世の中にはドーナ・マリアナのような女性がいる。彼女とても夫ベルモンテ伯爵の死後は黒色の喪服を着用していたが、そこに形容し難い高貴な美しさがあった。この彼女の気品こそ生まれつきのものであろう。流行のトリコになってバルドー型とかの髪に短かいスカートをはいて、ためにかえって滑稽になる女性は一考を要する。

ドン・ペードロの自戒によって、サン・クリストヴァン宮には風波も立たず、平穏な歳月が流れた。しかしその間、政治的には非常な難局に陥り、ドン・ペードロの議会を無視した専制政治が、政府高官と国民の非難の的となっていた。ドン・ペードロは元来が英雄の素質をもつ反面、わがままであったことが彼をして帝位を退くはめにならしめたと言える。一八三一年四月七日がそれだ。

時の政情やむを得ず、彼は退位を決意した。

〝セッテ・デ・アブリル〟は何となくリズミカルな響きを与えるが、当のドン・ペードロ一世には苦々しい思いの日である。ブラジルではこの四月七日を選んで店開きや開業をする習慣がある。

縁起がよいとでもいうのであろうか。もっとも、

ドン・ペードロ一世の退位が動機となって、ブラジルの新しい運命は開けたのだが。

ドン・ペードロが、当時僅か五歳のドン・ペードロ二世に帝位を譲って、ポルトガル本国へ引き揚げることになったについては、くどくどしく述べる必要はないであろう。そこで重臣ジョゼ・ボニファシオが、幼年のドン・ペードロ二世の保護者に任ぜられた。ジョゼ・ボニファシオはコインブラに遊学して法学と政治哲学、鉱物学を修め、後にポルトガル王室の委嘱をうけてヨーロッパ各国の科学調査をやった人物だけに、教養高く、英明剛直にしてなかなかの一徹者でもあった。彼は大政治家の風格を備えると同時に頑固オヤジであったようだ。従って彼には、女性の気げんとりをするなどはもってのほかであった。そのためにサントス女侯爵とも常に相反目したものだ。

このジョゼ・ボニファシオが宮廷に入って、最初に気にさわったのがツンとすました尊厳そのものの態度のドーナ・マリアナであった。ドーナ・マリアナにすれば、故意にすましているのではないが、彼女の気品ある風姿所作が、いかにも高ぶっているかに男の目には映じるのであろう。ジョゼ・ボニファシオは内心はなはだ面白からず、勢い、彼の宮廷の

官女や侍女に対する態度は教養人とも思われない粗暴なところがあった。ドン・ペードロ一世にも女性には粗暴なところがあったが、そこにはダンティさもあって粗暴は帳消しにされたが、ジョゼ・ボニファシオは頑固一点張りだからかなわない。

ついにある日、ひと騒動が起こった。

サン・クリストヴァン宮の一室に、年少の王子、王女のための玩具の貯蔵棚があったが、ドーナ・マリアナの命によってそれらの玩具は一個づつ与えられて、決して王子たちの自由にさせなかったものだ。しかし、それを知ったジョゼ・ボニファシオは、彼の独断でその全部の玩具を王子たちに分け与えてしまった。これが騒ぎのそもそもの原因となった。

ジョゼ・ボニファシオは年がいもなく、玩具にことよせてドーナ・マリアナへの欝憤晴らしをやったのであろう。彼に言わせると、タカが玩具でないか、それを全部王子たちに分けてやったとて何もシツケに影響することはない、という理屈だ。

実際タカが玩具だが、この問題は大きな波紋を起こし、官女や侍女たちがボニファシオと、ドーナ・マリアナの二派に対立することになったから厄介な話だ。当時宮廷には二人の官女長がいたがその一人はイタジペ伯爵夫人のドーナ・ジョアキナ・アデラ

イデ・デ・ベルナで、ジョゼ・ボニファシオ派を代表した。他の一人はドーナ・マリアナの姪のドーナ・ジョアナ・ピントで、ドーナ，マリアナ派を代表するものであった。

こうした女性の暗闘はどこの社会にもあるが、それが次第に露骨となるに及んで、ドーナ・マリアナは自ら悟るところあって宮廷を退くことになった。今度は往時のドン・ペードロとの問題と異なって、彼女の胸中は悲壮なものであった。

ドーナ・マリアナの退去によって宮廷の女官たちの二派の争いは絶えたが、政府要人の間には醜いまでに紛争がつづいた。特に執政官をめぐる幾多の問題が起こり、一徹者のジョゼ・ボニファシオはその犠牲となって、幼君の保護者の栄職を除かれてグワナバラ湾のパケタ島に追放される身となった。

こうしてドン・ペードロ一世によって任命されたジョゼ・ボニファシオは宮廷を追われ、ドーナ・マリアナも同じく彼女の荘園に去った。

そこで、新たに執政官とドン・ペードロ二世の保護役を兼任したのが、イタニャイン侯爵であった。このイタニャイン侯爵は、七十歳に近い老体にも似ずなかなかの活動家で、わけても美しい女性には抜け目なく立ち回る方であった。

彼が王子の保護者として宮廷に赴任するや、直ちに目にとまったのがマリア・アンジェリカという十七歳ぐらいの侍女であった。彼女はピチピチした子鹿のような感じで美しく、老齢のイタニャイン侯爵はそれを抱きすくめたいような情熱に燃えた。ただ、彼はドン・ペードロのように大胆に行動するのでなく、あくまで紳士然として、ゆるやか且つ人目にふれないように女性に接近するコツを心得ていた。

マリア・アンジェリカをすっかり気に入ったイタニャイン侯爵は、彼女を自分の寝室のカマレーラに任じ、毎朝彼女に窓を開けさせて目ざめることに無上の喜びを感じた。マリア・アンジェリカは、窓を開けると同時につやっぽい声で型のような挨拶をするのが常であった。

「ジャネーラを全部開けましてございます。シニョー・マルケス」

このような雰囲気は、幼年のドン・ペードロの知るところではなく、彼はすこやかに成長し、未来の皇帝としての厳格な教育をうけた。

サン・クリストヴァン宮夜話としては、ほかにも面白いものはあるが、それは別の機会に述べよう。

ドン・エンリッケ王子とアメリカの発見

ポルトガルの王　ドンジョアン1世の
第3王子　ドン・エンリッケ

およそ読みものの中で、探険記ほど青少年の情熱をわかすものはない。それは、将来に生きる若人には多少にかかわらず、未知の世界を捜ろうとする冒険魂―これは先駆心に通じる―をもっているからだ。その意味で、広大無辺の国土に恵まれたブラジルの未開発地を開拓するものは、これらの若い世代人であらねばならない。

十月十二日はアメリカ発見記念日であり、また「海洋の日」だが、米州の発見史に記される航海家や

探険家の名に接するだけでも、なんとなく胸踊る感がある。もしそれらの探険記を読んで、なんらの感激も覚えぬ少年や青年があるとすれば、それは不幸なことというべきであろう。

一四九二年のクリストフォロ・コロンボのアメリカ発見を始め一四九七年のジョアン・カボットのニュー・フォンドランドの発見、一五〇〇年のペードロ・アルヴァレス・カブラルのブラジル発見、一五一七年のジョアン・デーアス・ソリスのラプラタ河とアルゼンチンの発見史によって、私どもは少なからず学ぶものがある。

次に米州の開発史に不滅の名をとどめる探険家をあげるが、それらの経歴と業績について、現在の人々はどれほどのことを知っているであろうか。

○アメリコ・ヴェスプッチ（一四五一―一五一二）
○クリストフォロ・コロンボ（一四四六―一五〇六）
○ジョアン・カボット（一四五〇―一四九八）
○ペードロ・アルヴァレス・カブラル（一四六〇―一五二六）
○ジョアン・デーアス・ソリス（不明）
○フェルナン・マガリャンエス（一四八〇―一五

二一）

○ヌーネス・デ・バルボア（一四七五―一五一七）

○フランシスコ・ピザロ（一四七五―一五四一）

一九六〇年は、“ＮＡＶＥＧＡＤＯＲ”（航海者）で世界に知られるドン・エンリッケ王子が逝去して五百周年に当たるので、その記念行事がポルトガルを始め、各国で盛大に行なわれた。

リオ市では海岸に沿って新設されたドライブ・ウエーに、アベニーダ・インファンテ・ドン・エンリッケと命名、クビチエク大統領とポルトガル大使の臨席の下に、その開通式があげられた。これはブラジルとポルトガル両国の親善を象徴し、またブラジルの発見を促したドン・エンリッケ王子の偉業に敬意を表するためでもある。

事実、十五世紀に始まるポルトガルとスペインの新領土の発見、アフリカとインド航路の開拓、アメリカとブラジルの発見等は、ドン・エンリッケの先見と大洋航海の鼓吹に負うものである。従って、もし航海者ドン・エンリッケの出現がなければ、米州の発見史も大いに変わっていたことが想像される。

しからば何ゆえにエンリッケ王子が大洋航路開拓の必要性を痛感し、それに一生の努力を傾到したか

を知らねばならない。

大体において十五世紀初頭までの西欧と東洋の貿易は、アラビア人とイタリア人（おもにジェノヴァとヴェネチア人）に握られていた。当時の東洋の大市場はインドのカルカッタであった関係から、陸路や沿岸航路によらずしてカルカッタに達することがポルトガルの願いであった。それには万難を排して大洋航路を開拓せねばならず、ここに大型帆船の建造、乗組員の養成、大洋航海術研究の必要が起こった。

ドン・エリッケは、一三九四年三月四日に、ポルトガルの王ドン・ジョアン一世の三男として生まれた。彼は長じてアルガルヴェの総督に任ぜられ、大洋航路開拓の功績によってビゼウ公爵となった。

イベリア半島の西端を占める一小国ポルトガルの存在が、やや判然となったのは十字軍遠征の終了後であり、その建国の基礎を固めたのはドン・エンリッケの父、ドン・ジョアン一世（在位一三八五―一四三三）である。

ドン・ジョアン一世は、カステラ王国（スペイン）と戦って勝利を得てアヴイス王室を創立し、またモロッコのムーア人（モーロー人）と戦闘を交えて北部アフリカのセウタを征服した。

このようなポルトガルの興隆期に成長したエンリッケ王子は、ポルトガルの南端アルガルヴェ領地のサグレスに、大洋航海技術研究のための学校を設立した。

かくして航海、造船、天文地理、星座数学等の研究が進み、すぐれた人材が輩出した。これがポルトガルの新領地発見を促す要因となっている。それはエンリッケ王子の二十歳台の時である。

ドン・エンリッケが、サグレスの航海学校を設立したのは一四一七年だが、その影響で一四一八年にアソーレスとマデーラ島が発見され、一四二四年にはそれらの拓植事業に着手する運びになった。また

ポルトガルのブラジル発見当時に用いられたカラヴェラ船

一四三一年には、ドン・エンリッケの命によってゴンサロ・カブラル・コエーリョの商船隊が、アソーレス近海を探険して他の群島を発見し、その探険と航海についての詳細な報告をもたらした。この報告が、エンリッケ王子に西部アフリカとインド航路開拓の指針を与え、且つ将来のクリストフォロ・コロンボのアメリカ発見の動機となったのである。

一四三三年にはドン・ジョアン一世が死去したが、その国家統一と地理的発展の遺業を継ぎ、エンリッケ王子は有能の人材を鼓舞して大洋航海と探険を指揮した。

エンリッケ王子は温厚な性格の反面厳格で、ことに臨んで決断と実践力に富み、感情に流れるところがなかった。彼が、その時代の航海家や探検家が、ややもすればとらわれやすい迷信や俗信を避け、すべての研究を科学的に進めたことはまれにみる進歩的人物であったと言える。

一四三四年には、ジル・エネアスの探険隊がボジャドール岬への回航に成功し、ポルトガルの第一目標であったアフリカ貿易の道が開かれた。ついで一四三六年にはカーボ・ブランコにも達したが、その翌年から二年に及んだタンジアーの戦闘のため、アフリカ探険は一時中絶のやむなきに至った。この

戦いで、ドン・エンリッケの長兄ドン・ドアルテが戦死を遂げている。

一四四四年から一四四六年にかけては、最も活発な探険活動がつづけられたが、この間に三十隻の大型帆船がポルトガルの王子旗を翻して大西洋を航海し、はなばなしい海国ポルトガル時代を現出した。当時ジニス・デーアスやヌーノ・トリスタンなどの航海家が、アフリカの西端カーボ・ヴェルデに到達した。他方、アルヴァロ・フェルナンデスを隊長とする船隊が、カーボ・ヴェルデを経てセネガンビアとギネーに達した。

このように大西洋に航路を開き、第一期計画のアフリカ貿易が軌道に乗りかけた一四六〇年に、エンリッケ王子が他界したことは、ポルトガルにとって大きな痛手であった。

ところで、エンリッケ王子が活躍中に日本はどうであったかと言えば、いわゆる戦国時代で、群雄割拠し各地に戦火が絶えぬありさまであった。ましてや海外の探険など思いもよらない。

面白いのは、航海者といわれるエンリッケ王子自身には大洋航海の実地経験なく、しかも、彼のさしずによって開拓した大洋航路の延長距離は、千七百マイルにも達していたことだ。

また、彼が創立したサグレスの航海学校は、幾多のすぐれた航海家を輩出している。その代表人物は、アフリカの喜望峯への航路を開いたバルトロメウ・デーアス、インド航路の開拓者ヴァスコ・ダ・ガーマ、マゼラン海峡の発見者フェルナン・マガリャンエスなどである。またクリストフォロ・コロンボも、アメリカ発見の約四年前の一四八八年のころ、短期ではあったがサグレス航海学校でコスモグラフィー（天文地理学）を学んだと言われている。

ドン・エンリッケは一四六〇年の十一月十三日に、サン・ビセンテ岬で遠く海洋を望みながら永眠した。これはいかにも「航海者」らしい最後であった。彼の遺体は、ラゴアスのサンタ・マリア寺院に葬られた。その後、ドン・マノエル王によって、エンリッケ王子の像がベレン教会の中央門に設けられ、一八四〇年には、サグレスに彼の記念像が建立された。

エンリッケ王子の没後は、ポルトガルの第二の発見期となり、王ドン・アフォンソ五世とドン・ジョアン二世が、ドン・エンリッケの遺志の実現に当たったことは歴史にみる通りだ。

ドン・アフォンソ五世在位中は（一四四三―一四八一）アフリカ王のあだ名で知られたほどで、彼の

治世に、アフリカのギネー湾からサンタ・カタリナ岬までの探険が実現された。同時に、数回にわたってモロッコに遠征隊が派遣され、一四七一年には、アルジラとタンジアーをムーア族から占領した。

ドン・ジョアン二世(在位一四八一―一四九五)の時代となっては、一四八八年にバルトロメウ・デーアスが、アフリカの南端喜望峯に達し、インドに通じる航路開拓の可能性を得て、ポルトガル人を狂喜させた。

ジェノヴァ人のクリストフォロ・コロンボのアメリカ発見も、ドン・ジョアン二世の時代であって、本来ならばポルトガル王室の企画の下に行なわれるべき探険であったが、事情やむを得ずスペイン王室の後援によって実現された。

クリストフォロ、コロンボのアメリカの発見は、一四九二年十月十二日であったが、これも帰するところはドン・エンリッケの大洋航海の鼓吹に負うところが多大である。

これに次ぐヴァスコ・ダ・ガーマのインド航路の開拓と、カブラルのブラジル発見は、いずれもドン・エンリッケによってポルトガルに勃然と燃え上がった海外探険熟の所産にほかならない。

特に、一五〇〇年のブラジル発見は偶然のできごとと言われているが、この偶然の機会を生むために約一世紀にわたってその素地が養われ、準備時代のあったことを忘れてはならない。

黒人ドレイ秘話

糞尿療法

黒奴が病気になってもセニョール（主人）から手当てを受けるとは限らない。もしセニョールが奴隷の病人の手当てに努めるとすれば、それは愛情や人道的行為ではなく、奴隷に死なれては損をする、という打算からである。だから人間の病気をいやすのでなくて、道具を修繕するようなものだ。もっとも奴隷はペサとして、一つの商品または部分品に過ぎなかったから不思議ではない。

ところでセニョールから医薬を与えられない奴隷は、郷土アフリカ伝来の病気療法を用いる。

まづ彼らに最も多い眼疾から述べてみると、軽症のものは唾液療法というのでたいていなおる。

それが効果のない場合は、旦朝起きぬけに自分の小便で目を洗えば百パーセントとはいわぬまでも九

十八パーセントぐらいのききめがあるという。唾液にせよ尿にせよ、早朝のものがより効果があるとは科学的にもどうやら根拠がありそうだ。

次ははれものだが、これには牛糞を膏薬代用にする。また外部（患部）療法でなく、内服薬を必要とする時には七、八歳の男児の尿を飲む。これは毒下しとしての下剤に相当する。ただ、女児の尿は効き目なし。

胃や肝臓の痛み止めには二日を経た尿を醗酵させ、それに少々温湯を混じて飲む。

匐行疹の療法には、早暁に起きて唾液を患部に塗る。これはさきに述べたのと同じ理屈になる。悪性の熱病（大ざっぱな表現だが）や麻疹には犬の糞の乾燥したのをお茶のようにせんじて服用する。血のにじみ出る打撲傷や切傷には乾燥したブーロの糞の溶液で傷を洗う。これは治癒と消毒にもなる由。

化燥したできものには、牛糞を膏薬としてはりつければ吸い出し薬になる。またひょう疽（ヒョウソウ）にはニワトリの糞が特効がある。しかしこの調剤法を書きもらしているのが遺憾だ。それにしても、ガーロでなくてガリーニャとあるから、めんどりの糞と考えるのが正しい。

消化不良と潅腸には唾液と牛糞を調合したのを用

いる。これも牛糞は新鮮なものか乾燥したものかが記されていない。

下腹部の痛み止めにはなるべく新鮮な牛糞をよく練って塗りつけ、その上をバナナの葉でおおっておく。これと同一の療法は、黒奴のよくかかる睾丸の表面のただれる病気に特に効果がある。これは一種の皮膚病で、日本でいうインキンタムシのようなものだ。そうとすれば、黒奴がアフリカから持ち込んだ病気ではない。

丹毒には妊婦の尿で患部を洗うのが効果顕著、これは一面彼らの信仰から来ているものがあるらしい。これこそ病は気持ちからというのに通じる。

毒蛇や毒グモ、サソリなどのかみ傷手当てには、山羊の糞にタツーの脂肪を混じて塗布する。同時にそれと同じ分量をせんじて飲むなればききめテキメン、しかし毒が体内にまわって死ぬのは手おくれと知るべし。ここで一つ厄介なのはタツーの脂肪を手に入れることだ。

脱臼した時には黒奴の老女が呪文を唱えながら脱骨した箇所に縫いばりと糸をおき、男児の尿にデンデン(北伯産のしゅろの一種)の実の油を混入したものを塗る。こうすれば不思議に脱骨がなおる。これは黒奴だけでなく、セニョールやその家族が脱骨すれ

ば、奴隷の老女にその治療法をやってもらう習わしがある。

また黒奴は、よく、赤痢性の腹痛とボーバという彼ら特有の病で苦しみ、時には喀血するが、その療法にもさまざまの糞が用いられる。秘訣は調合法にあるらしく、これは一家の秘伝としてやたらには公表されない。

ビショ・ド・ペにしても、足から採掘した部分が化のうすることがある。それの療法には、縄タバコに牛糞と壁の石灰を混じたものを用いる。このビショ・ド・ペは、もともと黒奴によってアフリカから入れられたとも伝えられるが、もしそれが事実とすれば、黒奴輸入の付加税のようなものだ。そのお陰で外国の自由労働移民が耕地でどれほど苦しんだことか。

鵞口瘡は牛馬が侵され、それが人間に伝染することもあるが、奴隷は不潔のためその犠牲になることもまれではない。この予防法には、健康体の牛馬の額に灰をもって十字の印をする。この十字の印には、金曜日の早朝男児の尿で灰を溶いたものを用いるとは、なかなか念が入っている。それ以上に効果があるのは、コーモリの糞を男児の尿で溶いたものだが、問題はいかにしてコーモリの糞を探し出すか

である。

天然痘の予防にも、黒奴はこれに似た方法を用いる。同じく金曜日を選んで、玉ねぎと成熟した女の尿でせんじた茶を飲み、且つ綿にマモナ油を含ませた燈火をかざしながら呪文を唱える。淋巴腺がはれて苦しむ時は、カフェーに羊（ヒツジ）の糞の粉末を混入して飲む。ここでいうカフェーは野生の珈琲科植物の実であるらしく、羊も山羊のまちがいかと思われる。

さて最後に述べるのは、いうところの病気療法ではない。奴隷女が、セニョールの邸宅（カーザ・グランデ）で食卓の給仕をする場合は、体臭（特にワキガ）を消すために牛糞をマサカー（北東ブラジル特産のハッカに似るにおいをもつ植物）の葉汁で煮た液をからだに塗る。なぜかというと黒人女特有の体臭は男子の官能を刺激するおそれがあるからだ。

こうなると、同じ動物の糞でも牛糞ほど用途の広いものはない。牛には一切捨てるところはないが、その糞までがかくも貴重品であるのを知っていま更ながら驚く。それにしても、あたりに妙（タエ）なる香りがするように思われるので、糞尿章はこの辺でやめて次にうつろう。

ドレイ女の眼球

これはバイアのあるエンジェーニョ（砂糖園）にあった実話だ。

一人の奴隷ムラタ（半黒女）が、給仕人として富裕セニョールの邸宅に働くことになった。そのムラタは、ポルトガル人の男子と黒人女の混血児で、実に美しかったそうだ。わけても彼女の目に非常な魅力があったらしく、農園の男たちはそれをひと目見て射ころされるような思いがした。

ところである日のジャンタールのできごとである。脂ぎった精力型のセニョールがその給仕女を見るなり「なんと美しい眼をしているのだろう……」と、慾情そのままの笑いを浮かべた。それを見たその家の奥さんは、髪の根元までの嫉妬を燃やし（昔のポルトガル人はこんな形容詞を用いた）ながら、「ええそうですかね。」と、それでも表面は至極おだやかにうなずいていた。当夜はそのまま何ごともなく済んだが、翌日の朝食となっていつものムラタの姿が見えず、別の給仕女が現われた。しかし、その女の目たるや乾魚の目のように無表情なものであった。

「どうしたの、あの女は」とセニョールは奥さんに尋ねた。

奥さんは無言のまま別室に立ち去り、やがて銀盆を純白の布でおおったものをうやうやしく持って来て卓上においた。

「これがあなたへのプレゼントです。」

主人（セニョール）はいぶかしげにその布をとった瞬間、口も利けないほど驚いた。銀盆の上に気味悪く並んでいたのは二つの人間の眼球であった。奥さんはいとも平然と、「よく見ておきなさい。これはあのムラタの眼球ですよ。あなたがあまり美しいとほめたので、ファッカでえぐり抜いて持って来てあげたの」と言ったものだ。

二つの眼球は、うらめしげに奥さんと主人を見つめているようであった。

哀れなムラタの奴隷は、美しい眼をもっていたためにそれを失い、顔に二つの穴があき、さながら生けるばけもの同様となった。今ならせめて義眼でも入れられるであろうが……。

それから数カ月が過ぎたある夜半に、セニョールの奥さんは両眼がひどく痛むといって泣きわめいた。そしてついに翌日の夜明けをも見ずに失明してしまった。これはソコヒのような眼疾とも想像され

るが、かわいそうな奴隷女ののろいのせいかも知れない、と世間で語り伝えられた。それを反対に喜んだのはセニョールで、また別の奴隷女を邸宅に雇い入れて給仕をさせたが、あのムラタのような美しい目をもった女は一人も見当たらなかった。目の見えない奥さんは一層嫉妬心をつのらせ、そのために発狂して行方不明となったが、ある日の夕暮れに付近の湖水に死体となって発見された。不思議にも彼女の眼球はくり抜かれていたといわれる。

黒人王　シコ・レー

十八世紀にミナスのビラ・リーカ（後のオーロ・プレート）で、黒人王と言われたＣＩＣＯ　ＲＥＩとは、一体どんな男であったのか。彼は伝説的人物とも思われているが、多くの史実でみると、どうやら実在した人物のようである。

シコ・レーは、祖国アフリカでその家族と共に捕えられ、奴隷としてブラジルに売られたが、数年を過ごす間に一人の男児を残したのみで、他の家族とは死に別れとなった。彼は一人むすこを伴ってミナスの首都ビラ・リーカに住んでいたが、一生懸命に

働いて小金をため、それで子供の自由を買った。元来奴隷は無給制だが、ミナスの金鉱地では僅かの賃金が払われたところもある。

そのころから、だれともなくシコ・レーと呼ぶようになった。初めはさすがの彼も照れくさがったが、しまいには自ら王様気取りで人々に接するようになったというから面白い。彼は同志を集めては計画を練り、共動活動の実績をあげて奴隷の境涯から一人二人と救ううちに、後には数十人、数百人もの黒人が自由の身となった。ついには彼らの黒人部落が形成され、大きな勢力をもつまでになった。これは、ビラ・リーカばかりでなく、全ブラジルの黒奴史に特筆されるべきことだ。

シコ・レーは再婚して家庭をもったが、その後妻は女王と呼ばれ、新しく生まれた子供は各々王子、王女となり、文字通りの黒人王国を築いた。シコ・レーは自身の王国内に教会を建設し、それの護神にサンタ・イフイジェニアをまつった。この教会は、後にロザリオ教会となり、参詣人がたえず訪れてビラ・リーカの名高い存在となった。そのお祭りには黒人のみでなく、たくさんの白人までも群集して非常ににぎわいを呈するようになった。毎年一月六日がロザリオ教会のお祭りで、当日は刺繍を施した豪

華な服装をした黒人王と、女王、王子、王女が行列をするのが恒例となり、それを見物する人々がわざわざ遠路押しかけるありさまであった。

このお祭りの行列では、アフリカ黒人の典型的音楽が奏され、護神サンタ・イフイジェニアの像が運ばれるが、これは現在のオーロ・プレートの名物となっている。それは、バイアのセニョール・デ・ボンフィンの黒人祭りと相並んで、ブラジル黒奴の伝統をくむ特色あるお祭りである。

ブラジルの黒奴についての逸話や伝説俗謡は、数えきれないほど多い。また黒人社会をテーマとした文学作品もたくさんあるが、それらを抜粋編纂したものに人類社会学者エジソン・カルネーロのＡＮＴＯＬＯＧＩＡ　ＤＯ　ＮＥＧＲＯ　ＢＲＡＳＩＬＥＩＲＯがある。これはその名の通り、ブラジル黒人のアンソロジーだが、その中の幾つかを「ブラジル黒人奴隷秘話」として紹介した。時代はいうまでもなく奴隷制度の全盛時代の十八世紀だが、執筆の都合上、ところどころ現在の形で叙してあることと、原著の内容をゆがめない程度に筆者の主観が盛られていることを諒承願いたい。

ブラジル建軍の父

カシアス公爵

リオ市には軍人の銅像が多い。陸軍省前面、パンテオン上のカシアス公爵の銅像をはじめ、パリス広場のテオドロ・ダ・フォンセッカ将軍、フラメンゴ海岸のバローゾ海軍大将、ボタフォーゴ海岸のタマンダレ提督の銅像、いずれも立派な彫刻芸術である。

これらの銅像の人物はいわゆる好戦将軍でなくて、平和愛好に徹していたところに学ぶものがある。軍服姿の彼らが、常に平和のために剣をもってたったその人柄にうたれる。

工業都市サンパウロでも、かねてカシアスの記念像建立を決定し、その作者に彫刻家ビトール・ブレシェレーを選んだ。しかるに心魂を傾けて制作に従った作者ブレシェレーは、彫像の完成と同時に他界してしまったが、プリンセーザ・イザベル広場にあるこのカシアスの像は、南米一といわれる巨大なもので、去る二十五日（一九六〇）に落成式が挙行された。

さて、八月二十五はブラジルの「軍人の日」として記念される。それはブラジル陸軍の創設者カシア

ス元帥の誕生日に当たるからだ。

世界をあげて平和運動が唱えられる今日「軍人の日」を記念するのは一つの矛盾だが、それは軍国思想を高揚するためではなく、武人の鑑としてのカシアスの人と成りをたたえ、「平和をねがう日」と考えるのが当たっているであろう。

カシアスはＰａｃｉｆｉｃａｄｏｒ（平和建設者）と呼ばれるが、武人でありながら彼ほど平和を愛好した者は少ない。彼がブラジルの平和のためにのみ戦ったことは、当国の陸軍史を見てうなずける。

貴族万能の帝政期には、豪農、大耕主は経済力にものをいわせて貴族に列し、数百人のバロン・ド・カフェ（珈琲男爵）を続出したが、一人カシアスが公爵であったことは何を物語るか。

ルイス・アルベス・デ・リーマ・エ・シルバ、これがカシアスの本名である。元来が武門に生まれた彼は、幼にして軍人教育をうけ、長じて陸軍兵学校を経て少尉となり、バイアにおいての独立戦争（ブラジル軍とポ軍との戦い）で戦火の洗礼をうけた。その後は数多くの内乱革命を鎮圧し、パラグワイ戦争での輝かしい戦功によって元帥となり、最高爵位の公爵に叙されたことは彼をもって唯一とする。

彼は武人であると共にすぐれた経世家であり、武力を行使するよりは、人徳と政治的才能をもって叛軍や革命首謀者を降伏させたことは他に類を見ない。

カシアスが二十歳台のころのブラジルの陸海軍には、本格的な組織はなく、陸軍はフランス軍人のラバトウー大将、海軍は英国海軍のコックレーン脚とテーラー提督によって指導されていた。カシアスはそれらの外国軍人から少なからぬ人格的感化をうけている。

カシアスは若くして皇帝ドン・ペードロ一世の護衛兵団長に任ぜられ、皇帝への忠誠を誓った。

ところがドン・ペードロの専制政治に対する国民の不満から暴動となり、軍部の坂乱にまで発展し、ついにドン・ペードロは一八三一年四月七日を期して退位することになった。その時にカシアスは宮廷に参じて「自分はあくまで皇帝のために戦うであろう」と決意を述べた。ドン・ペードロは「貴下の誠意は感謝するが、貴下はブラジル軍人であることを忘れてはならない。従って貴下は今の場合、革命軍に参加する義務がある」と説得した。

今一つカシアスにちなむエピソードに、デオゴ・フェージョを首班とする一八四二年のサンパウロ革

命がある。
　かつての大政治家デオゴ・フエージョはカシアスの人物を見抜き、その将来を嘱目して皇帝の護衛兵団長に推挙の労をとった人である。しかるに運命は皮肉だ。デオゴ・フエージョがサンパウロ革命の首班としてソロカバ市にたてこもった時、彼を捕縛する命をうけてカシアスがソロカバに急行することになった。
　革命軍は放れて兵士四散し、デオゴ・フエージョはその本営に一人寂しくたたずんでいた。数名の部下を従えてソロカバに着いたカシアスは、デオゴ・フエージョの捕縛を部下に命ずることなく彼自身が馬から降りて静かに歩を進めてデオゴ・フエージョと相会した。その時のカシアスは、熱鉄をのむの思いであったろう。彼は礼儀を正しておもむろに口を開き、「余が政府軍軍人として貴下捕縛の任務を遂行する苦衷をくまれよ」と。
　デオゴ・フエージョは、落ち着いたなかにも沈痛の面もちで、「アス・スワス・オルデンス・コロネル」とカシアスの前に一歩進み出た。
　一八六九年一月五日、ブラジル軍総司令官として敗戦国パラグワイの首都アスンソンに入ったカシアス（当時侯爵）は、いささかも戦勝将軍を誇るとこ

ろなく、直ちに治安維持に万全を期すと同時に、戦火を恐れて避難したパラグワイ市民に、各々の家庭に帰るように通告を発した。

パラグワイの人々が、いまだにカシアスを尊敬する理由もそこにある。

ブラジルを訪れるパラグワイの人々が、カシアス元帥やオゾリオ将軍、タマンダレ提督の銅像に敬意を表すのは何を意味するであろうか。サンパウロのソロカバナ駅近く、プリンセーザ・イザベル広場のカシアス記念像は、グランデ・ソルダードの姿であると共に、平和の象徴である。

アンデスの征服者
ラボーゾ・タヴァレス

一五〇〇年のカブラルのブラジル発見後に、もしバンデランテスの奥地探険がなかったならば、ブラジルは現在の約四分の一の領地より占め得なかったであろう。

中でもアントニオ・ラポーゾ・タヴァレスほど、広域にわたって探険をしたものはなく、その踏破区域はパラナ、サンタ・カタリナ、マット・グロッソか

らパラグワイ、ボリビアを経てペルーのアンデスに至り、アマゾン上流からサン・フランシスコ河流域地帯にまで達している。

いま、ブラジルの地図を広げて彼の足跡を印した地点を見ると、それは十七世紀の探険としては驚異的な業といわざるを得ない。年代を追ってアントニオ・ラポーゾ・タヴァレスの探険区をあげると、一六二九年のパラナのグワイラ地帯の踏査に始まり、イタチンスを経て一六三六年にはリオ・グランデ・ド・スールを踏破したが、一六三九年に、北部ブラジルがオランダ軍に侵略されつつある報に接し、救援のために探険を中絶して戦乱の現地に行っている。この一事によっても、彼が蛮勇一途の猛者ではなくして、愛国の血に燃えていたことがわかる。その後、一六四八年に彼は、バンデーラス史にかつて記されたことのない大規模な冒険旅行を敢行したが、それは南米三国にまたがる探険で、パラグワイと現在のボリビアを踏破し、ついにアンデス山系地帯を征服した旅行で、今にして思えば超人的な偉業である。ラポーゾ・タヴァレスはこの探険で、アンデスからアマゾン上流に達したが、その間、蕃人、猛獣、悪疫と戦い、大森林におおわれる人跡未踏の仙境を突破したことは、聞くだに快絶そのものの感が

ある。

サンパウロのパウリスタ（イピランガ）博物館の正面入口のサロンに、アントニオ・ラポーゾ・タヴァレスの大理石の像が飾られているが、それを見るにつけ、彼の冒険旅行が眼前に浮かぶようである。

ところで、ラポーゾ・タヴァレスはブラジル生まれではなく、その誕生地はポルトガルの山村サン・ミゲル・デ・ボージャである。

彼は一五九八年生まれで、二十歳でブラジルに移住した。彼は祖国ポルトガルを出発するに当たり、未知の新天地ブラジルに対して、天を圧する大森林とインジオや山なす黄金を頭に描いて胸を踊らせた。ここで強調せねばならないのは、ラポーゾ・タヴァレスのような豪胆無比のバンデランテスが現われなければ、おそらくブラジル領地の大部分はスペインを筆頭に、フランス、オランダ領斑となったことである。わけてもコロンブスのアメリカ発見を契機として、スペイン対ポルトガルの発見新領地の境界問題が起こり、一四九四年にローマ教皇アレキサンダー六世の立ち会いの下にトルデシラス協定が成立して以来は、スペインが優位にあった関係からも、普通ならば、当全ブラジル領はスペイン領になったことが想像される。こう考えればバンデラン

テスは、直接あるいは間接に、スペイン人やオランダ人をブラジルから放逐する役目をつとめているのである。

ブラジル奥地の探険をするバンデーランテ

豪胆にして指導者的な風格のラポーゾ・タヴァレスはブラジル移住後、一六二八年にバンデランテスの元老マノエル・プレートの後継として、探険隊を組織しその隊長となったが、当時彼に統率されたのは白人九百名と教化されたツピー土人三千であった。

この探険で、彼は約一万のインジオを捕虜にし、サンパウロに連れもどり、奴隷として売った。

このことは人道的には批判をまぬがれないが、そのころの社会実情からはやむを得ないものがあった。当時ラポーゾ・タヴァレスの声望は遠くまで聞

こえ、若くしてサン・ビセンテのカピタニア長官に任ぜられ、同時に陪審判事の名誉職が与えられた。

サンパウロにおいての彼の勢力地盤は、現在のキンタウナからバルエリーに及んだ。バルエリーはジェズイッタ教団の土民教化区であったので、インジオ狩りで知られるラポーゾ・タブァレスと人道主義を標傍するジェズイッタとが相反目したことは当然の成行きである。ついにジェズイッタはラポーゾ・タブァレスの怒りを買い、ジェズイッタ教会は焼き払われて僧侶や修道士は追放されたのである。

このジェズイッタの追放が、当時のブラジル総督デオゴ・ルイス・デ・オリベーラの耳に入り、ラポーゾ・タヴァレスはオウビドール（陪審判事）の職を罷免される結果となった。

そこで憤怒に燃えた彼は、すべての栄職を捨てて再び奥地探険に向かった。一五三六年の半ばにイビッルーナ（現在のパラナ）および、カンポス・デ・パルマ（サンタ・カタリナ）を経てリオグランデ・ド・スールに入り、そこに群居するスペイン人を追放してポルトガル領たらしめた功績は大きい。

この探険半ばに、ペルナンブーコがオランダ軍に侵略されつつあることを聞き、彼はひとまずサンパウロに引き返して北部の防衛戦に参加すべく、サン

パウロ軍の指令官として戦地に参じたことは有名な逸話である。

オランダのブラジル侵略は一六三〇年に始まるが、ペルナンブーコを第一にリオ・グランデ・ド・ノルテ、セルジッペ、パライバ、バイアにその攻略の手が伸びつつあった。

一六三九年にラポーゾ・タヴァレスの率いるサンパウロ軍はサントスを船出し、リオとエスピリット・サントの軍隊と合してバイアに向かい、果敢な奮戦によってオランダ軍を敗北させた。

ラポーゾ・タヴァレスを指令官とするサンパウロ軍が、オランダ軍と戦った地域は主としてサン・ロッケ半島であるところから、カーボ・デ・サン・ロッケの戦闘とも言われる。その大勝の功によってラポーゾ・タヴァレスに、メステレ・デ・カンポの称号が授けられた。しかし当時はポルトガルの国力不振のため、ブラジルはスペインの統治下におかれていたことは歴史にみる通りだが、一六四〇年となって、ポルトガルとブラジルに歓喜の日が到来した。それは、ポルトガルが六十年にわたるスペインの統治を脱して以前の独立王国に復し、ドン・ジョアン四世が王位についたことであった。

そのころ既にブラジル人の間に独立を願う兆候が

見えたが、ラポーゾ・タヴァレスはポルトガル王室への忠誠を誓いつつ、ブラジルの繁栄に尽くした。

彼は大面積の土地を所有して資産を積み、安逸な生活を楽しめるまでになった。が、生来の冒険児はそれにあき足らず、またしても奥地の探険を決行したのであった。当時の彼は五十歳であったが、数カ月を探険の準備に費やし、一千余の人員からなる探険隊を組織して気炎万丈、いよいよ出発の日が到来した。彼は再度リオ・グランデに進み、パラグワイを経てマット・グロッソからボリビアに至り、ついにアンデスを征服した。

晩年の彼は決して幸福ではなく、不遇のうちに世を去ったが、いつどこで没したかすら明らかでない。大体一六五八年ごろ、六十歳で他界したと推定されるのみである。

銀の夢

初めに念のため一言。ブーロはポルトゲースの代名詞だ。あまり芳しくない代名詞だが、これはポルトガル人のねぼり強さというか強靭性を意味する。もしブラジルの植民期のポルトガル人が才気に富ん

で、あの鈍重なまでの強靭性に欠けていたならば、百年以上にも及んだバンデーランテスの奥地探険もなく、ブラジルがこれほど広大な国土を確保し得なかったであろう。

とかく利発な者は結論を急ぐ傾向があるが、それはややもすればあきらめでありうる。植民事業にして特にしかりである。従って、人は時に臨んでブーロであることも必要であり、これが古今を通じての人生哲理かも知れない。

この表越の銀の夢は、本来ならば銀物語りとすべきであった。これはバンデーランテス史以前の銀探索をめぐる幾つかの物語りをコント風につづった『ロマンセ・ダ・プラタ』の抜粋要訳であり、著者は歴史小説家として名高い、パウロ・セツバルであることを付記する。

〃ＰＲＡＴＡ〃（銀）これは十六世紀のヨーロッパの人々に大きな魅力であった。

植民初期のブラジルは、パウ・デ・チンタ（赤色の染料の樹）とパパガイオ（オウム）並びにインジオ（土人）で知られていたが、それ以上に注目の的となったのが銀だ。十六世紀のヨーロッパでは、銀が金よりも貴重視されたことは、種々の文献で知られる。わけてもスペイン人とポルトガル人がシノギ

を削って捜し回ったのが銀であった。そして、だれいうともなく新天地ブラジルには至るところに銀の鉱脈があるとのこと、これが冒険児の血をわかせたのは当然である。

スペインが豊富なペルーの銀鉱を獲得して、一躍ヨーロッパ第一の強国になったことは歴史の示すところだが、そのペルーがブラジルの地続きだから、必ずブラジルにも銀鉱があるに相違ない、というのがそのころのポルトガル人の常識であった。ブラジルの初代総督トメー・デ・ソーザの、ポルトガル王室への報告書にも、ペルーに銀が発見されてブラジルにそれがないはずはない、といかにも確信ありげに述べられている。

どこまで事実かはわからないが、カブラルがブラジル発見のミサを挙行した時に、海岸で目撃した土人が銀の燭台らしいものを持っていたことも王室への報告文の中に見られるとか、こんなことはブラジルの史書には記されていない。

さて、カブラルのブラジル発見がポルトガル王室に報告されてから、それを確認するために第二回、第三回の探険隊が繰り出された。リオのグワナバラ湾を発見したゴンサロ・コエーリヨの探険隊が南航

してプラタ地帯に到達した時にも、河岸で銀の斧を見つけたなどの話があるが、これになるといささか童話じみている。

その時のゴンサロ・コエーリョの王室への報告には、プラタ河をさかのぼること二百レグアにして、土人の用いるすべての器具が銀製であることに驚嘆した、という一節がある。二百レグアは千二百キロだが、あの当時にプラタ河を、それほどの長距離さかのぼったとは考えられない。また、航海家のフェルナンド・デ・ノローニャにしても同じで、ブラジルの陸地が銀でおおわれているような報告をしながらも、彼自身は染料のパウ・ブラジルの切り出しをやって、それで大もうけしたのはどうしたものか。

このようにブラジルを訪れた航海家や探険家は、いずれもブラジルの銀を語りながら、いつも銀を一つも持ち帰っていない。しかし、それらの報告によって胸を踊らせたのは、海外移住を望むポルトガル人であった。それは主としてポルトガルの西南部サグレス方面の住民であった。

サグレスといえば、有名なドン・エンリッケ親王が大洋航海学研究の学校を設けて、アフリカやインド探険を奨励した場所だ。そうした影響で、一獲千金を描きながらブラジルに渡る者を続出したのが、

十六世紀の中葉一五四〇年から一五五〇年のころである。それはマルチン・アフォンソ・デ・ソーザのサン・ビセンテ村の建設後約十年のことだ。

ところで、ブラジルでの銀鉱探索については、第一にジョアン・コエーリョ・デ・ソーザという男をあげねばならない。それは彼がブラジルにおける銀捜しの先駆者だからだ。

当時のポルトガルではブラジルに関して奇想天外のうわさが流布されていた。ブラジルには銀の山脈や銀の峰が各所に存在し、ある山岳のごときは頂上が白銀で輝き、川底は銀で敷きつめられているとか、また鬱蒼たる森林に一歩入れば砂銀が一面に発見される、しかしその反面、人間をひとのみにする魔ものや怪獣がいる等々。事実、銀鉱発見を企ててブラジルの奥地に入りこんだまま行方不明になった者が多く、それらは殆んど土人に殺され、または悪疫で死んだ者であった。

この点、ジョアン・コエーリョは好運児であった。彼はあだ名の、セニョール・デ・ジェキリサで知られていたが、銀探索は三年間つづけられた。彼が好運に恵まれたのはたくさんの銀を発見したのではなくて、比校的無事に探険を終えることができたとい

うに過ぎない。彼は山なす銀を発見したとも伝えられたが、それはどうやら眉ツバものらしい。
ジョアン・コエーリョは砂糖農園を持っていたので、生活に窮することはなかったが、銀鉱探索に殆んどの資産を使い果たした。
その間、あらゆる冒険をあえてし、僅かばかりの銀の発見で大いに自信を得、意気揚々として引揚げる途中、彼の農園近くで病死した。その時彼が、弟ガブリエル・ソアーレスにあてた遺言には「ブラジルには確かに銀鉱がある。もしその銀鉱探索が本格的に着手されるならば、王室（ポルトガル）の経済は容易に立直るであろう」と書かれてあった。兄の遺書を読んだガブリエル・ソアーレスは、何ものかを決意するところがあったが、同時に彼の耳には次の言葉がひびいた。
「用心せよガブリエル・ソアーレス、今までにブラジル奥地の銀鉱発見に乗り出して、生きて帰った者は一人もいないぞ、よいかガブリエル・ソアーレス……」と。
しかし当のガブリエル・ソアーレスは兄の遺言を信じ、銀の峰を夢みながら敢然その探索に歩を進めることになった。
そこで彼が考えたのは、銀鉱の発見は、小規模の

探険では困難だ、どうしても大掛かりの組織と財源を必要とする。それにはスペイン政府を説得せねばならない。彼は在ブラジル十七年の経歴にものいわせてスペインを訪れることになった。当時は、ポルトガル本国とブラジルはスペインのフィリッペ王朝の統治下にあったからである。

ここでガブリエル・ソアーレスの人物を説明すると、彼はバイアの砂糖農園主であると共に、文学者としても有名であった。おそらく彼は、植民期ブラジル文学史の第一ページにのせられるべき人物であろう。

彼はスペイン王室を訪れるに先だって、ブラジルの銀鉱探索とその可能性についての名文をつづり、ＴＲＡＴＡＤＯ　ＤＥＳＣＲＩＴＩＶＯ　ＤＯ　ＢＲＡＳＩＬの標題を付け、麗しい赤色の表紙をつけたが、後日それがリーブロ・ベルメーリョとして著名の文献となった。

これを彼がスペイン王室に提出するに当たって、多大の協力をしたのが王室との関係深い政治家の、クリストヴァン・デ・モレーラであった。

ガブリエル・ソアーレスのスペイン訪問は功を奏し、王室から相当の援助を得てブラジルに帰ることができた。

ガブリエル・ソアーレスの銀鉱探索隊は数百人から成るもので、その中には約二百人の順化された土人タプイオがいた。この土人は全部が弓術に長じていたのは大きな強味であった。

先ずパラグワスー河の上流、クワレルーを根拠としてそこに城塞を築いた、とはひどく気長な話であるが、これが、ブラジルの海岸線から数百キロ隔たる奥地に、白人によって設けられた最初の建物であろう。

ところが、その場所は水が悪質であった上にたくさんの毒蛇や毒虫がいて、ガブリエル・ソアーレスの描いていた銀の世界とは遠いものであった。特に驚いたのは無数の蝙蝠（コーモリ）がいてそれが夜間に馬の血を吸ってやせさせ、ついには死滅させることだった。他方、人間は食糧不足のために衰弱し、あまつさえ悪疫をわずらって高熱に呻吟し、死亡する者が相次いで現われた。しかもガブリエル・ソアーレスの唯一の頼みである先導者のブーグレ・グワラシーが、ある湖水のほとりで熱病で急死したことは彼をして少なからず落胆させた。その時に、彼の耳元で再びささやく言葉があった。

「用心せよ、ガブリエル・ソアーレス、今までにブラジル奥地の銀発見に乗り出して、生きて帰った者

は一人もいないぞ、よいかガブリエル・ソアーレス……」

しかし、それと同時に彼は死んだ兄の遺言を思い出し、奮然、勇を鼓して更に奥地へ向かって歩みを進めた。

このように、ガブリエル・ソアーレスは初志を曲げなかったが、他の探険隊員は次第に希望を失い、かろうじて疲れた足を運ぶありさまであった。もっとも食うに食物なく、着るに衣服ない状態では勇気喪失も当然である。

「ブラジルの銀は裏ぎりものだ。その発見のために一人残らず死に絶えているのだ」という声がどこからともなく人々に聞こえてくるのであった。しまいには狂人のように奇怪なうわ言をして死ぬ者が現われる悲惨さであった。夜半となっても暑さきびしく、ヤブカに責められて眠られぬままうとうとしていると、突如、野獣のうなりにも似た異様な声が聞こえた。

ガブリエルは直ちに起き上がると、カタナを手にして外を見やった。（註＝ポルトガル語のカタナは大ナタを意味し、日本の刀に通じるのが面白い）その騒音はほかならない、探険隊員のインジオの謀叛であったのだ。それに恐れをなした他の者は、遁走四散した

まま行方知れずになったのが多い。ガブリエル・ソアーレスは孤軍奮戦の悲壮な覚悟はしたが、彼自身が熱病に侵されて身動きもならない重態であった。彼はすぐれた文才をもちながらも、多くの著作も残さず、さりとて捜し求める「銀の峰」をも発見せずして空しく病死を遂げた。

その後に登場したのが、白人と土人（カラムルーの娘）との混血児メルシオール・デーアスで、半ば伝説的な人物だが、彼によって相当の銀鉱が発見されたといわれる。彼はその功労で爵位に叙される報に接し、スペインのマドリードを訪れたはよいが、元来が白人とブラジル土人の混血児であるところから、たいして教養のないカボクロであったので、スペインの宮廷の人々から冷たい目で見られたのは止むを得ない。

彼は憤然爵位を拒絶し王室を辞してブラジルに帰った。

彼もさるもので、ブラジルのどこで銀を発見したかばだれにももらしていない。

しからば彼は、実際にブラジル奥地で銀鉱を発見したかどうか。彼は発見した銀を山中に隠してあったのだろうか。これは彼のみの知るなぞである。

それから幾歳月が流れ、彼が死の床にある時にその耳にささやくものがあった。

「用心せよ、メルシオール・デーアス、今までにブラジル奥地の銀鉱発見に乗り出して、生きて帰った者は一人もないぞ、よいかメルシオール・デーアス……」

しかし、彼は皮肉な微笑を浮かべてつぶやいた。

「おれは、ジョアン・コエーリョやガブリエル・ソアーレスと違って、自分の農園で、床の上で死ねるのだ。だから果報者だ」と。

ブラジルのスイス

ノーバ・フリブルゴ　心の巡礼地

リオ州には三つの名高いシダーデ・セラーナ（山岳都）がある。それはペトロポリス、テレゾポリスとノーバ・フリブルゴであり、これらは風光絶佳で知られるばかりでなく、歴史的にもいわれのある土地だ。

ペトロポリスとテレゾポリスについてはドン・ペードロ二世の面影が浮かび、ノーバ・フリブルゴと聞いてはドン・ジョアン六世と、純朴なスイス人

の移民村がしのばれる。しかもノーバ・フリブルゴは、ブラジルの外国移民発祥地であり、この点からも学ぶところがある。

ノーバ・フリブルゴはその名称からしていかにも旋律的であり、〝山脈の宝玉〟といわれる街の姿が眼前に描き出されるようだ。あの青空にくっきりそびえるドゥアス・ペドラスの岩山と、市街を流れるベンガラ川とには、前世紀からのフリブルゴの歴史が秘められている。部厚いジュウタンを敷いたような緑の山と樹林の境フリブルゴの美は、多くの詩人によってうたわれている。

かつて、ルイ・バルボーザがフリブルゴのアンシェタ高等学校での祝辞に「私のように心の巡礼地を求める者にはフリブルゴは聖堂である」と述べた心境がわかるような気がする。

また文豪マッシャード・デ・アシスは、病気療養のためフリブルゴに数カ月滞在したが、この土地をこよなく愛し、その間著作の思索にふけったこともうなずける。

名外相リオ・ブランコも名を成す以前、この町の検事として短期間を過ごしたのはおもしろい縁故だ。

さて私のリオ訪問は前後を通じて数十回、いつも

ながら商用の多忙さは、名所を散歩する気持ちすら起こさせないが、今回は同行の妻の希望もあったので、ノーバ・フリブルゴまで歩をのばすことにした。

リオでの用務を終えた私は気分も軽く、プラサ・マウアを出発したのが年前七時、バスがアベニーダ・ブラジルからフルミネンセ低地を過ぎるころには、はるかの前方に頂きを浮雲でつつまれたテレゾポリスのデード・デ・デウスの奇峯が見えはじめた。

この新道はペトロポリスもテレゾポリスも通らずに、直接ノーバ・フリブルゴに達する。途中カショエイラ・デ・マカクーで小憩をとり、快走すること三十分で山岳路にかかる。鬱蒼たる天然林は山をおおい、渓流が右方左方に現われ、岩間から落下する小滝に乗客は歓声をあげる。

蜿々迂回する車道から遠く谷を隔ててレオポルジナ鉄道が細い線を引き、がん具のような汽車が走っている。谷間には点々としてクワレスメーラが紫色の花を咲かせて、復活節の近づきつつあることを思わせる。この山はイペの季節には美しい黄色や赤色で飾られるであろう。

やがてバスは山路を登りきって走りつづけると、ヨーロッパ型の別荘風の建物が見える。ほどなくユーカリの並木が美観を添えるプラッサ・プレシデ

ンテ・ヴァルガスのバス停車場に着く。
フリブルゴに着いた私たちの目に奇異に映じたのは、住民の大部分が純ブラジル系かカボクロ系であることだった。と言うのは、金髪碧眼の白い皮膚のスイスやドイツ系の住民を想像していたからである。フリブルゴ開拓の始祖スイス人の子孫は四散し、あるいは絶えたのであろうか。もっとも、昔スイス移民村が創設されたのはモーロ・ケマードで、現在の市街地からは少し離れている。
標高八百五十メートルとはいうがかなりに暑く、フリブルゴの特徴である乾燥した気候と反対に降雨がつづいて多いのは今年の変調というべきであろうか。
フリブルゴは冬期がよく、寒い中にも湿気を含まないために空気が澄みきっていて、朝晩の爽快さはたとえようがないという。
この町は幾つかの山に囲まれ、あたかもカリスの底に形成された観がある。市街そのものはたいして感歎するほどでなく、ブラジルのスイスといわれる風光美は周囲の山の眺望にある。またヨーロッパ的な感じは高台の斜面に設けられた別荘地にある。
リオから直線九十一キロ、自動車路は迂回しているため百五十キロ、バスでは三時間半の旅程であ

る。

フリブルゴの北部はスミドゥロ、ボン・ジャルジン、トラジャノ・デ・モラエス、東部はマカエー、南部はカジミロ・デ・アブレウ、シルバ・ジャルジン、カショエーラ・デ・マカクー、西部はテレゾポリスの諸郡に相接している。

地勢図で見ると、フリブルゴの所在するオルゴン連山は、海岸山脈の一つの分かれであって、この中にモーロ・ケマード、ベルタ、サン・ジョアン、ボア・ビスタ、アンパロ、ボア・エスペランサ、マカエー、パケケールなどの山々が存在する。

山岳地であるから水流と瀑布が多く、おもな滝にはハンス、サント・アントニオ、カテテ、ペネルなどがあり、これらにはノーバ・フリブルゴ電力会社の発電所が設けられている。

柿栽培の始祖

春日亨氏

フリブルゴに到着するやいなや、直ちにバス停車場建物の階上にあるドトール・カスガ（春日氏の令息）の診療室を訪れ、何かとフリブルゴの案内について教えをうけ、そのあと郊外のチングリーに柿園

を経営する春日享氏を訪問して敬意を表した。
春日氏は人も知る通りフリブルゴの邦人の草分けであり、しかも一九二七年に、野田良治氏の斡旋で現在の場所に農園を構えて以来、他に移転もせずに今日に至っていることは、むしろ異例というべき存在であろう。
春日氏は、野田良治氏と親交がありフリブルゴを訪れたが、たまたま一九二七年当時の市長ドトール・ザニットの農場で、柿の熟しているのを見た。これにヒントを得て、本格的な柿栽培に乗り出したのが、同氏が柿作りとなった動機である。
市街の中心から約一キロ半、近来の雨続きでデコボコの坂道は洗われ、緑色を帯びた石が所々に露出しているのは実に風情があった。
春日氏の農園の入口の門には、なるほどローマ字つづりで柿園と記されていた。
春日氏は数年前からの中風で、不自由されていると聞いていたが、私の訪問を令息の電話で知られ、窓口に立って待っておられた。
春日氏夫妻との歓談は、何かと私の参考になったが、特に同氏がフリブルゴに入った当時の思い出話しは、興味尽きないものがあった。
今から三十数年も前のこととて日本人は珍しく、

よく支那人とまちがえられたこと、当時のフリブルゴには昔日の豪勢な珈琲園の跡が残っていたこと、また現在の農園の付近に猿やタツーが見られたこと、等々であった。

かつて野田良治氏が春日氏に語って、「リオはブラジルの玄関だ。それにもかかわらず、今までの日本移民は横側からはいっていた形だ。リオ付近にこそ日本人によって理想郷がつくられるべきである」と。

この野田氏の説に動かされて春日氏は、フリブルゴに入つたという。この意味では野田氏、柿栽培ではドトール・ザニットが恩人であるとて、両氏の肖像画が春日氏の居間に掲げられている。

現在ではフリブルゴに五十家族の日本人がいるが、いずれも子弟教育に熱心であるのは、将来のために心強い限りだと言われた。

春日氏の令息二人もそれぞれ大学を出られ、長男は医師、次男はニテロイの山県工務所の技師として活躍しておられる。

春日氏宅を辞した私たちは、雨の中をサン・クレメンテ公園のパーク・ホテルに向かった。

フリブルゴの史的回顧

ノーバ・フリブルゴは、一八二一年まではカンタ・ガーロ郡に属していた。

カンタ・ガーロ郡と言えば『オス・セルトンエス』の著者エウクリーデス・ダ・クーニャの誕生地だ。

一八〇八年にポルトガルの王室をブラジルに移した摂政ドン・ジョアン（六世）は、ブラジルの発展のため諸外国に対して開港し、自由貿易を認めると同時に外国移民の誘入を奨励した。幸い、一八一七年からスイス国の外交官ニコラウ・ガシエーを介して、スイス人による移民村の創設が交渉されていたので、ドン・ジョアン六世は一八一八年五月十六日付の法令をもって、それを認可した。翌一八一九年には、スイスのフリブルゴ地方から百家族の移民が到着して村を創設した。これがリオ州カンタ・ガーロ郡のモーロ・ケマードで、ブラジルの外国移民史の発端である。カンタ・ガーロ郡がスイス移民村に選ばれた理由は、この地点がスイスの気候風土に似るためであった。

ドン・ジョアン六世は、最初の移民村であるモード・・ケマード耕地の建設促進を目ざして特別債券を発行したが、その売上げは八十五コント二百ミルレースに達した。これは当時としては莫大な金額で

あった。

新設されるべきスイス移民村の指導監督に任命されたのは、ペードロ・マッシャード・ミランダ・マリエーロス僧であった。

彼は旧モーロ・ケマード耕地を一〇、四六八ミルレースで買収し、これに政府からのセスマリア（未開拓の無償分譲地）を併合して村の建設に着手した。

まずコロノのために百戸の住家を建て、中央に教会を設けて、これにサン・ジョアン・バチスタと名付けた。

ここで付記せねばならないのは、この百家族のスイス移民は、カトリック教徒であったことだ。

この第一回移民の後続部隊として、二回にわたって移民が来着したが、その合計は二百六十二家族で千六百八十二人に達した。この内訳は、男八百四十六人、女七百三十六人であった。ところが初めのブラジル政府と外交官ニコラウ・ガシエーとの契約では、八百名を限度とするものであったのに、ガシェーが独断で千六百八十二名ものスイス移民を導入したため、それらを入れる施設が不十分で、困難をきわめたと記録されている。

しかしスイス移民の不屈の努力は功を奏し、一八

二一年にモーロ・ケマード耕地はビーラ（村）の資格を得て、ノーバ・フリブルゴ村と呼ばれることになった。

進んで一八二四年には、六十一家族、三〇二人のドイツ移民が到着した。それは全部プロテスタントであった。その指導者としてはフリーデリヒ・サウエル・ボン牧師と、医師ヘンリック・デンクウイツがいた。

その後は歳月を経るにつれて、当のスイス移民とドイツ移民はミナス方面に移転するものが多くなり、代わってイタリア、ポルトガル、シリア移民がはいってきて相当の繁栄を見せた。しかし、フリブルゴ村の基礎を築いた最初のスイス移民の功績は、高く評価されてよいであろう。

一八七二年にフリブルゴの人口は六、三〇三人に達したが、この中の八九七人は奴隷であった。

一八九〇年にフリブルゴはシダーデの資格を有し、生産増加と佳良無比の風光気候と相まって、ブラジル有数の優秀都となった。

現世紀初めとなっては、進取の気性と独創力に富む幾多の人材がフリブルゴに定住し、それ以来は工業都の趣きをもつようになった。そのおもな人物をあげると、ジュリアス・アルプ、マキシミリアン・

ファルク、ウィリアム・ピーコック・デニスで、これらの人士によってフリブルゴの誇りともいうべきレース工業と皮革、ゴム、織物、金属加工業をもつに至った。

またドイツ人ではヨハン・ハーシス、ヘルマン・オストマン、エミール・クリッフ、エルネスト・オット・シームス、ハンス・ガイサーなどの諸氏によって、フィロ工業会社が創設された。

現在のフリブルゴの主要工場は約三十で、その工務員は八千二百、年産額は百三十八万八千コント（一九五九年度調べ）に達している。

特にレース工場とフィロ工場、イプー工場のごときは、いずれも美しい風景に因まれ、その建築様式と内部組織、従業員の衛生、娯楽設備は、工場芸術の粋といっても過言ではない。

教会と学園の都

ノーバ・フリブルゴの、他の都市に見られない特異性は、旧教と新教教会が渾然と共存し、全人口の割合いに学校の多いことであろう。まず旧教教会ではサン・ジョアン・バチスタ系が十二、ノッサ・セニョーラ・ダス・ドーレス系が四、サンタ・テレジー

ニャ系が三つ、これらに付随する宗教団体が十二ある。

また新教教会も十二あるが、プレスピテリアンが教会と信徒の数で絶体優位にあるようだ。

また、ドイツ移民が多いだけにルーテル教会があり、更に十三のセントロ・エスピリタ（交霊教会）もあるなど、けだし壮観というべきである。

今一つのフリブルゴの特徴は、学都の観を呈していることだ。全市に九十五の学校をもつことでは他に類を見ぬであろう。その学生数は六、九三八、ほかに二十一の私立小学校もあるが、その就学児童は二、〇七三である。

高等学校で有名なのはコレジオ・アンシエタで、この創立は一八八六年であり、古い伝統とすぐれた校風はフリブルゴの誇りである。同校の現在の建物は一九〇七年に完成し、建築様式が城閣を思わせるところから〝シャトウ〟と呼ばれている。この学校は、ドン・ジョアン六世が、スイス移民の子弟のために設けた私塾がその始めをなしている。なおこのごろでは、遠く、アマゾン、パラー、南リオ・グランデなどから、この学校に入って勉学しているものもある。

他の高等学校ではコレジオ・ルイ・バルボーザ、コ

レジオ・ノッサ・セニョーラ・ダス・ドーレス、コレジオ・ノーバ・フリブルゴ（財団法人ジェツリオ・ヴァルガス）、コレジオ・モデロ、コレジオ・セフェル等がある。中でもフンダソン・ジェツリオ・ヴァルガスの高等学校は、高台の風光明媚の地に所在し、環境に恵まれている。このような雰囲気の中で学ぶことは、人生最大の幸福であると思われる。

フリブルゴ周辺の遊覧地には、荘園地のサンス・ソウシー、サンタ・テレジーニャ、ヴェオ・デ・ノイバ滝、オリファス遊園地、カレドニア・ヴァレーなどがある。また遠足地ではカテテ洞窟、カレドニア山、ポルセレー山、インペラドール山などがある。

サン・クレメンテ公園とパーク・ホテル

フリブルゴの幾つかの公園で、パルケ・サン・クレメンテが最も名高い。その自然美と人工美の配置、規模の大きさは感嘆のほかない。山と樹林、水の美しさのこれほど調和するところも少ないであろう。

この公園はかつてサン・クレメンテ男爵家の所有地であって、造園芸術家グラジオウの設計になるものだ。グラジオウは、リオのキンタ・ダ・ボア・ビ

スタをはじめ幾つかの遊覧街の設計家として知られている。

前方に三つの岩山が見えて満目の緑は滴るばかり、ただ樹林に囲まれた沼が連日の降雨のためか濁水であるのが遺憾だ。

左方の高台にパーク・ホテルがある。私たちはこのホテルに投宿し、普通のホテルで味えない静かな山荘にいるような気分に浸り得たのは幸いであった。このホテルはエスチーロ・ルスチコといぅ丸木と板、石によって建てたもので、山荘設計家として著名なルシオ・コスタの設計という。所有主は当国の富豪且つ名門のギンレ家で、上流知識人に対してフリブルゴ観光を奨励する目的で営利を度外して造られたものだ。現在のホテル経営者はギンレ家からの貸借人で、上品なイタリア人夫婦がこれに当たっている。部屋の数は全部で十に過ぎなく、そこに大規模のホテルに見られない家庭的な気分が生まれる。

二階建の階上には十の客室が並び、地階はロビー、ホール、娯楽室、食堂からなっている。

全体の設計は一見簡素にして凝ったものだ。雨降りに屋根からの点滴が下の細長い池に落ち込む工夫は、なかなか妙を得て面白い。その中で鯉や金魚が

泳ぎ回っている。一切の家具調度も建築様式に調和したもので、ホールには大きな独創的な養禽場があり、数羽のカナリアがさえずっている。建物の裏側にみごとな庭があって、多種多様な植物が見られ、小さな植物園を思わせる。

私たちは二日目の朝、室のバルコーで、前方の沼と樹林の景色を賞しながらトマカフェーをした。高い木立の上にビン・テ・ビーが悠然と止まり、滝の音にまじって蝉の鳴き声が聞こえる。

トマカフェーを終えた私たちは、この公園内にあるフリブルゴ・カントリー・クラブを訪れて案内を頼んだ。同クラブの書記長は私が日系新聞の寄稿家であることを知って、いとも丁寧に説明をしながらクラブ施設の一切を見せてくれたのは感謝であった。

このクラブの建物と所属庭園は、クレメンテ男爵家の別邸であったもので、昔のままの室内装飾と家具が保存されていて大いに参考になった。特にはなやかな天井画と彫刻を施した大理石の暖炉、豪奢なシャンデリアなど、調度のすべては前世紀の貴族であった大農園主の生活をしのばせるものである。

この大庭園と別邸を造営したクレメンテ男爵ことベルナルド・クレメンテ・ピント・ソブリーニョは、

初代のフリブルゴ男爵アントニオ・クレメンテ・ピントの令息である。
してブラジル随一のラチフンジオであった。おそらく帝政期の数多い貴族の中でも、クレメンテ男爵父子ほど、教養高い大資産家で模範農園の経営者、社交的にも洗練された紳士としての高い文化生活を送ったものはあるまい。
彼等の名はブラジルの歴史にも刻まれているが、その全盛期には工業家としても聞こえ、政界にも重きをなした。彼ら父子がフリブルゴ一帯の産業と文化の発展に寄与したことは実に大きい。
このフリブルゴ男爵の本邸がリオのカテテ宮であり、これが後に共和政府に買収されて大統領の官舎となったことは周知の通りである。
当国の首都がリオからブラジリアに移されて、カテテ宮は博物館になったが、これについては稿を改めて述べてみたい。
話はサン・クレメンテ公園のフリブルゴ・カントリー・クラブにもどるが、前述のギンレ家に所有されていた旧クレメンテ男爵別邸が、一九五七年に現在のクラブの所有に帰した。それ以来、莫大な費用を投じて種々の設備を完成したが、主として社交、運動、物理体育室、蒸し風呂、水浴場、おとなおよ

び子供用プール、食堂、野外食堂、バール、娯楽場などである。

建物の周囲の庭園も広大なもので、たくさんの珍しい樹木があるから、植物に興味をもつ人にはまさしく天国である。

このサン・クレメンテ公園は、同公園分譲地（別荘用）の地主に共同所有権があって、その保存管理に多大の努力が払われている。

サン・クレメンテ公園を見て深く感じたのは、同公園と内部の建物にはクレメンテ男爵の家風と歴史が蔵され、またギンレ家の理想が反映していることである。

結局は人間が邸宅を建て、庭園を造るのは後世に残る大きな芸術であると思う。

これをもってこの稿を終えるとして、私たちには僅か一週間の旅であったが、ノーバ・フリブルゴに遊んだことは生涯忘れ難い思い出となるであろう。

植民期の南リオ・グランデの歴史

黎明期の南リオ・グランデ

南リオ・グランデの開発は比較的おそく、十七世紀の中葉に始まっている。ブラジル南部の天然資源と土人捕獲の目的で探険を企てたバンデーランテ、並びにパラグワイとウルグワイを本拠とするスペイン系ジェズイットの土民の教化とによって、南リオ・グランデ開拓の第一歩は進められたのである。

当時の南リオ・グランデからウルグワイにかけては、土人グワラニー族の中でも勇猛凶悪で知られるシャルアースや、ミヌアーノス、タペーなどの部族が住んでいた。リオ・グランデ・ド・スールの名称もなく、漠然とタペーまたはパトスと呼ばれていたにすぎず、パトスはサンタ・カタリナと南リオ・グランデの総称のようなものであった。パラナ河とウルグワイ河の西方の地域はビーラ・リーカ・ド・エスピリト・サントといわれて、スペインの支配下にあった。

一四九四年に、パーパ・アレキサンダー六世の立ち会いの下に、ポルトガルとスペインに締結された、トルデシーラ協定線外に南リオ・グランデがお

かれ、十五のカピタニアの最南端であるカピタニア・デ・ペロ・ロープス・デ・ソーザが、サンタ・カタリナの北東海岸線の一小部分を占めるのみであった。従って、正確には南リオ・グランデはスペイン領であったが、その画然たる境界はなく、面積も知られていなかったのである。そこで、もし勇猛不敵のバンデーランテの探険がなかったならば、南リオ・グランデはブラジル領(当時のポルトガル領)たり得なかったことが想像される。あわせてウルグワイ河に沿って設けられたジェズイット・ミッションの教化土民村が、南リオ・グランデの開発に大きな影響を及ぼしていることを知らねばならない。一七五〇年のマドリード会議によって、長い間ポルトガルとスペインの紛争地であったサクラメント植民地と、セーテ・ミッソンエスの領地問題が解決されると同時に、南リオ・グランデが、ブラジル領として地図の上に表わされた。しかし、その境界線がやや明瞭となったのは一八〇一年以後であり、それは一七七七年のサント・エルデフォンソ条約に基づくものであった。

元来南リオ・グランデは、サンタ・カタリナに併合されてリオ・デ・ジャネーロ庁の直轄下にあったが、一七六七年に、南部の軍事的重要性によりリオ

行政区から分離され、一八〇七年にはサン・ペードロ・デ・リオ・グランデの名称で、カピタニア・ジェラルに昇格し、直属のカピタニア長官が任命された。

このように、南リオ・グランデにはおくれて独立カピタニア制がしかれたため、他のカピタニアとはその開拓史を大いに異にしている。見方によっては南リオ・グランデの開発を促したものは、サクラメント植民地をめぐるポルトガルとスペインの闘争であったと言える。つまり南リオ・グランデは、幾たびにも及んだサクラメント植民地奪回戦の基地となり、占領後はその前衛地とされたからである。

さて年代を迫って述べると一六三一年に、バンデーランテ・パウリスタの雄傑ラポーゾ・タバレスを筆頭に、ルイス・デーアス・レーメ、フランシスコ・ブエノなどによってパラナのグワイラ地帯に大規模の探険が行なわれ、二万の土人カリジョ部族を捕虜にした記録がある。一説にはこの時の捕虜数三万五千とも言われるが、それはかなり誇張されているようだ。

当時、ウルグワイ・ミッションを本営とするジェズイットに指導された土人一万が、グワイラ地方から南下してサンタ・カタリナと南リオ・グランデ、ア

ルゼンチン境に達し、広大な土人村を形成して牧畜に従事し、非常に繁栄していた。しかし、この一帯はミッソンエスと言われ、後日に名外相バロン・ド・リオ・ブランコの登場と相まって、ブラジル対アルゼンチンの領地問題の中核となったところだ。

以上の史実に照らしても、最初に南リオ・グランデとその隣接地に足跡を印したのは、バンデーランテ・パウリスタと、スペイン系ジェズイットであると言える。

一六五四年になると、サンタ・カタリナの海岸線伝いに進出し、その南端に達したバンデーランテのドミンゴス・ブリト・ペーショットが、少数の農夫や漁夫の協力を得て一つの村落を設けた。

それがラグーナである。

そのころのブラジルの地図には、南部はサンタ・カタリナからラプラタまで一つの海岸線がひかれるだけで、村や集団地は全くなく、ラグーナが最南端のビーラであった。

ところで、さきにあげた人物ドミンゴス・ブリト・ペーショットが、ラグーナを根拠地として更に南部の探険に乗り出したことが、南リオ・グランデ開発史の起源をなしている。

いうまでもなく、ラグーナはサンタ・カタリナ州

だが、ここから南リオ・グランデ開拓が進められたので、ラグーナはあたかも南リオ・グランデ州であるかの錯覚を人々に与えているようだ。

ラグーナは南リオ・グランデ開拓の関門であるばかりでなく、後日のファラポスの内乱の時、イタリア人の革命児ガリバルジの出現によって有名となったことは、歴史の示す通りである。

十七世紀半ばには、リオ駐在のゴヴェルナドールが南部ブラジルの行政権をもっていたので、ドミンゴス・ブリト・ペーショットを南方ブラジル海岸線防衛のカピトン・モールに任じたとある。

カピトン・モールは、植民期ブラジルの軍政警察権を帯びる大佐級の官職であった。

他方、ブラジル南部の開拓が遅々として進まず、いつまでも村や町が形成されぬことについて、一六七八年、ポルトガル王室諮問機関の海外参議会が王ドン・ペードロ二世に対策を提案したが、それはブラジル南部海岸線の防衛と開拓を促進する内容のものであった。

ドン・ペードロ二世と対面した海外参議長のマノエル・ローボの言うに、ブラジルのラグーナ以南ラプラタまでの領域は、カステラ（スペイン）領たるやブラジル（ポルトガル）領たるやも判然としない

状態である。聞くところによれば、カステラ王国はひそかにあの領地の開拓を企図している由。従ってカステリアーノがラプラタ地帯から侵大してかの土地を占拠する以前に、ブラジルのリオ駐在のゴヴェルナドールに指令し、適材を南部に派遣させて軍事行政権を強化し、ポルトガル王室の名において、あの領土の占有権を確保すべきである、と。

そこで、当のマノエル・ローボがリオのゴヴェルナドールに任命され、二百名の軍人と数十名の農夫を引率して、ブラジルに行くことになった。

マノエル・ローボの艦隊は、リオのグワナバラ湾に数日停泊したのみで直ちに南航してラプラタ海域に達した。かくしてラプラタ河の北方に要塞を築いて根拠としたが、それがサクラメント植民地で、一六八〇年のことである。

これによって・従来ブラジル南部の地図には、ラグーナを唯一の村として黒点が印されていたのが、サクラメントにも別の黒点が付され、二つの集団地が設けられたのである。

サクラメント植民地はその以前、スペイン人によって占められていたものだが、マノエル・ローボによって追放された。一説には、スペイン軍は何か感じるところあって、あえて頑強にポルトガル軍に

抗戦せず退却したといわれるが、それが果たして真実かはわからない。

その後一七一五年のウテレシエー会議で、スペインは、ポルトガルに対してサクラメント植民地（当時はノーバ・コロニアといわれた）の所有権を認める調印をした。

そこでポルトガル王室は、直ちにリオのゴヴェルナドール、フランシスコ・タボラに命じて、サクラメント植民地の経営と防衛を固めることにした。しかし、南部のラグーナからサクラメント植民地までの距離はあまりに遠く、その堆持経営には相当の困難があった。果たしてたれがその至難な任務の適任者であるか。

当時のラグーナはドミンゴス・ブリト・ペーショットによって理想的な村となり、彼の子息フランシスコが父の遺業を継いでいた。そのフランシスコ・ブリト・ペーショットは、かつての父と同じくカピトン・モールの官職を有し、声望高くすぐれた拓人と指導者の風格を備えていた。彼には典型的バンデーランテの血が流れていたのである。

リオのゴヴェルナドール、フランシスコ・タボラは、フランシスコ・ブリト・ペーショットに懇篤な書面を送り、南リオ・グランデからサクラメント植

民地に至る海岸線と陸地の実地調査を依頼した。また陸路の開設と共にスペイン人が存在するや否やを確かめ、領地内に居住する土人には寛大であるように促した。このフランシスコ・タボラの書面こそ南リオ・グランデの開発史に大きな意義をもつものである。

フランシスコ・ブリトは、既に老齢でこの探険に直接当たることは不可能であったので、信頼する部下五人に奴隷を従わせてサクラメント植民地に通じる陸路の下検分をさせたが、それが土人の襲撃をうけて惨敗したことは彼を少なからず落胆させた。そのある者は殺され、または土人の捕虜となった。

そこでフランシスコ・ブリトは別に四十人のラグーナ出身の屈強の男子と数十人の奴隷をもって探険隊を組織し、その隊長には彼の女婿ジョアン・マガリヤンエスを当たらせた。ジョアン・マガリヤンエスはポルトガルのブラーガ生まれであり、彼の探険によって南リオ・グランデの植民史が始まったとも言える。

ジョアン・マガリヤンエスは、白人未踏の南リオ・グランデの陸地を横断してラプラタに達した。ウルグワイの平原で彼は土人ミヌアーノス部族と相知り、親交をもつまでになった。ミヌアーノスの酋長

は、ジョアン・マガリヤンエスに協力して隊員と牛馬までも貸与するという親密さと好意を示した。

また、南リオ・グランデでは、スペイン人のジェズイットと共に旅行を続けるタペー土人にも会った。ジェズイットは布教陣営を選定するための旅をしていたのであった。マガリヤンエスはジェズイットの情熱には頭が下がると同時に、彼らの土民教化運動は、ひいてはスペイン人の領土侵入の動因ともなることを恐れ、それを阻止する必要を感じた。

ジョアン，マガリヤンエスがラプラタからの帰路、タペー土人の代表者を説得してラグーナまでの陸路旅行に参加させたのは大きな成功であった。この、彼の南リオ・グランデ横断の記録と報告書が、同地開発の貴重なドクメントとなっている。

ジョアン・マガリヤンエスは第一回のラプラタ探険によって、一千キロ以上の砂質の連山を踏破し、土人から与えられた家畜の群れを追いつつ南リオ・グランデの実地調査をなし、ここが農牧を営む理想の天地であることを知って胸を踊らせた。それはまさに牧畜のための自然条件を具備する天与の地であった。

彼の探険隊員であるラグーナ出身の農夫たちは、無限につづく広漠たる沃野に歓声をあげた。

その後、フランシスコ・ブリト・ペーショットがポルトガル王室に送った書面には、彼の女婿ジョアン・マガリヤンエスがトラマンダイーに設けた農牧地は、南リオ・グランデに造られたエスタンシア（大規模の牧場）の創始である、と記されている。

またそれ以来、いわゆるガウーショ（南リオ・グランデ生まれのブラジル人）が現われた。

十八世紀の南リオ・グランデ

ジョアン・マガリヤンエスによって始められた牧畜は次第に広がり、他のカピタニア向け生畜または乾肉の輸出のために、ラグーナは南リオ・グランデの玄関的存在となった。またラグーナを通じて南リオ・グランデに移住した者も多く、それらの農民と土着の土人との混血児がガウーショの起源ともなっている。

一七三五年にはコスメ・ダ・シルベーラという、かつてジョアン・マガリヤンエスのラプラタ探険隊に参加した男が、南リオ・グランデのビアモン（ポルト・アレグレの近傍）に定住して小麦栽培と酪農を

経営して有名となった。後にクリストヴァン・ペレーラが南リオ・グランデの風土産業を記述した中に、このコスメ・ダ・シルベーラの農業経営に最大の賛辞を与えている。ビアモンは南リオ・グランデの最古の町の一つで、一七六三年から一七七三年まで政庁所在地でもあった。

南リオ・グランデの典型的ガウーショ。

ジョアン・マガリヤンエスについで、十八世紀の南リオ・グランデの植民史に見のがし得ないのは、ジョゼ・ダ・シルバ・パエス少将の業績である。彼はリオのゴヴェルナドールによってサクラメント植民地に差遣され、地理的にその前衛地である南リ

オ・グランデに二つの要塞を築き、また産業開発に多大の貢献をしている。ジョゼ・ダ・シルバ・パエス少将については別に述べるが、一七四一年に、フランシスコ・ダ・クーニャ・カルヴァーリヨというラグーナ人が、ビアモンの付近に農場を設け、そこに礼拝堂を建設した。それとほとんど同時に、ポルトガル人のデオニジオ・ロドリゲス・メンデスが、グワイバ河畔トリステーザに農場を構えたが、それが後日のポルト・アレグレの一部分をなしている。

また前述のジョアン・マガリヤンエスは、更に南方をさして開拓を進め、コンセーソン・ド・アロイオ村を建設したが、それが現在のオゾリオである。この地でパラグワイ戦争の勇将マヌエル・ルイス・オゾリオが一八〇八年に生まれた。

一七四三年にはコンセーソン・ド・アロイオに教会が設けられ、一七七四年となってはフレゲジア（カトリックの小教会区）の資格をもつまでになった。このコンセーソン・ド・アロイオ（オゾリオ）は、歴史の古い割合にたいした発展もせず現在に至っている。いまだに一世紀半を経たコロニア型の建物が存在し、珍しくも中世ドイツの建築様式の教会が見られる。この教会でオゾリオが洗礼をうけたと言われる。

コンセーソン・ド・アロイオと相並んで、南リオ・グランデの海岸地帯の名高い町にはリオ・グランデがある。この町の歴史も古く、その有名な中央教会はリオのゴヴェルナドール・ゴーメス・フレーレによって一七五五年に建設されたものだ。その豪華な建築と内部装飾は、バイアの寺院と同じくブラジルの国宝的存在であり、これに南リオ・グランデの歴史の一部が秘められている。

一七二五年に、バンデーランテのフランシスコ・ブリト・ペーショットは、ジョアン・マガリヤンエスに命じて数百人の白人男子と奴隷をリオ・グランデに派遣し、町の建設に当たらせたのである。ブリト・ペーショットは、そのために自身の資産を傾け尽くしたほどである。

リオ・グランデは、南リオ・グランデのゴヴェルナドールの駐在地となり、また、サン・ペードロ・デ・リオ・グランデとして独立カピタニア制が布かれてからは、その政庁所在地となった。ジョアン・マガリヤンエスは、リオ・グランデの北部対岸にも村を建設したが、それがサン・ジョゼ・ド・ノルテの前身である。また、クリストヴァン・ペレーラも、この半島に定住して村落を築いたが、そのころから牛群をつれてラゴア・ドス・パトスの海峡を横断す

るのが有名なものとなった。それをプロモトリア・デ・サン・クリストヴァンと呼んだ。今もその跡が存在する。ここを経てタマンダイー、ラグーナ、またはサンパウロへ生畜やその他の物産が送られた。現在はこのいわれのある場所に燈台が設けられている。

一七三五年、ゴーメス・フレーレがリオのゴヴェルナドール就任と同時に南方政策として最初に着手したのが、前述のシルバ・パエス少将を派道してサクラメント植民地を奪回し、その防衛を固めることであった。

なぜかというと、一七一五年のウテレシエー条約で、サクラメント植民地をブラジル領と認めたにもかかわらず、スペイン軍はまたしてもそれを襲撃し、占領したからである。

パエス少将は、サクラメント植民地奪回の任務を果たしてからの帰路、暴風雨にあって難渋をつづけ、ようやく動砂地帯を経てテーラ・フィルメ（固定地）に到達することができた。

彼はテーラ・フィルメに達した時、クリストヴァン・ペレーラの真心こもる歓待をうけ、南リオ・グランデの地理地質について多大の教示をうけた。クリストヴァン・ペレーラは南リオ・グランデの地理、

地勢、地質に精通し、その権威であったからだ。

その後、パエス少将がミナス出身の二百名の竜騎兵の協力を得て、ジェズス・マリア・ジョゼ・デ・サンタ・アンナの要塞の構築に着手したのは一七三七年の三月であった。それが現在のアロイオ・マルチンスで、城塞とはいうものの、初めに造られたのは藁と野獣の毛皮を混じた土壁の建物であった。それ以外には矢や弾丸防衛の建築資材がなかったからである。ここで対外的侵略を防ぐ計画であり、一時はサンタ・アンナの要塞地に、南リオ・グランデのゴヴェルナドール代理、カピトン・モールが駐在し、兵器庫までが設けられた。

他方、リオ・グランデは一七六三年まで、ブラジル南方統轄所在地として軍事、政治の重要性にあわせて、農牧産業の中心ともなり、サクラメント植民地とラグーナの中間であるこの地に、別の黒点が印されることになった。

そのころ、リオのゴヴェルナドール、ゴーメス・フレーレとジョゼ・ダ・シルバ・パエス少将、ジョアン・マガリヤンエス、クリストヴァン・ペレーラとの間にかわされた書簡は、南リオ・グランデの史的記録にも等しく、彼らの名は南部ブラジルの植民史に特筆されるべきものである。実に南リオ・グラ

ンデは、バンデーランテのブリト・ペーショット父子に次ぐこの四傑によって、開拓の基礎が固められたのである。

彼ら四名は各々政治、軍事、経済、地理に通じ、しかも燃ゆるがごとき情熱家であり、すべての計画に対して精力絶倫の実践家であった。特にシルバ・パエスは軍人でありながら農業を愛し、南リオ・グランデの農夫の父ともいわれた。彼は一七三八年に、セボラ（玉葱）と小麦の種子をヨーロッパから取寄せてその栽培をはじめ、ついでリーニョ（麻）やメロンの栽培もやった。およそイベリア半島にあるすべての穀類、果樹、野菜の栽培に成功したのは、彼の指導の賜ものである。

また彼は、硬質煉瓦とその他の建築資材をポルトガル、ドイツ、英国から輸入し、従来のタイパや土壁に代わる堅固な建築が現われるようになった。また牛畜搬出用の大型船を建造したのも彼である。当時は牛一頭のリオ・グランデ海峡の輸送に一トストンを徴収したが、これが大きな政府の所得となった。

かくしてサン・ペードロ・デ・リオ・グランデが、ブラジル南部の政治、経済の最重要地となったのはよいが、人口稀薄が問題で、当然人口政策の必要性

が生じた。ところが、たまたま一七四七年にアソーレス群島がひどい飢饉に襲われ、島民が生活にあえぐ状態となったので、難民救済策としてブラジル南部への移住者を募集することになった。

この難民救済策によって、一七四八年には、数十家族の最初のアソーレス植民が南リオ・グランデに着き、それから二年後に血気盛りの二千夫婦が到着した。それらの子孫が現在の南リオ・グランデのポルトガル系人口の大部分を占めている。彼らの中には、そのままリオ・グランデにとどまったもの、あるいはパンパス方面に移動し、土着民と混血してガウーショを生んだものもある。またはポルト・アレグレに定住した家族も多い。その理由によるのか、ポルト・アレグレは初めポルト・ドス・カザエス（夫婦者の港）と称されたものだ。

彼らの中にはポルト・アレグレから更に河を上ってトリウンフォ、タクワリー、リオ・パルド、カショエーラ・ド・スール、グワラバタイーに住居を構えたものもある。

パンパス方面に移動したアソリアーノは、根本的にその生活様式を改めて牧童ガウーショに変わったことは、植民社会学の見地から興味深い研究課題である。その反面、リオ・グランデやポルト・アレグ

レに定住したものが、いつまでもアソーレス以来の生活風習を固持したことは、面白い対象をなすものだ。

アソリアーノは類型的にはポルトガル人だが、細かに観察するとポルトガル本国のそれとはかなり異なる点がある。そのあるものはオランダやサキソンの血をうけている。ガウーショにはまれに金髪の者があるのはそれを物語るものだ。一八二〇年のころに南リオ・グランデを訪れたフランス人の博物学者、サンチレールの旅行記にもそのことが記されている。

今でも南リオ・グランデのある家族の姓からして、オランダ系アソリアーノの子孫であることを否定し得ないものがある。たとえばＵＴＥＲまたはＵＴＲＥＣＨＥＴの姓など、これは後にズトラに変わったのが多い。またはＶＡＮＤＥＲＧＵＥの姓もあるが、これはＶＡＮＤＥＲまたはＨＡＡ・ＧＥＮが原型であり、後にブラジル式に変じてシルベーラとなったものもある。

およそオランダ系アソリアーノは信仰に厚く、彼らの宗教祭日を厳格に記念する習わしがある。

特にエスピリト・サント祭は彼らには最大の宗教行事で、オランダ以来の風習でもある。彼らは概し

て知性に富み、勤勉快活で平和を好み、しかも誠実である。そのフェスタには覆面舞踏に興じるのが唯一の楽しみのようだ。農夫としても優秀で、彼らによって南リオ・グランデの小麦栽培が普及され、その産額を増した。グワラバタイー、カサパーバ、カショエーラ・ド・スールなどが、アソリアーノによって小麦産地となったと言っても過言でない。

アソリアーノを、南リオ・グランデに送るポルトガル政府の方針として、四十歳未満の夫婦を選んだことは賢明であった。ポルトガル政府は、アソリアーノ植民のブラジル渡航費を全額負担するほか、初年度は生活に必要な小麦を給与し、女子にはその年齢に応じて補助金が与えられた。また子供には一人当たり一ミルレースの養育補助金があった。更に一家族に対し猟銃、おの、シャベル二ちょう、フィオセ一つ、ファコン、大ばさみ、二アルケーレスの種子、牛二頭、牝馬一頭が与えられたなどは、その当時として相当の恩典であった。男子には兵役義務を免除し、教会建設と宗教行事には多大の援助があった。

ポルトガル政府が、彼らアソリアーノによる村や町の建設に、無方針の建築を禁じて整然たる都市計画の下にそれを行なわせたことは賞賛に価いする。

南リオ・グランデの都市がその大小を問わず、いずれも区画整然としているのはそれを物語るものだ。今一つ、アソリアーノ植民の成功の要因は、原則的に中年以下の既婚者を送ったために、北東ブラジルにあったような性の問題が起こらず、土人や黒奴との雑婚の弊害が極少であったことである。

アソリアーノが入れられて約五十年後の一八〇〇年には、南リオ・グランデに十四の町が建設され、その人口合計は三万六千に達した。ことに産業の発展は目ざましく、海路を経て北東ブラジルに向けたくさんの乾肉、生皮、小麦を輸出し、バイアからは砂糖を輸入した。一八〇〇年当時で乾肉の輸出高は百万アローバ、生皮三十六万枚、小麦五十万アルケーレスを示している。

リオ・グランデ、ポルト・アレグレ、リオ・パルドに集団したアソリアーノ植民は、アソーレスで経験ずみの軍律による自治制を設けて、彼ら社会の安寧秩序の維持につとめ、町の入口には関門を築いて守備兵を配置し、外襲を防ぐやり方をした。

さて話は再びリオ・グランデにもどるが、一七六三年にスペイン軍の襲撃をうけて、約十年間占領されたが、住民の果敢な戦いによって奪回し、十四年後には立派に復興した。

リオ・グランデのバーラ（港口）の通航には相当の困難があったので、敵軍の再度の海路襲来には天然の要害であった。ただし、ブラジルの北部からの航海には、九月から一月にかけてのモンソン（貿易風）を利用して半島に沿って南下すれば、比較的容易にリオ・グランデの海峡を通過できると、当時の航海記録には記されている。

一七三一年には、地理学者パーデレ・デオゴ・ソアーレスが南リオ・グランデを訪れ、南部ブラジル海岸線の地図作製に当たった。それに協力をしたのがクリストヴァン・ペレーラである。デオゴ・ソアーレスは、海岸線の測量のほかに海の深さの測定もやった。それから二年後に、シルバ・パエス少将が潮の満ち干を測定する二本の標度柱を設けたなどは、そのころとしては進歩的な方法であった。そのほか、サンタ・カタリナからガスパール・ドス・サントスという海流測定の専門家を、月俸十二ミルレースで招いて研究に当たらせたが、これは当時としては最高の俸給であった。

その甲斐あってか、シルバ・パエス少将のゴヴェルナドール任期中に、リオ・グランデ海峡は顕著な改良を見た。

これによって、最も困難とされていた港口通航が

容易となり、船舶一隻当たり十ミルレースを徴収した。この通航税は数十年間もつづけられたが、ひき船が現われてからこれが廃され、それに代わってトン当たり四百レース課されるようになった。

一八一六年には、リオ・グランデ港から五十万枚の生皮、十二万アローバの乾肉三万一千ヘクトリットルの小麦が輸出された。当時の南リオ・グランデは輸入よりは輸出がはるかに多く、輸入品はおもにポルトガル製の化粧タイル、カジス産の塩、英国産の石炭であった。

昔日のリオ・グランデ海峡は、大型船舶の通航が不可能で、現在のようにラゴア・ドス・パトスを通り、ポルト・アレグレに行くことができなかったので、リオ・グランデ港が南リオ・グランデ唯一の輸出入港であった。かつてのリオ・グランデの港口は大型船舶の墓場とまでいわれたほどで、いかにその通航が困難であったかが想像される。ようやく一八八〇年以降、リオ・グランデに浚渫築港工事が行なわれて、ポルト・アレグレ港への航路が閉けたのである。

リオ・グランデがスペイン軍に占領されたことは前に述べたが、リスボア政府がそれを知って、スペイン軍の放逐戦を準備することになった。ドイツ人

ヨハン・ヘンリッヒ・ボン大将がポルトガル王室の依頼によって、その戦闘を指揮することになり、サン・ジョゼ・ド・ノルテに兵力を集中した。それはポルトガル軍と在来の植民兵との混成軍であった。

かくして一七七四年四月一日に戦闘が開始され、その翌日にはブラジル軍の勝利で戦いは終わった。スペイン軍は多量の武器弾薬を放乗して逃走したが、ブラジル軍はそれをラプラタ近くまで追撃した。このように、四月二日はブラジル軍がリオ・グランデの戦闘でスペイン軍に大捷した記念日であり、それはちょうどサン・フランシスコ・デ・パウロの祭日であった。

この戦いに参加した植民兵の大部分はアソリアーノで、彼らは宗教心に富み、慈悲心も深かったところから、四月二日の戦勝は天助なりとて感謝し、この日を期して謝恩礼拝を催すのが習慣となった。リオ・グランデの戦いに敗れたスペイン軍残党の一部は、その後十三年を経てペロタス河とサン・ゴンサロ河の合流点に村落を設け、教会を建ててサン・フランシスコ・デ・パウロと命名した。

ところが、この教会には神像がなかった。しかるに運命の不思議か、ある時、サクラメント植民地に向けて航海中のポルトガルの一帆船が、南リオ・グ

ランデ沖で難破した。それにはサクラメント植民地の教会にまつらるべき神像が積まれていた。この神像が不思議にも漁夫の網ですくわれ、サン・フランシスコ・デ・パウロ教会に安置されたといわれる。この多分に伝説的な問題の神像は現在ペロタスのエピスコパル教会にある。同神像は木彫りであって、十八世紀のポルトガルの名高い彫刻家の力作で、高さ一メートル総身暗褐色、両眼はガラス、背後の光は銀でつくられている。

その後もペロタスはしばしばポルトガル軍（ブラジル軍）とスペイン軍の戦場となったため、この町の住民の祖先の大部分は昔の戦争の英雄である。

一七七七年に平和になって、サルジェント・モールのジョゼ・マルセリーノは、開墾の条件で未開地を希望者に無償分譲した。ここを安住の地として人々は小麦を作り、タペー山脈から木を切り出して舟を建造し、また乾肉を製造した。彼ら住民は信仰にあつく、宗教儀式の用具まで所有する者があった。

伝えられるところでは、ペロタスが平和となってから、セアラ出身のジョゼ・ピント・マルチンスという男が現われ、新しい乾肉の製造法を普及したと。いずれにせよラグーナスからペロタスに移住し

た者が多く、それらによって乾肉産業が隆盛となり、一七八〇年のころはペロタスは南部ブラジル有数の生産地となった。

ペロタスの創設から五十年後には、その周辺に五十五の乾肉製造工場が存在し、一年に四十万頭の牛を屠殺する盛況さを示した。ペロタスは乾肉産業によって繁栄し、富豪が相次いで現われた。

中には金力にものをいわせて貴族となり、リオに本邸を構えてパリー、ニース、モンテカルロに豪奢な旅行をする者が続出した。しかしその後、乾肉産業は次第にバジェーを始め他の方面に移り、ペロタスの乾肉産業はさびれ、僅かにその隆盛の跡をとどめるのみとなった。

かくして歳月が過ぎ、一九〇〇年以後となって新産業が現われた。それは米作だが、ペロタスの米作は河水を利用する水田式であるのが特徴である。これが普及して同地の主要産業となった。

以上述べたリオ・グランデ、オゾリオ、ペロタスなどのほかに、南リオ・グランデには首都のポルト・アレグレをはじめ、バジェー、ベント・ゴンサルベス、カショエーラ・ド・スール、カシアス・ド・スール、リブラメント、ノーボ・ハンブルゴ、サンタ・マリア、サン・ボルジヤ、サン・ガブリエル、サン・

レオポルド、ウルグワイアナなどの都市があり、それぞれの建設史もあるがそれは省略する。

また十年にも及んだファラポスの内乱戦もあるが、それは別に大きなテーマとなり、帝政第二期のできごとでもあるので、あえてこの植民期の南リオ・グランデの歴史から除くことにした。

セーテ・ミッソンエス

南リオ・グランデの歴史にセーテ・ミッソンエスの物語りを逸してはならない。

一七五三年の二月に、パンパスの牧草茂る丘陵地の住民と、ポルトガル軍、スペイン軍にからむ戦闘が繰り広げられることになった。

当時パンパスの一区域であるサンタ・テクラにサン・ミゲルという大きな農牧地があった。そこの住民は、スペイン系ジェズイットによって教化された土人とガウーショがおもで、約五万頭の牛が放牧されていた。岩山や丘陵の上には粗野なパオピケの家が散在し、時にはそれらの家を礼拝堂としてサンタ・テクラの神を礼拝する風習があった。この土人村は、好戦的なイバジー部族の奇襲によって、まれ

に牛馬を略奪される以外には平和郷そのものであった。

ところがある日の早朝、北方の地平線に突如として砂煙が巻き起こった。それは多くの武装した土人兵の進軍であって、先頭には酋長のむすこセペー・チアラジーの姿が見えた。当時セーデ・ミッソンエスでセペー・チアラジーの名を知らぬものはなく、彼は少年から青年期になるまでジェズィットの僧侶について読み書きを習い、宗教教理を聞き、芸術を解して声楽に長じ、特に機械学に興味をもっていた。セペーは農耕作業を指導し、土地測量もなし、綿花を栽培して紡織もやり、またマテ茶の燻煙法も心得ていた。しかも政治的手腕があったので、彼はセーテ・ミッソンエスの事実上のゴヴェルナドールであったのだ。社会の安泰と秩序は彼によって保たれていたといえる。しかるに、その五十年間の平和を破ってセーテ・ミッソンエスが外部から侵略されることを知ったセペーは、敢然と軍旗をかざしてたったのである。

サン・ミゲルの住民たちは、セペーの突然の来訪の意味を知った。セペーの言うには、「戦いは開始された。やがてポルトガル軍とスペイン軍がここに到達するであろうが、それによってわが郷土の運命は

決せられるのだ。われらはあくまでこの土地を死守せねばならない」と。

サン・ミゲルの住民は、さっそく牛群を集めて他に移動させたが、それが数日にも及び、さしもの牧牛地も全く空になった観があった。同時に岩山や丘陵のふもとをめぐって暫壕が築かれた。

かくするうちにポルトガル軍とスペイン軍の代表が来訪した。それはスペイン軍のドン・ジョアン・エキスヴァリア大尉と、ポルトガル軍のフランシスコ・アントニオ・メネゼス少佐のほか、軍属土木技師、軍医、兵卒を加え約五十名からなるものであった。

彼ら一行はサン・ミゲルの岩山に接近するにつれ、そこに待機する住民が異様な表情で興奮し、ある者は憤怒の形相をしていることを感知した。それらの男子は長い黒色の皮の衣服を着て大型の帽子をかぶっていた。それがガウーショの典型的な服装ともいうべきもので、その周囲には、種々の色から成る軍服を着用し、顔面が丸味を帯びて赤銅色を呈し、荒い黒髪が肩まで伸びているものがあった。それが土人兵士であったのだ。

気味悪いまでの沈黙を破って、サクラメント植民地調査隊の代表から大音声で次のことが伝えられ

た。

「一七五〇年一月十三日のマドリード会議の条約第十六条に基づいて、セーテ・ミッソンエスの住民に告ぐ。同条約の協定により、この土地の住民は他のスペイン領地に移住すべきである。住民の所有するすべての動産、家畜は携行してよいが、建物、武器弾薬はこの領地の事実上の領主に無条件で譲渡されねばならない」と。

その時、土人軍の代表セペー・チアラジーは、岩頭に立上がり、次のような歴史的宣言をした。

「神とサン・ミゲルは、この土地をわれわれに与えた。もしスペイン軍が進軍を続けるならば入るも可。しかしポルトガル軍は一歩たりとも立入ることを許さぬ。この地はわが民族が永年にわたって開拓し、建設した郷土である。われわれはいかなることがあってもここを退かぬであろう」

そこでポルトガル軍のメネゼス少佐は事態を解明して言うに、「スペインとポルトガル王室は、各々の植民地の平和のために紳士的協定に調印した。その高貴の意図の下にポルトガル王室はサクラメント植民地をスペイン領と認め、またスペイン王室はセーテ・ミッソンエスの所有権をポルトガル王室に譲渡した。従って、サン・ミゲルの指導者である僧侶た

ちは住民を説得して、その所有物と共に速かにセーテ・ミッソンエス外の土地、スペイン領に移って新たな村を建設せられたし」と。

この占領軍代表の提言が終わる以前に、平原のかなたに武装した土人兵が現われて包囲陣を張り始めた。

ポルトガル軍とスペイン軍の代表はやむなく退却したが、開戦不可避と見たセペーは速刻土人兵を伴って彼の根拠地に向かった。

この報告に接したリオのゴヴェルナドール、ゴーメス・フレーレは、直接セペーとの会見を申込み、セーテ・ミッソンエスに急行した。

セペーはゴーメス・フレーレの会見申込みに答えて、

「もしジェネラル（ゴーメス・フレーレを指す）が自分との会見を希望するならば、彼自身がここへ来るべきである」と。

しかし更に熟慮の末、セペーはゴーメス・フレーレの宿舎を訪れるべく意を決した。

ゴーメス・フレーレは林の中の大樹の下にジュウタンを敷いてセペーと対談した。その四隅には腰にピストルを帯し、軍刀を抜いた護衛兵を配し、また大樹の左右に半円形を措いて竜騎兵が控えるという

警戒ぶりであった。
そこに到着したセペーは、通訳からジェネラルの手に接吻するように言われた。セペーはこれを拒否して、「ここは自分の土地でジェネラルのものではない、自分はジェネラルの手には接吻せぬ」と。
ゴーメス・フレーレは更に通訳に向かって「この土人は野蛮人だ」と言わせた。
セペーは、「ジェネラルこそ野蛮人だ」とやりかえした。
ゴーメス・フレーレはこの水かけ論を避け、「スペイン軍はこの土地から平和のうちに退却した。おまえたちもそれと同じようにここを立去るがよい。もしそれを拒絶するならば、わが軍隊はおまえの種族を殲滅するであろう」と。
それに対するセペーの最後的回答は
「われわれは死んでもこの土地を退かぬ」であった。
そのころの賓客の歓待には、かぎタバコをすすめるのが礼儀であったので、ゴーメス・フレーレが豪然とタバコを出そうとすると、セペーは故意に自分の持参したかぎタバコを見せて、「自分のものはジェネラルのものよりはるかに良質だ」と悠然とそれをかぎながら馬にまたがり、むちをあてて走り

去った。
ゴーメス・フレーレとセペーの会談は完全に決裂したわのである。
いよいよ戦闘開始だ。
サンタ・テクラ平原の陣営の右方には、馬上のゴーメス・フレーレとブエノス・アイレスのゴヴェルナドール、ドン・アントナイギが厳然と柊え、左方にはモンテビデオのゴヴェルナドール、ドン・ジョゼ・ジョアキン・ビアンナが待機した。先鋒部隊には知名のトーマス・ルイス・オゾリオ大佐を指揮官とする竜騎兵、それにフランシスコ・アントニオ・カルドーゾ・メネゼス少佐に率いられる砲兵隊が続いた。
後続部隊を形成する騎兵隊の中には大型の帽子に皮のジャケットをまとい、顔は日やけして鋭い眼光の者が多い。それはラグーナ人、またはアソーレス人とパウリスタで組織される市民兵が主であった。その市民兵の隊長としてパンパスの歴史に英名をとどめるのがラファエル・ピント・バンデーラである。彼はカピヴァリー近くの牧牛地に生まれ、青年期には土地のガウーショの指導者として知られた。
やがてはるかに遠くにゆるやかな波状をなすパンパス平原に土人軍の先頭部隊が現われた。それは無

数ともいうべき大軍で、彼らは各々弓矢を携えていた。その土人軍の先頭に立つ酋長のタツー・グワスーは、ワニ皮の胴着をつけているのに反し、むすこのセペーはあえて胸部を露出していたのは、勇気の範を示すためであろうか。

セペーは走りながら、馬上から続けざまに矢を放ち数名の白人兵の生命を断った。彼は弓術の達人でもあったのだ。

ポルトガル軍とスペイン軍は砲門を開いて応戦した。いかに精鋭の土人兵とても大砲の攻撃には勝つすべもなく、たちまちにして死体は山と積まれ、乗り手を失った馬はさまよい走り、酋長のタツー・グワスーも、頭部をサーベルできられて落馬絶命した。それを見た多くの土人兵もあえなく四散し始めた。勇敢無比のセペーはなおも馬を走らせつつ、落ちた矢を拾い集めては射た。そこに偶然走り寄ったジョゼ・ジョアキン・ビアンナが猛然と彼にいどんだ。二人の間には、やりと剣による死闘が続いた。その時、不運にもセペーは落馬した。ビアンナは大声でセペーに「降伏するか、それとも死を望むか」と呼びかけた。

セペーは無言のままにビアンナに一本の矢を投げつけ、同時に剣をもってきりつけた。ビアンナの頭

上にばっと血潮が散った。しかし彼の間一髪のピストルの一撃は、セペーの心臓に命中してまっかな血を吹くのが見えた。

セペーは三たび立ち上がるべく最後の力をふりしぼったが、ついに彼自身の血だまりの中に倒れて絶命した。土人兵の他の者は致命傷を負って馬にひきづられ、ある者は四散して逃げまどう悲惨さであった。

スペイン軍とポルトガル軍はラッパの合図によって集合し、後にセペーの死体を収容した。セペーの血まみれになったズボンのポケットには、グワラニー語で書かれた二通の手紙があった。一つはサン・ミゲル教会の僧からセペーに宛てたもので、決して白人を信用してほならぬと忠告した文面であり、他の一通はセペー自身が書いたもので、あらかじめ死を覚悟しての遺書であった。

ヴァカカイ河岸にセペーは葬られて木の十字架が建てられ、その碑文にはＥＭ　ＮＯＭＥ　ＤＥ　ＴＯＤＯＳ　ＯＳ　ＳＡＮＴＯＳと記された。

セーテ・ミッソンエスの血なまぐさい激戦の三日後に、ニコラウ・ランギルーを隊長とするスペイン軍が戦場調査をしたが、セペーが戦死した付近には一千五百の土人兵の死体が散乱していた。

当時のゴーメス・フレーレの手記によれば、土人兵はいとも勇敢、且つ頑強に戦ったが、彼らには武器と戦略に欠けていたとある。それは当然のことであろう。

土人以外の住民も、サン・ミゲルを去るに当たって建物一切に放火したため、占領軍が到着した時には全くの焼野原であった。また、セーテ・ミッソンエスに布教区をおいたジェズイットも避難民と共に他に移動したらしく、一人だに見当たらなかった。

このような戦闘をあえてして、サクラメント植民地とセーテ・ミッソンエスの問題は一応は解決したが、一七六一年に至って、一七五〇年のマドリード会議の協定に修正が加えられ、サクラメント植民地は再びポルトガル領となり、セーテ・ミッソンエスはスペイン領となった。

ここまでくるのには、二千六百万クルザードが費やされ、二万の土人がその郷土を追われ、数千の土人、混血児、白人が生命を犠牲にし、そのほか数万頭の牛や馬が失われた。そしてパンパスの住民の間には、いまだにセーテ・ミッソンエスの激戦と、セペーの悲壮な死が語りつがれている。

このセーテ・ミッソンエスの物語りを終えるに当たって、ウルグワイと南リオ・グランデに関連する

バジリオ・ダ・ガーマの作詩『ウルグワイ』を紹介したい。『ウルグワイ』はバジリオ・ダ・ガーマの代表作であって、ホーマーの『イリエード』（トロイの戦いを歌った史詩）を思い出させる。『ウルグワイ』はセーテ・ミッソンエスの風物、住民、土人とサン・ミゲルの戦闘に取材したもので、あたかもジェームス・クーパーやロングフェローがカナダの土人をテーマとし、またジョゼ・デ・アレンカールがブラジルの土民を主題としたようなものである。

以上は植民期の南リオ・グランデの歴史の概略であるが、これは執筆の都合上、厳正な史的記述よりは半ば物語り風に叙したことを諒解願いたい。

バイアは招く

バイア州は面積においてアマゾナス、パラー、マット・グロッソ、ゴヤス、ミナスについでブラジルで第六位にあり、その首都サルバドールは地理的にノルデステの関門をなしている。従ってノルデステの研究と実地調査には、バイアから始めるのが順

序である。しかもバイアではノルデステ特有のあらゆる風土的条件と、社会事象を学ぶことができる。

現在、石油の産地として注目を浴びつつあるレコンカボ・バイアーノといわれるトードス・オス・サントス湾の周辺と、南部のカカオ生産地帯、サンフランシスコ河の西部とその北部、および東部の海岸地帯とでは、地勢、地質、社会、経済、文化の面で画然たる差違がある。

サン・フランシスコ河の西部は、ブラジル中央部の特徴ともいうべきシャパドン(大原野)をなし、カンポとセラードでおおわれている。またパラグワスー盆地から北部には、ノルデステのみに見る半乾燥地カアチンガが果てしもなく続き、その中に点々と洋上の島のような岩山がそびえるという寄景を展開する。南部の地勢は一変して起伏がはげしく、ミナス州境近くには標高八、九百メートルの山岳地が見られる。

トードス・オス・サントス湾一帯は、白亜質の第三紀世土から成り、湾の周囲には肥えたマッサペ土が多い。植民期に甘庶栽培と砂糖産業が栄えたのはそのためであろう。

更に目を東部海岸地帯に転じると、永年の水蝕によって形づくられた岩層が存在して、それぞれの植

物と住民の社会構成が異なるなど、バイアは地理、地質、地勢、気象、産業、社会、文化的見地から幾多の研究課材を蔵している。ゆえに、バイアを学ぶことはブラジルを知ることであり、まず、首都サルハードルに発してレコンカボ・バイアーノを訪れ、順次セルトン地帯まで歩をのぼせば見るべきものが多々ある。それには少なくとも二、三カ月を必要とするであろう。しかし、サルバドールを訪れるだけでも、どれほどうるところがあるか知れない。

あの黒人のセニョール・デ・ボンフィンの宗教祭りへの招待の名文句ＶＥＭ，Ａ　ＢＡＨｌＡ　ＴＥＥＳＰＥＲＡ！　が、バイア祭りの序曲のようにどこからともなく聞こえてくるようだ。

バイアの魅力

数日前にバイアの旅から帰った。その旅行中に手に入れた文献でメモをとりながら、実際に見聞したバイアの印象を整理しようと始めたが、これはなかなかの大仕事である。ひどく暑かったのと、早朝から夜まで歩き回ったせいか、帰宅してがっかりするほど疲れてしまった。しかし心持ちよい疲労だ。それにしても、今こうしてバイア紀行をつづるのは、

この上もない楽しさを感じる。

戦前、ロイド・ブラジレーロの貨物船で、北伯旅行をやったことはあるが、それは専らセリド綿の生産地の調査が目的で、帰路思いがけなくサルバドールに寄港したので、僅か二時間ほど市中を散歩したに過ぎなかった。これではバイア見物とも言えまい。

しかし、当時少しばかりのぞいたバイアは、私の記憶から消えず、それ以来バイアはあこがれの地となった。これは私ばかりでなく、おそらくブラジル全土でバイアほど人々の興味をひく所はないであろう。従って、バイアを見ずしてブラジルを論ずるなかれとは、あながちバイア人の郷土自慢の表現ばかりではないようだ。

バイアの民謡詩人ドリバル・カイミの名句、「ヴォセ・ジャ・フォイ・ア・バイア・ネーガ」は理屈なしにバイアの魅力となり、人々にバイア独特の風土色を思わせる。

ところで、日本や北米、ヨーロッパへと気軽に旅行する人でも、まだバイアを知らないという者が意外に多い。これは一つにはブラジル国内の観光組織の欠如によるものであろう。また、それだけに当国の見学旅行には決心と覚悟を必要とする。

他人のことはさておき、私自身が面倒がっていてはいつまでもバイア訪問ができないので、先日思いきって出かけたが、バイアでの至るところで好意あふれる歓待をうけたことは感謝である。それは私が、アマチュア・ジャーナリストの立場から、バイアを知る熱意を示したことの結果であったようだ。

さて、バイアといえば概念的に首都サルバドールを意味し、またサルバドールはバイアそのものにも通じる。このように首都と州全体が、あたかも一つの感じをなすところは他にないであろう。

つまり、バイア人は、サルバドールをバイアと呼ぶことに善悪の執着をもっているらしい。そうかと思うと、中にはサルバドール本来の名はサン・サルバドールだなどと議論する連中もいる。

「そんなことはどうでもよい。むしろサン・サルバドールやサルバドールよりは、昔のままのバイアでいいではないか。」と言うのが、生粋のバイアーノの作家ジョルジュ・アマードである。

濃いカトリック的空気

ポルトガルの信仰にあついコロニザドール（植民）によって造られたこの町には、濃いカトリック

的な空気が流れているのは当然である。彼らコロニザドールは、町に宗教的な意義をもたせるためにサルバドールと名付けたが、先住民の土人と黒人系人口がふえるにつれて、彼らは眼前に広がる美しい湾を望んで、いつかサルバドールの名にとらわれず、単にバイアと呼びならしてきた。特にパラグワスー河の清水の注ぐこの湾で、土人の女モエマが恋人を捜しつつ死にたえた哀話は、今も土着人に忘れ難いものとなっている。

一八〇八年に、ポルトガルの王室をブラジルに移してバイアに滞在したドン・ジョアン六世は、しきりにサルバドールの呼称を強調したがその甲斐なく、いつともなく住民はバイアと言ウようになった。さてもバイアーノはカベスード（頑固頭）ではある。

このようにバイア人は、善悪いずれにも極度に保守的で、市街全体が懐古的な感じだが、それはバイア人の郷土愛に結び付いている。バイアを訪れて、始めてブラジル人に愛国心のあることを知った、という話を聞くが、うなずけるものがある。またバイア人は、郷土に対する大きな誇りをもっているが、それはバイアがブラジルの歴史の発祥地であるばかりでなく、多くの人材を輩出しているからでもあ

る。事実バイア州ほど各分野にすぐれた人物を生んでいる所はないであろう。私は今回の旅行で、バイア人の著名郷土人への誇りと尊敬の念が想像以上であることを如実に知った。

それらの代表人物は、ガブリエル・ソアーレス、カイルー子爵（ジョゼ・ダ・シルバ・リスボア）、ジョアナ・アンジュリカ、マリア・キンテリア、アンナ・ネリー、テオドロ・サンパイオ、ミゲル・カルモン、カストロ・アルベス、ルイ・バルボーザ、ニーナ・ロドリゲス、アルツール・ラアーモス、ジョン・マンガベーラなどである。

更に現存の知識人では、ルイス・ビアンナ・フィリョ、デーアス・ダ・コスタ、アルベス・リベーロ、エジソン・カルネーロ、ネストル・ドアルテ、アフラニオ・コウチーニョ、ウィルソン・リンス、ジョルジュ・アマード、オドリコ・タヴァレス、ルイ・サントスらの名があげられる。バイア人はその連綿とつづく優秀な人材の花を咲かせてきたと言って過言ではないであろう。

しかし、産業経済の面では、コロニア期以来のエンジェーニョも衰微して、タバコ工業のほかには工業というべきものはなく、一般の工業製品に関する限りでは、サンパウロを主とする南部依存であるの

もバイアの特徴であった。そのためか、先年訪れた時のサルバドールは、活気に乏しい古色蒼然たる町であった。ところが今度は、レコンカボ・バイアーノの石油ブームとカカオ景気によるのか、または観光都として外人がどしどし訪れるせいか、市街全体が著しい活況を呈しているのに驚いた。人口も最近の十年間に十万余を増加して、現在は六十五万であると。それは長い間朽ちかけていたパウ・ブラジルの巨幹から、たくましい新芽が生々と萌え出しつつある観がある。

しかしバイアはいつまでもバイアである。あのコロニア色の豊かな古びた感じはサルバドール独特のものだが、その中に近代的な新建築が発見され、また、豪奢な大邸宅と、貧民のボロ家とが対象的に混在している。これは、まさしく新旧と貧富の極端な交錯図で、この町の特徴的風景だ。

人口の過半を占める黒人系の住民、数えきれないほどの教会と寺院、上町と下町をつなぐラセルダのエレベーター、港に群集するサヴェーロと呼ぶ帆舟、観光客の話題に上る黒人の宗教儀式カンドブレーとカポエーラ、さては代表的バイア料理のヴァタパの味、同時に奴隷解放の詩人カストロ・アルベスや自由主義文化人ルイ・バルボーザの風姿などが

思い出され、筆を執る私はかつて経験しなかった興奮を覚えた。そしてＩｓｔｏ　ｅ　Ｂａｈｉａのリズミカルな文句が耳に響くようだ。

バイア・デ・トードス・オス・サントス

サンパウロを午前九時に出発し、リオでレアル空輸会社のスーパー・コンヴェーアー機に乗り換えて、サルバドールに向かう。機内のサービスはすべてによく留意されて心地よい。二十数年前の貨物船の旅とはたいへんな違いである。

窓外を見ると、エスピリト・サント北部からは低い海岸線が続くのみで単調そのものだが、カカオの産地で名高いイリェウースを過ぎて約四十分たつと、はるかにトードス・オス・サントス湾が現われて展望が一変する。それがジョルジュ・アマードの作品に叙されるバイア・デ・トードス・オス・サントスだ。湾の入口に有名なイタパリカ島が悠然と横たわり、その対岸の大陸に細長く形成されるのがサルバドールである。なるほど市街の各所に教会の聖塔が見える。

やがて飛行機は旋回してあちこちに白砂の小丘のある空港に降りた。それは数分間に目に映じた風景

だが、空路旅行のよさをしみじみ感じた。

空港の名はドイス・デ・ジュリョ（七月二日）で、所在地の名はイピタンガである。市街の中心から三十六キロ隔たっていて、自動車で約四十分の空港から市街への途中のながめが素晴らしく、バイアの特有風景ともいうべきココ椰子の樹林と青々とした海が現われる。それはイタポアン海岸で、ここに名高い燈台があり、その昔（一五一二年のころ）カラムルーのあだ名で知られるデオゴ・アルヴァレス・コレーアが難船した場所である。この市街に通じるアスファルトのドライブ・ウエーに沿って、高級住宅があるかと思えば下層民のボロ家が現われるのがいかにもバイアらしい。

午後四時、町の中心であるチリー大通りのパラーセ・ホテルに着き、直ちに近くのカストロ・アルベス広場から日没前のトードス・オス・サントス湾を望む。バイア・デ・トードス・オス・サントスを「よろず神の湾」などと邦訳したのではピッタリこない。

この湾は周囲二百キロ、面積一、〇五二平方キロで、リオのグワナバラ湾よりはるかに大きく、その入口のイタパリカ島と大陸の間は八キロ半もあるので、船舶の出入が容易である。しかも湾内の深さは

相当なもので天然の良港をなし、花崗石と片麻岩層から成るサルバドールの市街とその地勢は自然の要害ともいえる。思うにポルトガルからブラジルの初代総督として派遣されたトメー・デ・ソーザは、傑出せる軍略家経世家であったばかりでなく、都市計画と港湾設計にすぐれていたようだ。

ここに市街が設けられると同時に、多くの要塞と教会が建てられ、さながら要塞と教会の町の観を呈した。その創設記念日が十一月一日とされているが、それは一五四九年の十一月一日が、植民期ブラジルの最初の町の造られた日だからである。

下町、上町のあるサルバドール

トードス・オス・サントス湾の周辺がレコンカボ・バイアノといわれ、その地域内にサン・フランシスコ・ド・コンデ、カンデーアス、マタ・デ・サン・ジョアンなどの油田と、マタリペの石油精製所がある。ほかに知名の場所ではカショエーラ、フェーラ・デ・サンタアナ、マラゴジペ、ムリチーバ、サント・アマロ、サン・フェリスがあり、バスや鉄道で行ける。

既述したようにサルバドールはシダーデ・ソブ

ラーダといわれて、下町と上町の二段に形成されているのが風変わりである。その下町と上町の高さの差は六十メートルから八十メートルで、びょうぶのような盤石で隔てられている。シダーデ・バイシャといわれる下町は、バーラ（港口）から岩壁に沿いイタパジペ半島に向かって設けられている。そこにはサンパウロやリオの金融街を思わせるような地区があって、銀行、貿易商、卸商の大建築が軒をつらねている。インスチツート・デ・カカオもここにあるし、オスカー・ニーマイアーの設計によるペトロブラスの本部もある。

しかしその近くに、不潔と不秩序と雑沓、喧騒そのものの野外市アグア・デ・メニーノが相当の面積を占めているのが皮肉な対象をなしている。

更に税関の建物をはじめ、ポルトガルのアズレージョ張りのコロニア期の古風な建物が見られるのは、全く別世界の観がある。ところで、この植民期のアズレージョを、日本流に化粧タイルと訳したのではほんとうの感じが出ない。

ブラジルの開港と外国移民導入の恩人、カイルー子爵の銅像に敬意を表して歩を進めると、下町と上町とをつなぐ幾つかの坂道が現われる。その不規則に石で舗装された狭い坂道に、俗にジェリコといわ

れる小さいブーロ（驢馬）が水おけを背負ってたたずんでいるのはほほえましく、サルバドールの特異風景であろう。

サルバドール名物のラセルダのエレベーターは一八六二年に完成したが、当時は水力を応用し、パラフーゾと呼ばれた。そのほかにインクライン式の電車があり、それらの乗車賃が一クルゼイロとはいかにも安い。

上町から湾の展望

ラセルダのエレベーターでのぼりつめたところが、上町のムニシバル広場で、そこには郡役所とバイア州の政庁がある。

政庁は由緒ある建物で、一六二四年にバイアがオランダ軍の侵略をうけ、その占領下にあった間オランダ総督庁とされた。そのことが入口に刻まれている。

このムニシバル広場から大通りが左右に発するが、右に通じるのがサルバドールの中心街ともいうべきルア・チリーで、ここに一流の商店が並んでいる。これはさしづめリオのルア・ド・オウビドール、サンパウロのルア・バロン・ド・イタペチニンガ、ポ

ルト・アレグレのルア・ダ・プライアに相当するものであろう。

ルア・チリーは比較的短く、カストロ・アルベス広場で終わっている。カストロ・アルベス広場からはこれまた名高いセーテ・デ・セテンブロ大通りを発し、カンポ・グランデ広場を経てバーラ（港口）という高級住宅区まで続いている。おそらくこの大通りは距離において最長のものだ。

バーラは大陸の突端で、ここを境に西方にトードス・オス・サントス湾がひらけ、東方に大西洋岸が続き、白砂の浜に波しぶきをあげている。バーラには昔の要塞そのままを利用して燈台が設けられている。

トードス・オス・サントス湾は、サルバドールの市街のどこから望んでも美しいが、その港口であるバーラやサンタ・テレーザ修道院の裏庭もよく、カストロ・アルベスの銅像の立つ広場からのながめも格別である。

サンタ・テレーザ修道院は、現在の宗教芸術博物館で、バイア大学の管理下におかれ、おもに十六、七、八世紀のポルトガルの宗教芸術作品が蔵されている。絵画、彫刻・金銀聖器は、アズレージョ、家具などが多く、特にバロック芸術が注目をひく。

この博物館を一巡してから裏庭に出て、午後のトードス・オス・サントス湾を望んだ。はるかかなたにイタパリカ島がかすかな線をひき、港内には十数隻の船舶が停泊していた。その中には油送船も見られる。防波堤を隔ててサン・マルセロ要塞がぽっかり海中に浮き出たように見えるのが面白い。この湾において過去に幾多の史的なできごとがあったのだ。

さて、バイア・デ・トードス・オス・サントスはどのようにして発見され、またいかにしてサルバドールの市街が建設されたのだろう。

バイアの発見

カブラルのブラジル（ヴェラ・クルース）発見後の一五〇一年に、ポルトガルの国王ドン・マノエル一世の命によってブラジルの所在を確認するため、数回にわたって探険隊がくり出された。それらの探険隊長または航海家は、アンデレ・ゴンサルベス、フェルノン・デ・ノローニャ、ガスパル・レーモス、アメリコ・ヴェスプッチ（フロレンス人）であり、そのいずれもがバイアの発見者といわれるので、果たしてだれが真の発見者かはわからない。しかし史実

の示す限りでは、アンデレ・ゴンサルベスが、アメリコ・ヴェスプッチと共に一五〇一年五月十日にリスボアを出港して、サン・ロッケ岬に達し、更にラプラタ海域に向けて南航中、バイアつまりトードス・オス・サントス湾を発見したというのが真実のようだ。最近では数名の史家の説もこれに一致している。

アンデレ・ゴンサルベスとアメリコ・ヴェスプッチが、バイアを発見した当時の航海距離は三百レグア（千八百キロ）で、トードス・オス・サントス湾に二カ月停泊したと記録されている。一説には、次の船隊の到着を待つためとあるが、それが何の目的であったかが明らかでない。

その後一五〇三年に、著名の航海家クリストヴァン・ジャックスが、かつてカブラルの上陸したポルト・セグーロを訪れて村落を設けたのが、バイアでの最古の白人村のようだ。

このようにトードス・オス・サントス湾は、一五〇一年に発見されただけで直ちに町が形成されたのではなく、一五四九年の初代総督トメー・デ・ソーザの着任まで四十数年の空白期があった。

一五一〇年以後（その年代が明確でない）には、カラムルー（火の神）で知られる伝説的人物デオゴ・

アルヴァレス・コレーアが、現在の大西洋側のイタポアン海岸で難破して土人に救われ、彼の持っていた火縄銃で有名になったのは周知の通りだ。

進んで一五三〇年にはブラジルにカピタニア制がしかれ、バイアのカピタニア長官としてフランシスコ・ペレーラ・コウチーニョが任命され、村を設けたのが現今のバーラであり、当時はビーラ・デ・ビトリアと言われた。そのペレーラ・コウチーニョの村づくりに協力し、土人との間の通訳をつとめたのがカラムルーである。

一五四九年となって、初代総督トメー・デ・ソーザが到着してからは、市街の防衛と軍略的見地から、大西洋岸のビトリアでなく、トードス・オス・サントス湾に画した要害の地を選定して町の建設に着手した。その地点が現在のプラサ・リオ・ブランコに当たる。

トメー・デ・ソーザはポルトガルから六百人の軍人と、四百人の罪人（おもに思想政治犯）のほか大工、石工、鉄工などの職人を連れて来たので、すべてに好都合であった。またマノエル・ダ・ノブレガ神父を首長とする六名のジェズイットが参加していた。更に、建築土木技師ルイス・デーアスを、年俸七十二ミルレースで契約したなどが建設史に見られ

る。

まず初めに建てられたのが、ノッサ・セニョーラ・ダ・アジューダと命名されたジェズイットの教会で、同時に総督庁、議事堂、税関、兵器庫、監獄が造られた。その後一七六三年に首都がリオに移されるまで、サルバドールがブラジルの総督府であり首都であった。

ジェズイットのノッサ・セニョーラ・ダ・アジューダ教会は、長い間サルバドールの中央教会とされた。サルバドールの創設四年後の一五五三年には、バイアで最初のエンジェーニョ（製糖農園）がつくられ、これが北東ブラジルの新産業として広く普及した。

一五六四年、第三代総督メン・デ・サーの任期中に、リオはフランス軍に侵略され、また一五八八年から一五九〇年のマノエル・デーレス・パレットの総督時代には、サルバドールは英国の海賊ホーキンスに襲撃されたこともあったが、それは撃退された。

こうした外侵に備えるために、バイアには十幾つかの要塞や城砦が築かれ、さながら要塞の町の観を呈した。

二つの史的広場

ここで方向を転じて、前述のムニシパル広場から左側のルア・ダ・ミゼルコルデアを経て、ラルゴ・ダ・セーに入った。この広場にはその昔ジェズイットの神学校があった。現在見られる代表的な建物は、パラシオ・エピスコパルだが、これは植民期には大司教の邸宅であった。

ラルゴ・ダ・セーにつづくテレーロ・デ・ジェズスには、セー寺院やバイア医科大学がある。この二つはバイアならでは見られない古びた建物だ。セー寺院の前身はジェズイットのノッサ・セニョーラ・ダ・アジューダ教会であり、ここで聖賢アンニトオ・ビエーラが名説教をやったことで知られている。従って、パーデレ・ビエーラと聞けばその説教を連想するほどだが、彼は前後三たびポルトガルを訪れ、当時不当の迫害をうけていたユダヤ人を擁護したかどで宗教裁判をうけた。これは史上有名な物語りとなっている。そのためか、パーデレ・ビエーラの絶叫にも似た説教のひびきが聞こえるようだ。

このセー寺院はローマン・ビザンチン建築で、ジェズイットのノッサ・セニョーラ・ダ・アジューダ教会を取りこわしてその敷地に建てられたもので

ある。

次に同じくテレーロ・デ・ジェズスの奥に有名なサン・フランシスコ教会がある。一五八七年に起工されて一五九六年に完成したが、当時は礼拝堂と修道院にすぎなかった。

現在の華麗無比の教会は、一六八六年から一七一三年にかけて建設されたものだが、スペインのバロック建築で、その内部が金ぱくで張りつめられているのは目を奪うばかりである。また、ポルトガルのアズレージョ芸術と、ジャカランダ彫刻の粋を集めたものとしても知られている。もちろんブラジルで唯一の建物で、世界でもまれなものであろう。

郷土有名人の記念館

上町には著名バイア人の記念館がいくつかあるが、特に訪問すべきものはルイ・バルボーザ民事裁判所、ニーナ・ロドリゲス博物館、州立博物館、ジョアナ・アンジェリカ修道院（ラパ修道院）などであろう。

民事裁判所ルイ・バルボーザは、カンポ・ダ・ボルボラにある豪荘な建物で、オタビオ・マンガベーラが州知事時代に建設されたものだ。入口のホール

は全部イタリア大理石で張りつめられ、正面壁の上部にルイ・バルボーザの顔面彫刻が付けられてある。

また四囲の壁には同じくルイの名演説の数句が刻まれていて、訪問者をして自然にえりを正さしめる。これを見ても、バイアではいかにルイ・バルボーザを郷土人の誇りとしているかが想像される。ほかにも下町にあるルイ・バルボーザの生家が、そのまま記念物として保存されている。

ムゼウ・ド・エスタード（州立博物館）は、ジョアナ・アンジェリカ大通りの一九八番で、植民期バイアの史的絵画、彫刻、家具、著名バイア人の遺品などが置かれている。

私は特に興味をもって、詩人カストロ・アルベスと天文地理学者ミゲル・カルモンの室を見た。

カストロ・アルベスの室には彼が使用した机とす、衣服、彼とその恋人の肖像写真が数葉陳列されている。また彼の代表作『奴隷船』の原稿の一部が注目をひいた。

そのほかドン・ジョアン六世とブラジル開港の記念室、帝政期の記念物にも大いに参考となるものがあった。この州立博物館の庭にはアカシア・ローザの花が美しく咲いていた。

博物館ニーナ・ロドリゲスは、テレーロ・デ・ジェズス近くのポルタス・ド・カルモにある。ライムンド・ニーナ・ロドリゲスといっても、日系コロニアには余り知られていない。

彼は一八六二年にマラニョンに生まれて、一九〇六年にヨーロッパに客死した。少年時代にバイアに移転してバイア医大に学び、生涯の大部分をバイアに過ごした関係からバイア人と見なされているようだ。彼の専門は心理学だが、アルツール・ラーモスと相並んで黒人文化の権威でもある。

バイアの黒人とその社会を論ずる限り、彼の著述は必読のものであり、その意味でニーナ・ロドリゲス博物館は興味深い。

ジョアナ・アンジェリカ大通りには、ブラジルの独立戦争に貴い犠牲となった修道女ジョアナ・アンジェリカの葬られているラパ修道院がある。

一八二三年二月十九日のできごとだが、戦勝の祝宴に酔ったポルトガル軍は、ラパ修道院に乱入して門の扉を破壊した。ジョアナ・アンジェリカは両手を広げて荒れ狂うポルトガルの兵士の前に立ち、「ここは神のおわす聖なる場所です。もしあなたたちがこれから前に進もうとするなら、私のしかばねを越えて行きなさい」と言って、一兵士の剣に刺さ

れて絶命した。
　そのジョアナ・アンジェリカの倒れた場所に、当時の様子を物語る数句が刻銘されている。

教会と寺院の町

　バイアではどの方向を見ても必ず教会が目につく。狭い凹凸の坂道を歩いていると、古びた教会に出会わぬことはなく、それほどに教会が多い。バイアでは一年の日数に相当する三百六十五の教会や寺院があるといわれ、それは誇張だとしても正確な数は三百を越えるようだ。それには、日本でいう本山（マトリス）、教会（イグレージャ）・テンプロ（寺院）カペーラ（礼拝堂）が含まれている。なんとしてもものものしいことではある。そのほかに十幾つかの修道院がある。
　ところでバイアの最古の教会は、一五三一年につくられたビトリア教会だ。これは初代カピタニア長官ペレーラ・コウチーニョによって建設されたが、一六六六年と一八〇九年の二度にわたって改築されたので、原型は全く見られない。ここにカラムルーの娘一人が葬られているとも伝えられる。同教会はコレドール・ダ・ビトリアの終わりの地点にある。

金ぱく張りのサン・フランシスコ教会については先きに叙したが、それと並んでオルデン・テルセーラのサン・フランシスコ教会がある。この教会は外部装飾の美しいことではバイア随一で、しかも、その外壁の彫刻が長い間石灰層でおおわれていて、だれにもわからなかったとは奇抜な話だ。ある日、電工師が作業中に金づちで正面の外壁をたたいたところ、石灰層がはがれて下から美麗な彫刻が現われたということだ。同教会は一七〇一年に創設されたもので、ヴェラスコの壁画とポルトガルのアズレージョ、ジャカランダの彫刻が見ものである。

またテレーロ・デ・ジェズスにはバイアのカテドラル（中央寺院）がある。昔のカテドラルはバロック建築であったが、後にローマン・ルネサンス型に改装され、さらに部分的にはギリシア型も施されている。このカテドラルには付属博物館があって、銀製の聖母像や四十名のジェズイットの殉教をテーマにした名画などが見られる。

下町のイタパジペ半島の聖なる丘に建つセニョール・デ・ボンフィン教会は、黒人のボンフィン祭で知られ、バイア名物の一つとされて観光客の訪れが絶えない。

この教会は一七五六年に起工され、十数年を経て

完成した。一九二三年以来はバジリカ・デ・ボンフィン（ボンフィンの大伽藍）となり、ポルトガルからボンフィンの神像が送られてここに安置された。天井画はヴェラスコの麗筆になるもので、壁画はテオフイロ・デ・ジェズスの力作である。この教会の特徴は、アパレシーダ寺院と同じくボンフィン神の奇跡である。その内部には、奇跡的に不治の病いがなおったり、または大願成就したりした人々が感謝する意味でおくった無数のろう細工の頭、腕、手、足などや、写真、書簡などが飾られている。

毎年一月に催されるボンフィン祭はブラジル全土に有名だが、それは別の機会に述べたい。

セニョール・デ・ボンフィン教会と共にぜひ訪ればならないのは、バイアの守護神であるノッサ・セニョーラ・ダ・コンセーソン教会である。これはコンセーソン・ダ・プライア教会とも言われ、一五五〇年に総督トメー・デ・ソーザによって創設された。当初は一つの小礼拝堂であったが後にポルトガルのバロック建築に改装され、全部ポルトガル産の大理石で張られていることはバイアでも唯一のものであろう。

ヴェラスコとテオフイロ・デ・ジェズスの師匠で

あるジョゼ・ジョアキン・ダ・ローシャによって天井画が描かれている。これもバイアの教会というよりは国宝的存在ともいうべきものだ。

イタパジペ半島の海岸に画した場所にボア・ビアジェン教会がある。ここにはノッソ・セニョール・ドス・ナヴェガンテスの神像がまつられていて、船乗りの護神で知られ、そのお祭りはボンフィン祭と共にバイアの名物となっている。

イタパジペ半島にはほかにもノッサ・セニョーラ・デ・モンテセラーテ教会があり、その聖母像で名高い。

上町のピエダーデ広場にはそれと同名の教会と修道院がある。これはローマのサン・ペードロ寺院を模倣したもので、一六七九年に創設され一八〇九年に改築された。その美装工作は名匠プレシリアーノ・シルバによって施された。同教会は専らバイアの上層社会のミサに使用され、いつからともなく無産階級の訪れが絶えたようだ。ここには愛国の詩人ジュンケーラ・フレーレを始め、数名のオランダ戦争の英雄の遺骨が葬られている。

下町と上町をつなぐカルモ坂の近くに、カルモ教会とその付属修道院がある。これは一五八五年の創

設で、オランダ戦争にブラジル軍の本営とされ、ここでオランダ軍の降伏調印がなされた。その史的できごとが同修道院の壁にしるされている。

このカルモ教会にはエウゼビオ・デ・マットスの描いた天井絵と壁画、ドン・ジョアン六世がミサに用いたいすが昔のまま保存されている。

アベニーダ・ジェキタイア（旧アベニーダ・ピラール）には、一七一四年に設けられたサンタ・ルジア教会がある。同教会はポルトガルのバロック型で、その横側には珍しくも植民期の地下墓地があり、ギリシアのパンテオンを思わせる円柱が立ち並んでいる。どうやら旧教会のにおいがしてきたようだから、このあたりでやめることにする。

要塞めぐり

バイアの市街は要塞と共に建設されたといわれるほど、要塞や城砦が多い。大西洋側の大陸の突端にあるサント・アントニオ・ダ・バーラの要塞に始まり、トードス・オス・サントス港の海岸に沿って八つ、海に面しない場所に三つ、合計十一の要塞が数えられる。それはいずれも廃虚と化しているが、在りし日のバイアを物語っている。これによっても植

民期のポルトガルは、いかに海賊や外国軍の侵略に対するバイアの防衛に万全を期したかがわかる。

一五四九年一月七日付の、ポルトガル王室からブラジルの初代総督トメー・デ・ソーザにあてた指令に、テーラ・デ・サンタ・クルース（ブラジル）の首都建設には、外侵防衛のためにできるだけ多く要塞を築くべし、の一節が見られるが、トメー・デ・ソーザとその後のゴヴェルナドール数代は、忠実にそれを実行してものものしい要塞が設けられ、バイアの防衛陣地が固められた。従って植民期のサルバドールには「フォルタレーザ・ド・サルバドール」の別称があったほどだ。そのあるものはオランダ戦争の跡をとどめ、当時の歴史を秘めている。中でも特に知られるのがサント・アントニオ・ダ・バーラとモンテ・セラーテの要塞である。サント・アントニオ・ダ・バーラの要塞は、総督マヌエル・テーレス・バレットによって創設されたもので、一六四二年五月九日に、西インド会社所属のオランダ軍がバイアに来襲した時は、これがブラジルの防衛拠点となった。

当時、アルバート・シャウテーンに率いられた千五百人のオランダ軍が、現在のポルト・ダ・バーラに上陸を敢行し、四日間の戦闘の後にサント・アン

トニオ・ダ・バーラ要塞を占領した。

独立戦争にも重要基地となる

また一八二三年の独立戦争には、この要塞がポルトガル軍との戦いの重要基地となった。

ブラジル軍が強硬に戦って、バーラ要塞を守り抜いたことは史上名高い物語りとなっている。しかしその後一八三八年のサビナーダの動乱には、バーラ要塞は飯乱軍の手に陥った。

オランダ戦争が終わりを告げて平和となり、一六六九年にバーラ要塞に燈台が設けられた。一八三二年にはそれが英国製の燈台に替えられ、その落成式が一八三九年十二月二日のドンペードロ二世の生誕日を期してあげられた。更に一九三七年にバーラ燈台は現在の電燈式になり、昔の要塞と共にサルバドールの名所の一つとなっている。

この要塞は、殺伐な過去の戦争舞台を思わせる反面、その構造の美しさは訪問者を感歎させる。

ここは大陸の突端であるので、燈台に向かって左側に大西洋の波が打ち寄せて岩に砕け、右側に歩を進めると視界は一変してトードス・オス・サントス湾が現われる。

バーラ要塞から港に向かって約五百メートルのところにサンタ・マリア要塞がある。これは海中に突出する岩山の上に築かれたもので、展望の美は他に類を見ない。観光者は例外なくこれを写真に収め、また画家の画材となっている。要塞の横側は小さな入江をなし、ポルト・ダ・バーラと呼ばれサヴェーロ（帆舟）の荷揚げ場となっている。日曜日にはここにたくさんの人が群集して遊ぶが、ひとたび荒れてくると、波浪は要塞の岩山にしぶきを上げて物すごい風景となる。この入江が前述のオランダ軍の上陸地点となったのだ。また初代カピタニア長官ペレーラ・コウチーニョ、並びに初代総督トメー・デ・ソーザの上陸した場所でもある。

一八一七年のペルナンブーコの革命には、革命軍から派遣されたパーデレ・ローマがここで上陸し、同時に捕縛された。

サンタ・マリア要塞はバーラ要塞と共にマヌエル・テーレス・バレットによって構築されたが、一六〇九年に改築され、現在は海軍省の所有に属している。

サンタ・マリア要塞を通過して、ヨット・クラブの方向に約四百メートル行くとサン・ジエゴ要塞が見られる。これはポルタ・ダ・バーラの北端に位置

し、サント・アントニオ教会近くの椰子林に囲まれ、暗白色の城壁が静かな湾に臨んで立っている。同要塞は、総督デオゴ・ルイス・デ・オリベーラーによって建設され、一六三三年のオランダ戦争に戦火の洗礼をうけた。一八八一年に大砲が除かれて、航海船舶のための信号マストが設けられた。一九二六年には、ウェスターン・テリグラフ会社がこれを買収すべく政府と交渉したが、国防的見地から軍部の反対があって、それは不成立に終わった。

サン・ジエゴ要塞から、起伏の多い海岸の細道伝いに行くこと二キロで、サンパウロ・デ・ガンボア要塞がある。そこは市街の中心に近く「パラシオ・ダ・アクラマソン」が眼前に見える。この要塞は殆んど朽ち果てているが、一八七五年にすえられたアームストロング砲、口経二十五インチ重量十三トンが注目される。当時この大砲はブラジルで最大のものであった。ガンボア要塞はサルバドールの数多い要塞の中で特筆されるべきもので、かつてはここに十二門の大砲が備えられ、一八〇八年二月二十三日のドン・ジョアン六世の到着には、礼砲をとどろかせて市民を熱狂させたものだ。

さて、いよいよバイアの港内に入ると、海中に円形を描くサン・マルセロ要塞がある。ここは海面か

ら十五メートルの高さの城壁が築かれていて、上町のどこからでも望むことができる。一六二三年、オランダ軍襲来の直前に構築されたものだ。これの建設のために、特に市民に対して増税され、完成近くなってバイアの大司教の猛烈な反対があった。要塞の構築に巨額を投ずるよりは、セー寺院の建設にこそ当てるべきであると。しかしその翌年、五月九日に大挙オランダ軍が来襲した。当時未完成のマルセロ要塞はオランダ軍に占領され、オランダ人によってこれが完成改良されたとは皮肉である。

一時は叛乱首謀者の獄舎に

独立戦争の時、サン・マルセロ要塞は一度ポルトガル軍の手に占領されたが、イタパリカ島のジョアン・ダ・ボタスを隊長とするブラジル軍の果敢な戦いで、再び奪い返された。後にこの要塞は革命や叛乱の首謀者の獄舎となった。コンフェデラン・ド・エクアドール革命とサビナーダ叛乱の首謀者は、いずれもここに監禁された。またリオ・グランデ・ド・スールのファロピーリャス革命のリーダー、ベント・ゴンサルベスも、このマルセロ要塞に収監されて脱獄を企てたことは有名である。今ではそうした

昔話も殆んど忘れられ、港内の船火事の警報、またはノッソ・セニョール・ド・ナベガンテの舟祭りに祝砲を放つ役割りをつとめるに過ぎない。

サン・マルセロ要塞を左がわに望みながら、イタパジペ島に向かって進むと、エキタジイ大通りの側にサント・アルベルト要塞がある。これには、フォルテ・デ・サンチアゴ、フォルテ・デ・アグア・デ・メニーノ、フォルテ・デ・ラガルチーシャスの別名がある。独立戦争に破れたポルトガル軍の司令官マデーラ・メーロ将軍が、バイアを引揚げる時に送別の合図の砲を発したのがこの要塞であった。現在これはバイア第六軍団の獣医部に使用されている。

サント・アルベルト要塞から少し離れたところにゼキタイア要塞がある。これは有名なアルコ伯爵によって建設され、サビナーダの坂乱に占領されたことがある。また、カヌードスの叛乱の時には、ここが第二遠征軍司令官サバジエー大将の住居となった。現在これはペトロブラスの構内となっている。

更に進んでモンテセラーテの先端に、それと同名のモンテセラーテ要塞がある。景色の美しいことでサルバドール随一ともいわれる。近くにモンテセラーテ教会があるが、要塞と教会共に名総督ドン・フランシスコ・デ・ソーザによって建設されたもの

だ。特に海岸のながめが素晴らしく、ここからサルバドール全市を望むことができる。イタパリカ島とマーデレ・デ・デウス島は紺碧の海上に浮き、レコンカボ・バイアーノの小港から出てくるたくさんの帆舟が見られる。

オランダ戦争ではモンテセラーテ付近で激戦があった。敵軍の大将ヴァン・ドースが悲壮な最後を遂げたのもこの場所である。

以上のほかに、サルバドールには海岸から離れた地点に三つの要塞がある。それは、サント・アントニオ・カルモ、サン・ペードロ、バルバーリヨ要塞である。これらの要塞は戦いのために一度も砲門を開く必要がなく、朽ちたまま現在に至っている。

お祭りのバイア

バイアはお祭りの町である。その大部分は教会祭りで、特に黒人系の信徒によって行なわれるものが名高く、ブラジル全土に知られている。

カンドンブレーやマクンバは、お祭りというより黒人特有の宗教儀式とみるのが正しい。それについては別に述べるとして、ここではバイアの教会祭りにふれてみよう。

幾つかの宗教祭でバイアの名物となっているのは、ノッサ・セニョーラ・ダ・コンセーソン祭、ノッソ・セニョール・デ・ナベガンテス祭、レース祭、ノッソ・セニョール・デ・ボンフィン祭であろう。そのほかに水神祭りともいうべきイエマンジャ祭がある。これらの中で最もポプラールなのがセニョール・デ・ボンフィン祭だが、これは毎年一月の第三木曜日から八日間にわたって行なわれる。このセニョール・デ・ボンフィンは黒人のお祭りではあるが、当日はバイアの全市民がその見物に集まって、ボンフィン祭一色となる。

ノッソ・セニヨール・デ・ボンフィン教会の境内洗い

ところで、このセニョール・デ・ボンフィン教会は、ポルトガルの軍人テオドジオ・ロドリゲス・デ・

ファリアによって一七五四年に創設され、ポルトガルのセツバルにあるものと同じ神像がこれにまつられたのである。

ボンフィン祭は教会の水洗いから始まるが、これがまた見ものである。それは黒人信徒が教会の外部と敷地を洗う作業であって、これに参加する男女は数百から一千名を越え、人列は数キロにも及ぶありさまである。

一月の第三木曜日の早朝、ノッサ・セニョーラ・ダ・コンセーソン教会の近くからセニョール・デ・ボンフィンの聖なる丘まで、盛装した黒人女が長蛇の列をつくるのはけだし壮観である。それらの黒人女の衣服は全部白色で、レースを配して華美な刺繍を施したのが多く、ものものしい首飾りと腕輪をし、バランガンダンという絹のずきんをいただき、その上にモリンガ（素焼きの鉢）をのせ、それに色とりどりの花が盛られている。両側に立ちならぶ観衆はそれに熱烈な拍手を送る。

ボンフィン祭こそ、これに参加する黒人女にとっては一年を通じての栄光の日であろう。

行列のところどころにブリーニョ（小さなブーロ）のひく車があり、その上に白い鳥を入れたおりが積まれている。この白い鳥は、行列がボンフィン

の丘に着くと同時に教会の入口で放たれる習慣になっている。それは黒人がかつての奴隷の境涯をしのび、解放と自由の歓喜を意味しているもののようだ。

行列にはベレーロといわれる声楽隊が加わっていて、ピタンガの枝をかざしながら哀調を帯びた黒人歌を口ずさむ。それにはアフリカ以来のものがあり、またはサンバやカンドンブレーの歌もあるが、いずれもあまり陽気ではない。そのほかにほうきを持って進むバレドールの群があり、そのあとから水おけを積んだカミニョンが徐行する。炎天下、六キロもの距離を歌いながら歩行し、しかもボンフィン教会に着いてから水洗いをやるのは重労働だが、その日はいかに働いても疲労を感じないとの彼ら黒人の信仰があるのだ。真夏のこととて猛暑の中に歌い、踊り、教会の水洗いをやるのは容易でないが、黒人の狂気じみた信仰は普通人の常識では理解できないものがある。

水洗いは午前十二時に始まるが、聖なる丘には政府の高官や有名人でも徒歩で登り、自動車を用いない。

やがて最初の鉢の水が流され、ついで第二、第三の鉢から散水されると大ぜいの黒人が交互に出て掃

き清める。昔は教会の内部まで洗ったというが、一八九〇年からそれが禁じられ、外側だけが洗われるようになった。

教会の付近にはたくさんの野外店が設けられ、また夜はボンフィン教会をはじめ、あたりが一斉に点燈され、もむような人出で非常なにぎわいを呈する。

野外のバラッカには売店のほかにあらゆる種類の競技場、カポエーラ、賭け場、サンバ踊り場などがあって、喧騒と雑沓そのものである。

こうしたお祭りが八日間続き、そして二月初めのリベーラのカルナバル祭になるとは、文字通りのバイア祭りの観がある。

コンセーソン・ダ・プライアの集り

ノッサ・セニョーラ・ダ・コンセーソン教会は、初代総督トメー・デ・ソーザによって建設されたことは既に述べたが、これはサルバドールの守護神または商人の神様となっている。トメー・デ・ソーザ自身が建築材料を運んで、タイパ造りの原始的な教会を建てたのがその始まりである。現在の大理石張りの教会は数回の改築を経てできあがったものだ。こ

の中に安置されるノッサ・セニョーラ・ダ・コンセーソン像も、ポルトガルから送られたもので、重厚なジャカランダの彫刻と共に有名である。

ボンフィン祭には、アフリカ系の黒人特独の迷信じみたところが多分にあるのに反し、コンセーソン・ダ・プライア祭はカトリック的な気分が強い。これは商人の護神祭であるだけに、教会の外部には無数の屋台店が並び、それらがことごとくバイア料理を売るのが特徴である。そのためか、コンセーソン・ダ・プライア祭は、フェスタ・デ・コミーダ・バイアーナの別名でも知られる。

屋台店はそれぞれ工夫を凝らした装飾をし、代表的バイア料理のヴァタパ、アラカジェ、カルルーなどを調理するデンデ油（デンデ椰子の実からとった油）と、ピメンタの臭気が鼻をつく。ほかにもニワトリでつくられたシンシン、モケカ、ハウサまたはココ菓子など、それらの名前を覚えるのが容易でない。好奇心からバラッカを一巡すると、どこでもデンデ油の香が漂っている。

教会からかなり遠ざかった所にはバイア特産の果物を売る野外店があり、西瓜、イタパリカ島のマンガ、野生に近いがとても美味のみかんなどが並べられている。他のバラッカではサンバ踊りやカポエー

ラが盛んに行なわれ、群衆がそれを囲んでいるのはボンフィン祭りと変わりない。

コンセーソン・ダ・プライア祭はバイア料理のお祭りであり、それはまた、カポエーラとサンバの祭りでもあるようだ。

バイア特有のカポエーラ競技

船乗りの護神祭

コンセーソン・ダ・プライア祭が過ぎ、十二月末日から新年初頭に、名高いノッソ・セニョール・ドス・ナベガンテスのお祭りが挙行される。これはボア・ビアジェン祭ともいわれ、舟乗りの護神祭りで

ある。その当日は美しく飾り付けたたくさんの帆舟、漁舟、ジャンガーダ、モーター船が行列をしてトードス・オス・サントス港を航進する。その偉容はバイアならでは見られぬものだ。

船の列はバーラ(港口)まで行って、再びセニョール・ドス・ナベガンテス教会のあるモンテセラーテまで帰って来るが、これを船のプロシソン（礼拝行列）と呼んでいる。

毎年、ちょうど元旦にサルバドールに寄港中の船は、このボア・ビアジェン祭の列に加わる。また行列に参加できない船も、その近くに停泊して敬意を表するのが習わしとなっている。モンテ・セラーテのノッサ・セニョーラ・ダ・ボア・ビアジェン教会は小さな礼拝堂にすぎないが、内部の装飾アズレージョには難船救助の図が描かれ非常に貴重なものとなっている。ノッサ・セニョーラ・ダ・ボア・ビアジェンの女神像は、プロシソンによって、十二月三十一日にコンセーソン・ダ・プライア教会に運ばれて一夜を明かし、翌元日にナベガンテス祭の先頭の舟に飾られることになっている。

このナベガンテス祭の当日、陸上では教会の付近のバラッカで、サンバ、バッキ、カポエーラなどがあり、パンデーロス、カブァキーニョス、ビオラ、ア

コデオン、ベリンバウンス等の楽器が奏せられてお祭り気分は最高潮に達する。しかも群集の汗とピンガとわきがの臭気もつきまとう。

かくして飲み食い且つ歌う一昼夜が過ぎ、あくる二日の太陽が高くあがるのを見て祭りの終わったことを知り、人々は疲れきった足をひきずるようにして帰路につく。

このように、バイアのおもな教会祭りは十一月のコンセーソン・ダ・プライア祭に始まって、ナベガンテス祭、レース祭、セニョール・デ・ボンフィン祭となるので、それらを見物する目的で十一月にサルバドールを訪れ、一月まで滞在する観光客が多い。

以上述べたほかにもエスピリト・サント祭、サン・コスメ祭、サン・ダイモン祭、サンタ・バルバラ祭があり、また水の女神イエマンジャ祭もある。イエマンジャ祭を見物するには、前もってトードス・オス・サントス湾を一巡して土地の事情を少々知っておく必要がある。つまりイエマンジャ祭を見るための予備知識である。

七百か所もある「テレーロ」（拝堂）

極端に言えばバイアの特色は黒人系の住民にあり、しかもその黒人によって連想されるのがカンドンブレーである。それだけに．カンドンブレーは黒人文化研究の重要な分野となっている。従ってカンドンブレー研究の専門家とその権威者がいる。故人ではライムンド・ニーナ・ロドリゲスとアルツール・ラーモス、現存人ではエジソン・カルネーロ、ビバルド・コスタ・リーマ、ロジャース・バスチーデなどがある。ほかにもカンドンブレーの熱心な研究家は、バイアだけでも数十名に達するであろう。さすがはカンドンブレーの本場である。

ところで、カンドンブレーを黒人のお祭りと考えがちだがそうではなく、また単なる黒人舞踊でもない。これはもともとアフリカから伝来した黒人の宗教儀式で、見る目は決して楽しいものではなく、いわゆる邪教徒の迷信に終始する妖気漂うような感じである。

バイアでは、カンドンブレーの聖座を「テレーロ」(拝堂)と呼ぶが、これはサルバドールとその郊外だけで七百箇所もある。しかしカンドンブレーにも本物とまがいものがあり、後者に対しては、当局の取締りが厳重で相当の弾圧があるというのに、それでも繁殖力は驚くばかりであるというから驚く。

かつてはカンドンブレーの衰退期もあったが、近来は再び台頭して、むしろ以前にもまして隆盛となりつつあるようだ。特にバイアの観光客には、カンドンブレーは必ず見るべきものの一つとすらなっている。外国人にして特にしかりである。

ところで、六、七百もあるカンドンブレーの中で正夷正銘のものがどれほどあるかを知るのは至難だ。一九四四年に、作家ジョルジュ・アマードが、その方面にくわしい友人の協力を得て調べた結果、正式に登録されているものがサルバドールのみで百七あった。また一九六〇年に再び彼が調査した時は、六百十一のカンドンブレーのテレーロがあったという。ましてやレコンカボ・バイアーノ一帯では一千を超えるものと想像される。元来カンドンブレーはアフリカの黒人が「神」を礼拝する儀式だが、これが奴隷と共にブラジルに入り、時のたつにつれてあるものはカトリック化した。たとえば、セニョール・デ・ボンフィンにつながる「オシャラ」サン・ジョルジの「オショ・ショー」、ノッサ・セニョーラ・ドス・ナベガンテスの「イエマンジャ」、サン・バルトロメウの「オシュマレー」、サン・ラザロの「オモルー」、サン・ジェロニモの「シャンゴー」、サント・アントニオの「オグン」などである。そのほかカボ

クロ化したカンドンブレーもある。

最近は観光客目あてに企業化

バイアのカンドンブレー訪問には、その道に精通する人の案内を得なければ、とんでもないいかさまものを見せられた上に、たいしたサイ銭をせしめられる恐れがある。わけても近ごろは観光客を目あてに企業化されたものがある。

サルバドールで最も知名のカンドンブレーは、エンジェーニョ・ベーリョ、サン・ゴンサーロ、ヴァスコ・ダ・ガーマ、リベルダーデ、ガントエス、ビーラ・フラビーナに集合している。

バイアのカンドンブレーは、およそ次の四つに大別される。

一、カンドンブレー・ゴーゴ
二、カンドンブレー・アンゴラ
三、カンドンブレー・コレゴー
四、カンドンブレー・カボクロ。

サルバドールの最も著名なカンドンブレーには、ソシエダーデ・サン・ジョルジ・ド・エンジェーニョ・

ベーリョがある。これはアベニーダ・ヴァスコ・ダ・ガーマにあって三百年の歴史があり、サルバドールで最古のものだ。その女神や母神の黒人女は、九十歳から百歳の長寿であるのには驚かされる。

次にサン・ゴンサーロ・ド・レチロにあるセントロ・クルース・サンタ・ド・ラシエも有名で、マリア・ビビアナ・ド・エスピリト・サントという母神(黒人女)で代表されている。ほかにもたくさんのカンドンブレーはあるが、名高いものは例外なくその女神の経歴と人柄にあるようだ。

さて、カンドンブレーの見学には、テレーロの近くになってから自動車の速力をゆるめるのが礼儀となっている。もしその時に運がよければ、アタバキス(太鼓の一種)の音が聞こえてくるが、それはカンドンブレーの儀式が始められているからだ。やがてテレーロに着くと、人間のうめきに似た声とアタバキスを強くたたく音が響く。それはカンドンブレーの前奏曲ともいうべきアフリカの神「オリシャ」賛仰の儀式である。

聖座には紙や絹布でつくられた、さまざまの旗が飾られている。訪問客は男と女が別の側に列するのが普通だが、時には男女が共に席をとることもある。儀式が進むにつれて女神の「オリシャ」の入場

が伝えられ、三つのアタバキスの奏楽が最高潮に達する。カンドンブレーの奏楽には、打楽器の太鼓だけを用いるのが特徴である。

訪問者はいんぎんな態度を持して、カンドンブレーの神に対する礼儀を失ってはならない。その儀式の型は全部が必ずしも一様ではなく、あるものは有名人の中から十二人を公使に選んで招待する習慣がある。ジョルジュ・アマードなどがその一人だ。

僅か一、二のカンドンブレーを見ただけでは、それにどれほどの種類があるかはわからないが、大体おもなものに、オリシャス、オシャラ、エシューなどがあり、それが更に幾つにも分かれていてなかなか複雑である。一と口にいうオリシャスにもシャンゴー、オショロ、オショ、オヨシー、オグン、モルー、オシュン、マレーナナン、オバなどがある。以上の中でオシャラがバイアに最も普及しているが、その踊る動作は神秘的である上に強烈で、狂者の面相を思わせる。

またオリシャスには水神や火の神を意味するイエマンジャ、オシュン、ヤンサンがあって、それらには歌劇の要素があるので、ブラジル以外に広く外国にも知られている。ことにイエマンジャ踊りが有名で、ブラジルの土人のヤラー種族の舞踊によく似た

のがある。

カンドンブレーの彫刻

繰り返して言うまでもなく、カンドンブレーはアフリカ黒人の神をあがめる儀式だが、それがバイアでは次第に変型されて妖術や巫術を思わせるまでになった。アフリカ本来のカンドンブレーは複雑をきわめ、女神、男神、母神、地の神、水神、火の神、森林の神などが登場するのがある。時には動物（おもにウサギ）を生けにえにする儀式もあるが、その動物の血を剃髪した巫女（ミコ）の頭に流すすさまじさは他に類を見ない。どこからかなまぐさい風が流れてくるようである。

サン・ゴンサーロのカンドンブレーでは、シャンゴーの「娘」が頭上に燃える油のなべをのせて踊るのを見たが、不思議にも少しも火傷をしない。また油をふくませた綿に火を点じて飲み込むなど、一種の奇術のようだ。

いずれにせよ、バイアのカンドンブレーを研究するには、相当の時日をかけて広くテレーロを見回らねばならない。しかし現在はカンドンブレーについての参考書が多く、立派な写真帳もあるから、それ

によってもひと通り学びうる。中でもエジソン・カルネーロとロージャー・バスチーデスの著書『オ・カンドンブレー・ダ・バイア』が代表的である。ピエール・ヴェルジェー著の『オリシャス』には三十八の美しい挿画がある。画帳では画家カリベー自作の二十七の絵によって説明したものもある。

そのほかには、ジョゼ・メデーロの写真帳『カンドンブレー』が、特によく知られている。

次に、カンドンブレーに関連してバイアの名物としては、カンドンブレーの彫刻がある。

昔から、アフリカ土人が彫刻芸術に長じているのは周知の通りだが、特にギネーとコンゴ盆地の黒人がすぐれた彫刻技術をもっている。パリーやベルリン、ローマの画家や彫刻家で、わざわざアフリカ黒人の彫刻を学び、それによって作品をものしているのも少なくない。ピカソなどがその一人で、彼はアフリカ黒人の彫刻のマスク（面）を取寄せて自分の画材ともしている。

それらの黒人芸術の綿密な研究では、前述のライムンド・ニーナ・ロドリゲスとアルツール・ラーモスがあげられる。

ところでバイアのカンドンブレーの彫刻だが、昔は容易に購入できたのに、現在はサルバドールの市

街を捜し歩いても殆んど見当たらない。つまり、ある独占業者の手にあるので特殊の方法で求めるほかはない。

最後に、カンドンブレーとやや同じマクンバもあるが、これはあながちバイアでなくともリオや南部の諸州でも見られる。マクンバはおもにアンゴラとコンゴのバンツー黒人から伝来したもので、これも一つの宗教儀式であり、霊媒によって亡霊がよび出されるなどは、心霊術というか、エスピリチズモに似る点がある。カンドンブレー、マクンバ共に、アフリカとの比較ではかなり変型されているようだ。

ココ椰子茂る美しい海浜

バイアには幾つかの海岸があるが、どこも美しい。それらの海岸はドリバル・カイミの俗謡に歌われていて、とりわけ親しみを感じる。

プライア・デ・イタポアン、プライア・ダ・バーラ、プライア・ダ・ピッバ、プライア・ド・ブガリ、プライア・デ・ピアタン、プライア・デ・アルマソンなどである。

ほかにもまだプライア・デ・イネマ、プライア・ド・フラメンギーニョ、プライア・デ・ブラキーニョ

があるから、海岸めぐりだけで相当の時間を要する。

バイアの海岸には、南部ブラジルで見られない別の趣きと情緒がある。特にココ椰子がバイア風景に一段の美観を添えている。だからもしバイアの海浜にココ柵子の樹林がなくて、あの青い海だけであったなら、あれほどの美景は生まれないであろう。わけてもイタポアン海岸のながめに私は陶然となった。この海岸はアマラリナとピツバ海岸の先きにつづき、海辺の線の大きいところが気に入った。はるかかなたに燈台が見え、大西洋の波が岩礁を洗っている。沖にはジャンガーダの帆がちらほらし、その付近にカモメが飛んでいる。

イタポアン海岸の自動車路は、イピタンガの空港とリオ・ヴェルメーリョに通じる。

別のピツバ海岸はイタポアンとアマラリナの中間にあって、海水浴にもってこいである。

この海岸には有名人の別荘が多く、ここに著述家アントニオ・オスマール・デーアスや、詩人新聞人オドリコ・タブァレスの邸宅がある。こんな場所で悠々と思索し、著述に親しむのは人生至上の快楽であり、恵まれた生活境地だと思う。

このあたりは、内海でなく大洋に面しているから

オゾンを含む潮の臭気が強く鼻をついて心地よい。夏季にはたくさんのバイア人がバーラ、ピツバ、アマラリナ、イタポアン海岸に集まって海水浴を楽しむ。

今ではバイアの別荘地は、アマラリナからイタポアン海岸を経て、リオ・ベルメーリョの方面に延びつつあるようだ。リオ・ベルメーリョでは毎年仮装舞踏会が催されることで名高い。

名所「神秘の沼」

ところでイタポアンの近くに、海岸ならぬアバエテの沼がある。この沼はバイア名所の一つで、是非見るべきものとされている。ラーゴ・ミステリオーゾ（神秘の沼）といわれるだけに、沼の水は黒色を帯び、沼べの白色の砂原と面白い対象をなしている。

見物の順序として先きにイタポアン海岸を訪れ、ついでアバエテの沼に自動車を進めるのが理想である。アバエテの沼への沿道にはカジュやマンガの木が茂り、深緑の葉をそよがせている。

やがてアバエテの沼があらわれるが、あたりは静寂そのもので、暗黒の沼面から水の精でも出て来そうで気味が悪い。

イタポアンとアマラリナ海岸から市街を隔てた反対側（トードス・オス・サントス湾の側）には、プライア・グランデ、ペリペリ、サン・トメー・デ・パリペなどの海岸がある。そのペリペリにはジョルジュ・アマードの住宅があるが、かつて左翼作家といわれた彼も昨今はたいした印税で裕福なためか、時間的にはリオあたりに居る方が多いとか。またサン・トメー・デ・パリペには植民期の旧建築があって昔日をしのばせる。

またイタパジペ半島にはモンテセラーテ海岸とタニエーロス港があり、いずれの景色も美しい。

夏季休根ともなれば多くの人々がイタパリカ島に出かけるが、ここも全く別天地で、その静けさと展望の美は、リオやサンパウロで多忙な明け暮れの人には寿命がのびるほどだ。

また海水浴にも好適の海岸がある。この島は良質の鉱泉水と大えびラゴスタで知られている。サルバドールとイタパリカ間は毎日一回のモーター船が通っている。またイタパリカからイグアペ湾を経てサン・フェリスやカショエーラ行きの便船もある。イグアペ湾に近いマラゴジペ近傍には、セラミカ・バイアーナで聞こえる特殊製陶工場が幾つかある。

黒人「家伝」のバイア料理

つぎはバイア料理だが、初めにドリバル・カイミの歌の一節を解介する。

“ＴＯＤＯ　ＭＵＮＤＯ　ＧＯＳＴＡ　ＤＥ　ＡＣＡＲＡＪＥ　ＭＡＳ　ＴＲＡＢＡＬＨＯ　ＱＵＥ　ＤＡ　ＰＡＲＡ　ＦＡＺＥＲ　Ｅ　ＱＵＥ　Ｅ”

この歌の意味は、だれでもバイア料理のアカラジェを好きだが、それを作るに大した手間のかかることを考えない、というのだ。

サルバドールの街頭風景、バイア料理を売る黒人女。

バイア料理といってもしょせんはアフリカの黒人料理であって、それらのあるものは調理に驚くほどの手数がかかる。

バイア料理はデンデ油とピメンタで味付けされるのが特徴で、それに加えてココ椰子の乳液を用いる。ココ椰子の乳液は、特にモケカ、クスクスの材料として欠くべからざるものだ。カルルーにはその葉を用いるのが本当だが、近ごろではケヤボを代用するようだ。

バイアの黒人料理は、その原料と混合分量を知っただけでは美味のものはできない。つまりその調理法に秘訣があり、それが黒人の家伝ともなっている。従ってバイアの黒人全部が必ずしもそれを知ってはいない。昔の奴隷時代にはアフリカ以来の調理技術を心得ていた者もあったが、現在はそれが皆無といってよいほどだ。

たとえば、今では本格的の調理によるエフオや、ニワトリのシンシンを食べることは殆んど不可能といわれる。サルバドール市街の名物は、バイア料理を作りながら売る黒人女だが、好奇心で一つ二つ試食をするが義理にもうまいとは言えない。そのあるものは不潔を感じてのどを通らない。

さて、多種多様のバイア料理の中で、ブラジルはもちろん、世界的にも有名なのがヴァタパであろう。しかしこのヴァタパを賞味するには、その場所からして選ばねばならない。街頭の黒人女ではヴァタパを上手に作るのはまれで、やはり一流のバイア料理のレストランか、またはメルカード付近でのバイア料理の伝統的ノレンを誇る店を訪れるべきである。

参考までにヴァタパの原料を記すと、良質の米粉、乾魚（おもにガローパ）乾えび、カジュの実、玉葱、ショーガ、落花生、ピメンタ、サルサなどである。それらを前もって土器（すり鉢）で丹念につぶし、ココ椰子の乳液とデンデ油を混ぜつつよく練るが、この作業と火加減に秘訣がある。

ヴァタパの付きものとしてアカサがよく出されるが、これは上等のミーリョ粉末がおもな原料でその外観はゼラチン料理に似ている。アカサには牛乳でつくられたものもある。

シンシンの材料はニワトリで、特に黒色のニワトリが珍重がられる。これの調理にも乾えびのすったものを主とし、玉葱、ピメンタ、デンデ油を用いる。

サラパテルは代表的バイア料理の一つだが、豚の臓物が原料と聞いては胸が悪くなる。これにも玉

葱、ピメンタ、ニンニク、サルサ、クラボが多量に入れられる。

魚のモケカも有名なものの一つで、これは乾魚を粉末にし、玉葱、ピメンタ、薄荷、サルサ、トマトなどを一時間にわたって味付けをするのがその秘訣である。更に黄色のファロファとデンデ油を混合する。

それから問題のアカラジェであるが、これの材料と調理法はあまりに複雑で、一度聞いただけでは覚えられない。大体ノートはとったつもりだが容易に書けそうもない。

ほかにもアバラ、カルルー、アベレン、アウサ、ムングンザ、エフォ、ココ菓子のコカーダ・ブランカ、コカーダ・プーシャ、アルアなどがある。

バイア料理がうまいか否かは人それぞれの好みによるが、あの黒人女が街頭でバイア料理を作りながら売る情景は、バイア特有のものだ。それがいかにもバイア的で観光客に親しみを与える。

バイア旅行をしたい人のために

案内メモ

ジョルジュ・アマードの著作『バイア・デ・トー

ドス・オス・サントス』は、バイアの観光案内として書かれたものだ。この稿を終えるに当たり、バイアの見学旅行をする人のために、実際問題を少し記してみたい。

まず航空料金だが、ヴァリグ会社（レアル空輸会社と合併した）のスーパー・コンヴェア機でのサンパウロ、サルバドール往復は、二六・六八九クルゼーロ（一九六二年十二月現在）である。

サンパウロとリオ間はポンテ・アエレオにより、リオ、サルバドール間は直通とベロ・オリゾンテ経由がある。

サルバドールのホテルは、最上級がホテル・ダ・バイアで、これは市街の中心からかなり隔っている。市街の中心の一流どころにはパラーセ・ホテル、ホテル・メリジオナル、チリー・ホテルがあり、これら一日の宿泊料は、バス付きで一・二〇〇クルゼーロ程度、食事は別である。

バイアの物価はリオ、サンパウロより比較的高く、食物もあまりよくない。しかし二、三の上等のレストランがある。特にカストロ・アルベス広場の「レストランテ・カシケ」が定評がある。

ブラジル風物譚

サン・フランシスコ河の特色

私たちは時にブラジルの地図とにらみ合わせて当国の地理的常識を養う必要がある。と言うのはこの国のおもな河や都市の所在点を知らない人が意外に多いからだ。その一例として、ブラジルの大河の一つであるサン・フランシスコ河はどこを流れているかと問われても、直ちに確答できる人が少ない。はなはだしいのは、アマゾンの支流だと答える人がある。ましてやサン・フランシスコ河がブラジルの社会、経済、文化の面にどんな役割りを果たしているか知るべくもない。

かく言う筆者も、昨年の九月から十月にかけてオ・エスタード・デ・サンパウロ紙に連載された『伝道の河、サン・フランシスコ』の記事に刺激されて、この河についての文献を見直した事を白状せねばならない。

『伝道の河、サン・フランシスコ』の記事は、エスタード紙の少壮記者ルーベンス・ロドリゲス・ドス・サントスの現地レポで、彼独特の優雅な文体で記述され世評を高めたものだ。彼の文章に接するごとにエウクリーデス・ダ・クーニャを想起するが、時代

は異なるにしても両者のジャーナリストとしての観点と文体には、何か共通するものがあるようだ。

史書によれば、サン・フランシスコ河はブラジル発見の翌年、一五〇二年十月四日に航海家アンドレ・ゴンサルヴェスと、アメリコ・ヴェスプッチの探険隊によって発見されたとある。

ここで一つ地図を開いてみよう。

サン・フランシスコ河は、その上流を中部ミナスのサバラに近いカナストラ山脈に発して北方にゆるやかに進路をとり、ジュアゼーロからパウロ・アフォンソの岩礁地帯を経て更に東南に向かって流れ、ゆうゆうと大西洋に注いでいる。本流の全長は三千キロで、ミナス、バイア、ペルナンブーコ、アラゴアス、セルジッペの五州にまたがって流れ、その流域地を潤おす。

そのヴァーレ・ド・サン・フランシスコといわれる盆地の面積は七十万平方キロで、この地域内に約五百万の人間が生活している。それは聖地のヨルダン河、インドのガンジス河、エジプトのナイル河を思わせる。

飛行機上からながめるサン・フランシスコ河は、うねうねと白線を引いて遠く雲と地平線の間に消えうせている。それはかつて見た「失なわれた地平線」

という映画を想起させる。

思うにこの河の流域にブラジル奥地の文化が発したが、いまだに遅々として発展しないのはどうしたものか。西部の開発もさる亭ながら、同時にサン・フランシスコ盆地の産業振興も真剣に考究されてしかるべきだ。ミシシッピー河流域が北米の穀物倉となっている時、なぜサン・フランシスコ河流域の沃土が開発されず、昔のままになっているのであろうか。何事によらず企画と予算だけでは実際の仕事は進まない、興にそれと取組む人材が必要だ。

サン・フランシスコ河の流域地帯は上流、中流、下流の三つに大別され、それぞれ特異性のある社会を形成している。つまりサン・フランシスコ盆地はブラジルの人類、社会学的見地から、地方色研究の興味深い一つの課題となっている。

その上流はピラポラからパウロ・アフォンソまでをさす。その中には石灰質洞窟で名高いボン・ジェズス・ダ・ラパを始め、シケシケ、ジュアゼーロ、ペトロリーナの町が点在する。また下流にはピラーニャス、トライプー、ペネド、ピアサブスーなどの町がある。

川蒸汽

サン・フランシスコ河の特色としてあげられるものに、ひらぞこの川蒸汽とバランケーロと呼ばれる河岸の住民、並びにバルケーロ（シャタ舟の舟子）がある。

さてその川意汽だが、この船を見ていると前世紀にいるような錯覚をおぼえるほど、まことに古色蒼然たるものがある。水車式の水かきを回転させて徐々に進行するシロモノである。

太平の夢を破り突如として浦賀に来たペリーの軍艦は、艦の両側に水車があったが、この舟は船尾に水車がついている。古いアメリカを主題とした映画に時々現われるヤツとほぼ同じだ。

この川蒸汽はコミッソン・ド・ヴァーレ・ド・サン・フランシスコ（サン・フランシスコ盆地開発委員会）と、ヴィアソン・バイアーナ・ド・リオ・サン・フランシスコの所有に属するが、前者は連邦政府、後者はバイア州政府の経営によるものだ。

ヴィアソン・バイアーナ・ド・リオ・サン・フランシスコは、ブラジルの河川運輸会社では最古のもので、一八七一年の帝政期に創設された。その所有船舶もまたおそろしく古く、あるものはアメリカの

ミシシッピー河で長らく使用されたいわくつきのもので、時速四キロという驚くべきスピードで走る。ちょうど人間の歩く速度と同じであり、これで二千数百キロの旅をすると思えば、初めからウンザリする。全く現代離れした船旅である。

サンフランシスコ河の川蒸汽船

C．V．S．F（コミッソン・ド・ヴァーレ・ド・サン・フランシスコの略）所属の蒸汽船はいまだしも新しい方だが、それとても三十年以上の年数を経たもので、就航中の船よりは修理のため河岸に放置されているものが多い。サンパウロのCMTCのオニブスみたいなものだ。

C．V．S．Fは膨大な予算をもって三十年前に

設立され、円卓会議は盛んにやられるらしいが肝心の現地での実績には見るべきものがない。もっとも、実際の仕事が積極的に行なわれないのに業績があがるわけがない。

問題の蒸汽船は、航行中に進路の深さを測るとはいうものの、突如として思惑違いが起こる。それは水流で河底にできた砂丘に座礁することだ。そうなると、船長は船の積載量を減らすために乗客全部と貨物を河岸に降ろしてしまう。これは予期しないできごとであり、いわゆる非常時とあって一等船客といえども手伝わされるハメとなる。この荷降ろし作業には数隻のシャタ（小舟）が動員されるが、それがやって来るまでに長い時間がかかるので相当のシンボウを要する。

ブラジルの奥地旅行には往々にしてこのような手違いが起こるから、あらかじめ覚悟して行くことが必要で、短気な人は初めからアキラメた方が無難である。

さて、ようやく船が座礁点から離れて動き始めたのはよいが、たきぎの補給のためまたしても河岸に着ける。

このまき積みがすこぶるノンキなもので、いわゆる〝デッシャパラ・アマニャン〟式のノロノロした

働き方だ。見ていると彼らには時間の観念がないようだ。猛烈な暑さでからだがだるく、一等二等の船客は船室にハンモックをつって午睡しようとするが、やぶかが多くて閉口する。三等の船客は大低ビオロン、タンボリン、太鼓を鳴らしながら、彼らの土地の民謡に歌い興じている。

まき積みが終わって夕飯となると、船員のオーケストラが始まる。バンドの鼓手が食堂の給仕をするのも面白い。河岸の樹林はたそがれに包まれ、船の水かきの音にまじって水鳥のさえずりが聞こえる。

この船旅はイライラしてもはじまらない。だから借金や失恋の痛手など、総ての屈託を忘れさせる別天地の旅となる。

バランケーロ

次は河岸の住民のバランケーロのことであるが、彼らの大部分はポルトガル人とツピー土人（種族と部族の説明は省く）との混血系カボクロで、先祖代々二百年にも及んで同じ土地に住んでいるのがある。

彼らにとって最も大切なのは、減水期（ヴァザンテ）であり、この間を利用して河岸の湿地にマン

ジョカ、カボチャ、ミーリョ、米、フェジョンなどを栽培し、自家消費以外のものを近傍の野外市に売って生計をたてている。農作物以外の収入は、魚獲または、たきざを切って蒸汽船に売りつけることだ。

増水期(エンシェンテ)の収入はきわめて少なく、わけても恐ろしいのは急激な河水の氾濫で、そのために丹精の農作物や小屋などを流失する事もまれでない。従って増水期は毎年のように恐怖に襲われながら生活するが、だからといってそこを去って他に移転することもしない。それは愛郷や愛土心などとは異なり、無気力のしからしめる惰性と無精さであって、他の何モノでもない。ところが彼らには、彼等特有の強い生活力があり、普通の常識では理解し難いモノをもっている。

バランケーロたちの唯一の屈託は農作物の収穫であって、それ以外には欲望も野心もなく、自分の生活に必要とする甘蔗酒、縄たばこ、石油、僅かの布類、つり針等を購入する金があればこと足りる。これこそ無欲の社会だ。中には数百アルケールもの地主もいるが、その土地を利用して大もうけする事も考えない。彼らの住家は草家そのもので、パオ・ア・ピッケの土壁に、屋根は椰子の葉や樹皮でおおわれ

ているに過ぎない。それは簡素を通り越して原始人の生活に近いものである。

彼らの健康状態はきわめて悪く、厳密に言うなら一人として健康体の者はない。その大部分が慢性のマラリア患者であり、回虫、トラホーム、シャーガス病などにかかっている。そのおもな原因は偏食からくる栄養失調である。主食は乾魚とマンジョカ粉、少量の山羊の肉を食べる程度である。しかも文盲と血族結婚が彼らの体質と知能を低くしている原因になっているようだ。

ゼー・ソルダードのあだ名で知られる一人のカボクロの実例をあげると、彼は河岸に沿って一千ブラサ（奥に向かっての土地の広さは彼自身が知らない）の大面積の土地を所有しながら、最も下級の生活をしている。妻君は過労と多産のため年齢の割りにふけて枯木のように衰弱し、気力にも乏しい。彼の収入は、所有地からまきを切り出して未汽船に売るのと、少しばかりの山羊の肉を売ることによって得られる。

しかし、同じバランケーロでも少し進歩性のある者は、河岸の豊穣地に綿を栽培し、その綿花から糸を紡ぎ、家内工業として妻君や娘がレース編みまたは刺繍をやって収入を得ているのがある。しかしこ

のような家族は極く僅かである。

ところで、無気力な彼らも魚獲術にはなかなか長じており、彼ら独特の方法でスルビーやドゥラードなどの魚を捕獲する。しかしその方法は前世紀から行なわれているままで、それ以上にはなんら改良も進歩もしていない。地理学者テオドロ・サンパイオが一八七九年のサン・フランシスコ上流視察記に述べているバランケーロの生活様式が、現在と変わりがないのを見てもうなずける。

サン・フランシスコ盆地の発展を阻害するものの一つとして、封建社会の代表的存在であるラチフンジオ（大地主）がある。

彼らの多くは都市に住んでいて、広漠たる所有地に牛を放牧し、それによって莫大な収益をあげるが、特に土地の小口分譲や他の生産面への利用は考えない。幸いこの点に着眼したペトロリーナ近傍の地主は、土地を小作人に解放し、また自身もそれを耕作してセボラ（玉葱）を栽培している。現在ではその地帯がブラジル有数の玉葱の生産地となりつつある。

話はバランケーロにもどるが、彼らにはカボクロ・ダ・アグアのあだ名があり、その用語には、辞書にもない解し難いものがたくさんある。およそ彼

らは農業知識に乏しく、地質による作物の選定、施肥、灌漑、病虫害駆除等の技術的指導もないまま旧態依然、祖先以来の農法を続けているのは悲哀だ。

しかし、当のバランケーロにはそれが普通であって、少しの進歩も向上もないのは、ブラジルの前途のために憂慮すべきことである。農業指導に始まって交通運輸の改良、衛生救護の施設こそ、サン・フランシスコ盆地での急務である。

バルケーロ

サン・フランシスコ河の用船航路が開けたのは今から三世紀も昔だが、その割りに進歩を見ないのもこの河の特徴と言える。

アマゾン河の輸送船にはガイヨーラ、ヴァチカン、レガトンを主とするほかに、さまざまの型の舟が用いられるが、サンフランシスコ河では前世紀の遺物の蒸気船と、大中小のシャタ（小舟）が使用されるのみだ。

バルケーロという小型舟の舟子について述べてみよう。

彼らは単独で働くことは少なく、長距離の輸送には必ず二重か三隻が組んでそれに当たる。この小舟

のチーム・ワークたる〝組〟を、アジュージョと呼んでいる。

小舟を丸木でいかだ式に結合して、あたかも一個の舟として使用するが、こうすることによって激流にあってもテンプクを避けられる。カノア舟によるサン・フランシスコ河の探険は十六世紀末に発し、十七世紀となってはバンディランテスが黄金の探索のため、ピラポラからデアマンチナまでもさかのぼった記録がある。

ところで、シャタの大型のものはパケテと言われ、往復共に貨物を積む。　一日当たりの航程は大体二、三十キロで、四十俵から五十俵ぐらいのマンジョカ粉を積みうる。このパケテにはマストが立てられ、ジャンガーダのように高さ十パルモ（一パルモは約二十一糎）から十五パルモの三角型の帆がつけられる。下流のパウロ・アフォンソ以南では、舟も更に二本マストをもった大型となり大いに輸送能力をあげるから、フェロ・ヴエーリョ（古鉄）の代名詞である蒸汽船も顔負けと言っところだ。この大型のシャタには乗組員九人から十一人を要する。バルケーロは、自己で舟を所有する者はまれで、殆んどは所有主に雇われ、または歩合制で働いている。その給料と歩合、請負賃がまた驚くほど安い。一九

四三年ごろの例をみると、数十日を要するひと航海の貸金が一人三百ミルであったなどは信じられないぐらいだ。現在はもちろんそれよりも高価であろうが、それにしても、ひと旅行数千クルゼイロなどは考えられない。もっとも彼らバルケーロは夜間は舟を走らせず専ら昼間だけの仕事だ。早暁四時か五時には舟出して夕暮れには河岸につけて夜明けを待つ。しかも食料付きだから、独身者には給料の大部分が残る。

しかし、一九四五年の調査では、バルケーロ一人一日の貸金が十クルゼイロスだったと言う。ここでは労働法も最低賃金制も通用しない。

サン・フランシスコ河の風物の一つとして終わりに書き添えねばならないのは、アグアデイロという水売りのことだ。

それは、ブーロの背に幾つかの水を入れたタルを乗せて、飲用水に不自由な場所に売り歩く商売である。これはサン・フランシスコ地帯に限らず、北東ブラジルの各地にも見られ、南部ブラジルにはない一つの特異な風景であり、これこそほんとうの水商売である。

グワナバラ湾の蛇島

グワナバラ湾には大小数十の島がある。その中で最も知られているのがゴヴェルナドール島とパケタ島で、イリア・ダス・コブラスと言っても知っている人は少ない。しかし、現在海軍工廠と海軍陸戦隊本営のある島だと言えば、なるほどあの島か、とうなずくだろう。当のカリオカでさえ手近なグワナバラ湾の知識に乏しい。しかもこの島は国際空港ガレオンの近くに所在している。

さて、この島はリオ市の建設に大きな役割りを果たしているのである。ブラジルの三代総督メン・デ・サーが、おいのエスタシオ・デ・サー（リオの初代ゴヴェルナドール）に協力してリオ市街の建設に乗り出した時、その建築用材を切り出したのがおもにイリア・ダス・コブラスからであった。当時のリオ市街は、モーロ・ド・カステロを中心に形成された。

蛇島は長さ八百メートル、幅三百メートル（二十四平方キロ）に過ぎない小島だが、リオの開拓当時は全面こんもり茂った森林におおわれていたという。しかも、至るところに蛇がウヨウヨしていたので、いわゆるイリア・ダス・コブラスという名称が付けられた。

ところで二代目のゴヴェルナドール、サルバドール・コレーア・デ・サーの代になって、蛇島はジョアン・グテレス・ヴァレーロというポルトガル人に無償で譲渡された。同時にこの島はアフリカから輸送された黒人奴隷の荷揚げ場にされたとある。

つまり、リオの奴隷市場に運ぶ前にこの蛇島に奴隷たちをかこったらしい。もっともあのころの黒奴は人間でなく、ペサとして商品視されていたのだ。それは一五六八年のころであるから、リオには人々の想像よりも早く奴隷を入れたことがわかる。

またジョアン・グテレス・ヴァレーロが、リオでの最初のネグレーロ（奴隷商人）であったことも知られる。

その後数年を経てから、蛇島はジョアン・グテレスからフォンセッカ某に売却された。価格が十五ミル六百レースであった。今ならサンドウィッチの一つも食えないおネダンである。

フォンセッカ某は間もなく蛇島を買った同価格で、ベネジット派のペードロ・フェレーラ僧に再譲渡した。ペードロ・フェレーラ僧は、リオのサン・ベント修道院を創立した名僧？　だが、なかなかの手腕家だったようだ。

彼は買収した蛇島に種々の作物を栽培し、余分の

面積では借地料をかせぐというチャッカリさであった。

この辺までは天下泰平だが、歳月を経るにつれて、蛇島がリオ市の防衛に重要であることを悟った政府当局は、島の所有権をフェレーラ僧から奪回すべく相当にホネをおった模様である。

政府の言い分は、もともと蛇島はジョアン・グテレス・ヴァレーロに貸与したのみで譲渡権は認めない、従って蛇島の買収は違法である、と言うので、ついに裁判にまで発展した。その当時のことだから、リオ周辺には地主の判然としない大面積の土地がたくさんあったにもかかわらず、僅か二十四平方キロの小島の所有権をめぐって、政府と一僧侶との間で大きな問題となったのだから面白い。

いうまでもなく、リオは開発当初にフランス軍の侵略をうけ、多くの犠牲を払っている。そのフランス軍が、ゴヴェルナドール島を根拠にしたことからも、同島に近い蛇島がリオ防衛の見地から重要視されたことは無理がない。政府はフランス軍の再度襲来に備えて蛇島に要塞を築くため、その所有権を取りもどす必要に迫られた。

ベネジット派のフェレーラ僧もさるもので、政府に対してかたくなに譲歩しなかったが、オンサのあ

だ名で知られるルイス・モンテーロがゴヴェルナドールに就任してから、他愛もなくこの蛇島の問題は解決した。いかにして解決したかの記録はないが、どうやら荒療治がなされたらしい。

問題の蛇島が政府の手に帰すると、ここに要塞を築き、「フォルタレーザ・デ・サン・マルガリード」と命名した。これは、当時のポルトガル王室の執政官マルガリード・デ・サボイアに敬意を表わすためであった。

このサン・マルガリード要塞は一つの城閣にも等しく、完成までに少なからぬテンポを要している。リオの名ゴヴェルナドール、ゴーメス・フレーレの時代にようやく完成したのであるから、ひどく気の長い話ではある。それほど大騒ぎをし、多くの日数と予算をもって工事を完了したのはよいが、フランス軍の再度襲来もなく、サン・マルガリード要塞は戦わざる要塞となった。

後日、皮肉にも同要塞にミナス革命の主謀者（チラデンテスを除く）が数名幽閉されて、裁判の判決を待ったのは哀れな話である。その中の一人である詩人トーマス・ゴンザーガがアフリカに流刑された事など、歴史に記されている通りである。

イリア・ダス・コブラスは現在海軍省の所有に属

し、島全体が海軍の諸施設で占められていて、蛇など一匹も見当たらない。

北東ブラジルのレンデーラ

先年評判になったブラジル映画『オ・カンガセーロ』の主題歌にレンデーラが歌われている。

レンデーラ、つまりレース手工女（レース手編み女）のことだが、これが北東ブラジルの特色の一つとなっている。

このレース手工業はブラジルはえぬきの産業ではなく、ポルトガルから伝来したものだ。また同じノルデステでも、セアラー州のアラカチーがその本場である。

このアラカチーのレース手工芸は、ポルトガルのプイ地方の習慣と法式そのままであるのが注目される。しかも手工女の殆んどが純ポルトガル系でなく、むしろカボクロ系であるのが面白い。

大体レース手工芸は十五世紀ごろフランスで始まったらしく、次第にスペイン、ポルトガルに伝わったとある。

ポルトガルではペニシェ、セッバル。ビアンナ、ビーラ・ド・コンデなどがレース手工業で有名だが、

特にマデーラ島のレース手工芸は世界的に知られている。マデーラ島の拓殖事業はブラジルよりもはるかに早く着手されたが、この島民の特徴は非常にねぼり強いことだ。特に女性の、ネバリ強さは敬服のほかない。だからこそ複雑微妙にして優美なレース編みに専念できるわけであろう。

マデーラ島のレース手工芸は、文字通りの手編みで機械を用いない。原始的だが機械では出し得ない手芸の功妙さが現われており、その製品は高価である。

北東ブラジルのレース編みの女

このレース編みの手芸が、ポルトガルの植民によってブラジルに入れられ、男子が外部の作業に従

事する間に、婦人が家庭にあってレース編みに励んだという、このことに北東ブラジルのレンデーラの歴史が発している。レース手編みは驚くほどの根気がいる。

一つの卓布や寝台カバーを作り上げるには数カ月を費すこともまれでない。こうして完成されたものは立派な芸術品である。

北東ブラジルのレース手工芸は百パーセント女性の家庭工業であって、利害を離れてこの手芸に生き甲斐を感じている者もあるほどだ。セアラーでは名門の婦人で趣味としてレース編みに精出す人も多く、夫が外出した後、サーラで陽光を浴びながらレースわくを手にする様子は、一つの画材にもなるだろう。物質万能の現世にこのような社会と雰囲気を想像するだけでも楽しい。

ブラジルの日系社会では、婦人がいけ花や茶の湯を習うことが流行しているが、セアラーを主とする北東部の婦人は、レース編みを覚えることを一つの楽しみにしている。それは貧富老若を問わない。老婆から少女までが勢ぞろいして、屋外でレース編みをしている場面は、ノルデステならではお目にかかれない風俗である。

彼女たちは、俗にカンチーガまたはモジーニャと

いう哀調を帯びた歌をうたいながら器用に指を動かす。高度な機械工業を見る目には何ともまだるっこいものだが、それは全くの平和郷であり、別世界の感すらある。

このようにして北東部の女性が多くの時間と労力をかけて作ったレースは、意外に安価で中間商人に買われるのが普通である。ところが、これがリオやサンパウロの富裕な家庭に飾られる時には非常に高価なものとなっている。

手編みレースは高価であるほどよく売れるそうで、金持ち心理の弱点をさらけ出している。北東部の手編みレースは、その作り方によってコルドンとパンノに大別されるが、リオでは習慣的にビコまたはポンタで通っている。また、レンダはブラジル全体の通用語だが、リオ市のカリオカの間ではエントレメーオの同義語も用いられている。

ところで、レースはなんと言ってもセアラーを筆頭にアラゴアスとマラニョンのものが貴重がられる。そこでサンパウロやリオ製のノルデスデのレースが現われるから注意を要する。しかも手編みでなくて機械編みときている。

これは日本製の黒壇の象が、セイロン産としてコロンボの港で売られているのと同じである。

手編みレースの原料だが、北東部ではおもにセリード綿とツクン椰子の葉の繊維を用いる。麻や絹糸を使っているのもあるが、ブラジル的な感じはツクン椰子の繊維とセリド綿を用いだものだ。

中には高さ十メートルに幅十五メートルもあるレースがある。こんな大作は一年から二年を要する。これは能率主義のアメリカ人などには想像もつくまい。

それにしても、このごろは資本主義の浸透と多量生産の風潮に影響されて、北東ブラジルの手編みレース工業も次第に減っていく傾向にあるようだ。これも一面やむを得ない。

その反面、サンタ・カタリナの首都フロリアノポリス近傍で、レース手工業がかなり以前から行なわれているのは一つの奇現象であろう。ついでに、機械編みのレース工業は、リオ州のノーバ・フリブルゴとサンタ・カタリーナ州のブルメナウに、ドイツ人経営の著名な工場のある事を付記しておきたい。

アマゾンのパラー栗

今から二十数年も昔の話だ。

サンパウロでパラー栗の街頭宣伝がされたことがある。

あれは確か連邦農務局の予算で行なわれたもので、なかなかよい思いつきだったのだが、どうしたわけか永続せずに終わってしまった。その宣伝では、パラー栗の生産や栄養価値などの説明書を添えて、一キロの包みをきわめて安価に市民に売っていた。

これでパラー栗の知識を得た人も相当いた。しかしその後は宣伝中止となり、従ってブラジル人でもパラー栗を知らない者がたくさんいる。

パラー栗はアマゾンの主産物の一つだが、特にトカンチンスとマデーラ流域に多く、その両岸の広い面積がパラー栗の天然林でおおわれている。

栗といえば、日本人はたいていあのイガに包まれた栗を連想するが、パラー栗はそれとは全く形状が異なる。カスターニャ・ド・パラーがパラー栗で、カスタニエーロ・ド・パラーがパラー栗の木である。

これは植物学の分類上、レクチダセア科に属し、学名はBERTHOLLETA EXCLISA, H. B. K. (B, NOBILIS. MIERS)である。

堅いからに包まれた白色の実には高率の油が含ま

れている。風味もよく、栄養価も高い。ババス椰子の油と同様にパラー栗の油は貴重なものである。体質的に動物性脂肪を食べられない人にもってこいのものである。

バカにパラー栗礼讃をやったが、この辺でパラー栗の木の説明にかかろう。

栗の木と言っても、パラー栗は高さ二十メートルから三十メートルもの大木となる一種の広葉樹で、葉の表面は淡緑色である。樹の形状はペローバに似て直線に高く伸び、かなり上方から曲りくねった枝を張るのが特徴である。

このカスターニャ・ド・パラーにも幾つかの種類があり、殆んどアマゾン全面にわたってそれぞれの密生地帯がある。あるものは高台のテーラ・フィルメに適し、あるものは低地に繁茂する。

ペルー国境近くのパラー栗の木は最も生産量が多いと言われるが、一つのさやに十五から二十の実の入っているのはまれでない。

一本の木から二ないし四バリッカ（一バリッカは百二十リットル）の生産がある。

パラー栗の木の生育はおそく、十二年目にようやく実の採集が可能となる。

〃桃・栗三年〃なんていう日本のコトワザはこの

栗にはあてはまらない。しかし大樹ともなれば、一本から一回の収穫期に五百キロも収穫できる。

パラー栗の開花期は十一月ごろで、実の収穫まで十四カ月も要するため、採集は翌年の十二月から年を越えた一月となる。

実の採集は完全に熟して落ちたものを拾う。大風の時などはたくさんの実が一度に落ちて、採集人を傷つけることもあるそうだ。

完熟したパラー栗の実からは五十〜六十五％の油が得られる。この油はオリーブ油の代用とされるほかに精密機械の潤滑油、薬用並びに化粧石けんの原料となる。また実のからは種々の細工ものの原料となるから、全く捨てるところがない。

ところで、この程度の説明では、パラー栗について十分わかってもらうことはできないだろう。

結局は、アマゾンのパラー栗地帯を直接訪れて、実際に見聞してもらうのが一番よさそうだ。

風光絶佳のオリンダ

ブラジルの都会で、オリンダほどその名が如実に土地の感じを表現しているところはない。

植民初期にペルナンブーコの初代カピタニア長官として赴任したドアルテ・コエーリョが、レシフェの対岸に風光絶佳の丘陵地を発見して、“Ｏｈ　Ｌｉｎｄａ”と感歎したことがオリンダの名称の端緒となっている。

事実オリンダのながめは美しい。当国のある著名な史家の言によると、バイアに次いでレシフェとオリンダを知らざれば、ブラジルの歴史を論ずる資格なし、とのおそろしい権幕である。

この国に長年住んでマカコ・ベーリョを自認しながら、ブラジルの歴史や風物なんか知りたくも見たくもない、というご仁はハンセイを要するだろう。

さて、このオリンダがブラジル史にどのような重要性をもつか、そのいわれを語るには、ブラジルとポルトガル本国がスペイン王室の統治下にあった当時、ブラジルがオランダの侵略をうけた事件に触れねばならない。

これをオランダ戦争と言うが、バイアのサルバドールが最初にオランダ軍から攻撃されたのは一六二四年で、その翌年にはブラジル軍の奮戦によってオランダ軍を放逐した。

このオランダ軍というのは、オランダ国家を代表する大資本の西インド会社が、艦船と軍隊をもって

各国の植民地を攻略する目的の軍隊であった。
バイアから追われたオランダ軍は、それでもブラジル侵略を断念せず、一六三〇年には五十隻の艦船と数千の兵力をもってレシフェを襲撃した。当時武力ではオランダ軍に劣るブラジル軍は、マチアス・デ・アルブケルケをリーダーとしてゲリラ戦術で敵に対抗した。それが史上に名高いアライアル・デ・ボン・ジェズスの野営陣だ。
さしものオランダ軍も多大の犠牲を払ったが、ようやくレシフェとオリンダを占領し、更にセルジッペを経てマラニョンまで攻略の手を伸ばしていった。
ところでオランダ政府は、占領地のレシフェとオリンダに自国の総督を派遣することになり、それに選ばれて来任したのが、貴族のマウリシオ・ナッソー公であった。
ナッソー公はオリンダがすっかり気に入ったとみえて、そこを政庁所在地として町の建設に尽力した。まず運河を掘って橋をかけ、公園を設け、教会、博物館、図書館を設立した。また森林を切り開いて天文台を建設するなど、ブラジルはオランダ軍の侵略でヒドイ目にはあったが、文化的には大きな恩恵を受けた。

更にナッソー公は、オランダ本国やドイツから著名な科学者、画家、医師、芸術家、建築家を招いたが、これがどれだけブラジルのためプラスになったか計り知れない。

このようにオランダ文化の浸潤のおかげで、ブラジルは文化面に長足の進歩をみたのである。ブラジル風物譚で歴史を詳しく述べては的はずれになるが、総督ナッソー公はすぐれた文化人で崇高な人格者であったので、その施政方針が紳士的に過ぎてオランダ政府の意に添わず、彼はブラジル滞在数年にしてオランダ本国へ去った。

その後のオランダ政府の対ブラジル政策が露骨な搾取主義となったため、ブラジル人の強い反感を買い、ついにオランダ勢力の放逐戦となり、前後二回に及ぶグワララペスの激戦で、完全にオランダ人を追放した。

このグワララペスの戦闘に参加したのは、当のブラジル人のほかにポルトガル人、黒人、土人の住民の混成軍であったことが面白い。言い換えれば、ブラジルがオランダから侵略され搾取されたのが動機となって、住民の間に勃然と愛郷心というか愛国心がわき、自由のためにこぞって侵略軍に対抗する結果となった。つまり純然たる兵士ならぬいろいろの

人種から成る住民の防衛戦であったところに、グワララペスの戦闘の特色がある。ことに黒人兵が勇猛に戦ったことが注目される。

しかもこの戦闘に数年を費したとは、ずいぶん気の長い話である。オリンダはこのような史的にゆかりのある土地だから、一度は見学する価値がある。それを知らずに訪日の旅を唯一の楽しみとするのは、ブラジル人の言うイングラット（恩知らず）の態度だ。

余談はさておき、レシフェのグワララペス飛行場に無事到着し、順序としてブラジルの水郷ヴェニスといわれるレシフェの町を見物し、終わって話題のオリンダに向かう。

オリンダはどこを見ても寺院ばかり、という感じで、その古風な街路を通り丘に登ると、眼前に開ける風景はアメリカ流の〝ワンダフル〟の一語に尽きる。かつてドアルテ・コエーリョが〝オ・リンダ〟と歎声を発した気持ちがよくわかる。

オリンダの数多い史跡の中で、特に訪れねばならないのはミゼルコルデア教会、セー教会、サン・ベント教会、ジェズイット神学校と修道院、サン・フランシスコ教会、ベネジット修道院、旧サン・ジェルツルーデス学校などである。

この中でジェズイット神学校は一五七一年の創立で、礼拝堂は一六六一年に改築されたまま現在に至っている。その内部にはジェズス会の創立者サント・イナシオ・ロヨラをはじめ、サン・ペードロ、サン・フランシスコ・シャビエル、ノッサ・セニョーラ・ダ・グラサ、ノッサ・セニョーラ・ダス・ドーレスなどの聖像が安置されている。

ジェズイット神学校から少し歩くとサン・フランシスコ教会がある。これも同じく十六世紀の建物で、特徴は美麗なモザイク芸術で、壁に部厚い金ぱくでキリストの生涯が措かれている。これはまさしく国宝ものだ。そのほかに、浮き彫りを施したジャカランダ材の重厚な感じの聖壇や、洗礼用具などがあるが、十六世紀の教会建築芸術の粋とも言うべきものである。

またミゼルコルデア教会、サン・フランシスコ教会と付属修道院、ベネジット修道院、旧サン・ジェルツルーデス学校などを丹念に見学するには二日を要する。

ことにミゼルコルデア教会は一五六〇年の創立であるから、オリンダ最古の史跡である。その原型の一部分がオランダ戦争の戦火で焼失したのは残念だが、一九〇三年以降ベネジット派の所属となってか

ら改築された。その内部には華麗なポルトガルの教会装飾が施されている。

教会以外の史的建物では、オランダ戦争の功労者であり戦後のオリンダの復興者ジョアン・フェルナンデス・ビエーラの旧家と、同じくオランダ戦争の殊勲者である黒人兵のエンリッケ・デーアスの家などが、昔のままに保存されている。

再び繰り返すが、オリンダのながめは実に美しく、十七世紀に戦場と化した町とも思われぬものがある。それは日本の京都が、度々戦火を被りながらあの昔以来の古典美を保っているのと同様であろう。

ところで最後に念のため一言。それは、オリンダ見物は自動車を使わずに徒歩に限る、という事である。

マテ茶

さきにパラー栗について述べたが、今度はエルバ・マテすなわちマテ茶について語りたい。

エルバ・マテはブラジル南部の主産物の一つだ。マテ茶は国内で消費されるほか、南米諸国（アルゼ

ンチンとパラグワイを除く）とアメリカ合衆国へ出されるから、重要な輸出産業である。

周知の事だが、ブラジルには珈琲局や砂糖、アルコール局があるように、インスチツート・ナショナル・ド・マテ（内国マテ局）があって、エルバ・マテの生産から市場調査、輸出統制、宣伝に当たっているのを見ても、いかにマテ茶が当国の重要産物であるかがわかる。ブラジル南部のある地域では、エルバ・マテの採集期には数千もの労働者がそれに動員されて偉観を呈するが、それはカフェー耕地とは異なる雰囲気と社会風景である。

ところで、ブラジルの医者は病人にカフェーは禁じてもマテ茶はすすめる。従って、もしマテ茶も飲めぬ病人になればあの世行きかも知れない。また、マテ茶はカフェーや紅茶と違って多量に飲んでも有害でなく、就寝前にマテ茶を飲んだために興奮して眠れないということもない。

マテ茶は利尿剤にもよく、肉食後の消化剤にはもってこいである。それは、マテに含まれるタンニン素が動物性蛋白質の消化剤になるからである。だから南部の牧牛地で、シュラスコを食べながらシマローンでマテを飲むのは習慣であり、同時に消化を助けるためのものでもある。そのシマローンの器具

にはなかなか凝ったのがあり、銀や金をちりばめたものがあるが、愛煙家がパイプに凝るのと同じ心理であろう。

マテ茶の採収

ガウーショが客人を歓待する意味で、シマローンのマテ茶を回し飲みするのは一面不潔だが、それが彼らの礼儀であり、また親しみでもある。

ブラジル南部の地方色を豊かに現わした風俗的な情景として、牧童とシマローンをあげる事ができる。

かつてマット・グロッソに遊んだ時のことだが、牛の胴体の焼いたのをファカで切りながら食べて、シマローンをごちそうになったことがあった。その時の大陸的な気分はたとえようもなく豪快だった

が、正直に言ってシュラスコとシマローンはたいしてうまくなかった。

さてエルバ・マテの産地は、同じブラジル南部の中でもマット・グロッソの東南部と、パラナの西部が主だ。また、サンタ・カタリーナとアルゼンチン、パラグワイ北部からも生産される。

パラナでは、パラナ松の密林地が過ぎれば画然と線を引いたかのようにエルバ・マテ地帯が現われる。それは海岸山脈からパラナ河までも続いている。

しかし、チバジー、チキチー、イバイー河の沿岸一帯にはエルバ・マテの天然林は見られない。

大体エルバ・マテの密生地は、イグワスー河の航行可能の地域、ポルト・アマゾナスからサン・マテウスとパルミラを経てウニオン・ダ・ビトリアに至る約四百キロメートルに及んで存在する。

サンタ・カタリーナでは、北部の平原地リオ・ネグロ、リオ・イグアスー、リオ・ウルグワイとその支流地帯に、エルバ・マテの原生林が発見される。

マット・グロッソ東南部ではエルバ・マテの天然林は少なく、その大部分は栽培されている。ところがパラナ河の右岸地域には、部分的にはエルバ・マテの密林がある。

いずれにせよ、エルバ・マテはブラジル南部の平原地にのみ生産されるもので、ミナスやリオ・サンパウロで生産されるマテ茶は〝イカサママモノ〟である。このごろはマテ茶のニセモノがたくさん現われているが、それはマット・グロッソやパラナ産のマテ茶に、カウナスやコンゴーニャスの葉を混入したものだ。ちなみに、ホンモノのエルバ・マテの学名はＩＬＥＸ　ＰＡＲＡＧＵＡＲＩＥＮＳＩＳ　ＳＴ・ＨＩＬ．であることを書き添えておく。

さて、マテ茶園などと聞けば日本での茶畑を想像する人もあろうが、本場の宇治あたりに見るような美しい茶園ではなく、文字通りの森林である。

野生のエルバ・マテは、巨木とまではならぬが中ぐらいの高さの樹木だから、葉の採取にはハシゴを用いたり、またはよじ登らねばならない。ファコンで枝ぐるみ切り落とすという大ざっぱさで、日本での茶摘み情緒とはおよそ遠いものだ。

マット・グロッソの東南部には大規模のエルバ・マテ栽培農園があるが、あたかもリオ市郊外の柑橘園を思い出させる。エルバ・マテの採集期は六月から十月までで、その間は大繁忙をきわめ、これに働くのは殆んど男子である。それらの労働者は他方面から出かせぎに来るのが多い。農園づきの労働者は

もちろんいるが、収穫期にはたくさんの臨時雇いを必要とするので、それを目当てに平時は他の仕事に従事しているのである。

マテ茶の調製法はきわめて原始的で、葉の採取から二十四時間で作業を完了する。製造工程で最も肝要なのは俗にいうサペカージェン（燻灸）で、これによってマテ茶の外観と風味が決せられる。この燻灸法にはパラグワイ式とブラジル式の二つがある。前者は葉の付いた枝を積み重ねておき、その周囲から相当の間隔をおいてたき火の火熱と煙りを送って燻灸する方法であり、後者は直接火熱によって燻灸する方法だ。このサペカージェンを終えてから木づちで葉と葉柄を粉砕し、サッコか、たるに入れて送り出すのである。

マテ茶の調製順序をもつと厳密に言えば、デセッカージェン、バルバクワ、カンシアなどの作業もあるが、これらの用語はマットグロッソとパラナ、サンタ・カタリーナで非常に異なり、辞典にもないのがある。

次はマテ茶の香味だが、生産地と調製法によって渋味をもつのと甘味を帯びるものがある。また香気と味とともに比較的薄いものと濃厚なのがある。

概してパラナとサンタ・カタリーナ産は濃厚であ

る。そのいずれを選ぶかは人各々の好みによる。マテ茶の香味の濃度は葡萄酒のセッコやドーセのように、〝エストラ・フラコ〟と〝エストラ・フォルテ〟、または〝パラダール・フォルテ〟で区別される。

昨今は冷却したマテ茶を、清涼飲料水として飲ませる店がサンパウロやリオに出現した。これは暑い日にはもってこいの飲み物だ。

マテ茶の宣伝文句で面白いのは、レオン印のマテ茶で〝マテを飲み、且つ濫用されよ〟とある。

これによってもマテ茶を水代わりにたくさん飲んでも、決して腹をコワスことはないようだ。

白いカイピーラ・ムシュアンゴ

われわれが通常使っているカイピーラ（田舎っぺ）とセルタネージョ、カボクロなどの語は、いずれも同じような感じを与えるが、このほかにもカイピーラの同義語として「タバレウ」「ムクフォ」「ムシュアンゴ」などがある。なかでも　ＭＵＸＵＡＮＧＯ（ムシュアンゴ）といわれてもそれを知っている人はきわめて少ない。普通のポルトゲースの辞典には、ムシュアンゴはカイピーラと同じとなってい

るが、さすがに百科辞典にはその説明が詳しくのっている。ブラジルの風物を学ぶには、単なる辞典では用をなさない事を如実に感じた。

ムシュアンゴは、皮膚の浅黒いカイピーラではなく全くの白人で、しかも金髪碧眼の者が多い。

中にはねこのように緑色の目のムシュアンゴもいる。ナンとかいうハリウッドの女優のような金髪の女が、ここでは全くのカイピーラときているから驚かざるを得ない。

ところでこのムシュアンゴはリオ・デ・ジャネーロ州北部、パライバ河口近くの砂質の低地に住む特殊のカイピーラである。パライバ河口の低地は、俗にレスチンガと言われる海に面した湿地帯であって、ここにはえる植物も発育不良の見本のようなものだ。点々として潅木や疎林が見えるだけで大森林はない。同じパライバ河口地帯という中でも、ムシュアンゴが多く住んでいるのはサン・ジョアン・デ・バラの近傍である。その一帯は土地が波状を呈し、言うところの不毛の地で農作には最も不向きとされている。

社会的にみてムシュアンゴは最下級の貧農だが、彼らはあえて富を積もうという欲望もなく、やせ地で交通不便、不衛生のあらゆる悪条件の中にゆうゆ

うと暮らしているのは不可解なことだが、彼らには彼らなりの人生哲学があるらしい。「人間は余り働くと、毒になる。」これがどうやら彼らの人生観第一条のようだ。だから、そこには争いも生存競争もなく、前世紀そのままの進歩のない平和郷が存在するだけである。目を絶えず新しいもの、たとえば人工衛星やロケットなどに向けがちなわれわれも、距離的に近いリオ州の北部にこんな別天地のあることを知るのも必要であろう。遅鈍と不生産の世界、それがムシュアンゴの社会だ。

ムシュアンゴは、それぞれ小面積の土地をもっているから地主には相違ないが、農業生産の見地からは問題にならない荒れ地で、それに少しばかりのマンジョカとカボチャなどを植えている。

また、中にはサン・ジョアン・デ・バラ郡内の煉瓦工場に働く者もあるが、その貸金はサラリオ・ミニモの更にミニモである。労働法も欲のない彼らには無用の長物である。そのほか彼らは家庭で手工業に従事するものもあるが、それはおもにかご造りである。それからムシュアンゴには魚つりや狩猟、野生植物の実の採集など、土人の生活様式に似るものがある。その採集物や手芸品をブーロにのせて、ガルガラの野外市に出かける。ガルガラはサン・ジョ

アン・デ・バラ郡のアタフォナ町から西北に向かって約十キロの地点だ。このガルガラの野外市はムシュアンゴがそれぞれの商品を持って集まるので名高い。その雰囲気はガルガラの野外市ならでは見られない珍しいものだ。

野外市の商品とは、ムシュアンゴの自家製のマンジョカ粉、乾魚、さまざまなかご類、素焼きなべ、むしろ、漁網、ハンモック、サビヤやパパガイオなどの鳥類である。ガルガラの野外市は週一回だが、ムシュアンゴは当日だけは早起きして、荷物を積んだブーロをひきながら砂道をゆっくりと歩く、全く時代ばなれしたのんきな人間の姿である。

彼らは朝、起床した時既に疲れ、夕刻となって疲れているから厄介な話だ。前述の通りムシュアンゴの人種的特徴は土人や黒人系でなくて白人系である事だ。彼らは背が高くなく概してやせ型である。栄養失調の者が多く気力に乏しい。寄生虫のもち主や慢性のマラリアにかかっている者も多い。彼らの主食物がマンジョカ粉、乾魚、カルネ・セッカ（乾肉）であるのは、北東部のセルタネージョに似るものがある。

ムシュアンゴ村を訪れて奇異に感じるのは、遊び戯れる子供がいずれも金髪で青い目をしている事

だ。一体彼らの先祖はどこから来たか、ドイツ系だろうか、それともスカンジナビア系か、これは人類学の上から興味深い研究課題であろう。

余談ではあるが、アマゾンの大密林の中にも碧眼紅毛の土人が住んでいるということを聞くし、サント・アマーロ湖畔にも青目のカイピーラが住んでいるとか。

白人すなわち文明人という観念をもつ日本の人々が聞いたら、きっと驚くことだろう。

奇鳥　シャンシャン

ブラジルは密林原野が多く、熱帯地でしかも広大な地域をもつ国であるから、珍しい鳥類や昆虫類が豊富である。しかし中には次第にその数が減って貴重な存在となっている野鳥もある。

その一つにＣＨＡＮＣＨＡ（シャンシャン）という野鳥がいる。この鳥はまれにしか発見されないので、今ではその名まえすら知らない人が多い。しかし老齢の農村人ならば、〝シャンシャン〟と聞いたら思い出す人があるかも知れない。

シャンシャンはその名称からして風変わりなもの

だが、これに類似するものにカラカラとアヌーがある。

このシャンシャンは鳥の中のイカモノ食いで、なんとその大好物がダニときている。牛の背に寄生しているダニをムシリ取って食うのが得意である。これは間接的には牛の血を吸うことにもなるが、牛はいい気持ちで目を細くしている。牛の血を吸って気味悪いほどコロコロと太ったダニを、シャンシャンが牛の背に乗ってさもうまそうにそいつを食っている様は、ブラジルの牧牛地ならではの特異な風景である。

シャンシャンはその習性として大森林にはすまない。カンポや疎林の中にいて、もし人影でも発見すればトンキョウな声を出して、もよりの人家をさして飛んでいく。それが、ちょうど人が近づきつつあることを急報に行くように感じられるところからＮＯＶＩＤＡＤＥＩＲＯ（ノビダデイロ）の別称がある。だから突然にシャンシャンの鳴き声がしたならば、人が近づきつつあるのを知ることができるので、だれでもが一応道路の方を見やることになる。だからシャンシャンは、狩猟家にとっては目の上のコブで、野獣や鳥を発見してまさに発砲しようとする瞬間に、シャンシャンに鳴きたてられて、せっか

くのエモノを逃がしてしまう場合がある。「ちくしょう」と、カッサドールはうらめしそうにボヤいて立ち去る仕儀と相成るのである。

このようにシャンシャンがダニを食い、鳥獣保護の役目をつとめるのが自然界の面白さである。

昔、農村の妊婦はシャンシャンの肉を食べる習慣があった。それは生まれる子供が早く口がきけるようにと願う気持ちの表われであった。しかしシャンシャンの肉は堅くて美味ではないと言われている。

年老いたカイピーラやカボクロでシャンシャンを知らない人はないだろうが、この鳥もどうしたことが次第に数が減じて行く。きっと妊婦が食べたか、それともカッサドールにウラまれたかだろう。あるいは農薬が普及して牛のダニが減ったからであろうか。とにかくこのような奇妙な鳥が減って行く事は、ちょっと寂しい気がする。

リオ・ブランコ外交

イタマラチーの巨人

過去に傑出したブラジル人の中で、バロン・ド・リオ・ブランコを特に尊敬する私は、彼の伝記をはじめ多くの外交記録、モノグラフィア、ならびに彼の著書を集めているが、学ぶにつれてその人となりが理解され、外交政治家として卓絶する存在であったことがうなずける。

「ブラジルに、もしリオ・ブランコなくばブラジルの太陽は小さく、輝きも少なからん」とは、如実に彼の人物と功績を表現するものだ。

事実ブラジルは、一四九四年にポルトガルとスペインの間に調印されたトルデシーラス協定線によれば、その領土は現在の三分の一程度に過ぎなかったが、その後植民期ジェズイットの土民教化と、バンデーランテの奥地探険などによって、次第にその領土線を拡大してきたのである。

しかし、その後のリオ・ブランコ外交の成功がなかったならば、ブラジルは現在の国土を保有し得なかったことは明らかである。これは当国の小学児童の常識ですらある。従って過去のグランデ・ブラジレーロでは、バロン・ド・リオ・ブランコほど全ブ

ラジル人に尊敬されるものはないであろう。それほどに彼の人格はすぐれ、ブラジルのために尽くした功績は絶大である。

かつて野田良治氏は、日本公使館を代表してバロン・ド・リオ・ブランコの葬儀に参列したが、無慮数万の人出でリオ有史以来のものであったと驚いていた。バロン・ド・リオ・ブランコはリオのサン・フランシスコ・シャビエル墓地に葬られているが、その墓参者は今もあとを絶たない。

いうまでもなくバロン・ド・リオ・ブランコの肖像は、五クルゼーロ札に印刷されているので、最も人々に親しまれている風姿である。

彼は父と同名のジョゼ・マリア・ダ・シルバ・パラーニョスで、父は海軍兵学校出の帝政の大政治家、新聞人ビスコンデ・ド・リオ・ブランコである。このように父と子の二代にわたって、偉大なブラジル人を生んだことは当国の誇りというべきであろう。

リオ・ブランコは、第五代大統領ロドリゲス・アルベスの任期中に外相となって以来、十年の間外相のいすを占め、働きながら外務省の事務室で死去したことは、いかに彼がその使命に全心全霊をささげたかを物語っている。そのことが、パラシオ・イタ

マラチーのかつての彼の事務室の四囲の壁に記されている。彼の名によってブラジル外務省のパラシオ・イタマラチーが連想され、同時にブラジルにとって最もはなばなしかつた外交史が繰り広げられる。

では、何ゆえにリオ・ブランコがそのように有名なのであろうか。

彼の数多い功績の中で特にあげねばならないのは、ブラジルと隣国との国境問題の解決である。

一八九五年の対アルゼンチンのミッソンエスの領地問題の解決に始まり、一九〇〇年の仏領ギヤナとのアマパの境界問題、一九〇三年の対ボリビア政府とのアクレ領地問題、一九〇九年のペルーとの国境問題の解決など、それらはバロン・ド・リオ・ブランコの非凡の努力によって、ブラジル側に有利の判決が下されたのであった。

一八九五年のミッソンエスの領地問題は、アメリカ合衆国のクリーブランド大統領の立会いの下に正当な判決をみたが、これによってブラジルに属した面積は三万平方キロメートル以上で、それはベルギーの面積にも相当するものである。

また一九〇三年のペトロポリス会議で、ボリビア政府との交渉にも成功し、長い間現地で争闘の絶え

なかったアクレ領地が正式にブラジル領となった。このペトロポリス会議によって、ブラジル領と認められた面積は十二万五千平方キロメートルである。当時のブラジル政府はボリビア政府に対する交換条件として、マデーラ河の上流ボリビア国境に、マデーラ・マモレ鉄道の建設とボリビアに向けてのノロエステ鉄道の開設を約束した。かくてこれらの外交戦は成功を収めたが、その裏にはすべてリオ・ブランコの超人問的な活躍のあったことを知らねばならない。

彼は、領地問題のために外国政府と交渉するに先だって、必ずあらゆる面から綿密且つ厳正な調査をなし、準備万端を整えて臨んだものである。そのためには彼自ら現地調査におもむき、または外務省の事務室にあって、山なす書類の調べに徹夜することもたびたびであった。

彼は殆んどペトロポリスの私邸には帰ることなく、外務省内に浴室付きの事務室を設けて住み、昼夜の別なく働きつづけた。この献身と勤勉努力の生活は歴代外相中唯一の人であった。

アクレ問題につづいてリオ・ブランコは、ペルーとの国境問題の交渉にも当たったが、当時現地調査に派遣されたのはこれまた有名な陸軍軍属技師エウ

クリーデス・ダ・クーニャであった。そして、このエウクリーデス・ダ・クーニャのアルト・ペルーの現地調査報告書は、ブラジル対ペルーの国境問題解決に当たり貴重な資料となった。

このペルーとの国境問題は、一九〇四年のロドリゲス・アルベス大統領の時から、一九〇八年のアフォンソ・モレーラ・ペンナ大統領の任期に至ってようやく解決されたのである。それは一つにリオ・ブランコ外交の成功に負うものである。

しかし十年の間断なき激務と重大な外交使命は、さすが精力絶倫のリオ・ブランコを極度に疲労せしめた。そのため一九一一年から彼の健康は衰え、一九一二年の二月に入って重態となり、その十日未明に巨星落つるがごとくに永眠した。

リオ・ブランコの外相時代には、リオにおいての米州外相会議があり、また一九〇七年にはオランダのヘーグでの第二回世界平和会議があった。このヘーグ会議において、ブラジルの全権としてルイ・バルボーザが出席して空前の成果を収めたのは、リオ・ブランコ外交の成功を意味する。

リオ・ブランコは名外相としてのみでなく、歴史家文学者としても著名であり、その文体の正しく美しいことで定評がある。割合いに歴史的著述が多

く、それはすぐれた文献となっている。

リオ市にはビンテ・デ・アブリルというルアがあり、そこにリオ・ブランコの生まれた家が記念物として保存されている。四月二十日は彼の生まれた日であるところから、それがルアの名となっているのである。リオのアベニーダ・リオ・ブランコは彼の名を永久に記念するためであり、またエスプラナーダ・ド・カステロにはリオ・ブランコ記念塔が設けられている。

ほかにも彼の銅像はレシフェ、バイア、イリェウース、クリチバ、サンタアナ・ド・リブラメント、ウルグワイアナ、ポルト・アレグレ、リベロン・プレートにも見られる。

リオ・ブランコの汎米主義

今年（一九六二年）はリオ・ブランコ男爵（ジョゼ・マリア・ダ・シルバ・パラーニョス・ジュニオール）の死去五十周年に当たるので、ブラジル外務省の主催で二月十日から七日間「リオ・ブランコ週間」が記念されることになった。それがちょうどプンタ・デル・エステの米州外相会議の終幕と一致したところに一層の意義を感じる。事実リオ・ブランコ

はブラジルの外相としてのみでなく、彼の人となりとその外交政策の根本義は、汎米主義の背骨をなすものであり、またモンロー主義の原則にも通じ、ブラジル外務省（イタマラチー）の一貫する伝統的精神でもある。

リオ・ブランコはブラジルのビスマークともいわれるが、彼のリヴァプールのブラジル領事時代からイタマラチーにおいての十年間の業績は、一外交官の働きとしてはあまりに大きく感嘆のほかはない。

ブラジルの外交史によれば、ドン・ジョアン六世のポルトガル王室がブラジルに遷居して、ブラジルとアルガルベスを含むポルトガル亡命政府を樹立し、その初代外相に就任したのがアントニオニア・アラウージョであった。その後第百十六代目外相としてリオ・ブランコが登場したのだが、在任十年の記録は彼をもって唯一とする。それは一九〇二年、第五代大統領ロドリゲス・アルベスに始まり、アフォンソ・モレーラ・ペンナ、ニーロ・ペサーニャ、エルメス・ダ・フォンセッカの四人の大統領の任期に及んでいる。その間アルゼンチン、ボリビア、ペルー、仏領ギヤナ、英領ギヤナなどとの国境問題を解決して、正式にブラジル領となった地域は七十万七千平方キロメートルに達した。それはドイツ、フ

ランス、イタリア、ポルトガル四カ国の本土の面積にも相当する。

このようにリオ・ブランコ外交の功績は、隣接国との境界問題の解決にあるが、そのために一滴の血を流すこともなく、外国政府との折衝も、あくまで厳正な調査と公平な国際道義を基礎としてたゆまざる努力をつづけた結果、つねにブラジルに有利な裁決をみた点は大いに学ぶべきものがある。それは、一つにリオ・ブランコの人格と愛国の至誠の反映というべきである。彼がベルリンのブラジル公使であった時、ロドリゲス・アルベス大統領から外相就任を要請されたが、その返信に

「余は共和国のためではなく、祖国ブラジルのために献身を約束する」と言っている。

ところでリオ・ブランコ外交を記述するに先だって、順序としてリオ・ブランコ外相前のブラジル外交史のあらましを点検する必要がある。

いうまでもなく中世から近代初期までのヨーロッパの社会、思想、政治の絶対的支配権はローマ教会にあった。それはキリスト教国であると否とを問わず各国は特使をローマに派遣し、多額の納税（貢物）をしたことは歴史にみる通りである。従ってローマ法王の発言によって、一国の運命が左右されたと

言っても過言でない。

その一例として、ポルトガル建国の基礎を築いたドン・ジョアン一世に対し、ローマ法王マルチーニョ五世は異教徒討伐の名目で、一四一八年にマロッコ遠征の許可を与えた。それは十字軍の性格を帯びるもので、ドン・ジョアン一世はまずマロッコのセウタ攻略により、ポルトガルの勢力拡大の第一歩を固めた。こうしたポルトガルの優勢にあった時に生まれたのがドン・ジョアンの第三王子ドン・エンリッケである。ドン・エンリッケの母は英国のランカスター王家の息女フェリッパであったので、彼はねぼり強さと進歩性をあわせもつ英国人の血をうけていたのである。

ドン・エンリッケ王子は長兄ドン・ドアルテと共に、ポルトガルの西南端サグレスに航海学校を設立して大洋航海術を研究し、多くのすぐれた航海家や探険家を輩出したが、これがポルトガル人の海外雄飛を鼓吹して地理的発展を促した基となり、またコロンブスとカブラルのノーボ，ムンド（米州）発見の動機となっていることは述べるまでもない。

かくて発見されたのがアソーレスとマデーラ群島である。それ以前にカステラ王国（スペイン）はカナリア群島を発見し、ローマ法王クレメンテ三世に

懇請してその所有権を認められていた。

つまり十五世紀中葉から十六世紀にかけては、ポルトガルとスペインがヨーロッパの二大強国であり、この両国の間に新領土発見がきそわれていたのである。

やがて一四五三年には、コンスタンチノープルがトルコ人によって陥落され、ここにローマ勢力が衰亡して中世が終わりを告げ、地中海の制海権は全くトルコ人に握られた。このことがポルトガルとスペインをしてインドに通じる大洋航路開拓を促進せしめる要因となった。

当時のポルトガルはインド航路を開くに先んじて、アフリカ貿易に主力を注いでいたが、それがやや軌道に乗った一四六〇年にドン・エンリッケ王子は他界した。

さて、ドン・エンリッケの遺業を継いでアフリカ貿易に当たったのが、ドン・エンリッケの甥ドン・アフォンソ五世であった。彼はアフリカ王のあだ名で知られていた人である。

次いで、ドン・ジョアン二世の時代となってアフリカ航路は延長され、カーボ・ベルデからギネー湾に達し、一四八八年には、バルトロメウ・デーアスが難航をつづけてアフリカの南端に達し、それを書

望峯と名付けたことは人々の常識である。
それから四年を経た一四九二年に、コロンブスがアメリカを発見した。

一四九七年にはポルトガル人のヴァスコ・ダ・ガーマが、アフリカの南端を回って印度航路を開き、同年イタリア人のジョバニ・カボットがニュー・フォンドランドを発見した。一五〇〇年にはカブラルが新天地ヴェラ・クルース（ブラジル）を発見し、一五一七年にスペイン人のジョアン・デーアス・ソリスがアルゼンチンを発見した。
更に一五三四年には、フランスのフランシスコ一世の命によってジャック・カルチェーがアメリカ北部の探険をはじめ、セント・ローレンス河をさかのぼって、現在のモントリオールに達した。
またスペイン人のヘルナンド・コルテスは、一五一九年にメキシコの一部を攻略し、一五三三年にはフランシスコ・ビザロがペルーに侵入した。一五三五年から一五四二年には同じくスペイン大のヘルナンド・デ・ソートがアメリカ大陸のフロリダからミシシッピーの探険をした。
ここでコロンブスのアメリカ発見の一四九二年にさかのぼるが、必然の成り行きとしてポルトガルと

スペインの発見領土の争闘を防ぐため、ローマ法王アレキサンダー六世の立ち合いの下に一四九四年、トルデシーラス協定が結ばれた。このトルデシーラス協定は、ポルトガルとスペインの地理的勢力を限定するものであって、アフリカのカーボ・ベルデ群島から正午線に沿って西方三百七十レグアに境界線をひき、その線から東部をポルトガルの勢力圏とし、西部をスペインの勢力圏とするというにあった。今から考えれば非常に大ざっぱなもので、カーボ・ベルデ群島のどこを問題の分界線の基点とするかも判然としていなかった。そこで、このトルデシーラス協定線を確認すべく幾度か現地調査隊が派遣されたが、その報告はまちまちでいずれが正確とも断定し難い。

ともかくトルデシーラス分界線によって、既にブラジルの領土的運命は決せられていたのだ。

思うにリオ・ブランコ外交の主力が、隣接国との境界問題に集中されていたとすれば、それは前述のトルデシーラス協定に原因を発していると言える。換言すればブラジルの外交史はトルデシーラス協定に始まるとみられるのである。いずれにしてもこの分界線によれば、ブラジルのポルトガル領はアマゾン河口のマラジョ島のやや中央部から南方に直線を

ひいた範囲で、サンタ・カタリナの北端を占めるに過ぎない。それは現在のブラジル国土の三分の一に相当するものである。

ドン・ジョアン三世の治世となってはブラジルの防衛と開拓が着手され、海岸からトルデシーラス協定線に向かって十五のカピタニアに分割され、それぞれにカピタニア長官が任命された。

また、植民期のジェズイットの土民教化村の建設と、十七世紀のバンデーランテの奥地探険によって、次第にブラジルの領土は拡大されたが、それは公式に認められたものではない。特に南部ではスペイン勢力との絶えざる闘争があった。

こうして、一七五〇年のマドリード会議と、一七七七年のサント・イルデフォンソ会議は、帰するところ、ブラジル南部においてのポルトガルとスペインの領土争いの調停のためであったのである。

父子二代の名外相

未来のリオ・ブランコ男爵、ジョゼ・マリア・ダ・シルバ・パラーニョス・ジュニオールの生まれた一八四五年のブラジルの全人口は六百万で、リオ市の住民は十五万にすぎなかった。彼は幼少から少年時

代まで、ジュカ・パラーニョスと呼ばれていたが、父シルバ・パラーニョスは陸軍土木技師と新聞人で知られ、リオ市のトラベッサ・ド・セナド（現在のビンテ・デ・アブリル街）のインペリオ型の二階家に住んでいた。ここでゼッカ・パラーニョスがうぶ声をあげたのが一八四五年四月二十日である。

当時の父シルバ・パラーニョス（後のビスコン・デ・ド・リオ・ブランコ）は二十五歳で、英明闊達にして進歩的であったため、陸海軍兵学校の教師のほか、新聞「オ・ノーボ・テンポ」や「コレーオ・メルカンチル」の記者として健筆をふるった。

時を同じくしてエリネウ・エヴァンジェリスタ・デ・ソーザ（マウア男爵）によって、ニテロイのポンタ・ダ・アレーアに製鉄所と造船所が設立され、ブラジルに初めて重工業が現われた。またカシアスの平和の剣は、十年に及んだ南リオ・グランデのファラポスの乱を平定したが、ブラジルの名はまだ国際的に知られるに至らなかった。

若くして創意に富み、愛国の至情に燃えるシルバ・パラーニョスは政界進出の械会をねらっていたが、幸い一八四七年にプロビンシア・ド・リオ選出議員として議場に臨むことができた。しかし一八四九年の選挙には落選し「ジョルナル・ド・コメルシ

オ」の編集部員となった。それより二年後の一八五一年には、上院議員の保守党総裁オノリオ・カルネーロ・レオン（パラナ侯爵）が特使としてプラタ会議に出席するに当たり、その書記長に選ばれた。

ブラジル帝国政府は、ブエノス・アイレスの独裁者マノエル・ローザが、パラグワイとウルグワイのカウデイリョの革命児と結託してウルグワイを攻略し、さらにパラグワイを併合せんとするプラタ連邦建設の野望を阻止し、南方の安寧秩序を確保するための折衝を数年にわたってつづけていた。当時ウルグワイの首都モンテビデオは、ローザ軍によって包囲状態におかれていた。そこでブラジルは、ウルグワイとアルゼンチンのエスタードス・ド・エントレ・リオス、並びにコリエンテスと軍事同盟を結び、ローザ軍との戦闘に待機することになった。

こうして、プラタ交渉は二年に及んだため、シルバ・パラーニョスは二年後に一応ブラジルに帰ったが、当時の政府首相オノリオ・カルネーロ・レオンの要請によって海相に就任した。その翌年彼の長男ジュカ・パラーニョスは、十歳未満でリオのドン・ペードロ二世高等学校に入学した。しかし、ジュカ・パラーニョスは国務大臣という父の威力にすがることなく、彼独自の勉学によって抜群の成績を示し

た。間もなくシルバ・パラーニョスは海相から外相になったが、ジュカ・パラーニョスもドン・ペードロ高校の二年生に進級し、英語、フランス語、ラテン語、歴史、地理、数学図画を好んで学んだ。

一八六一年となって、シルバ・パラーニョスはカシアス内閣の蔵相となり、子息ジュカ・パラーニョスはドン・ペードロ高校からサンパウロの法科大学に進んだ。そのころ彼の父シルバ・パラーニョスは政界人として名声高く、そのためにもジュカ・パラーニョスは大いに自重せざるを得なかったのである。

サンパウロの法大生となったジュカ・パラーニョスは、性来の文才を発揮して、大学の機関紙をはじめ他の新聞雑誌に寄稿した。これが彼の文筆人としての出発である。法大時代のジュカ・パラーニョスは、背が高く理知的な額と美しいひとみの持主で、学生仲間での尊敬を集め人気者であった。特にその英国人好みのスタイルと処作振舞いは、女性の敬慕の的であったようだ。

さて一八六四年には、シルバ・パラーニョスは再びブラジル全権としてプラタ交渉のためモンテビデオに急行することになった。その当時のウルグワイはローザ軍と連合軍との戦場と化していたのであ

る。このウルグワイ戦争は一八六五年の二月に終わったが、同年十二月にはパラグワイ軍がマット・グロッソの一部を占領し、ここに五カ年に及んだパラグワイ戦争の火ぶたが切られたのである。いわばウルグワイ戦争はパラグワイ戦争の前奏曲であったのだ。

他方サンパウロ法大の四年生となったジュカ・パラーニョスは、卒業せずして父の勧奨によってレシフェの法大に転校した。父の願うところは子息ジュカ・パラーニョスにブラジルの北部をも知らしめ、その視野を広めさせることであった。

ジュカ・パラーニョスが法大生時代に丹念に資料を集め『プラタ戦史』と『ブラジル陸軍史』をつづったことは、若くしてすぐれた史家と著述家の素質をもっていたことを物語っている。

彼は二十二歳で法大を卒業した時、ロテリアで十二コントを得たのを機会にヨーロッパ旅行を企て、ポルトガル、スペイン、英国、ドイツ、フランスの各地を見学したことは将来の外交官たる彼にとって幸いであった。

ヨーロッパの旅から帰った彼は、母校ドン・ペードロ二世高校の地理歴史の教師になったが、間もなくリオ州ノーバ・フリブルゴの判事として招かれ

た。それは一八六八年十二月のことだが、これも僅か三カ月で辞職し、父と同じく政界進出の好機を待った。当時の父シルバ・パラーニョスは再び外相のいすを占めていた。ところで時機到来し、パラーニョス・ジュニオール（法大卒業後のリオ・ブランコ男爵はパラーニョス・ジュニオールと呼ばれるようになった）は、マット・グロッソ選出議員として登場することになった。彼は選挙運動の都合上自由党に所属して、父の保守党と対立したことは皮肉である。

一八六九年から一八七〇年にかけては、パラグワイ戦争後の平和会議に父シルバ・パラーニョスがブラジル代表として出席するに際し、パラーニョス・ジュニオールはその秘書として同行することになった。

父シルバ・パラーニョスはアスンソンから帰るや、過去の外交功績によってビスコンデに授爵され、同時に帝政政府の最高地位である内閣参議長に就任した。

そのころから奴隷解放の声が国内に高まり、リオや北部の主要都ではその演説会が催されるようになった。シルバ・パラーニョスも奴隷解放論者の急先ぽうであり、ついに彼の提唱によって一八七一年

九月二十八日に、ベントレ・リーブレなるブラジル生まれの奴隷の子の自由を認める法律が発布された。

当時、皇帝ドン・ペードロ二世は病気療養のためヨーロッパ旅行中で、プリンセーザ・イザベルが摂政の任にあった。

それから二年を経てリヴァプールのブラジル領事が病気辞任のため、その後任に選ばれたのがパラーニョス・ジュニオールである。これが彼の外交官の門出で、一八七三年に任地に向かった。

彼はリヴァプールへの出発に先だって、法大生時代に執筆した『プラタ戦史』と『ブラジル陸軍史』を補足脱稿の上出版した。またリヴァプールの領事在任中も寸暇を利用してブラジルとヨーロッパの地理歴史を研究して、多くの研究論文を書いた。

一八七九年には父リオ・ブランコ子爵が病気養生のためヨーロッパを訪れ、パラーニョス・ジュニオールを伴ってイタリーまで旅をした。リオ・ブランコ子爵の病気はたばこ中毒ともいうべきもので、その療法がなく、一日に三十本もの葉巻を吸うありさまであった。彼は一八八〇年初めにブラジルに帰り、同年十一月二日に死去した。

パラーニョス・ジュニオールはブラジル領事とし

てリブァプールに在任中、ブラジルを英国はじめヨーロッパ各国に認識せしめるための宣伝に最善を尽くした。特に一八八四年にはブラジル珈琲宣伝使節としてロシアを訪れ、同時にペトロダラードに開催された国際博覧会では、ブラジルの宣伝に非常な成果を収めた。

彼はドン・ペードロ高校時代からペン画やスケッチを得意としていたので、種々の宣伝ポスターや漫画を自ら描き上げるという器用さを示した。

彼はロシア政府から名誉勲章をうけ、またフランス美術友の会の創立会員に推された。そのころ彼によって購入されたたくさんのフランス画家の作品は、今もイタマラチーに秘蔵されている。彼は教養人としても英国の上流社会に知られ、ローヤル・ジェオグラフィカル・ソサイテーの名誉会員に推挙された。

当時彼はフランス語の“ＬＡ　ＧＲＡＮＤＥ　ＥＮＣＹＣＬＯＰＥＤＩＥ”を出版し、パリーの国際博覧会開催のために、同じくフランス語の『ブラジル史』と『ドン・ペードロ二世伝』を発表した。

当時彼は授爵されてリオ・ブランコ男爵となった。

ミッソンエス領地問題

一八八八年三月に、パラーニョス・ジュニオール（リオ・ブランコ男爵）はリヴァプールから母国ブラジルを訪れたが、当時ブラジルの政治社会情勢にはかつてない緊迫したものが感じられた。果たせるかな、同年五月十三日にプリンセーザ・イザベルによってレー・アウレアなる奴隷解放令が発布された。それは来たるべき帝政の終局を意味するものであった。その翌年十一月十五日、リオ・ブランコが在外十三年の任期を完了した時に、デオドロ・ダ・フォンセッカ将軍の数語の叫びで共和制が樹立され、ドン・ペードロ二世は国外に追放された。

奴隷解放の結果、多くのヨーロッパの自由労働移民がブラジルに導入されることになったが、その大部分を占めたのがイタリア移民であった。このイタリア移民の導入を提唱し、きっかけをつくったのがコンセリェーロ・アントニオ・プラードである。

当時リオ・ブランコはブラジル代表としてパリーの国際移民局に駐在し、自国をはじめ各国の移民問題を研究した。従って彼は外交問題のほかに各国の移民事情にも通暁することができた。

そのころから彼は『ジョルナル・ド・ブラジル』に、

ブラジルの植民期以来の歴史的回顧録を執筆したが、それが後に『エフエメリデス・ブラジレーロス』（ブラジル史的回顧録）としてブラジル外務省から出版された。七百五十ページの大冊で、ブラジル史研究家の座右の銘となった。

さて、ブラジル帝国政府は共和制樹立の二カ月前に、アルゼンチンとの国境問題の立会い裁判をアメリカ合衆国政府に要請していた。これはミッソンエス（ミッショネス）の領地問題といわれ、リオ・ブランコ子爵を介して一八五七年のプラタ会議にアルゼンチン政府の再検討を提議したのであったが、何らの解決なくして時が過ぎていたものであった。ほかにもブラジルと仏領ギヤナ、オランダ領ギヤナ、英領ギヤナ、コロンビア、ボリビア、ペルーとの境界問題があったが、一つとして正式に解決されていなかったのである。

このミッソンエスの領地問題は、フロリアノ・ペーショット大統領によって前スイス駐在公使アギアール・デ・アンドラーダ男爵に一任されていたが、それは同男爵がミッソンエスの現地事情とそれに関連する外交事務に通じていたからである。ところが当のアギアール・デ・アンドラーダは、アルゼンチン政府との交渉の成功に全く確信がなかった。

ミッソンエスのブラジル領とみなされるべき面積は三万五百平方キロメートルで、昔スペイン系ジェズイット・ミッションの大規模の土人教化村の設けられた地域である。

アメリカ合衆国政府の仲介交渉を託されたアギアール・デ・アンドラーダは、サルバドール・デ・メンドンサを事務総長とする特使団を組織してアメリカに向かったが、ワシントン滞在短期日にして老令と病弱のため客死した。そこでアンドラーダ男爵の後任を慎重選考の結果、地理歴史学の権威リオ・ブランコを第一の候補者にあげたのは真に当を得たものであった。

当時のブラジルの官界政界は人材ぞろいであったが、ミッソンエスの領地問題に関する限り、リオ・ブランコが唯一無二の適任者であった。

ブラジル政府はミッソンエス領地の所有権を立証する史実、外交記録、参考文書、地図をできうる限り多く且つ短期に整える必要があった。リオ・ブランコはかつて父リオ・ブランコ子爵の秘書としてプラタ会議に同行し、またそれらの外交書類の整理に当たった関係からも、ミッソンエスの領地問題に精通していたのである。

パラグワイ戦争の直後にアスンソンでリオ・ブラ

ンコを直接知ったフロリアノ・ペーショット大統領は、リオ・ブランコをミッソンエス問題交渉の最適任者と思いつつも、念のため政府要人数名に意見を求めたところ、全部がリオ・ブランコ説に一致した。

リオ・ブランコは、フロリアノ・ペーショット大統領の招電に接してリブァプールからリオに着くと、ミッソンエス領地に関するあらゆる証拠書類と数十枚の地図を整えるに忙殺された。それらを比較的短時日の間に整備するために、彼の言語に絶する困難と努力が傾倒された。

さて準備が整って、一八九三年四月五日付のブラジル政府辞令を手にしたリオ・ブランコは、ことの成否は全能者に委ねるのみと決意しつつ、アメリカへ出発した。

ワシントンに到着したリオ・ブランコは、ブラジル特使の信任状を国務長官バセット・ムーアに提出して歓談し、互いに相通ずるものがあった。その後彼は山なす書類を全部印刷する都合上、ニューヨークに住居を構えた。

ミッソンエスの領地問題は十八世紀半ばに発しているので、当時の史的記録や外交文書を手に入れるには非常な困難があった。また、かろうじて集めた古文書にしても文字が不鮮明で、内容を確かめるの

にそれぞれの専門家を招くなど、意外の時間と手数を要している。特殊の文書と地図のごときは、スペインやポルトガルのブラジル領事館に打電して取り寄せたものがある。

最初にポルトガルとスペイン政府との間で各々の南アメリカの領土境界が協定されたのは一七五〇年で、それはウルグワイ河に沿い、その右側（西方）をコンフェデラッソン・アルゼンチナ領とし、左側（東方）をブラジル領とするというきわめて漠然たるものであった。しかもこれは、アルゼンチン政府を介しての提案であったにもかかわらず、調印されるに至らなかった。その後再びスペイン、ポルトガル両政府の立会いの下に、ペピリ・グワスー河とサント・アントニオ河をもってアルゼンチンとブラジル領の境界とする決定がなされた。しかし、それから数年を経てアルゼンチンはシャペコ河とショピン河が境界であるとの提議をなし、ここにミッソンエスの係争地問題の端を発した。ミッソンエス領地はパルマとも呼ばれ、それ以来アルゼンチンとブラジルの境界が判然とせず、正確な境界図も作られぬまま、長い間ブラジル政府の頭痛の種となったものである。

一七五〇年に始まったミッソンエスの領地問題は、一七七七年のサント・イルデフォンソ会議でも

調停が成立せず、百十数年ももち越され、ついに一八九〇年のモンテビデオ会議では、ミッソンエス領地はアルゼンチンとブラジルに分割されるべしと提議された。これではブラジルに属すべき面積が半減されることになる。当時のブラジル臨時政府の外相キンチーノ・ボカユーバは、不本意ながらも一応この提議に署名したが、それは議会で否決され、アメリカ合衆国政府の立会いを求めることになったのである。そこで特使としてアメリカへ派遣されたのが前述のアギアール・デ・アンドラーダ男爵であった。しかし同男爵の急死によってリオ・ブランコが後任となり、アメリカに到着するや山なす書類と地図をあらためて検討し、それを印刷して膨大な四冊の書類と二冊の地図にまとめて国務局に提出した。それがクリーブランド大統領によって殆んど一年に及んで閲見されたのである。

リオ・ブランコは書類一切を整え、それを印刷するに昼夜の別なく働き続ける精力絶倫さを示した。こうした見地からも彼を除いては他に適材はなかったのである。

リオ・ブランコは書類印刷の便宜上ニューヨークに住んだので、ニューヨークとワシントンの上層知識人の間に多くの知己をうることができた。このよ

うにして約一年が過ぎ、彼にとって最上の栄光の日が到来した。それは一八九五年二月五日であり、クリーブランド大統領がミッソンエス領地問題立会いの裁決をする日であった。

クリーブランド大統領のすぐ左側には国務長官が控え、それに続いてブラジル代表リオ・ブランコとアルゼンチン代表エスタニスラウ・ゼバロスが着席した。その緊張した雰囲気に裁決書が読み上げられ、ここに米州史に特筆されるべき場面が繰り広げられた。それはブラジル側の全面的勝利を宣言するものであった。

クリーブランド大統領はリオ・ブランコと握手しつつ静かに「バロン・マイ・コングレツュレーション」と述べたに過ぎない。またアルゼンチン代表のエスタニスラウ・ゼバロスはリオ・ブランコの手を堅く握り、真心から祝福した。それに対しリオ・ブランコはむしろ沈痛の面もちで「この勝利は私個人のものでなく、ブラジル国家のものでもない、真実の地図によるものである……」と答えた。

ホワイト・ハウスの玄関には三人のブラジル人がリオ・ブランコを待っていたが、彼らの目には感激の涙があった。

クリーブランド大統領の立会い裁決によってブラ

ジル領となったミッソンエスの面積は、三万六千平方キロメートルで、リオ州の五分の四の広さに相当するものである。

これこそ領土侵略ではなく、リオ・ブランコの厳正な調査と正当な主張の勝利であるが、その栄冠の陰には筆舌に表わし得ないリオ・ブランコの献身的努力のあったことを知らねばならない。それはまさしくジガンテ・ド・トラバーリョ（働きの巨人）の表現が当たっている。

アマパ領地問題

ブラジルとアルゼンチンの境界、ミッソンエス領地問題がブラジル側の勝利で解決されたのは一八九五年だが、それより三年前の一八九二年には、仏領ギヤナの接続地アマパの係争問題のために現地調査委員会が組織された。元来ギヤナは十七世紀初期からフランス、英国、オランダの植民や軍隊が互いに争奪戦を練り返した地域であるため、各々の領土境界が判然とせぬまま時を経過していたものであった。

仏領ギヤナの例を見ても一六三三年に首都カインが創設されたが、一六五五年にオランダ軍に占領さ

れ、それから二年を経て英国人に攻略され、一六七四年に再びオランダ人が侵入して英国人を駆逐した。ところが一六七六年にはフランス軍がカインを占領するという実に目まぐるしい争乱の地であった。

ついでフランス軍はオランダ軍の要塞地であったオイヤポック河（別名ビセンテ・ピンソン河）の左岸フォルテ・デ・オランジェをも陥落せしめ、その侵略の手が次第に南部に伸びつつあったので、ポルトガル人が彼らの領土防衛のためフランス人と戦火を交えることになった。そのポルトガル人の領土とはアマパのことである。アマパは一八四一年以後、ブラジルとフランス政府の協定によって中立地域となったが、その後金鉱が発見され、その探索に各国の冒険児が侵入するようになって互いに争闘が絶えず、文字通りの動乱の地と化していたのである。従ってギヤナとアマパの過去は領土と黄金争奪の歴史ということができる。

一七一三年のウテレシエー協定では、仏領ギヤナとブラジル領の境界はオイヤポック河と決定されたにもかかわらず、ナポレオン一世の治世にそれが否定された。それ以後は画然たる境界が定められずして、ナポレオン三世の政府となってアマパは中立状

態におかれたのである。しかしアマパ現地の騒乱は依然としてつづき、その険悪きわまる情勢はフランスとブラジル政府をしてすみやかに対決を必要とするものがあった。しかしながら両国政府の折衝は一向に進捗せずして一八九五年となり、その間も現地での戦火が絶えなかったのである。

そこでフランスとブラジルは、アマパ係争地の立会い裁判をスイス政府に委任することにした。

このスイス政府の立会いが公式に受理されたのは一八九七年であった。同年六月にブラジル政府の任命でアマパ領地問題調査委員会が設けられたが、これは以前のミッソンエス問題より更に難物とはだれの意見も一致するところであった。

ところで他には適材とてなく、またしてもリオ・ブランコにアマパ領地問題解決の重責が負わされることになった。そのため彼はリブァプール領事を辞任し、一外交官として自由の立場でアマパ領地問題と取りくむこととなった。

一八九八年十一月二十二日付の政府辞令をもったリオ・ブランコは、ブラジル全権公使の資格でパリーを陣営として縦横の活躍をはじめた。

先きにミッソンエス問題で実地に経験を積んだ彼は、一糸乱れない計画と組織の下に準備を進め、ア

マパ領地に関する一切の書類と地図が集められた。それに動員された各々の専門家は七十名にも達したほどである。

このようにしてパリーの本営に集められたアマパの史的記録や文書はブルッセルで印刷し、それに地理学者ジョアキン・カイターノ・ダ・シルバのフランス語の著書『オイヤポックとアマゾン』と、リオ・ブランコ自身のメモリアルを添えてスイス政府に提出した。それらの印刷された書類は八百四十九ページという膨大なもので、ほかに数十枚の地図が作製され、その努力と苦心たるや第三者の想像を許さぬものがあった。

スイス政府は厳密な審査の結果、ブラジル側の提議を正当とする裁決を下した。これによってブラジル領となったアマパの面積は二十六万平方キロメートルで、これはアラグワリー河北部オイヤポック河までの地域である。

このスイス政府立会いの裁決を見たのは一九〇〇年十二月一日という十九世紀の最後に、リオ・ブランコはブラジルのため輝かしい勝利を得たのである。その彼の空前絶後の功績に対してブラジル全土から感謝と歓喜の声がわき起こったのは当然である。リオ・ブランコはアマパ問題解決の功績によっ

て、ブラジル政府から三百コントスの賞金が授与されたほかに、彼から子孫へと、世襲的に二十四コントスの年金が与えられることになった。ブラジルの古今、政界、官界を通じてこのような栄誉に浴したのはリオ・ブランコをもって唯一とするであろう。祖国のために最善を尽くす、これがリオ・ブランコの学生時代からの念願であったが、官界に投じ二十四年の在外生活を経て、祖国ブラジルの名においてアマパの地に栄光の日を望むことができたのである。

その後彼はブラジル共和国全権公使としてドイツに駐在することになり、政府の信任状を携えてベルリンに向かった。

彼の父リオ・ブランコ子爵は帝政の大政治家、名外交官として信望を集めたが、その子息パラーニョス・ジュニオールは今やグランデ・リオ・ブランコとなって、内外に著名の存在となった。

リオ・ブランコがドイツに赴任する時のブラジルの大統領は、サンパウロ州カンピーナス出身のカンポス・サーレスであった。彼は最悪の状態にあった国家財政の立て直しのため増税案を実施して国民の誤解を買ったが、彼の清廉剛直の性格とその確固不動の施政方針は次第に理解された。

このカンポス・サーレスの財政政策がようやく効を奏しはじめた時に選挙となり、同じサンパウロ州出身のロドリゲス・アルベスが当選して第五代大統領のいすにすわることになった。

一八七六年に政界を退いたリオ・ブランコは、専ら外交界に活躍を続けたが、この長年の在外生活を通して祖国ブラジルを客観的にみることができたのは、彼にとってかえって幸いであった。

カンポス・サーレスの後継としてロドリゲス・アルベスが登場したのは一九〇二年であり、その組閣に当たってリオ・ブランコに外相就任の意志あるやを打診した。当時のリオ・ブランコは健康すぐれずベルリンで保養中であったが、ジョアキン・ナブコを介してのロドリゲス・アルベスの要請を熟慮の上、礼をつくして拒絶した。しかしロドリゲス・アルベスの再三の懇請に彼はついに意を決して外相就任を受諾することになった。その時のジョアキン・ナブコのロドリゲス・アルベス大統領にあてた電文は喜びにあふれていた。新聞記者に出発して政界人、地理歴史学者から外交官となり、その間二つの大きな領地問題を解決したリオ・ブランコは、いよいよ外交官の最高地位を占めることになったのである。

リブァプールの領事以来二十六年の在外生活を送った彼はベルリンを出発し、汽船アトランチケに乗ってリオに着いたのが一九〇二年十二月一日であった。それはアマパ領地問題の裁決をみて一周年に当たる記念すべき日であったのだ。

リオに上陸したリオ・ブランコは、歓迎のために群集した人々に接して感激し一層の責任を感じた。リオ・ブランコをして外相に起用したのはロドリゲス・アルベス大統領だが、それはブラジル全国民の熱望するところでもあったのだ。

彼の外相就任によってイタマラチーの空気は一新され、活気に満ちた観があった。

イタマラチーは一八七六年にイタマラチー子爵邸として造られ、後にブラジル政府によって買収されて外務省となったものである。

リオ・ブランコが外相のいすを占めて以後は、事務的能率をあげるにはまず省内の雰囲気から刷新するの要ありとして、予算の許す限りイタマラチー内部の改装をした。しかし、人的組織の改革には慎重を期して、みだりに職責を替え人々を更迭することなく、特に一八六五年から事務総長であった当時八十四歳のカーボ・フリオ子爵をあつく遇したことは、リオ・ブランコの人柄を物語るものだ。事実、

カーボ・フリオ子爵は外務省きっての事務通であり、フロリアノ・ペーショット大統領は外交事務に関する限り必ずカーボ・フリオ子爵に相計ったものである。

やがて一九〇三年八月六日のカーボ・フリオ子爵八十五歳の誕生日を迎えた時に、リオ・ブランコはイタマラチーに「カーボ・フリオ記念室」を設け、それに彼の胸像を備えて外務省の大元老として敬意と感謝の意を表した。真に麗わしい話である。

そのころ対外的にはアクレ領地問題が起こり、この際ブラジルは断固としてアクレ問題を処決すべきであるとの世論がわきつつあった。ここでリオ・ブランコは外相就任間もなく、第三回目の重大な領地問題と取り組むことになったのである。

アクレ領地問題

イタマラチーの巨人といわれたリオ・ブランコは宏大な事務室を設け、中央の卓上には書類や地図書籍が山と積まれていた。こうした雰囲気に彼はあくなき精力を動員してアクレ問題調査の準備に当たった。それはミッソンエスやアマパ領地問題と同様超人間的な努力と根気を要するものであった。当時の

イタマラチーにはアクレに関する調査書類、地図、参考文献がはなはだ少なかったため、リオ・ブランコは前回のミッソンエスとアマパ問題以上に苦心したことが想像される。

いうまでもなくアクレは、ボリビアとペルーの国境にまたがっているので、当然その境界確立には両国との交渉を必要としたが、まずはじめにリオ・ブランコの目ざすところはボリビア政府との折衝であった。

元来、一七七七年のサント・イルデフォンソ会議で結んだスペインとポルトガル協定によれば、アクレ領地の大部分は法的にボリビアに属すべきであったが、その境界が判然とせぬ上に、多くのブラジル人が天然ゴム採集の目的でこの地帯に入り込んだため、紛争が起こったのであった。

アクレがブラジル人に注目されたのは十九世紀半ばで、あの奥アマゾンにつづく豊富な天然ゴムの樹林地域が目的であった。それはかつてアマパの金鉱が冒険児の血をわかせたと同じである。

ひと口にブラジル人とは言っても、アクレに侵入したのはおもにセアラ人で、彼らはガイオラという河舟でアマゾンの河川航路によりアクレに達したのである。それまでのアクレは殆んど人跡未踏の地で

住民とてもなく、だれの所有にも属しない土地であったのだ。

古い記録によれば最初にアクレに入ったのはポルトガル人のジョアン・ロドリゲス・カメタで、一八四七年となっている。次いでブラジル人のセラフィン・サルガードが、一八五七年にアクレの探険をした形跡がある。また、一八六〇年にはバンデーランテの血をうけたマヌエル・ウルバーノがアクレの大探険を行なって世評に上った。当時マヌエル・ウルバーノがマナオスを出発してマデーラ河とアクレ河を経てマクミ河に到達したが、その距離は一、七四〇マイルといわれる。

ブラジルとボリビアとの間に成立した国境協定は一八六七年で、当時ブラジルはパラグワイと戦闘状態にあった。これはアヤクチョー協定といわれ、ブラジルの全権使節はロペス・ネットで、ボリビア政府代表はマリアノ・ムニョスであった。

同協定によるブラジルとボリビアの境界は、南緯一〇、二〇度のマデーラ河に発して斜線をえがき、南緯七度のジャブリ河に達するとあった。同時に両国間に親善協約が結ばれ、ボリビアへの物資輸送のためアマゾンの自由航行権も認められた。

かくする間に、多くのブラジル人がゴム採集のた

めアクレに侵入してボリビア政府を刺激した。

アクレ問題が表面化したのは一八九五年で、ブラジルとボリビア政府の合議によるアクレ領地境界画定委員会が発足し、現地調査が始められてからである。当時奥アマゾンとアクレのブラジル人の間では種々の憶測がなされて混乱を生じ、そのためこの現地調査も一時中絶のやむなきに至った。

一八九九年となって、リオ駐在のボリビア政府使節ジョゼ・パラペンシはアクレのポルト・アロンソに税関設置の提議をしてきた。これは明らかにブラジル人のアクレ領地への侵入を防止する手段とみられ、同年アクレ在住のブラジル人は大挙して反乱を起こし、ついにアクレの独立を宣言して国旗を設定し、司法行政の機構をもつまでに発展した。彼らブラジル人はあくまでアクレの土地を固守して一歩も退かず、そのためには戦火も辞せずという勢いであった。これには当のブラジル政府もなすすべなく、しばらくは傍観の態度をとった。従って、ブラジルとボリビア国境は不明瞭のまま二年が過ぎて一九〇一年となった。

その時またしても重大問題となったのは、ボリビア政府がアクレのブラジル人放逐策としてアメリカの一有力会社にアクレの貸与契約を結んだことであ

る。一九〇一年六月にボリビアン・シンジケートが組織され、五百万ポンドの資本をもってアクレのゴム事業に着手することになった。同時にアクレ産ゴムの二十五パーセントはユーナイテッド・ステートス・ラバー・カンパニーに優先的に販売するという契約も調印された。このボリビアン・シンジケートの首脳部の一員に、セオドール・ルーズベルト大統領の子息が選ばれていたのだ。

このボリビア政府の計画に対しブラジル政府は強硬抗議をし、同時に一八九六年の親善通商協定とそれに付随するアマゾンの自由航行権を破棄する旨を通告した。

この情報に接したアクレのブラジル人は、アクレの南部に向かって侵入し、ポルト・アロンソを占領するという騒ぎが起こった。

こうした動乱の最中にリオ・ブランコは外相に就任したのである。彼はイタマラチーにあること僅か四十数日にして、最難関ともいうべきアクレ問題に突入することになった。リオ・ブランコはラ・パスのブラジル公使を通じボリビア政府に対し、「事の重大性にかんがみ、一八六七年度の境界協定に基づいて速刻ボリビアとブラジル国境画定を再検討されたし」の電報を発した。

リオ・ブランコは一七七七年のサント・イルデフォンソ会議によるアクレの境界協定を一読して直感したのは、マデーラ河とジャブリー河の中間地帯をアクレ領地とする、というのがすこぶる不明瞭で、そこに双方の見解の差と誤りの根源のあることを悟った。

リオ・ブランコのボリビア政府にあてた電報は爆弾的通告であったのだ。リオ・ブランコの手もとに集められたアクレ領地に関する古い外交記録と文書によれば、ブラジルとボリビアの国境線は南緯一〇、二〇度であるべきで、これに確信を得た彼はあくまでこの南緯一〇、二〇度線を主張することにした。これによってブラジルに属すべき面積は一四二、九〇〇平方キロメートルで、それはポルトガル、ベルギー、オランダ三国の本土を併合したものに相当する。リオ・ブランコの願うところはいかなる場合も武力を行使せず、厳正な調査に基づいて平和のうちにボリビア政府との折衝を進めることであった。この旨を彼は数回にわたってボリビアのブラジル公使に打電した。しかしアクレ現地での動乱は依然としてつづくところから、その鎮圧のためやむなくリオ・ブランコは軍部に命じて軍隊を派遣した。

それはボリビアとの交戦を意味するものでなく、

現地の安寧継持のためであった。このリオ・ブランコ外相の誠意を理解したボリビア政府は、アメリカの企業団体に対するアクレ貸与契約を破棄し、ラ・パスでブラジルとの外交会議を開くことを同意した。

この外交会議はリオ・ブランコの提案によって、一九〇三年十月二十一日に決定された。これにひきつづいて開催されたのが史上名高い一九〇三年十一月十七日のペトロポリス会議である。

このペトロポリス会議が前回のミッソンエスやアマパ領地問題と異なる点は、ブラジルとボリビア政府双方が好意的に交換条件を提出したことである。もともとアクレ領地はボリビア政府の好意による譲歩がなければ円満な解決は望まれなかったものである。

アクレ問題の解決はリオ・ブランコ外交の徹底的勝利を意味するもので、それはリオ・ブランコの人格が大きく影響していることを知らねばならない。

ペトロポリス会議の結果ブラジル領となったアクレ領地は一九一、〇〇〇平方キロメートルで、このうち四八、一〇〇平方キロメートルは、ボリビア政府が好意的にブラジルへ譲渡したものである。これに対しブラジル政府は二百万ポンドを賠償形式で支

払い、またマデーラ河の上流ボリビア国境に、マデーラ・マモレ鉄道の建設と、ブラジルとボリビアをつなぐノロエステ鉄道の開設が約束された。マデーラ・マモレ鉄道はポルト・ヴェーリョを発してグワジャラ・ミリンを終点とするものであり、これの建設に多大の犠牲が払われたことは有名な物語りとなっている。

一九〇二年の十二月以降、リオ・ブランコはイタマラチーに居を構えて家族を訪れることも殆んどなく、一日平均僅か三時間の睡眠をとって働きつづけたということは、まさしく巨人的存在である。彼の事務室の大きな机の上に、あらゆる参考資料が山積されている写真を見るとき、自らえりを正さしめるものがある。

栄光の晩年

アクレ領地問題を円満に解決したリオ・ブランコは、引きつづいてエクアドルの国境問題も無事解決することができた。次いで英領ギヤナ及びペルー国境問題も彼の不眠不休の努力によって解決されるなど、その功績ははかり知れないほどである。

英領ギヤナの国境問題の交渉には、駐英公使とし

てジョアキン・ナブコを派遣してそれに当たらせ、同時にイタリア国王の立会いを得て平和のうちに解決をみたものである。

更にペルーの国境問題について述べれば、それは一七七七年のサント・イルデフォンソ会議当時にはじまる領土係争で、未解決のまま六十余年をすぎ、一八四一年のブラジルとペルーの外交会議にこれが討議されることになった。しかし、同会議では肝心の国境問醇は解決されずして、両国政府間に親善通商協定が成立し、同時にペルーに対してはアマゾンの自由航行権が認められた。これはかつてのボリビア政府との協定に似たもので、この外交会議には、ブラジル代表として名外交官ドアルテ・ダ・ポンテ・リベーロが出席した。

その後一八五三年に、ペルー側から国境問題についてブラジルへの提議があった。当時のペルー政府はサント・イルデフォンソ協定に基づいて、ペルーとブラジル国境の再検分を主張した。

このサント・イルデフォンソ協定は、一七七七年にスペインとポルトガルの間に結ばれた領土規約であるため、当時の記録を調べるのにもリオ・ブランコは想像外の苦心と時間を費した。

ペルー国境係争もアクレ領地問題と同様に、一八

九七年にはジュルア・ミリン地帯でブラジル人とペルー人の闘争があり、一九〇二年にはペルー政府から派遣された奥アマゾン調査員カルロス・ヴァスケス・クワドロが、ジュルア河の右岸地帯をペルー政府の名において占領せんとし、ブラジル軍と衝突した。それ以来奥アマゾンとアルト・ペルーでは、ブラジル人とペルー人の闘争が続き多くの犠牲者を出した。

かくて、リオ・ブランコは外相就任第三年を迎え、一九〇四年にペルー国境問題と対決することになった。同年七月十二日にリオ・ブランコの提案により、このアルト・ペルーの係争地は、後日の再調査まで一時的にペルー、ブラジル両国の統治中立地域となった。

同時にリオ・ブランコはイタマラチーにあって、ペルー国境問題のため猛烈な活動を開始し、現地調査にエウクリーデス・ダ・クーニャを派遣したことは既述の通りである。このペルー国境の現地調査団は、ブラジル人とペルー人で混成されるものであった。

数年にわたるリオ・ブランコの厳正綿密な調査と、エウクリーデス・ダ・クーニャの現地報告が功を奏し、一九〇九年九月八日の領土協定で、ペルー

とブラジルの国境が明瞭となった。ペトロポリス会議前には、ペルー政府はアルト・ペルーから奥アマゾンにかけ四四二、〇〇〇平方キロメートルの領土占有権を強硬に主張した。その中にはベニ・ジャバリ河北部の二五一、〇〇〇平方キロメートルのアクレ中立地域も含まれていた。しかし、一九〇九年の領土協定では、リオ・ブランコの精細な陳述に異議をはさむ余地がなく、ペルー代表はそれを全面的に認めた。その結果ペルーはベニ・ジャバリ河北部の二五一、〇〇〇平方キロメートルの領土占有権を棄権する調印をした。

この領土協定の恩典を得たのは必ずしもブラジルだけでなく、アクレ領地の境界が画定されたためペルーに属すべき領域が拡大され、一九一、〇〇〇平方キロメートルであったブラジルのアクレ領地が、一五二、〇〇〇平方キロメートルに減少した。

これをみてもリオ・ブランコ外交はあくまでも正しきを強調し、実現することであって、ブラジル国家の利益のためには邪を正とすというのではなかったのである。

これまでの記述ではリオ・ブランコは専ら隣接国との国境問題に没頭し、鋭意それに努力したかに思われるが、その他のあらゆる外交問題にも細心の注

意を払いそれを処理した。米州政策強化の第一歩として、一九〇五年にワシントンのブラジル公使館を大使館に昇格せしめ、初代大使としてジョアキン・ナブコを赴任せしめたことはその一つである。

リオ・ブランコとジョアキン・ナブコは、共に生粋の外交官であると同時に親交深く、外交理念と思想的にも相通じるものがあった。一九〇一年にジョアキン・ナブコは大統領カンポス・サーレスから外相候補者について意見を求められ、次のように答えた。

「リオ・ブランコは外交に関する限りモンロー主義にとらわれることなく、彼独自の汎米主義をもって行動するであろう。わが国はその地理的条件から多くの国境をもつため、南米各国の地理歴史に精通する人物を外相に起用する必要がある。この点リオ・ブランコは最適任である」と。

イタマラチーにおけるリオ・ブランコの執務は乱脈とも思われるほどで、巨大な卓上に山と積まれた書類や書籍地図は、整頓もされずに放置されてあった。当時必要な資料や文献を事務室内に集めて置けば、省内を捜し回ることなく能率的というのが彼一流の考え方であったのだ。

ところでリオ・ブランコは、ミッソンエス領地問

題以来の膨大な調査資料や外交記録をレラトリオとして印刷すべく、その数トンもある原稿をインプレンサ・ナショナル（政府公報）の印刷局へ回す直前、同印刷局が大火で全焼した。これは彼がまれに見る幸運児であったことを物語っている。彼の生涯にはこのような事実が幾度かあった。

今一つは彼が一八八四年にロシヤを訪れた時である。何かしら彼は予感がしたらしく急いでニコライ二世の閲見を得たが、その後間もなく革命となり、ロマノフ王家は絶えたのである。

リオ・ブランコ外相在任中の大きなできごとでは、一九〇五年八月にリオで開催された第三回ラテン・アメリカ科学会議があげられる。当時ブラジル大使としてワシントンに駐在したジョアキン・ナブコがこの会議に出席して一段の光彩を添えた。事実リオ・ブランコ外交は、リオ・ブランコ自身とジョアキン・ナブコによって代表されたといっても過言でない。

第三回ラテン・アメリカ科学会議には米州十四カ国の代表が列し、リオ・ブランコの開会の名演説は人々に深い感銘を与えた。同会議の終了間もなく、一八八〇年以来問題を生じていたヴェネズエラとの国境問題も解決されるなど、リオ・ブランコは栄光

の絶頂にあった。

また、同年十二月十一日、ローマ教皇ピオ十世によって、ブラジルのリオにカルデアル（枢機）が任命されたこともリオ・ブランコ外交の成功であった。同じく一九〇五年には、二年前のボリビア政府と結ばれたペトロポリス協定に基づいて、ノロエステ鉄道の建設工事が着手された。

一九〇六年七月にはリオにおいて第三回米州会議が催されることになり、その準備にリオ・ブランコは忙殺された。彼はイタマラチー内部の美装に大いに意を用い、玄関のガレリーにブラジル歴代の名外交官のブロンズの胸像を配した。それはフランス人の彫刻家シャンペンチエールの力作である。階上の貴賓室や廊下、階段の改装にも相当の予算を計上したが、特にペードロ・アメリコの「平和と親和」の名画が人目をひいた。この絵のテーマこそリオ・ブランコの外交理念であったのだ。リオ・ブランコは風格堂々として巨漢を思わせるところがあったが、事務的にはあらゆる面に留意する精密さがあった。それがイタマラチー内部の装飾に現われている。

一九〇七年のアフォンソ・ペンナ大統領の任期となっては、オランダのヘーグで第二回世界平和会議が開かれ、ブラジル全権公使としてルイ・バルボー

ザが出席したことは既に述べた。同会議においてルイ・バルボーザはブラジルのために空前の成果を収めたが、これも帰するところリオ・ブランコの、ブラジル代表の人選よろしきを得たためである。

一九〇九年のニーロ・ペサーニャ大統領の時には、前述のペルー国境問題を解決し、同年十月三十日にウルグワイとの協定によって、国境のラゴア・ミリンとジャグワロンの領地を好意的にウルグワイに割譲した。

進んで一九一〇年、エルメス・ダ・フォンセッカ元帥の大統領就任となり、その組閣に当たってリオ・ブランコは三たび外相に留任した。

一九一二年になると政情が極度に悪化し、ピニエーロ・マッシャード将軍が暗殺される事件が起こった。性来が平和主義のリオ・ブランコはこうした情勢に耐えられず、また自身の健康すぐれぬ理由で辞表を出したが受理されなかった。しかし彼の病状は次第に進み、一九一二年二月五日の未明に昏睡状態となり、六十六歳で永眠した。それはまさしく栄光の死というべきである。

―完―

佐藤常蔵

◇明治四十年生・在ブラジル四十年

◇現住所　ＲＵＡ　ＣＡＮＤＩＤＯ　ＮＡＳＣＩＭＥＮＴＯ，１０１
Ｓ．ＰＡＵＬＯ　ＢＲＡＳＩＬ

◇出身地　北海道函館市

◇大正十一年渡伯・農業経営数年・雑誌「農業のブラジル」の主幹を経て現在織物工業に従い、かたわら文筆に親しむ。

◇サンパウロ日本文化協会理事
日伯文化普及会理事
サンパウロ学生会理事

◇著書「ブラジルの風味」「ブラジル風物記」

著者との規定により検印を廃止

愛土ブラジル

昭和三十七年十一月一日　印刷
昭和三十七年十一月三日　発行
著者　佐藤常蔵

￥５００

東京都千代田区神田神保町三ノ二九
発行者　株式会社　帝国書院
代表者　守屋紀美雄
発行所　東京都千代田区神田神保町三ノ二九
電話東京（３０１）〇八三〇～四

Ｐｒｉｎｔｅｄ　ｉｎ　Ｊａｐａｎ